九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—2—

甘木市所在下原遺跡・立野遺跡の調査

1 9 8 3

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告書

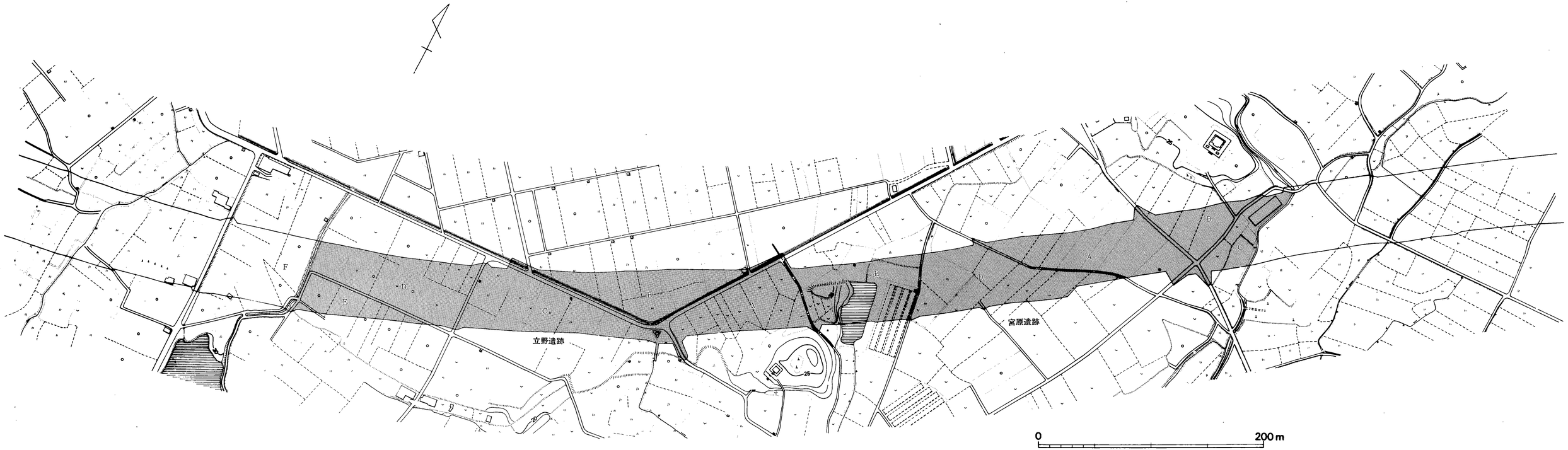
— 2 —

付　　図

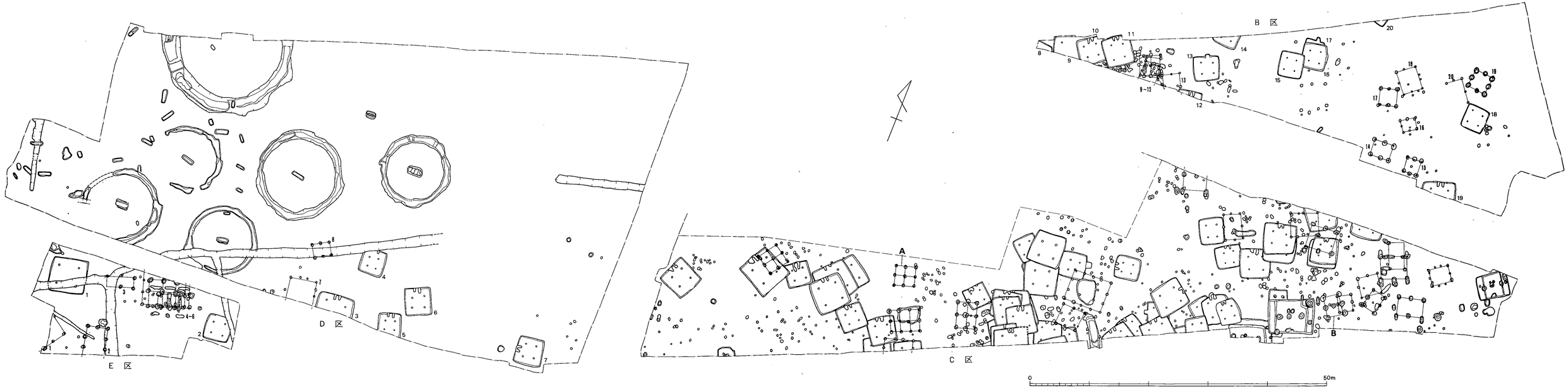
1 9 8 3

福 岡 県 教 育 委 員 会

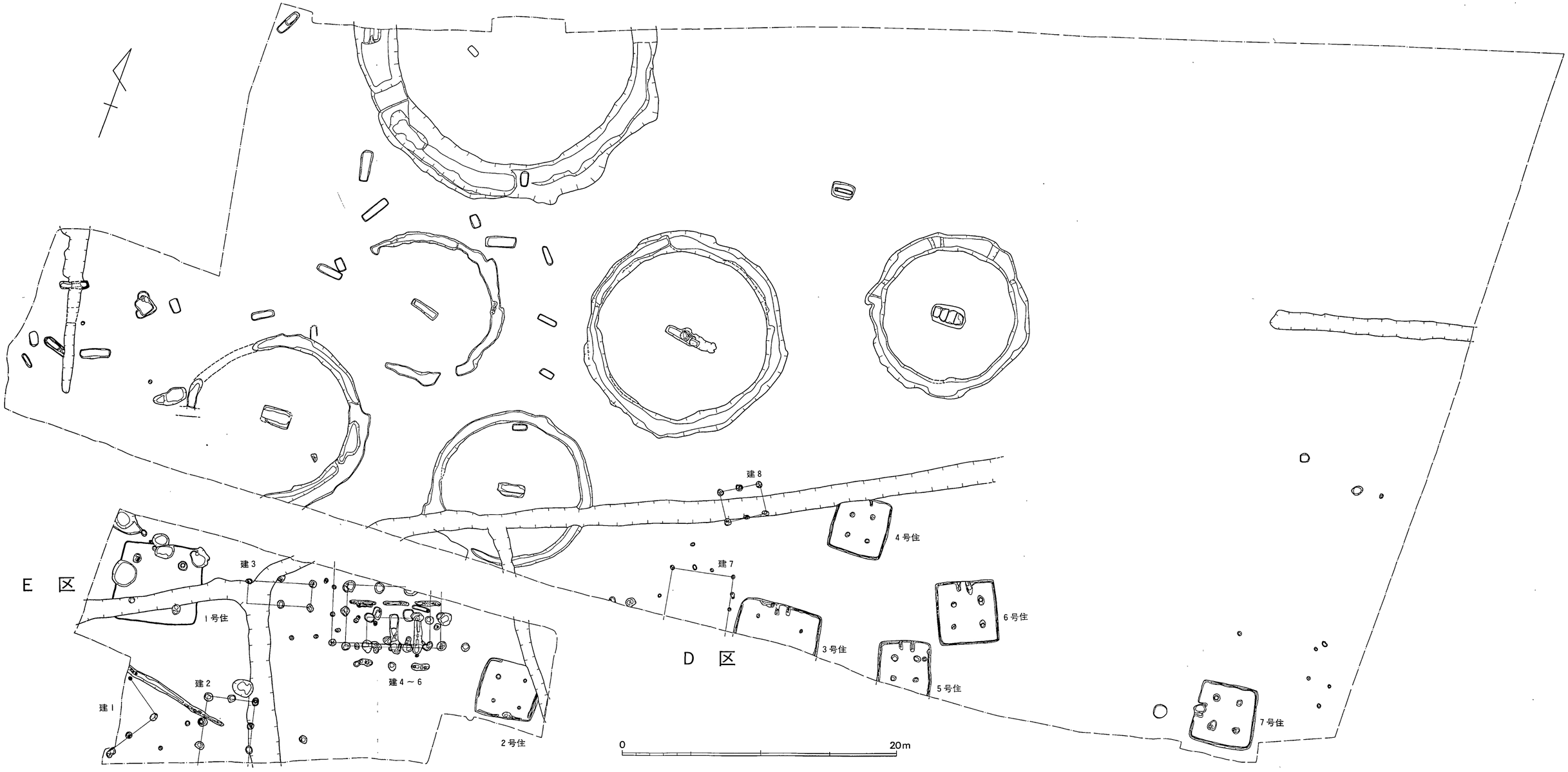
付図1　下原遺跡遺構配置図（1/200）



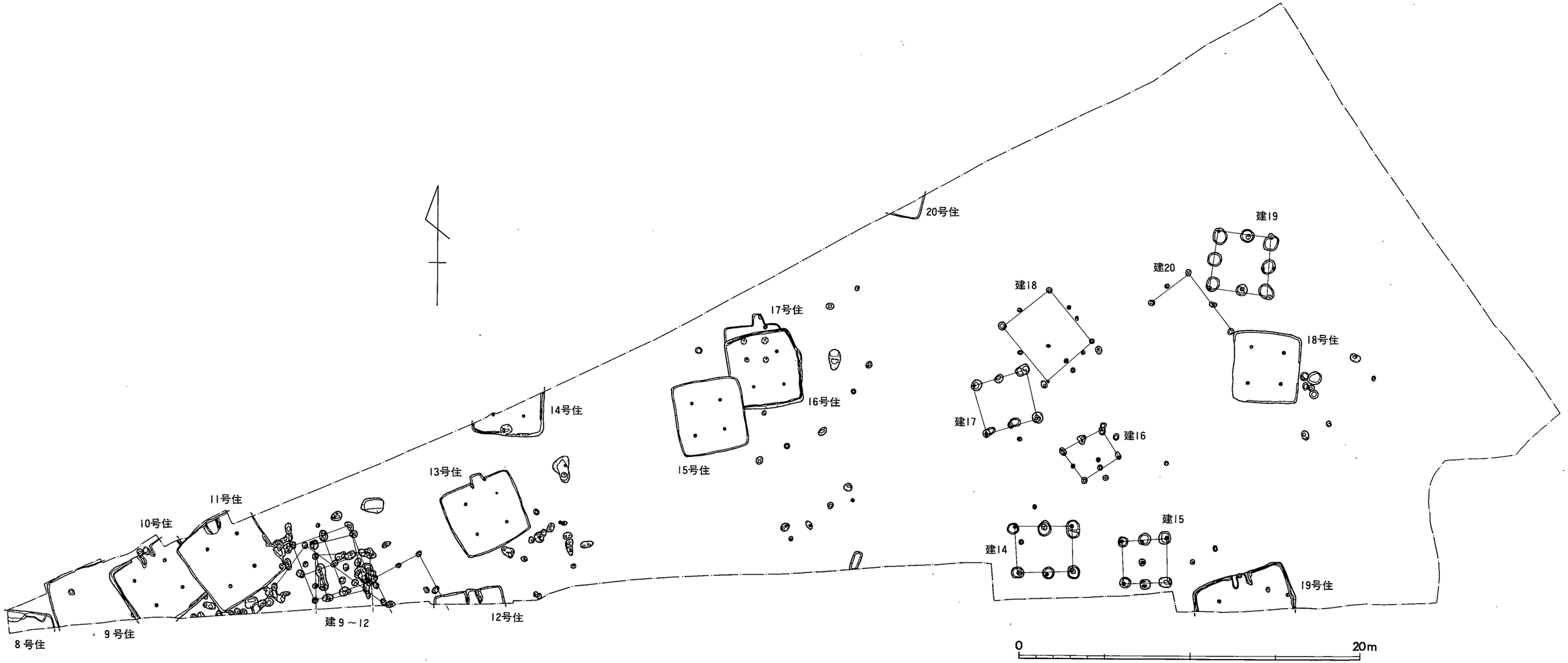
付図2　立野・宮原遺跡周辺地形図（1/2,000，アルファベットは地区名を示す。）



付図 3　立野遺跡遺構配置図（1/400）



付図4　立野遺跡D・E地区遺構配置図（1/200）



付図5　立野遺跡B地区遺構配置図（1/200）

下原遺跡・立野遺跡　正誤表

頁	行	誤	正
7	2	第 7 図	第 6 図
56	35	遺	遺　構
63	14～15	15~17号住居跡、15~17号住居跡におのおの	15～17号住居跡におのおの
64	第45図	天地逆 0 1m	0 5cm
69	6	‥‥1点であるが確証はない	‥‥1点である。
75	3	なお3·33	なお31・33
78	24	4.85m	3.84m

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—2—

甘木市所在下原遺跡・立野遺跡の調査

序

九州横断自動車道建設工事にともなう事前の発掘調査は昭和54年度にはじまり，本年で4年を経過しました。その間，地元の方々の多大な御協力により，主に甘木市内の遺跡を発掘しました。出土品の整理もほぼ一段落し，このたび2冊目の報告書を刊行することとなりました。

本書は昭和56年度に調査しました甘木市下原遺跡と立野遺跡の報告書であります。文化財保護活動や地域の歴史を知るうえで活用して頂ければ幸甚に存じます。

発刊にあたりまして，発掘調査に際し貴い汗を流して頂いた地元の方々をはじめ，種々御協力頂いた関係者の皆様方に深く感謝致します。

昭和58年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　友　野　　隆

例　言

1. 本書は，昭和56年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて，九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の事前調査を実施した第２冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は，下原（しもばる）遺跡（甘木市大字一ツ木字下原）と立野（たての）遺跡（甘木市大字下浦字立野）の56年度調査分である。
3. 下原遺跡の実測図は，佐々木隆彦・池辺元明・高田一弘・武田光正・日高正幸が，立野遺跡の実測図は，栗原和彦・石山勲・児玉真一・新原正典・佐々木・小池史哲・高田・武田・日高・池田和博が作製し，遺構と遺物の実測並びに製図は各遺跡の調査担当者及び補助員の他，手柴淳子・大坪文・塩足里美女史の多大な協力を得た。
4. 遺構の写真は，各遺跡の調査担当者が撮影し，遺物写真は，九州歴史資料館の石丸洋主任技師の指導のもとに平島美代子氏にお願いした。

   なお，図版１と29に使用した航空写真は日本道路公団の提供によるものである。
5. 遺物整理は，九州歴史資料館の岩瀬正信氏の助言を得て福岡県教育庁管理部文化課甘木発掘調査事務所で行なった。
6. 立野遺跡については，九州大学工学部建築学教室助手山本輝雄氏に現地での指導助言を得，かつ立野遺跡の第Ⅳ章の執筆をお願いした。
7. 本文中の下原・立野両遺跡の遺物番号は各々通し番号とし，実測番号と写真番号を同一にした。
8. 竪穴住居跡及びその他の面積はプラニメーターによる測定である。
9. 本書の執筆は，第Ⅰ章を石山勲，下原遺跡を佐々木隆彦，立野遺跡は児玉真一・武田光正・日高正幸が分担し，立野遺跡については文末に名記し文責を明らかにした。
10. 本書の編集は，下原遺跡を佐々木，立野遺跡を児玉が分担した。

第1図　下原遺跡，立野遺跡とその周辺の関連遺跡分布図（1/50,000）

図版12　(1)　3号竪穴状遺構（北から）
(2)　1号土壙（東から）
図版13　(1)　2号土壙（東から）
(2)　3号土壙（南から）
図版14　(1)　4号土壙（北から）
(2)　5号土壙（北から）
図版15　(1)　6号土壙（北から）
(2)　7号土壙（北から）
図版16　(1)　8号土壙（北から）
(2)　9号土壙（北から）
図版17　(1)　10号土壙（北から）
(2)　11号土壙（北から）
図版18　(1)　13号土壙（北から）
(2)　14号土壙（北から）
図版19　(1)　15号土壙（南から）
(2)　16号土壙（北から）
図版20　(1)　17号土壙（北から）
(2)　18号土壙（北から）
図版21　(1)　19号土壙（南から）
(2)　21号土壙（北東から）
図版22　(1)　23号土壙（北から）
(2)　24号土壙（北から）
図版23　(1)　土壙墓（西から）
(2)　土壙墓内遺物出土状態
図版24　1号竪穴住居跡出土土器
図版25　2号，3号竪穴住居跡出土土器
図版26　3号，4号，5号竪穴住居跡出土土器
図版27　5号竪穴住居跡，3号，5号掘立柱建物，3号竪穴状遺構，1号土壙出土土器
図版28　2号土壙，土壙墓，2号～5号竪穴住居跡出土土器・石器・鉄器

立野遺跡

図版29　立野遺跡航空写真
図版30　(1)　立野遺跡航空写真（南東上空から，アルファベットは地区名を示す）

(2) 立野遺跡航空写真（西上空から）
図版31 (1) 立野遺跡Ｅ区全景（東から，数字は住居跡の号数を示す）
(2) 立野遺跡Ｅ区全景（西から）
図版32 (1) 立野遺跡Ｄ区全景（西から）
(2) 立野遺跡Ｂ区全景（東から）
(3) １号竪穴住居跡全景（Ｅ区，南から）
図版33 (1) ２号竪穴住居跡全景（Ｅ区，南から）
(2) ２号竪穴住居跡下層遺構全景（同上）
図版34 (1) ３号竪穴住居跡全景（Ｄ区，南から，上は４号竪穴住居跡）
(2) ３号竪穴住居跡カマドと支脚（同上）
図版35 (1) ４号竪穴住居跡全景（Ｄ区，南から）
(2) ４号竪穴住跡下層遺構全景（同上）
図版36 (1) ５号竪穴住居跡全景（Ｄ区，東から）
(2) ５号竪穴住居跡下層遺構全景（同右）
(3) ５号竪穴住居跡カマド（南から）
図版37 (1) ６号竪穴住居跡全景（Ｄ区，南から）
(2) ６号竪穴住居跡下層遺構全景（同上）
図版38 (1) ６号竪穴住居跡カマドと土器出土状態（南から）
(2) ６号竪穴住居跡カマドと支脚（同上）
図版39 (1) ７号竪穴住居跡全景（Ｄ区，東から）
(2) ７号竪穴住居跡下層遺構全景（同上）
図版40 (1) ７号竪穴住居跡カマドと土器出土状態（東から）
(2) ７号竪穴住居跡カマドと支脚（同上）
図版41 (1) ８～11号竪穴住居跡と９～12号掘立柱建物（Ｂ区，東から）
(2) 10号竪穴住居跡カマドと支脚（南から）
図版42 (1) 12号竪穴住居跡全景（Ｂ区，北から）
(2) 14号竪穴住居跡全景（Ｂ区，南から）
図版43 (1) 13号竪穴住居跡全景（Ｂ区，南から）
(2) 13号竪穴住居跡カマド（同上）
図版44 (1) 15～17号竪穴住居跡全景（Ｂ区，南から）
(2) 17号竪穴住居跡カマド（同上）
図版45 (1) 18号竪穴住居跡全景（Ｂ区，西から）
(2) 19号竪穴住居跡全景（Ｂ区，北から）

図版46　(1)　2号掘立柱建物（E区，東から）
(2)　4～6号掘立柱建物（E区，南から）
(3)　8号掘立柱建物（D区，北から）
図版47　(1)　14号掘立柱建物（B区、北から）
(2)　15号掘立柱建物（同上）
図版48　(1)　16号掘立柱建物（B区，北から）
(2)　17号掘立柱建物（B区，北から）
図版49　(1)　18号掘立柱建物（B区，北から）
(2)　19号掘立柱建物（B区，西から）
図版50　1・3号竪穴住居跡出土土器
図版51　3・4号竪穴住居跡出土土器
図版52　4号竪穴住居跡出土土器
図版53　5・6号竪穴住居跡出土土器
図版54　6号竪穴住居跡出土土器
図版55　6・7号竪穴住居跡出土土器
図版56　7号竪穴住居跡出土土器
図版57　7号竪穴住居跡出土土器（下段写真の把手以外はカマド周辺床面出土）
図版58　8・10号竪穴住居跡出土土器
図版59　10・12号竪穴住居跡出土土器
図版60　11号竪穴住居跡出土土器
図版61　14・15号竪穴住居跡出土土器
図版62　15・19号竪穴住居跡出土土器（140は19号出土）
図版63　16号竪穴住居跡出土土器と手捏土器・紡錘車（1―3号住，2―5号住，3―18号住，4―7号住）
図版64　鹿児島県与論島熊谷文秀氏宅高倉

挿　図　目　次

下原遺跡

第1図　下原遺跡，立野遺跡とその周辺の関連遺跡分布図（1/50,000）……折込み
第2図　下原遺跡地形図（1/2,000）……折込み
第3図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）……9

第４図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……10
第５図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）……11
第６図　２号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……12
第７図　２号竪穴住居跡出土石器実測図（1/2）……13
第８図　３号・５号竪穴住居跡実測図（1/60）……14
第９図　３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……15
第10図　３号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）……16
第11図　４号竪穴住居跡実測図（1/60）……17
第12図　４号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……17
第13図　４号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）……18
第14図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……18
第15図　５号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）……19
第16図　１号掘立柱建物実測図（1/40）……20
第17図　２号掘立柱建物実測図（1/40）……21
第18図　３号掘立柱建物実測図（1/40）……22
第19図　４号掘立柱建物実測図（1/40）……23
第20図　５号掘立柱建物実測図（1/40）……24
第21図　３号掘立柱建物（Ｐ－５・６），５号掘立柱建物（Ｐ－５）出土土器実測図（1/4）…25
第22図　６号掘立柱建物実測図（1/40）……26
第23図　７号掘立柱建物実測図（1/40）……27
第24図　８号掘立柱建物実測図（1/40）……28
第25図　９号掘立柱建物実測図（1/40）……29
第26図　１号・２号竪穴状遺構実測図（1/40）……30
第27図　３号竪穴状遺構実測図（1/40）……31
第28図　３号竪穴状遺構出土土器実測図（1/4）……31
第29図　１号・２号土壙実測図（1/30）……32
第30図　１号・２号土壙出土土器実測図（1/4）……33
第31図　３号・４号土壙実測図（1/30）……34
第32図　５号・６号土壙実測図（1/30）……36
第33図　７号・８号土壙実測図（1/30）……37
第34図　９号・10号土壙実測図（1/30）……38
第35図　11号・12号土壙実測図（1/30）……40
第36図　13号・14号土壙実測図（1/30）……41

第37図　15号・16号土壙実測図（1/30）……42
第38図　17号・18号土壙実測図（1/30）……45
第39図　19号・20号土壙実測図（1/30）……46
第40図　21号・22号土壙実測図（1/30）……47
第41図　23号・24号土壙実測図（1/30）……48
第42図　土壙墓実測図（1/30）……49
第43図　土壙墓出土土器実測図（1/3）……50
第44図　土壙墓出土鉄器実測図（1/2）……50

立野遺跡

第45図　D地区出土縄文土器（1/3）……64
第46図　竪穴住居跡模式図と各部の名称（赤線は床面の下層遺構を示す）……65
第47図　1・2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4，4は2号住居跡出土）……66
第48図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）……67
第49図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）……68
第50図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）……69
第51図　3号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30，1/3）……70
第52図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……72
第53図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）……74
第54図　4号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30，1/3）……75
第55図　4号竪穴住居跡出土土器実測図①（1/4）……76
第56図　4号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）……77
第57図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）……79
第58図　5号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……79
第59図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……80
第60図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）……82
第61図　6号竪穴住居跡支脚……82
第62図　6号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30，1/3）……83
第63図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……折り込み
第64図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）……85
第65図　7号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30，1/3）……86
第66図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……折り込み
第67図　8号竪穴住居跡実測図（1/60）……88

第68図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……89
第69図　9号竪穴住居跡実測図（1/60）……90
第70図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）……91
第71図　10号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30，1/3）……92
第72図　10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……93
第73図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）……94
第74図　11号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……95
第75図　11・12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4，113は12号出土）……96
第76図　12号竪穴住居跡実測図（1/60）……96
第77図　12号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30，1/3）……97
第78図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）……99
第79図　13号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……100
第80図　14号竪穴住居跡実測図（1/60）……101
第81図　13・14号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……101
第82図　15号竪穴住居跡実測図（1/60）……102
第83図　15号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）……104
第84図　16・17号竪穴住居跡実測図（1/60）……105
第85図　16・17・18・19号竪穴住居跡出土土器器実測図（1/4）……106
第86図　18号竪穴住居跡実測図（1/60）……108
第87図　手捏土器・紡錘車実測図（1/2）……109
第88図　19号竪穴住居跡実測図（1/60）……110
第89図　19号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……110
第90図　1号掘立柱建物実測図（1/60）……112
第91図　2号掘立柱建物実測図（1/60）……113
第92図　3号掘立柱建物実測図（1/60）……114
第93図　4号掘立柱建物実測図（1/60）……115
第94図　5号掘立柱建物実測図（1/60）……116
第95図　6号掘立柱建物実測図（1/60）……117
第96図　7号掘立柱建物実測図（1/60）……118
第97図　8号掘立柱建物実測図（1/60）……119
第98図　9号掘立柱建物実測図（1/60）……120
第99図　10号掘立柱建物実測図（1/60）……121
第100図　11号掘立柱建物実測図（1/60）……122

第101図　12号掘立柱建物実測図（1/60）…… 123
第102図　13号掘立柱建物実測図（1/60）…… 123
第103図　14号掘立柱建物実測図（1/60）…… 124
第104図　15号掘立柱建物実測図（1/60）…… 125
第105図　16号掘立柱建物実測図（1/60）…… 126
第106図　17号掘立柱建物実測図（1/60）…… 127
第107図　18号掘立柱建物実測図（1/60）…… 128
第108図　19号掘立柱建物実測図（1/60）…… 129
第109図　20号掘立柱建物実測図（1/60）…… 130
第110図　16号竪穴住居跡段状遺構実測図（1/30）…… 132
第111図　正方形平面竪穴式家屋の類形…… 139
第112図　C地区A号掘立柱建物実測図（1/50）…… 140
第113図　B地区19号掘立柱建物実測図（1/50）…… 141
第114図　C地区B号掘立柱建物実測図（1/50）…… 142
第115図　B地区15号掘立柱建物実測図（1/50）…… 143
第116図　B地区17号掘立柱建物実測図（1/50）…… 143
第117図　B地区14号掘立柱建物実測図（1/50）…… 144

表　目　次

下原遺跡

第１表　１号掘立柱建物計測表……20
第２表　２号掘立柱建物計測表……21
第３表　３号掘立柱建物計測表……22
第４表　４号掘立柱建物計測表……23
第５表　５号掘立柱建物計測表……24
第６表　６号掘立柱建物計測表……26
第７表　７号掘立柱建物計測表……27
第８表　８号掘立柱建物計測表……28
第９表　９号掘立柱建物計測表……28
第10表　弥生時代の屋内土壙一覧表……54

立野遺跡

第11表　1号掘立柱建物計測表…… 112
第12表　2号掘立柱建物計測表…… 113
第13表　3号掘立柱建物計測表…… 114
第14表　4号掘立柱建物計測表…… 114
第15表　5号掘立柱建物計測表…… 117
第16表　6号掘立柱建物計測表…… 118
第17表　7号掘立柱建物計測表…… 118
第18表　8号掘立柱建物計測表…… 119
第19表　9号掘立柱建物計測表…… 119
第20表　10号掘立柱建物計測表…… 120
第21表　11号掘立柱建物計測表…… 122
第22表　12号掘立柱建物計測表…… 122
第23表　13号掘立柱建物計測表…… 124
第24表　14号掘立柱建物計測表…… 124
第25表　15号掘立柱建物計測表…… 125
第26表　16号掘立柱建物計測表…… 126
第27表　17号掘立柱建物計測表…… 126
第28表　18号掘立柱建物（A案）計測表…… 128
第29表　18号掘立柱建物（B案）計測表…… 129
第30表　19号掘立柱建物計測表…… 130
第31表　20号掘立柱建物計測表…… 130
第32表　竪穴住居跡一覧表①…… 136
第33表　竪穴住居跡一覧表②…… 137
第34表　掘立柱建物一覧表…… 138

付　図　目　次

付図1　下原遺跡遺構配置図（1/200）
付図2　立野・宮原遺跡周辺地形図（1/2,000）
付図3　立野遺跡遺構配置図（1/400）
付図4　立野遺跡D・E地区遺構配置図（1/200）
付図5　立野遺跡B地区遺構配置図（1/200）

Ⅰ　調査の経過

昭和54年度に開始した高速自動車国道九州横断自動車道（以下横断道と略す）の建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査事業は，この57年度で４年目を迎えた。調査にあたっては，当委員会では前年度と同様に２人１組３班編成――同時に３カ所の調査が可能となるよう計６名の文化課技術職員を専従させ，日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所と協議のうえ，同事務所側が各遺跡につけた順位に従って着手した。

稀にみる密度で住居や倉庫などが蝟集する甘木市宮原・立野両遺跡（第11地点）は，前年度と同様通年調査となり次年度への継続がみこまれ，３年がかりの大調査となるのは必至である。前年度から開始した柿原採土場の調査は，立木の伐採・搬出が予定より遅れたため，再開は５月となった。やはり，通年調査体制をとりＧ地区からＨ・Ｉ両地区へと移動したが，墳丘下の遺構，新たな墳丘の発見が相次いだ。

甘木市西原遺跡Ｃ区（第15地点）の調査は，唐突に生じた。「当地点は調査完了」（実は今回調査部分以外が終了）と誤認され「障害物件なし」との条件で側道工事が発注され，施工業者が重機類を現地に搬入してしまったからである。既述の２カ所の他に，八木山バイパス関係の調査に職員１名を専従として割いており，さらに８月から後述する朝倉郡朝倉町長島遺跡（第27地点）の試掘をも併行するという無理な体制で臨んでいただけに，対応に苦慮した。調査着手を延ばすことはできず，やむなく約１ケ月間の調査を応急的に実施せざるを得なかった。なお，第15地点では他に数カ所試掘を行ったが，いずれも遺構は確認されなかった。

朝倉町長島遺跡の調査は，土地問題未解決のため着手は大巾に遅れた。これより東方にある山田サービスエリアと国道386号線とを結ぶ土砂搬出路用地の確保を公団側が強く希望しており，このため，概東西に走る路線の中心杭以北を対象としている。朝倉町内の調査は58年度にも予定されており，調査の円滑な進捗を図るため町内に３×４間のプレハブ事務所を新設した。

この他，同町内では，第21・26・28地点ならびに山田工事用道路予定地の試掘調査をユンボを使用して行った。このうち，第26地点と山田工事用道路予定地では全く遺構がなく，本調査の必要なしと判断された。

なを，甘木市が丸山公園内の一丘陵を公団側に採土場として提供するというケースが前年に続いてくり返された。円墳や土壙墓群などの存在が知られていたが，「市と公団との問題」との態度を甘木市側が本年も変えなかったため，横断道関係の調査に従事している関係職員はこの問題に関与しないこととした。

総じて，57年度は現地調査のみが突出し，特に秋には１人１現場，八木山バイパスをも含めると５カ所もの調査が同時進行するという異常事態となった。58年度では横断道建設工事との

輻輳が一段と激化することが予測される。

整理作業は例年どおり，甘木市内の整理棟と太宰府市の県立九州歴史資料館とで行っている。調査の進展に伴い，出土品の量が増大しているので，本年度も甘木市内の倉庫棟（プレハブ4×10間）を新設してこれに備えている。しかし，いきおい現場優先とならざるを得ず，整理作業のくり越しが増加しつつある。

なお，朝倉地区の調査開始に際しては，円滑なる進捗のために朝倉町役場建設課古賀係長ならびに朝倉町九州横断自動車道地権者協議会会長星野信義両氏から種々の御高配を得た。末筆ながら銘記して両氏に御礼申し上げます。

調査期間

立野遺跡（第11地点）

自　昭和57年10月1日

至　昭和57年12月10日

宮原遺跡（第11地点）

自　昭和57年4月1日

至　昭和58年3月31日

西原遺跡C区（第15地点）

自　昭和57年8月30日

至　昭和57年10月2日

柿原採土場（第57地点）

自　昭和57年5月10日

至　昭和58年3月31日

長島遺跡（第27地点）

自　昭和57年8月5日

至　昭和58年3月31日

調査関係者（昭和58年1月末日現在）

日本道路公団福岡建設局

局　長	持永竜一郎	
総務部長	田代勝重（前任）	落合一彦
管理課長	布川　堯（前任）	梅田道人
管理課長代理	野口利夫	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長	江口正一（前任）	乗松紀三
副所長	矢野浩司	

〃　（技術担当）中村義治

庶務課長　森本太助（前任）　松下幸男

用地課長　溝口萩男（前任）　岩下　剛

工務課長　深町貞光（前任）　山口宗雄

小郡工事区工事長　田口　裕

甘木工事区工事長　瀬戸山邦雄

朝倉工事区工事長　吉永英一（前任）　平沢　正

福岡県教育委員会

総　括

教育長　友野　隆

教育次長　守屋　尚

管理部長　森　英俊

管理部文化課課長　藤井　功

〃　課課長補佐　中村一世

庶　務

管理部文化課庶務係長　内山孝之

〃　事務主査　三島洋輝（前任）　松尾　満

〃　主任主事　長谷川伸弘

調　査

管理部文化課調査第2係長　栗原和彦

〃　主任技師　石山　勲

〃　同　浜田信也

〃　同　児玉真一

〃　同　新原正典

〃　同　中間研志

〃　同　佐々木隆彦（前任）

〃　同　小池史哲

〃　同　池辺元明（前任）

昭和56年度（追補）

下原遺跡（15地点）

自　昭和56年6月15日

至　昭和56年10月15日

II 位置と環境

下原遺跡は福岡県甘木市大字一ツ木字下原に所在する。

甘木市の北側に連なる山々は筑紫山系の三郡山地に属し，古処山（859.5m），馬見山(977.8m）等の連峰から源を発する小石原川と鳥屋山（645.1m），米山（590.9m）等の連峰を源とする佐田川が大平山（315.1m）を狭んで南流し，筑後川へ注ぎ込んでいる。これらの連山は殆んどが壮年期から老年期の山々で，その狭間を縫って流れる両河川によって形成された広大な扇状地が南眼下に一望できる。その中にあって両河川に浸蝕され形成された扇状台地が多数南方に細長く延びており，廻りには冲積平野が広がり現在の農耕基盤として利用されている。小石原川と佐田川とに開析されて形成された扇状台地には原始から古代にかけての数多くの遺跡が群在し，下原遺跡が位置する扇状台地もその一つである。当台地は新世代第四紀の前半の洪積世に形成された洪積層台地で，表土下には阿蘇山の噴火による黒色土の火山灰が堆積していることでも判る。

下原遺跡は南方に延びる洪積層台地のほぼ中央部の西端に位置し，小石原川を見下す標高30.5mの地点にある。遺跡の周囲は原始から古代にわたり絶間なく遺跡群が営まれ，当時の生活基盤の一翼を担っていた。それは弥生時代中期頃から特に顕著になり，遺跡は拡大化される。その源には南方に広がる冲積平野の生産性が背景にあったことは推測できる。その証左として栗山遺跡に観られる大規模甕棺墓群とそれに継承される石棺墓群の設営が考慮される。しかも，下原遺跡の北側に隣接して中期後半の甕棺墓が崖に露呈しており，栗山甕棺墓群とは異った集団墓が形成されている。これらに伴う集落群も当然台地上に構成されており，後の世代に引き継がれた集落として小田道遺跡が出現する。小田道遺跡以降には台地の南側に神蔵，小田茶臼塚等の前方後円墳が築造され，地域一帯への権力構造が一段と強化されてくる。

これら諸遺跡の下地ともなるべき弥生時代中頃までの生活遺跡は台地周辺では必ずしも明らかではなく，断片的な資料は採集されてはいるが，調査された生活遺跡としては小田集落遺跡，大願寺遺跡程度で非常に少ない。しかし，栗山遺跡でみられた様に弥生時代中期前葉頃の甕棺墓群が発見でき，少なからず同時期の集落構成を窺い知る資料は揃いつつある。

弥生時代を中心とする生活遺跡等については甘木市史編さん委員会発行の「甘木市史」—上巻—及び福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」—1—等に詳細に記載されており，個別の遺跡については上記の刊行物を参照されたし。（佐々木）

立野（たての）遺跡は福岡県甘木市大字下浦字立野に所在する。遺跡の営まれた台地の東を小石原川が，西は宝満川がそれぞれ南流して筑後川に注いでいる。立野遺跡はこの台地の東側縁辺部に存在し，周辺の水田面との比高差は約5m程である。眼下には，水田の合間を縫って南流し，

最終的には筑後川に合流する小河川たる陣屋川を望むことができる。水田への給水面からみると，小石原川は主要河川として動脈的役割を担い，陣屋川は従位的な河川ではあるが，その流路周辺の水田を十分に潤している。

立野遺跡はその東方の宮原(みやばる)遺跡とともに，6世紀後半乃至末頃から8世紀代におよぶ集落遺構が主体を占める遺跡である。両遺跡とも昭和56年度に調査を開始し，現在継続中であるが，立野遺跡では4世紀代以降の埋葬遺構群の他に，竪穴住居跡76軒，掘立柱建物40棟以上を検出しており，未調査分を加えると，竪穴住居跡100軒以上，掘立柱建物は50棟を越えるものと推測され，宮原遺跡は竪穴住居跡・掘立柱建物の数がおのおの立野遺跡の倍に及ぶと推定される。このように，立野・宮原遺跡は6世紀以降律令的支配体制が確立し，展開する期間とほぼ重なる集落遺跡であり，以下に関連遺跡を素描することによって歴史的環境を概観しておこう。

筑後平野北縁部の甘木市・小郡市周辺で，立野・宮原遺跡を具体的に考える時，遺構の構造や集落問題との関連で，小郡市向築地遺跡（註1）・干潟遺跡（註2），甘木市柿原野田遺跡（註3）・小田道遺跡（註4）が報告例として存在する。

向築地遺跡は史跡小郡郡衙跡の南側低丘陵に営まれた集落跡で，竪穴住居跡9軒・掘立柱建物5棟・土壙15（16？）等が報告されている。7世紀初め頃より8世紀初め頃までの土器が報告されており，竪穴住居跡の年代幅はこの中におさまりそうであるが，掘立柱建物はそのプランと構造の面において不明な部分が多い。4～9号住居跡が約100年の間に営まれているとされ，主柱穴配置と住居の平面プランに整合しない部分があるものの，1軒の竪穴住居跡の持続時間幅を考える上で興味深いし，このような狭い範囲での短期間のあいつぐ重複関係は，居住地「選択権」に関する社会的に重要な問題の存在を示唆しているのではないかと考えられ，同様な重複関係は立野・宮原遺跡において数多く見ることができる。上記の問題を考える上で向築地遺跡は重要な参考例となる。また，2号住居跡の構造とカマドの位置は極めて特異な例である。

干潟遺跡は，第Ⅰ・Ⅱ次調査で竪穴住居跡36軒・掘立柱建物22棟の他にごみ捨て場とされる土壙19等が報告されている。その時期幅は7世紀中葉かやや降る頃から8世紀代にかけてのものである。7世紀代には竪穴住居跡23軒，土壙2基の他に土壙墓が営まれ，8世紀代にはいって掘立柱建物が採用されるように見受けられ，10軒の住居跡とともに土壙10基以上が営まれている（時期不明竪穴住居跡3軒がある）。掘立柱建物の中には倉庫あるいは倉庫と私考するもの5棟（7・11～13・16）の他に両面廂建物（20号）が検出されている。棰先瓦が出土し，井上廃寺出土のそれとの関連性が説かれている。あるいは造寺集団の一翼を担ったか，寺院と関連のある集落跡であった可能性も残し，また，地理的な面や掘立柱建物の推定年代（8世紀）から，小郡(おごおり)郡衙との関係も考慮に入れてよいだろう。金製玉の出土や竪穴住居・掘立柱建物の

併存から，集落内の重層的人間関係を推測することができる。さらに，竪穴住居床面下の構造（掘り込みや土壙—第46図参照）やカマドの支脚に使用されたと考えられる小型甕や瓦の出土等，立野・宮原遺跡との共通点が多い。田崎博之氏による出土土器の4期（Ⅰ～Ⅳ期）編年が呈示され，立野・宮原遺跡を考える上で避けて通れない重要な遺跡である。なお，その後，第Ⅲ次調査が行われ，竪穴住居跡7軒，掘立柱建物1棟が検出されている（註5）。

柿原遺跡は佐田川中流域右岸に営まれ，集落遺構が多く検出されたD地区では，竪穴住居跡13軒・掘立柱建物5棟（うち1棟は柵列かとされる）等が検出され，B地区で掘立柱建物1棟が検出されており，出土遺物から8世紀代の年代が推定されている。竪穴住居跡の規模の大・小による住居内の主柱穴配置の相違や，カマドの構造の差が指摘されており，掘立柱建物（倉庫を含む）との併存ともあわせて，奈良時代の集落を考える上で重要な遺跡である。

小田道遺跡は佐田川右岸の低台地上に営まれた弥生時代の終末期を前後する集落遺構が主体を占める集落遺跡であるが，8世紀代に所属するとされる5軒の竪穴住居跡が報告されている。これらの竪穴住居跡の床面下の構造は，小田道遺跡の北方約2㎞の同一低台地東縁部に営まれた西原遺跡（註6）の竪穴住居跡でも見ることができる。

立野・宮原遺跡の竪穴住居跡床面下の構造と類似の遺構は，佐田川・小石原川・宝満川流域での報告例ではわりと普遍的に存在することが知られる。また，集落の構造や性格に関しては，上記の報告された遺跡との対比や，7世紀後半代の創建とみられる井上廃寺や8世紀代の小郡郡衙との関係も考慮に入れる必要がある。（児玉）

註

1 小郡市教育委員会『向築地遺跡』（小郡市文化財調査報告書 第5集）1978

2 福岡県教育委員会『干潟遺跡Ⅰ』（福岡県文化財調査報告書 第59集）1980

3 柿原野田遺跡調査団『柿原野田遺跡』1976

4 甘木市教育委員会『小田道遺跡』（甘木市文化財調査報告 第8集）

5 1980年に福岡県教育委員会が調査し，調査担当者の伊崎俊秋氏に御教示頂いた。

6 1982年に横断道第15地点として福岡県教育委員会が調査を実施した。

参考文献

甘木市史編さん委員会『甘木市史』上巻 1982

Ⅲ　各遺跡の調査

下原遺跡の調査

1 調査の概要

当該遺跡は前項でも述べたように朝倉山塊系の大平山・安見ケ城山から細長く南方向に派生する洪積層台地上にあり，甘木地方では遺跡の集中する地域として著名な所でもある。

下原遺跡の調査を実施するにあたり，日本道路公団甘木事務所より柿原採土場からの工事用道路を先行施工させたいとの主旨の連絡を受け，発掘調査の当事者である福岡県教育庁文化課と道路公団甘木事務所間で協議の結果，主要地方道の甘木・田主丸線の西側での本線及び側道部分のＳＴＡ・114＋60～121＋20間（調査時の地点名＝15地点）の予備調査を先行作業として実施した。予備調査は遺跡の分布状況の把握を主眼とし，それに基づいて発掘調査の工程等の策定を目的とした。このことを踏えた上で，先ず重機による試掘から実施した。試掘調査後間も無く本線敷地内の一部で水田耕作がなされ，本線内の廻りの耕作地に少なからず影響を及ぼすことも懸念されたが，試掘調査は支障を来すことなく遂行できた。

先ず試掘はＳＴＡ•114＋60付近から開始し，本線幅員内で等間隔に４本の試掘溝を設定し，遺構の有無を確認し乍ら進めた。

その結果，ＳＴＡ•114＋60から既設地方道の甘木・田主丸線までの間約4,200㎡の内の2,660㎡のみに遺構が確認され，前記の様に位置としては洪積層台地の西端の一部で，眼下に冲積平野が望める箇所である。このことから後世における台地の削平も考えられるが，予備調査時に地元の古老から拝聴した所によると「当地は本来灌木が繁茂しており，削平を受けた記憶がない」との返事が返ってきた。本線内の地形は廻りの地形と比較して僅かではあるが低く，遺跡の空白地である可能性も考慮される。

調査で検出した遺構内容は竪穴住居跡５軒，竪穴状遺構３基，掘立柱建物９棟，土壙24基，土壙墓１基，溝状遺構１条，その他ピット群等である。遺構自体は少なく，竪穴住居跡が僅かに散在していること，竪穴住居跡に重複することなく高床式の倉庫群が営まれており同時併存が窺えること等々から集落の北限近くを調査対象としたものと考えられ，集落の母体はより南側に遺存していた可能性が強い。現在，隣接する南側にはアスファルト工場の敷地として使用され，著しく削平を受けており旧地形を窺い知ることはできないが，計らずしも本調査時に来現した古老の話では「削平したのは戦後間も無い頃のことで，水田の整備作業を行う目的で採土したと云う。その際に緑泥片岩の板石が多数発見され，人骨(頭骨)も数体出土した」とのことであった。このことから少なくとも集落跡の他に石棺群が遺存していたことは確実であろう。

その他特記すべき事象として土壙群が挙げられる。この内の１号・２号土壙からは少量ではあるが土器が出土しており，土器の形状から竪穴住居跡と同時期の所産であるが，その他の土壙は出土遺物が皆無であり時期は明らかでないが，３号・20号土壙が竪穴住居跡より古いことが確実となり，別の用途を考えなければならない。

なお，発掘区中央部付近で押型文土器の小片を検出したが，整理中に紛失してしまい記録に留めることができず残念である。出土した時点でトレンチ調査を実施したが，伴う遺構は確認されなかったことを付記しておく。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版4-(1)・(2)，第3図）

発掘区の南西隅で検出した竪穴住居跡で，南西の壁はアスファルト工場建設のため削平を受けており，調査前に崖面に露呈し住居跡の存在は確認していた。平面形態は方形を呈すと思われ，北壁が胴張りをなし，南壁も同様であろう。規模は東西軸5.25m，壁高40cm前後を測る。現存の床面積は約22.4m²を測る。床面からは中央ピットを除いて14個の柱穴を検出したが，主柱は4本と思われるがその内の1本は検出できていない。主柱と考えられる柱穴の深さは8～9cmと浅い。柱間は2.85m，1.90mである。屋内土壙は東壁沿いに不整楕円形の浅い土壙が掘られており，長軸1.10m，短軸70cm，深さ19cmで，通常の屋内土壙にしては浅い。現存では周溝はなく，床面上には焼痕も認められない。床面中央には方形に近い一辺80cm，深さ30cm強のピットが掘られており，ピットの周囲には床面よりも3乃至4cmの高い土手状の遺構が廻っている。中央ピットに土手状遺構が廻る類例は岡山県の惣図遺跡（山陽町教育委員会「惣図遺跡発掘調査概報」-1971年）の10号・15号住居跡等にあり，柱穴とは異る用途に使用された可能性があり，中央の屋内土壙も考慮せねばなるまい。主軸方位はN41°Eを示す。

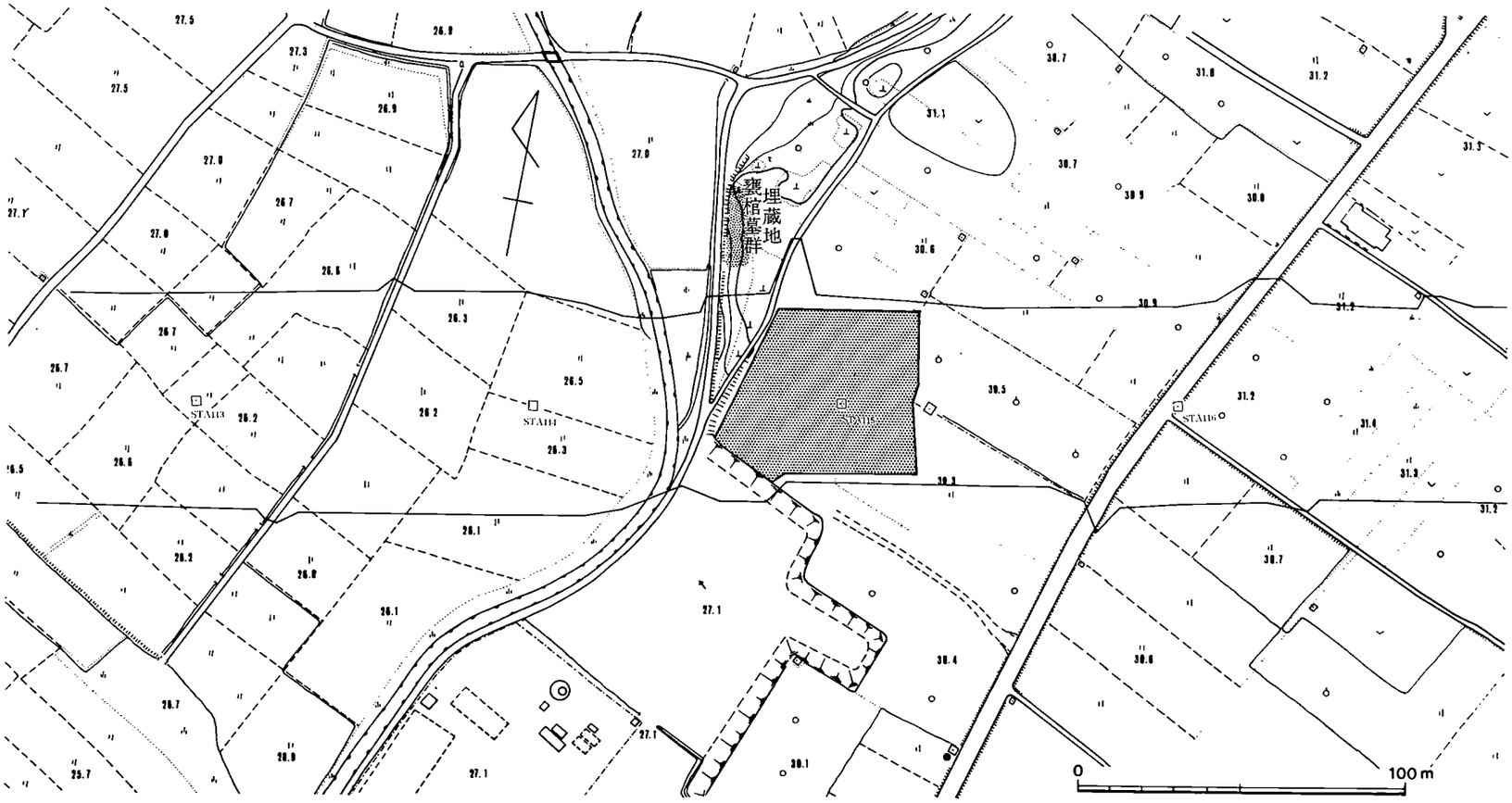
出土遺物は壺・甕・鉢・蓋・器台等がある。出土した土器から住居跡の時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物

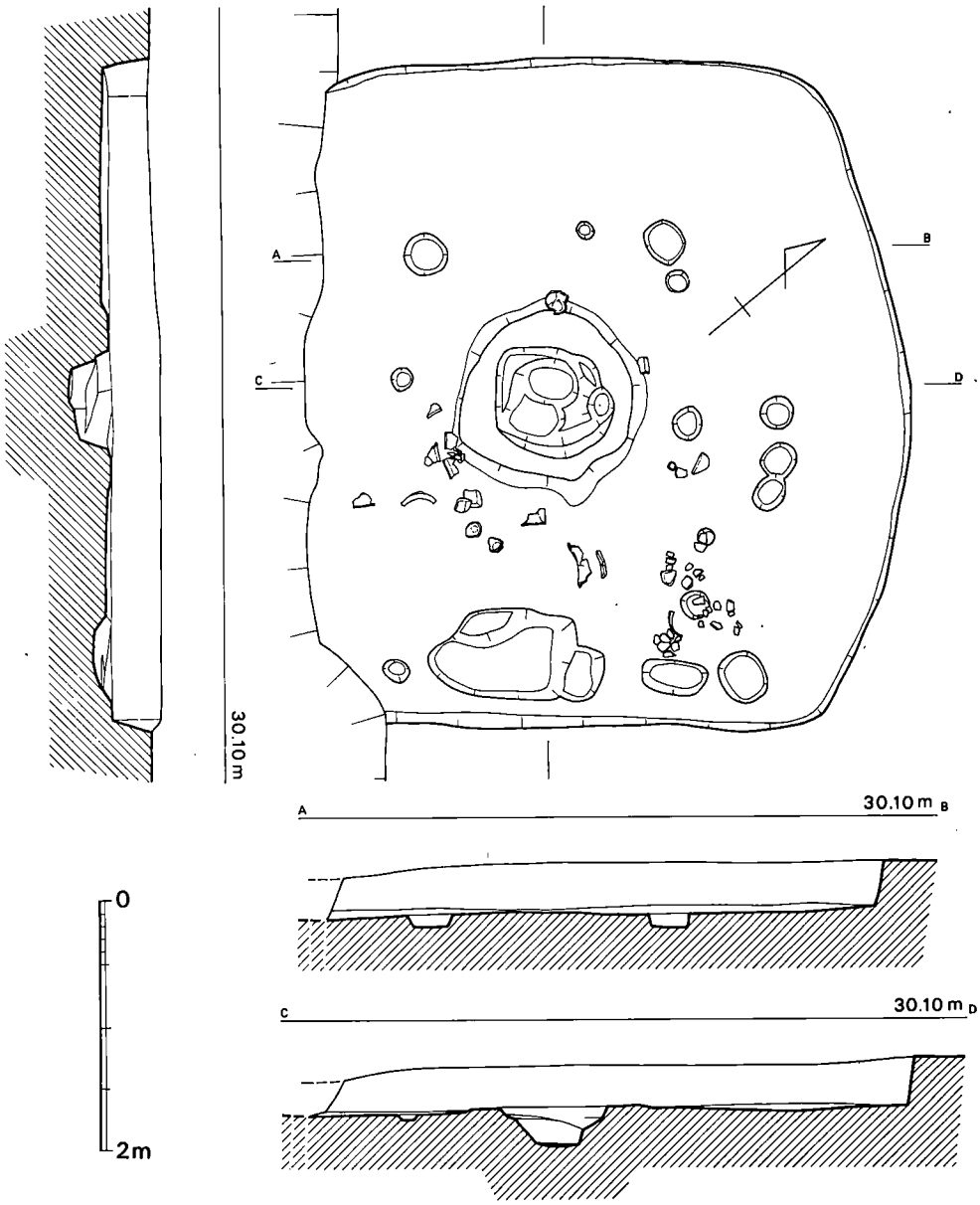
土　器（図版24，第4図）

壺には(1)・(2)がある。(1)は広口壺の破片で鋤先口縁を有す。平坦部には細い暗文を廻らす。調整は丹塗り研磨であり，二次加熱を受けくすんだ赤色を呈す。(2)は復元実測の壺で口縁平坦部は内傾し，頸部は細まり肩部には三角凸帯を付せる。つくりの良好な精製された土器で丁寧なナデで仕上げる。

甕には(3)～(11)がある。(3)～(6)は口縁平坦部が内傾するが，弥生時代中期後半の所謂「く」字状口縁とは肩部の張り具合等で明らかに相異が認められる。口唇部に凹線を廻らすものもあり，上方に肥厚させ跳ね上げ口縁状をなす。この内(6)は口唇部にヘラによる不規則な刻み目を

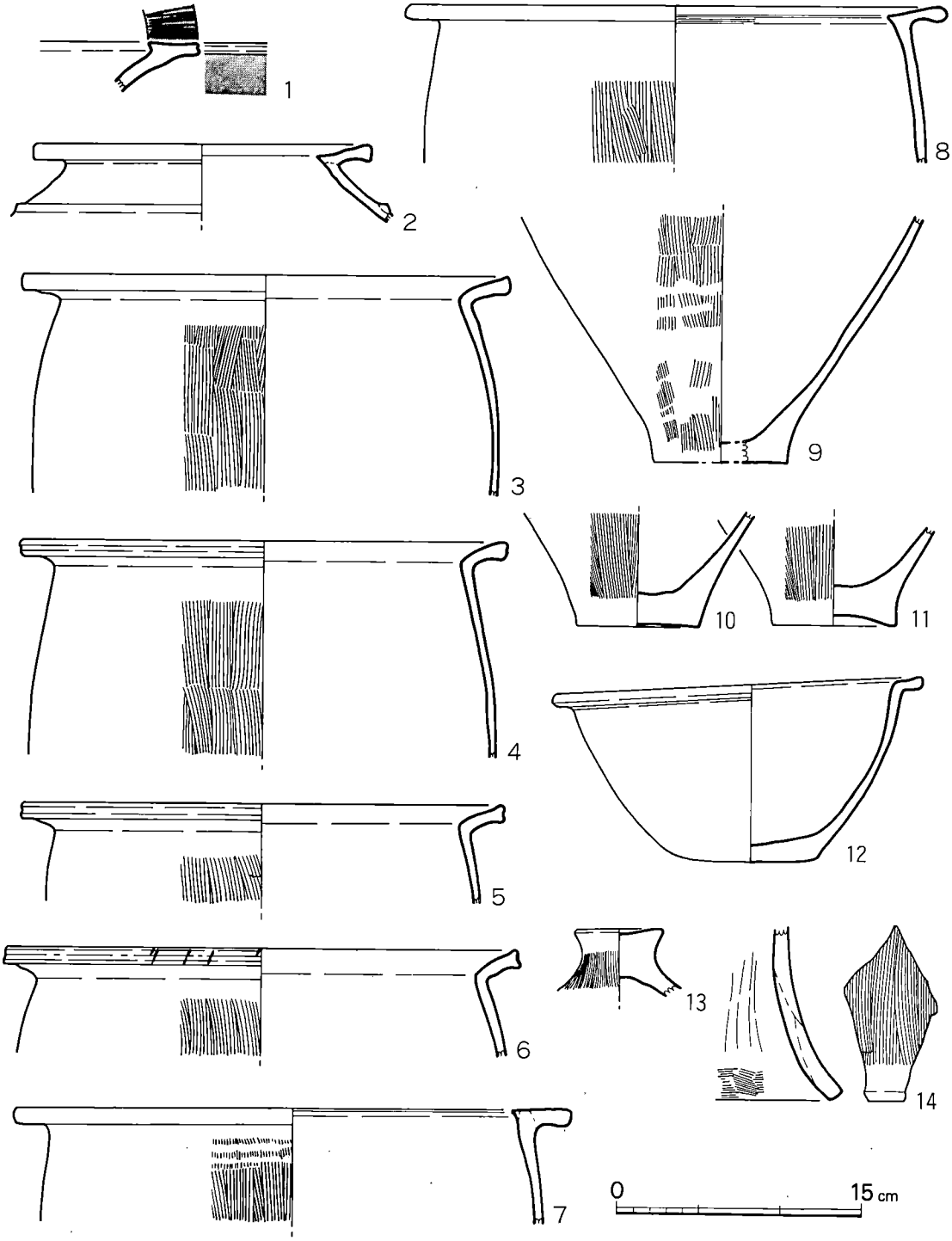


第2図　下原遺跡地形図（1/2,000）



第3図 1号竪穴住居跡実測図（1/60）

施す。胴部の張りは鈍く，細みの底部を持つと思われる。調整は全てハケとナデで仕上げ，煤の付着が多々見受けられる。この一群は遠賀川系統の甕である。(7)・(8)は逆「L」字状の口縁部を有す甕で(7)は厚手につくられる。調整は前者の甕と同様である。当該住居跡の甕は遠賀川系統の甕の出土が目立つ。



第4図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

鉢には⑫がある。口縁部は逆「L」字状をなし，不安定な底部を有す。調整は横方向のヘラ磨きを施し，つくり，焼成とも良好な土器である。器外面には二次加熱を受ける。

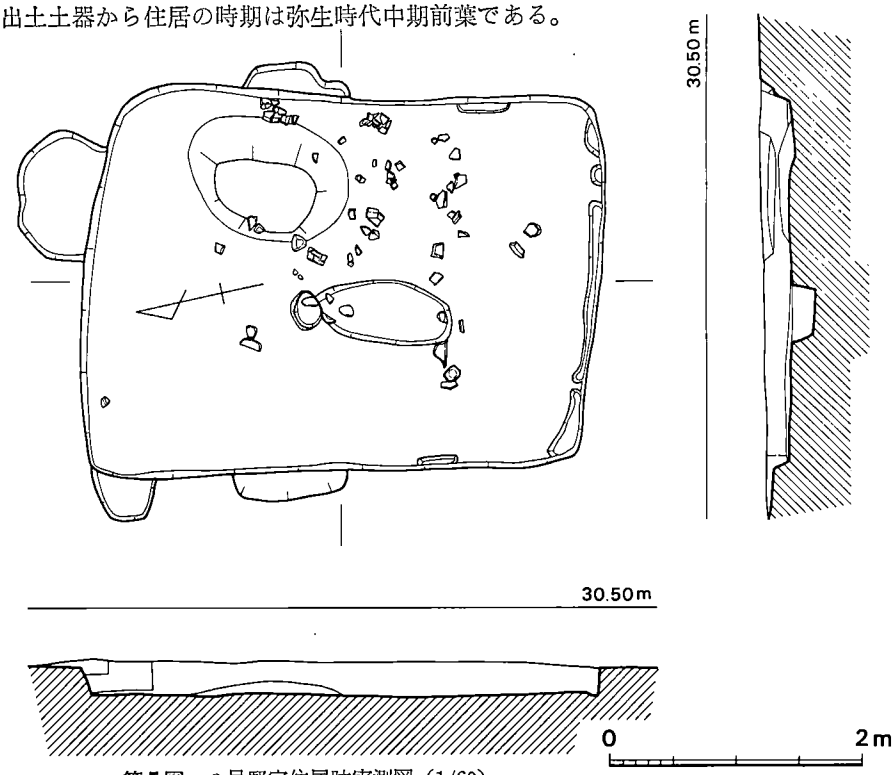
蓋形土器は⑬がある。摘み部のみが遺存し，やや小振りである。調整はハケで仕上げる。砂粒多く淡黄褐色を呈す。

器台には⑭がある。小片であるが細かい縦ハケで仕上げ，弱い二次焼成を受ける。

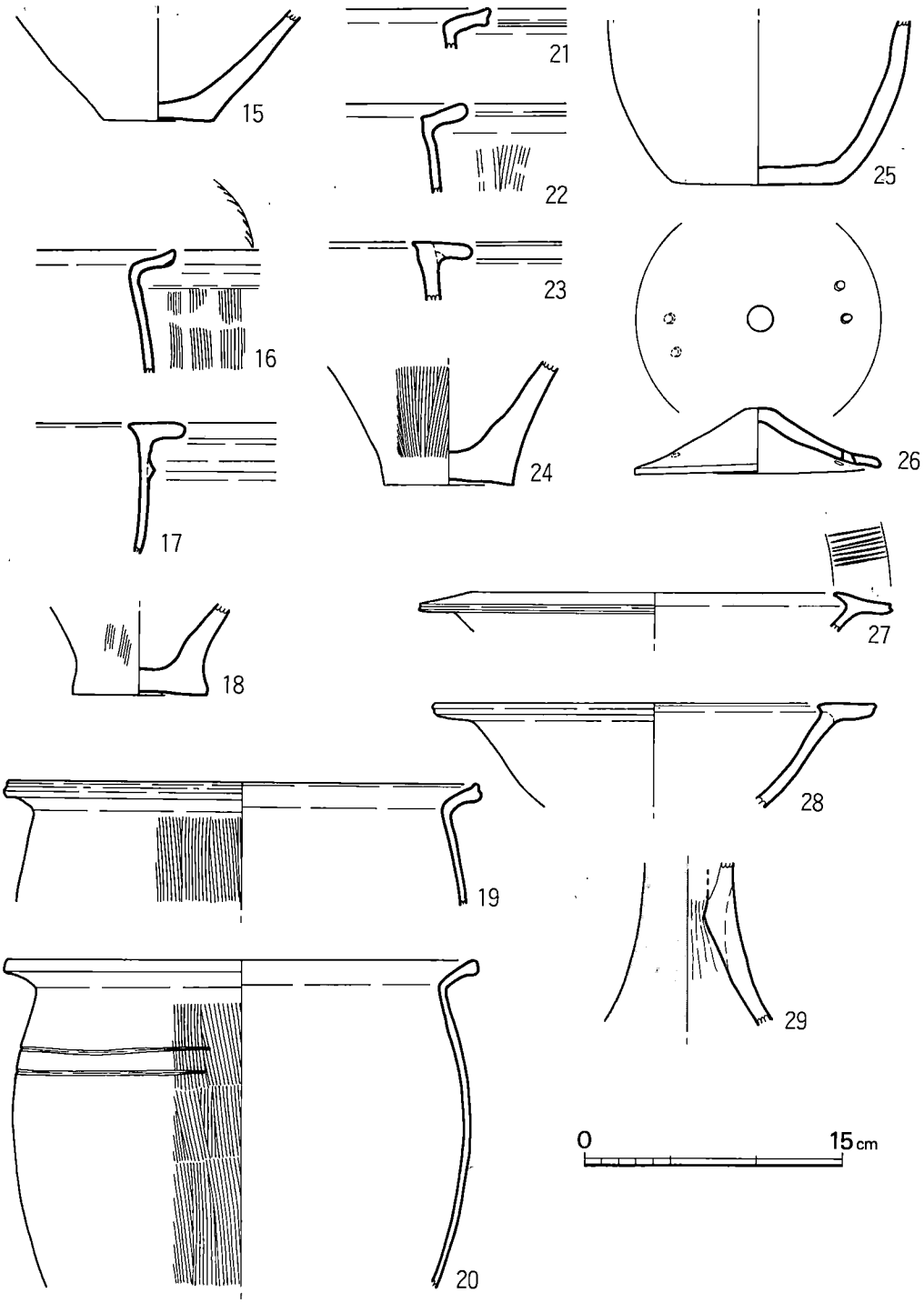
2号竪穴住居跡（図版5-(1)・(2)，第5図）

1号竪穴住居跡の北西に位置する住居跡で，平面形態が長方形をなす。規模は長軸4.10m，短軸2.95m，壁高20cm前後を測る。床面積は11.3m²で小型の住居跡である。柱穴は床面中央部に一本あるのみで，壁の外周等にも掘られていない。柱穴の壁面は強い焼痕が残り焼失住居跡の様相を呈するが，床面からは焼土・炭化物は認められない。柱穴の傍には楕円形の掘り込みがあり，焼痕は残らないが炭化物を含む黒色土が充塡されており炉跡と推測されるが，柱穴の傍である点が疑問視される。南壁には周溝が掘られ，東壁沿いには楕円形を呈する台形状の高さ9cmの凸部が地山と同一の黄褐色土で付設しているが，用途は明らかでない。主軸方位はN 11°Eを示す。

出土遺物は壺・甕・鉢・蓋・高坏で構成される。この他頁岩製の石庖丁片が1点出土している。出土土器から住居の時期は弥生時代中期前葉である。



第5図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）



第6図 2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土　器（図版25，第7図）

壺は(15)が1点出土している。広口壺の底部で僅かに上げ底をなす。器外面には黒色の光沢があり，通常甕棺に塗布される黒塗りであろう。胎土は緻密で焼成も堅固である。

甕には(16)～(24)があり，出土数は他の器種を圧倒している。形態は2タイプあり，口縁平担部が内傾し口唇部を跳ね上げるか肥厚させる遠賀川系統の甕(16)・(19)・(20)～(22)と逆「L」字の口縁を特徴とする遠賀川以西の甕(23)とがある。この内の(17)は胴部の曲線から鉢の可能性が高い。底部も2種類あり，やや開く(18)と細まる(24)とがある。調整は全てハケとナデで仕上げ，(20)の様に肩部に2本の沈線を施すやや古い技法を残すものもある。この場合の沈線は一周しない。

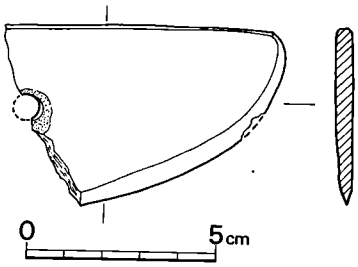
鉢には(17)・(25)がある。(17)は逆「L」字状口縁で口縁下に一条の三角凸帯を付せる。器面の風化が著しく煤の付着が認められる。(25)は丸みのある胴部に大きな平底を持つ。器壁は厚くつくられ，二次加熱を受ける。

蓋形土器には(26)がある。復元実測で対峙する箇所に各2個づつ孔を穿っている。孔は紐で摩耗している。風化著しいが，胎土の良好な土器である。

高坏には(27)～(29)がある。(27)は「T」字状の口縁をなし，口縁平担部が外傾しヘラによる暗文を施している。口唇部は鋭い沈線が廻り，赤色の化粧土を塗布し，丁寧なナデで仕上げている。二次加熱を受けくすんだ赤色を呈す。形状から観るとやや新しい要素が窺える。(28)は鋤先口縁をなし厚みを持つ。口唇部には凹線を廻らし，坏部は横ヘラ磨きで仕上げる。部分的に二次加熱を受ける。(29)は脚部で丹塗り磨研である。胎土・焼成とも頗る良好である。

石　器（図版28，第7図）

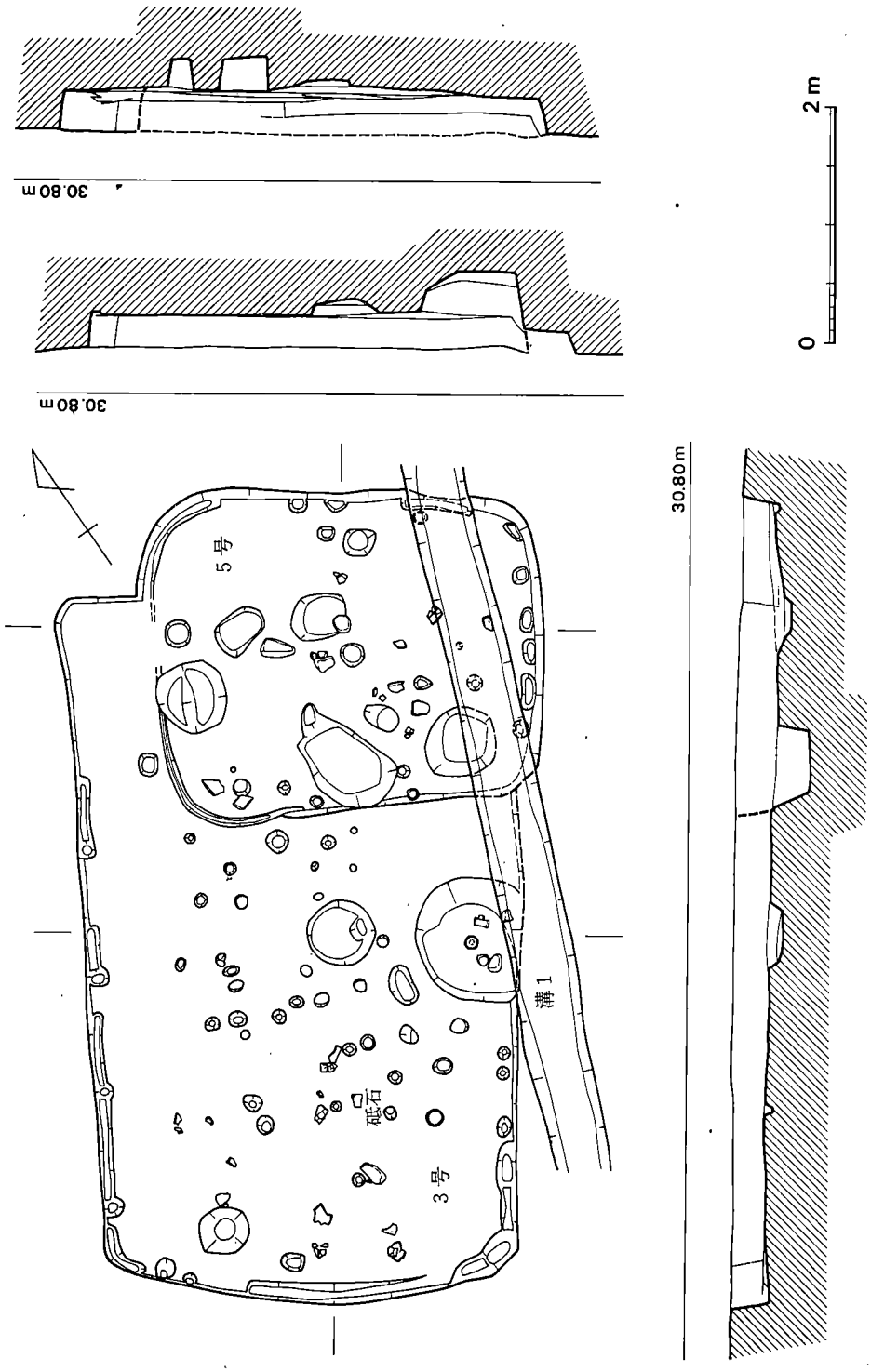
床面直上から出土した頁岩製の石庖丁で½以上を欠失している。現存での長さ7.4cm，最大幅4.8cm，孔は復元径0.7cmを測り，両側面からの穿孔である。



第7図　2号竪穴住居跡
出土石器実測図（1/2）

3号竪穴住居跡（図版6-(1)・(2)，第8図）

発掘区の南東で検出した竪穴住居跡で，溝状遺構と5号竪穴住居跡に切られている。平面形態は長方形を呈し，規模は長辺5.65m，短辺3.55m，壁高は30cm前後を測る。床面積は21.6m²である。柱穴は中央ピットを除くと南壁沿いに1個あり，その他は小ピットが床面と壁沿いに無作為的に掘られている。その中には断面が「V」字状をなし所謂〝杭〟を打ち込んだ痕跡を残していることから，上部構造の副次的な支えとしての使用法が考慮されるが，無作為に散在していることに疑問が持たれる。仮に前記の使用法を想定した場合，主柱穴の掘方は設けず僅かな凹状程度の掘込みの可能性を考えねばならない。さらに視点を変えて中央ピットを柱



第8図 3号・5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

穴と見做し，その二次的支えとしての用途も考慮できる。ちなみに中央ピットの深さは10cmを測る。東壁中央沿いでは円形の屋内土壙を付設している。その規模は1.05×0.90m，深さ30cmである。炉跡は見当らず床面に焼痕は認められない。主軸方位はN 35°E を示す。

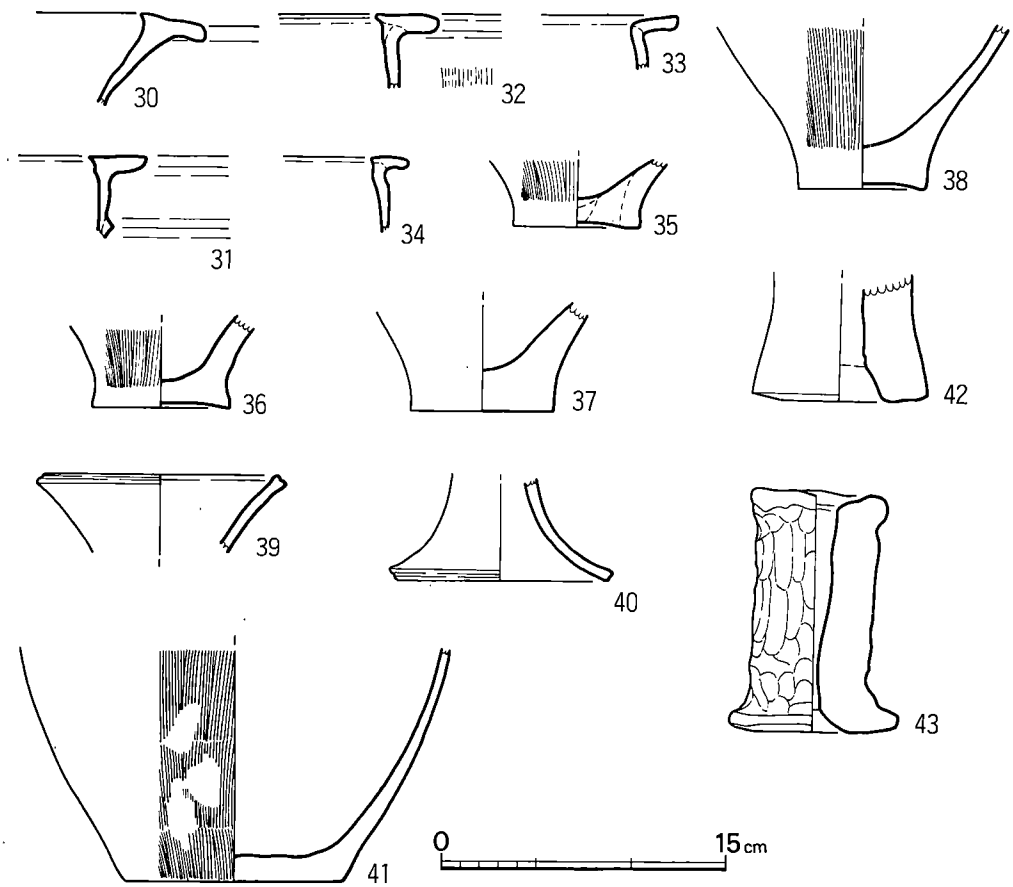
出土遺物は床面上で壺・甕・鉢・器台・砥石があり，屋内土壙から甕（底部）・器台が出土している。出土土器から住居跡の時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物

土　器（図版25・26，第9図）

壺は(30)の広口壺がある。鋤先状の口縁部をなし，平坦部は外傾する。調整は丁寧なナデ仕上げである。

甕は(31)～(38)がある。この内の(31)は(41)の底部と同一個体とも考えられ，鉢の可能性がある。逆「L」字状の厚手の口縁をなし口縁下には一条の三角凸帯を付せる。(32)～(34)は逆「L」字状口



第9図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

縁をなすもので，(32)は煤の付着が著しい。(33)は平坦部が僅かに内傾する。(34)は小型の甕で精製され，ヘラ磨きで仕上げる。(36)・(37)は屋内土壙出土の甕で前者は細まった底部で接着部は台状に広がり上げ底をなし，胎土に黒雲母を多く含む。後者は細みの平底で金雲母を多く含む。両者とも二次加熱を受けており，割目は摩耗している。(38)は細みの上げ底をなし不安定な感じを与える。煤が付着している。調整は(34)を除くと全てハケとナデで仕上げる。

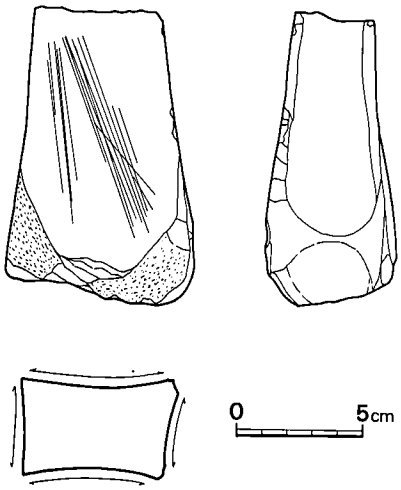
精製器台には(39)・(40)がある。両者は胎土・焼成とも同一で一個体であろう。口縁部は直に外反し，口唇部は肥厚させる。脚は細みの胴部から大きく開く裾部を持ち，端部の技法は口唇部と同様である。調整は縦方向のヘラ磨きとナデで仕上げ，化粧土を塗布する。(40)は風化著しく器面の剝落が著しい。弥生時代中期に普遍的に出土する器台形土器の祖型であろう。

鉢には(41)がある。平底の太目の底部を持つ。底部外面には一見ヘラ削り風のカキ取りを施し，細かいハケと丁寧なナデで仕上げる。色調は灰白色を呈し，白っぽい感がある。

(42)・(43)の粗製器台は屋内土壙出土で頗る厚手である。両者とも指頭によるナデで仕上げる。しかし，粗製器台が屋内土壙の特定の遺構から出土したことに何らかの意義が秘められているとも考えられる。

石　器（図版28，第10図）

砥石が1点出土している。約½を欠損し，現存での長さは11.7cmを測り，砥ぎ面中央部が細まる。4面に砥ぎ痕が残り，その内の一面には斜方向に細い線刻が走る。石材は硬質砂岩で，一部に煤が付着する。



第10図　3号竪穴住居跡出土石器実測図（1/3）

4号竪穴住居跡（図版7-(1)，第11図）

発掘区の北西隅で検出した竪穴住居跡で，一部が本線外のため完掘に至ってない。平面形態も明らかではないが，他の住居跡の形状から短辺胴張りの隅丸長方形と推測される。規模は南北壁のみ計測可能で3.50m，壁高20cm前後を測る。床面積，主柱穴等は不明であるが，現存では床面上から5個の柱穴を検出した。床面中央部と目される箇所にはピットが掘られ，深さは15cm程であるが中からは炭化物・灰等の出土は認められない。

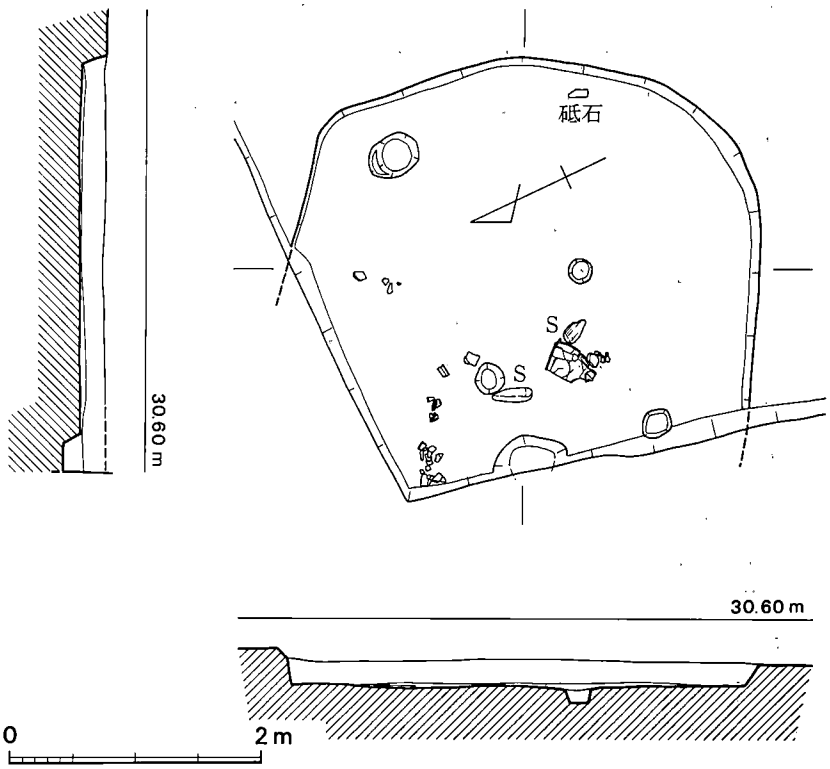
中央ピットの廻りの床面は硬く踏み固められていた。その他の付設遺構は明らかでない。

出土遺物は甕・鉢・高坏・器台の他，砥石が1点出土している。出土土器から当住居跡の時期は弥生時代中期前葉である。

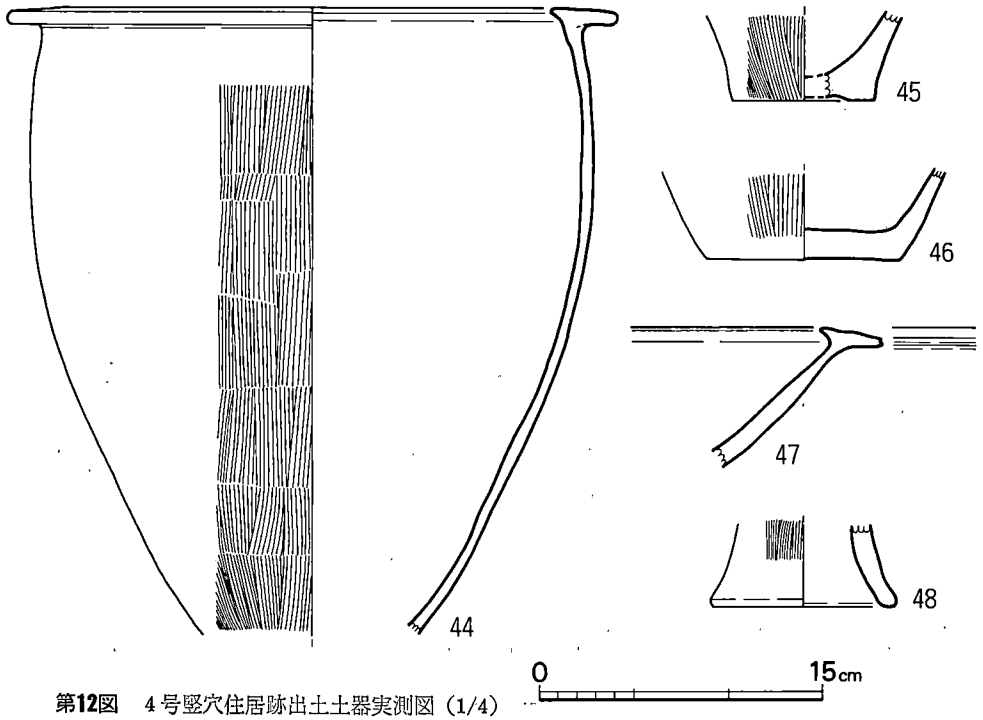
出土遺物

土　器（図版26，第12図）

甕には(44)・(45)がある。(44)は復元実測で逆「L」字状の口縁部に僅かに内傾する頸部を有し，張りの鈍い胴部をなす。底部付近は細みで底部を欠失する。調整は丁寧なナデと荒いハケで仕上げ，全体に煤の付着と二次加熱が著しい。底部



第11図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）



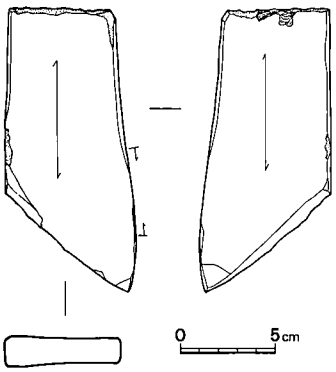
第12図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

は(45)の様な形状をなすと思われる。(45)は上げ底を呈すが，前者の土器と同一個体ではない。二次加熱を受けている。

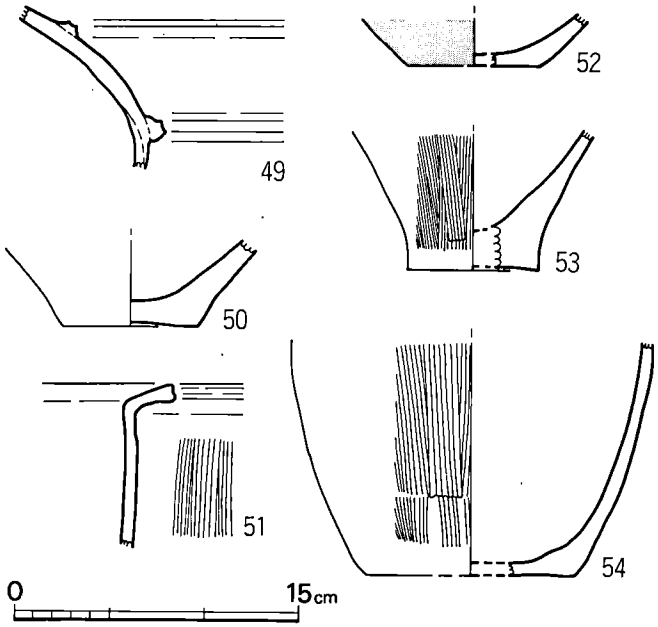
鉢には(46)がある。太目の平底をなす。調整は荒いハケで仕上げ，胎土には金雲母を多く含み，焼成は堅固である。

高坏は(47)がある。鋤先状の口縁を持ち平坦部は外傾する。口唇部は鋭い沈線が廻り，坏部の器壁は厚くつくられる。調整はヘラ磨きを丁寧に施し，赤色の化粧土を塗布するが，強い二次加熱を受けくすんだ赤色を呈す。しかし，丹塗り研磨とは明らかに異る。

器台は(48)がある。裾部は鈍く開き端部は尖って終る。器壁はやや厚手で細いハケと丁寧なナデで仕上げる。



第13図　4号竪穴住居跡出土石器実測図（1/4）



第14図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

石　器（図版28，第13図）

砥石が1点出土している。一部石の目に沿って欠損しており，現存長14.7cm，幅は最大で6.6cm，最小で5.6cm，厚さ1.4cmを測る。砥ぎ面は2面で，一部側面に使用痕が残る。石材は硬質砂岩製である。

5号竪穴住居跡（図版6，第8図）

溝状遺構に切られ，3号竪穴住居跡を切った状態で検出した住居跡である。平面形態は隅丸方形に近く，西壁は検出時にプランが不明確であったため確認に困難を来した。規模は東西壁で3.30・3.05m，南北壁で2.45・2.80m，壁高約20cmを測る。床面積は8.7m²と狭く検出した竪穴住居跡では最も小型である。主柱は明らかではなく，規則的な柱穴は見当らない。壁沿いには小型のピットが掘られ，壁とピットの間隙に何等かの構造物の存在が推測される。南壁傍には不整形の屋内土壙と想定されるピットが掘られ長軸85cm，短軸55cm，深さ34cmを測る。周溝は西壁沿いに深さ3cmと浅く掘られている。炉跡に使用されたピットはなく，床面には焼痕も無い。主軸方位はN55°Wを示し，3号竪穴住居跡と主軸が90°で交叉する。

出土遺物は壷・甕・鉢の他，緑泥片岩の磨き石が出土している。屋内土壙からの出土遺物は

皆無である。出土土器から住居跡の時期は弥生時代中期前葉である。

出土遺物

土　器（図版26・27，第14図）

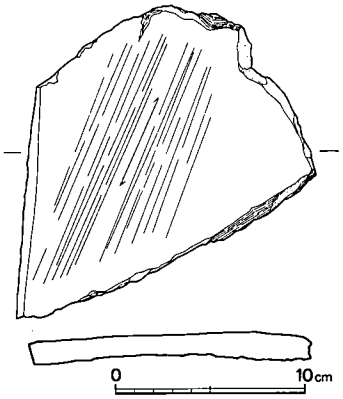
壺は(49)・(50)がある。両者とも広口壺で，前者は「M」字状凸帯を2条付せる。調整は丁寧なナデである。後者は細く締った上げ底で，内面は丁寧なナデ，外面は縦方向のヘラ磨きで仕上げる。

甕には(51)～(53)がある。(51)は逆「L」字状の口縁部で平坦部は内傾する。口唇部は肥厚させ，浅い凹線を廻らす。胴部の張りは非常に鈍い。ナデと荒いハケで仕上げ，煤の付着が認められる。(52)は小型の甕で丹塗り研磨で仕上げる。(53)は細く締った底部で僅かに上げ底をなす。調整は細いハケとナデで仕上げ，下端は横ナデを施す。下端の横ナデは出土した甕形土器の大部分に認められる。器外面は弱い二次加熱を受ける。

鉢は(54)が1点ある。大き目の平底をなし，胴部の張りは鈍く安定感がある。調整は荒いハケとナデで仕上げ，底部下端は甕と同様横ナデで仕上げる。煤の付着と二次加熱が認められる。

石　器（図版28，第15図）

緑泥片岩の板石が2点出土しているが，その内の1点に磨き痕が残る。研磨痕は一面のみで斜方向に線刻が認められる。砥石として使用される石材ではないことから，一応研磨石としておくが，何等かの作業台としての用途は窺われる。



第15図　5号竪穴住居跡出土石器実測図（1/4）

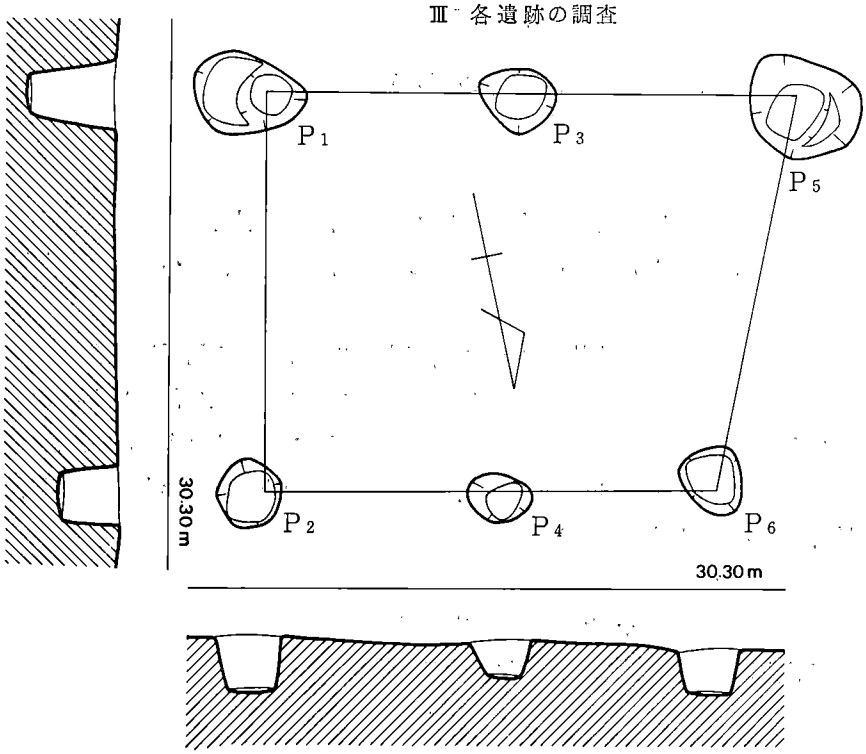
(2)　掘立柱建物

1号掘立柱建物（図版7-(1)，第16図）

1号竪穴状遺構の南側に隣接して検出した1間・2間の掘立柱建物で，他の建物に比較して梁間は狭くやや小型の東西棟である。桁行間は北側で2.75m，南側で2.45mで不規則な数値を示す。主軸方位はN78°Wを示す。柱穴の深さはP1—45cm，P2—28cm，P3—20cm，P4—18cm，P5—43cm，P6—25cmを測り，隅柱が深く掘られている。柱穴からの出土遺物は皆無である。

2号掘立柱建物（図版8-(1)，第17図）

1号竪穴状遺構の北側に隣接する1間・2間の東西棟の掘立柱建物で，梁間が広い特徴を持ち桁行間よりも長い。建物の中央部には隅丸長方形の22号土壙が掘り込まれているが，建物と



第16図 1号掘立柱建物実測図 (1/40) 0 2m

第1表 1号掘立柱建物計測表 単位 (cm)

梁間間		桁行柱間		桁行間
p1 — p2 210	p3 — p4 210	p1 — p3 130	p3 — p5 145	p1 — p5 275
	p5 — p6 200	p2 — p4 135	p4 — p6 110	p2 — p6 245

の相互関係は不明である。柱間は略一定しており均整のとれた建物である。主軸方位はN79Wを示し，1号掘立柱建物と主軸を同一にする。柱穴の深さはP1—42cm，P2—19cm，P3—30cm，P4—31cm，P5—53cm，P6—36cmを測り，P2以外は深く掘られている。柱穴からの遺物は無い。

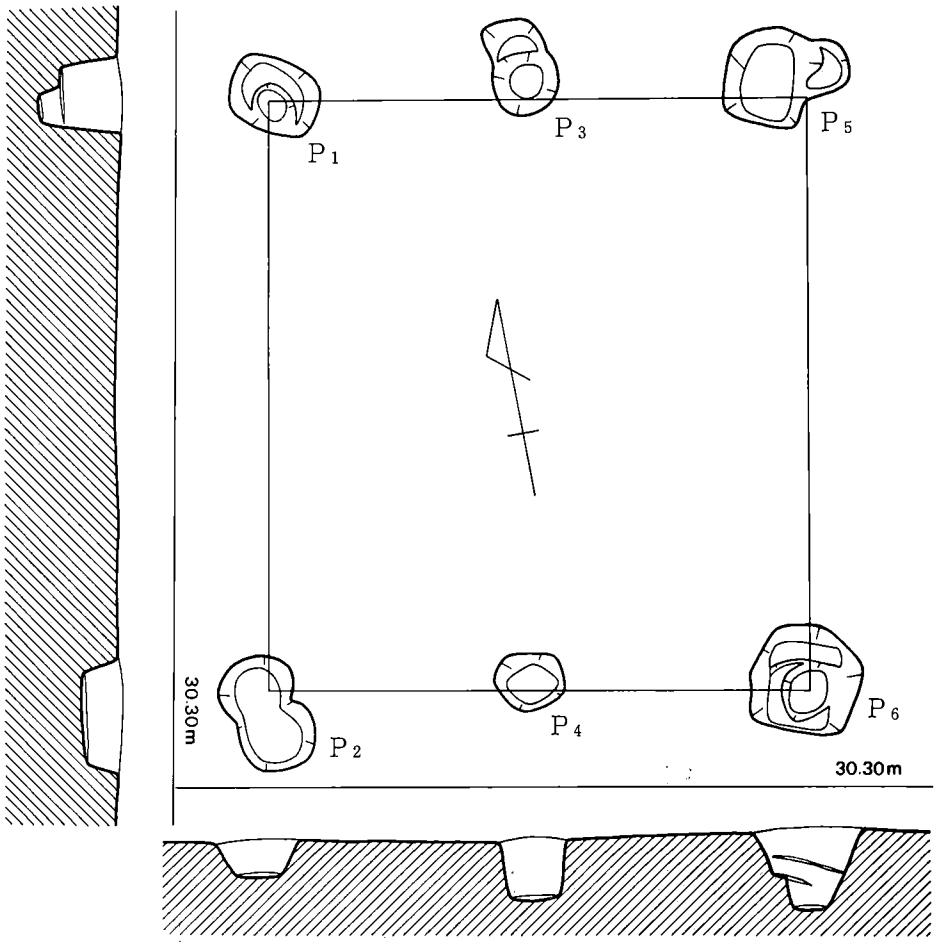
3号掘立柱建物 (図版8-(2)，第18図)

2号掘立柱建物の北側で検出した1間・2間の東西棟の掘立柱建物で，梁間と桁行間が略同数値を示し，2号と同じ形状をなす。主軸方位はN70°Wを示す。柱穴の深さはP1—29cm，P2—37cm，P3—26cm，P4—17cm，P5—53cm，P6—37cmを測り，P5の隅柱は深く南北方向の桁行中央柱は細みの柱を使用する。出土遺物はP—5・6から甕形土器が出土している。

出土遺物

土　器（図版27，第21図）

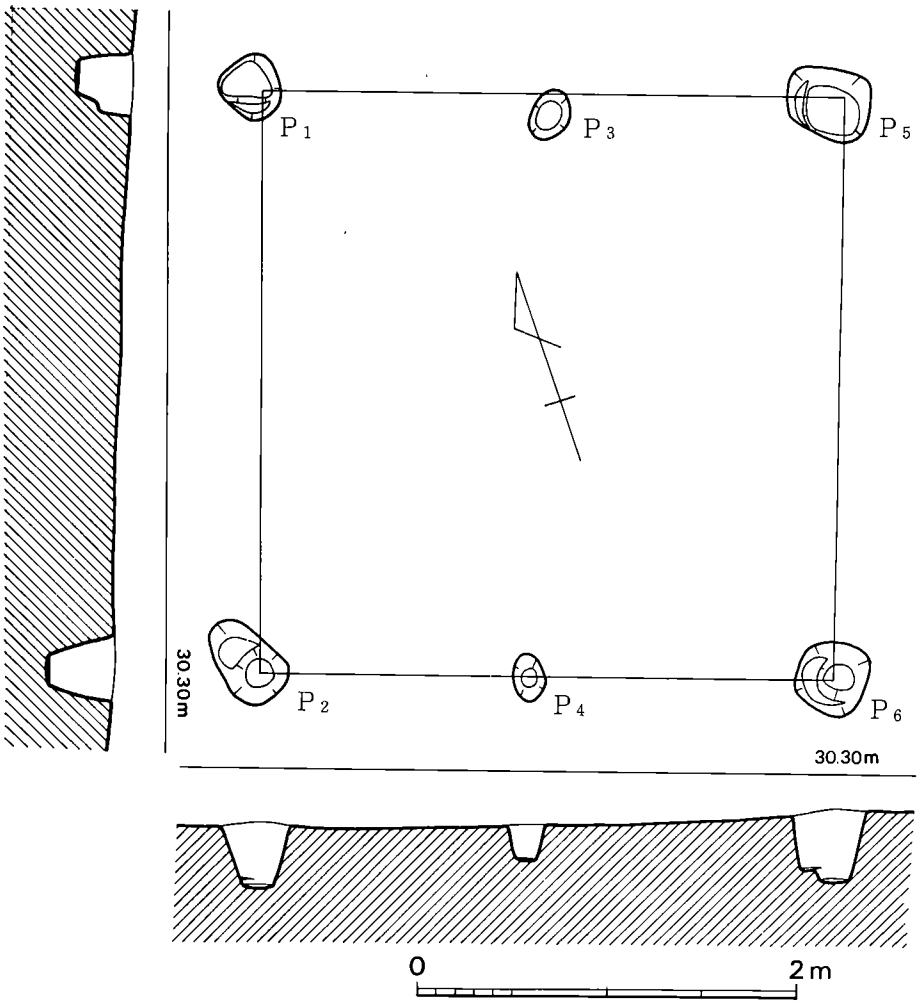
(55)・(56)の甕が2点ある。前者は未発達な逆「L」字状の厚手の口縁を有し，横ナデで仕上げる。胎土には金雲母を若干含み，灰黄褐色を呈す。後者は底部で上げ底をなし，調整はハケとナデで仕上げる。下端には横ナデを施している。黒雲母を多く含み，淡黄褐色を呈す。



第17図　2号掘立柱建物実測図（1/40）　0　2m

第2表　2号掘立柱建物計測表　　単位（cm）

梁間間		桁行柱間		桁行間
p1 — p2 310	p3 — p4 320	p1 — p3 135	p3 — p5 130	p1 — p5 265
	p5 — p6 325	p2 — p4 145	p4 — p6 145	p2 — p6 290



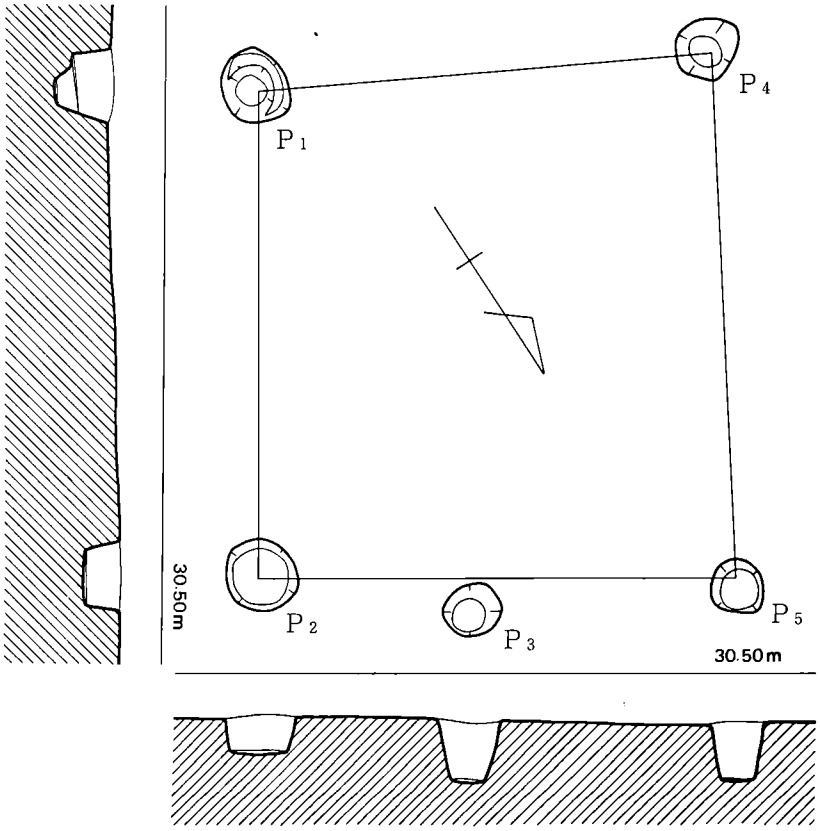
第18図 3号掘立柱建物実測図（1/40）

第3表 3号掘立柱建物計測表 単位（cm）

梁間間		桁行柱間		桁行間
p1 — p2 310	p3 — p4 295	p1 — p3 160	p3 — p5 150	p1 — p5 310
	p5 — p6 297	p2 — p4 142	p4 — p6 165	p2 — p6 307

4号掘立柱建物（図版9-(1)，第19図）

2号竪穴住居跡の東側で検出した東西棟の掘立柱建物で，1間・2間と思われるが，南側の桁行中央柱は掘られておらず明らかでない。北側の桁行中央柱も桁行中軸線から逸脱している。主軸方位はN57°Wを示す。柱穴の深さはP1—29cm，P2—18cm，P3—31cm，P4—14cm，P5—30cmを測る。柱穴からの出土遺物は無い。



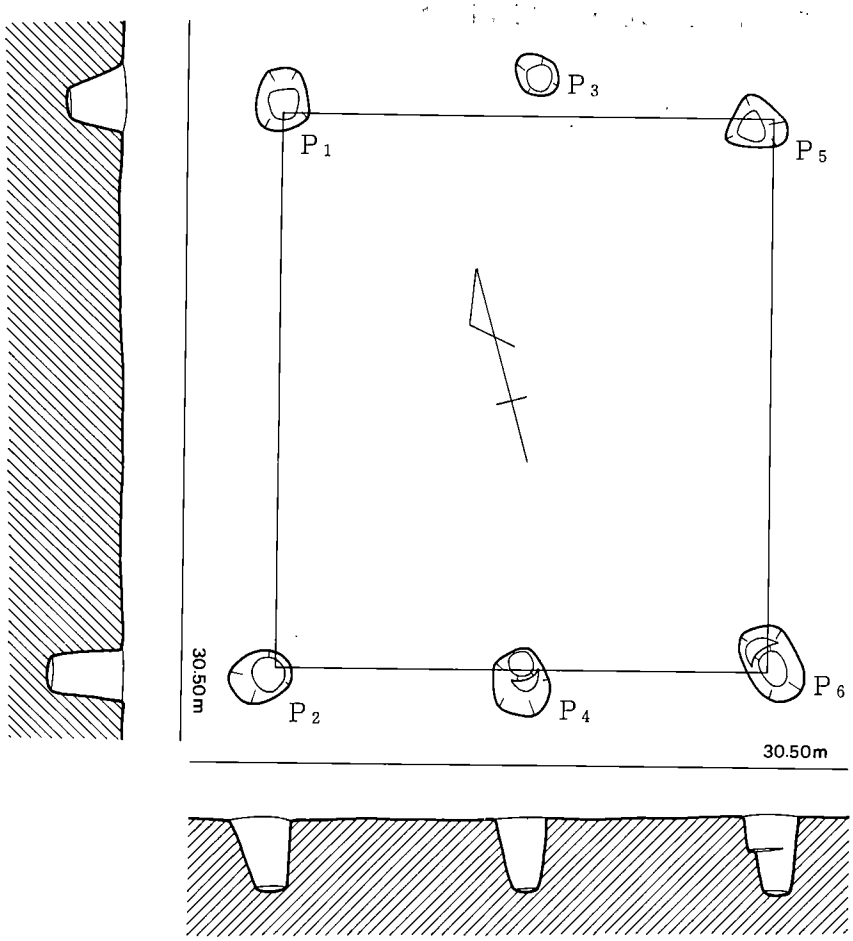
第19図 4号掘立柱建物実測図（1/40） 0 2m

第4表 4号掘立柱建物計測表 単位（cm）

梁間	間	桁行柱間		桁行間
p1 — p2 255	—	—	—	p1 — p4 241
	p4 — p5 280	p2 — p3 112	p3 — p5 140	p2 — p5 250

5号掘立柱建物（図版9-(2)，第20図）

3号掘立柱建物の北側に位置する1間・2間の東西棟の建物で，2号・3号同様桁行間よりも梁間が広い傾向を示す。北側桁行中央柱は桁行中軸線から外側に僅かにずれる。建物の主軸方位はN75°Wを示し，1号～3号建物と略同一方位をなす。柱穴の深さはP1—29cm，P2—



第20図 5号掘立柱建物実測図（1/40）

0 2m

第5表 5号掘立柱建物計測表 単位（cm）

梁間間		桁行柱間		桁行間
p1 — p2 300	p3 — p4 310	p1 — p3 135	p3 — p5 115	p1 — p5 245
	p5 — p6 285	p2 — p4 135	p4 — p6 135	p2 — p6 270

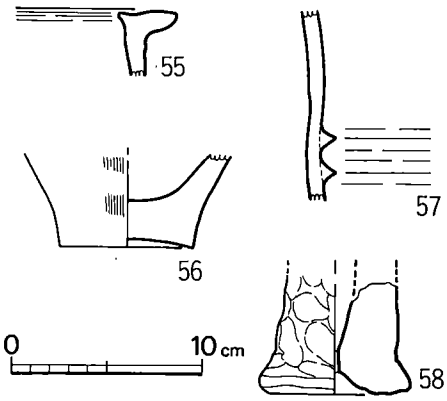
37cm，Ｐ３—28cm，Ｐ４—39cm，Ｐ５—31cm，Ｐ６—41cmを測る。柱穴からの出土遺物はＰ５から大型甕形土器片（甕棺片か）・器台がある。

出土遺物

土　器（図版27，第21図）

(57)は大型の甕形土器の胴部破片で，通常甕棺に使用されるが，周囲に同時期の甕棺墓が設営されていないことから（北側に隣接する台地の西端に甕棺墓が崖面に露呈しているが中期後半に属し，出土した土器片より新しい時期の甕棺である。）甕棺片と速断はできないが，つくりは甕棺と同様である。胴部には２条の三角凸帯を付し，横ナデの後に黒塗りを施している。

(58)は粗製の器台で，３号竪穴住居跡の屋内土壙出土の器台と同タイプの器台である。器壁は厚く，指頭ナデで仕上げる。



第21図　３号掘立柱建物Ｐ—５・６（55・56），５号掘立柱建物Ｐ—５（57・58）出土土器実測図(1/4)

６号掘立柱建物（図版10-(1)，第22図）

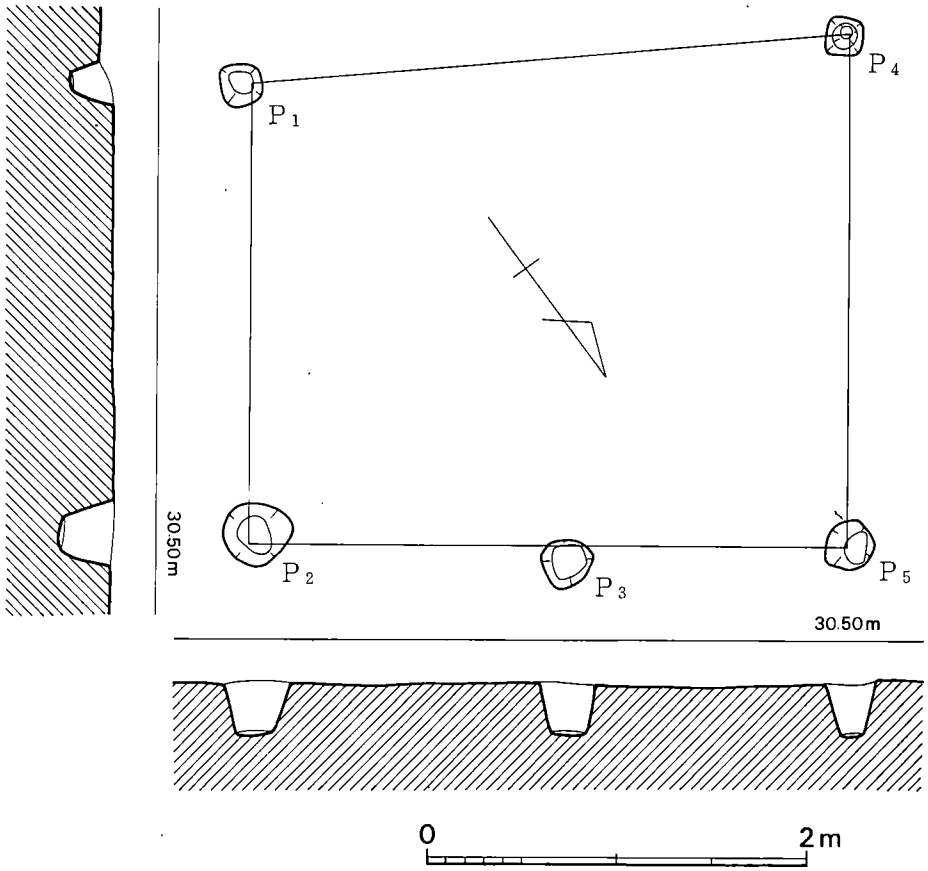
発掘区の北西側で７号掘立柱建物と重複した１間・２間の東西棟の建物である。１号建物を除く２号～５号の建物とやや形状を異にし，梁間よりも桁行間が長い。Ｐ４—Ｐ５の隅柱間はＰ１—Ｐ２のそれよりも30cm程広く，主軸に対し50°Ｗ振れており僅かながら変形をなす。さらに，南側桁行中央柱は掘られておらず，重複する７号建物と同形態を呈す。主軸方位も４号建物を除く１号～５号とは方位を異にし，Ｎ53°Ｗを示す。柱穴の深さはＰ１—22cm，Ｐ２—26cm，Ｐ３—25cm，Ｐ４—14cm，Ｐ５—25cmを測る。柱穴からの出土遺物は皆無である。

７号掘立柱建物（図版10-(2)，第23図）

６号建物と一部重複する東西棟の掘立柱建物で，６号同様北側の桁行中央柱の柱穴は見当らない。さらに，南側の桁行中央柱は桁行中軸線からやや外側に逸脱している。建物の主軸方位はＮ66°Ｗを示す。柱穴の深さはＰ１—21cm，Ｐ２—15cm，Ｐ３—13cm，Ｐ４—12cm，Ｐ５—22cmを測り，総体的に浅く掘られている。柱穴からの出土遺物は無い。

８号掘立柱建物（図版11-(1)，第24図）

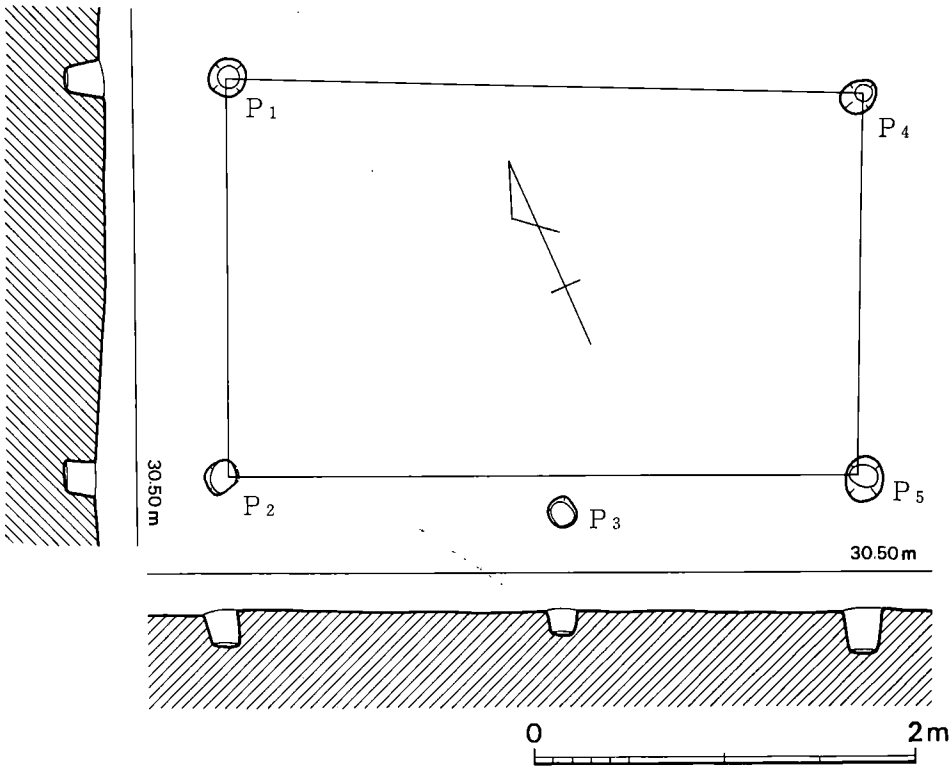
２号・３号竪穴状遺構間で検出した１間・１間の建物である。４本の柱間は2.50～2.70mを測り，他の建物の桁行間比較すると長く，竪穴住居跡の削平による柱穴の残存とも考えられる。しかし，炉跡やその他の付属施設は全く見当らない。主軸方位はＮ51°Ｅを示す。柱穴の深さはＰ１—34cm，Ｐ２—25cm，Ｐ３—32cm，Ｐ４—35cmを測る。柱穴からの遺物は出土していない。



第22図 6号掘立柱建物実測図（1/40）

第6表 6号掘立柱建物計測表 単位（cm）

梁間間		桁行柱間		桁行間
p1 — p2 240	—	—	—	p1 — p4 320
	p4 — p5 270	p2 — p3 165	p3 — p5 150	p2 — p5 315



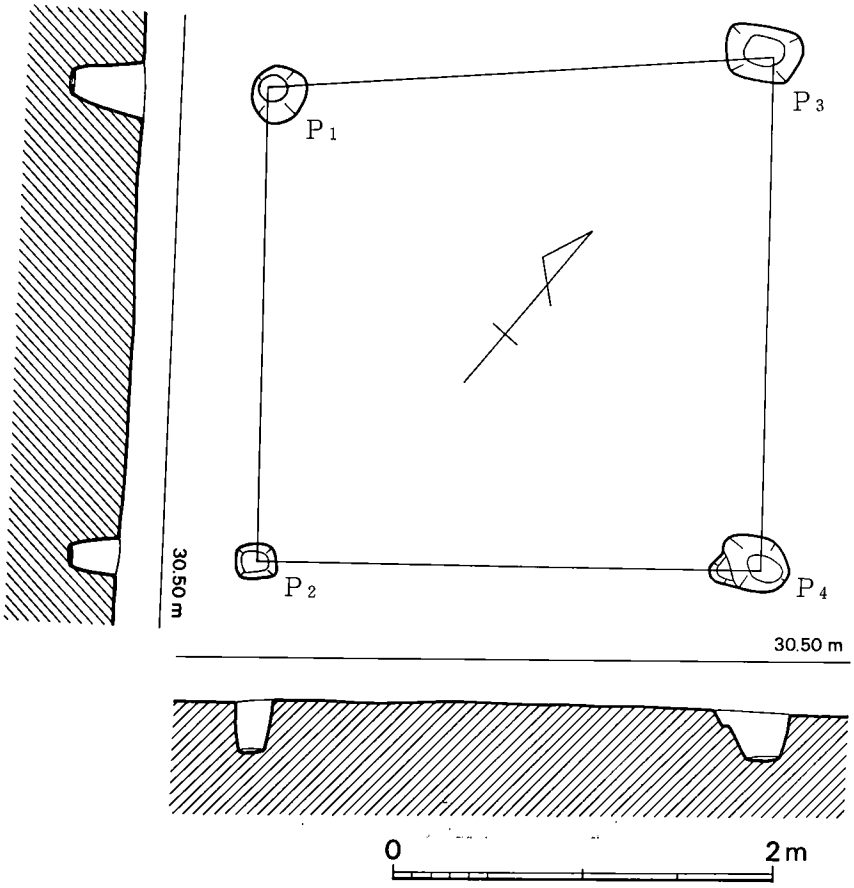
第23図 7号掘立柱建物実測図（1/40）

第7表 7号掘立柱建物計測表 単位（cm）

梁間	間	桁行柱間		桁行間
p1 — p2 210	—	—	—	p1 — p4 335
	p4 — p5 200	p2 — p3 180	p3 — p5 160	p2 — p5 340

9号掘立柱建物（第25図）

3号掘立柱建物と重複する1間・1間の建物で，8号同様竪穴住居跡の可能性を残してはいるものの，当遺跡での遺構の構成から竪穴住居跡と掘立柱建物との重複は認められないことから竪穴住居跡の柱穴とは考え難い。主軸方位はN15°Eを示す。柱穴の深さはP1—44cm，P2—42cm，P3—61cm，P4—35cmを測る。柱穴からの遺物は皆無である。



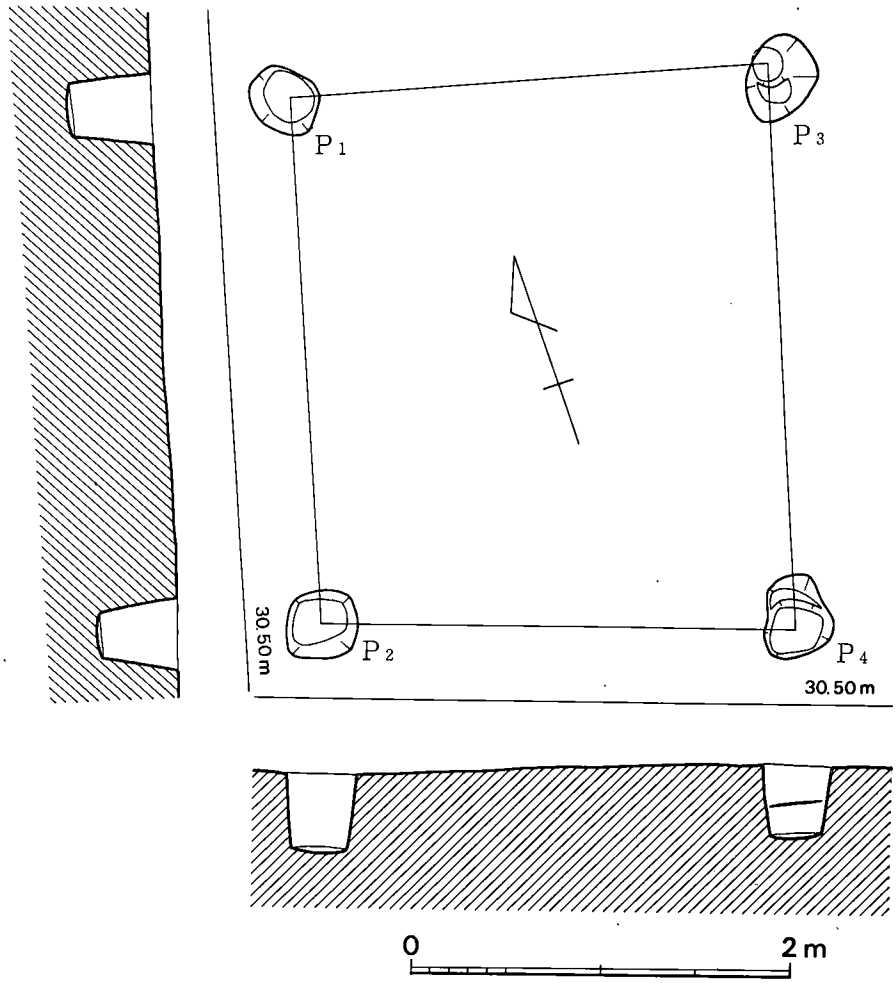
第24図 8号掘立柱建物実測図（1/40）

第8表 8号掘立柱建物
計測表 単位（cm）

梁 間 間	桁 行 間
p1 — p2 250	p1 — p3 260
p3 — p4 270	p2 — p4 270

第9表 9号掘立柱建物
計測表 単位（cm）

梁 間 間	桁 行 間
p1 — p3 255	p1 — p2 275
p2 — p4 250	p3 — p4 295



第25図 9号掘立柱建物実測図（1/40）

(3) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（第26図）

1号・2号掘立柱建物の間隙を縫って掘られた不整形の平面形態を持つ竪穴状遺構である。遺構内の覆土は住居跡内のそれと同色をなし略同時期の所産と判断したが，出土遺物が皆無で明らかではない。規模は長軸2.03m，短軸1.85m，壁高は3.0cm～8.0cmを測り，遺存状態は良くない。床面積は2.9m²である。

2号竪穴状遺構（図版11-(2)，第26図）

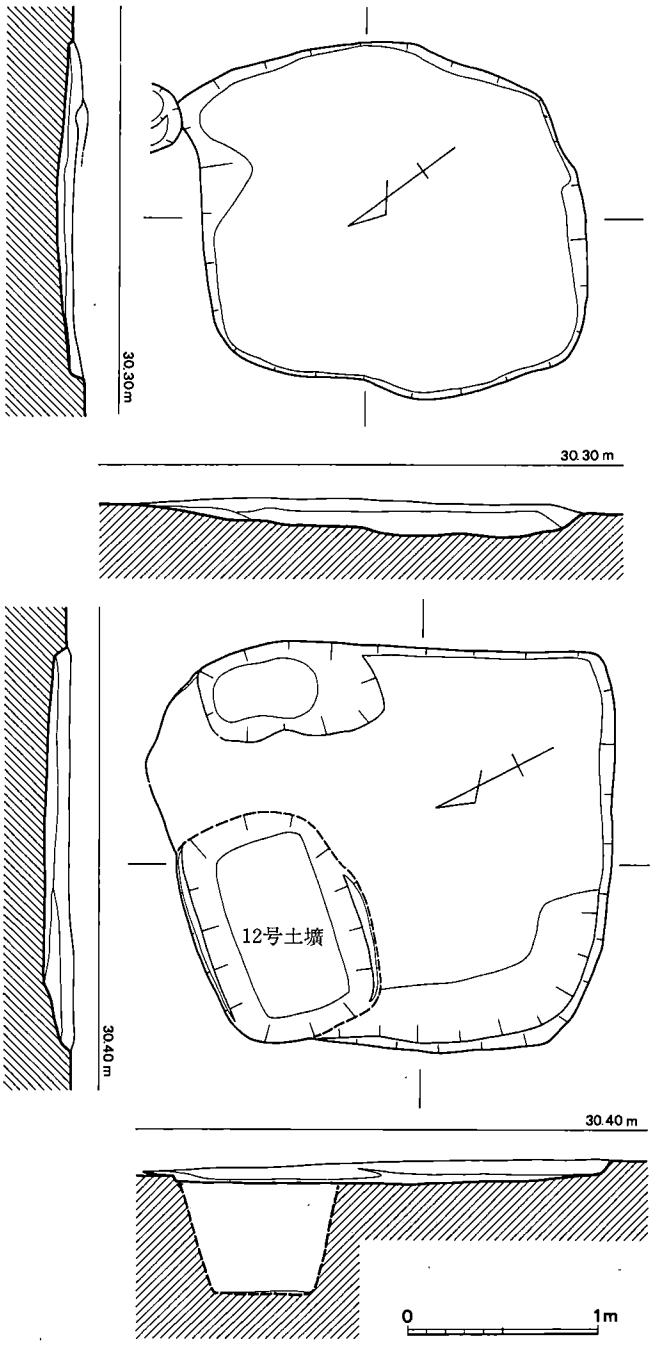
12号土壙と重複する竪穴状遺構で，重複部分は黄褐色粘土で床面を貼っている。平面形態は

隅円不整方形をなす。規模は長軸2.30m，短軸2.13m，壁高は高い所で7cm，低い箇所では殆んど遺存せず非常に残りが悪い。東壁沿いに深さ11cmの浅いピットが掘られている他は付設する遺構はない。床面は硬く踏み締められ，床の面積は4.0m²である。主軸方位はN27°Eを示す。出土遺物は甕の小破片が若干みられるが，図示不可能である。時期は土器片から弥生時代中期前葉頃と判断される。

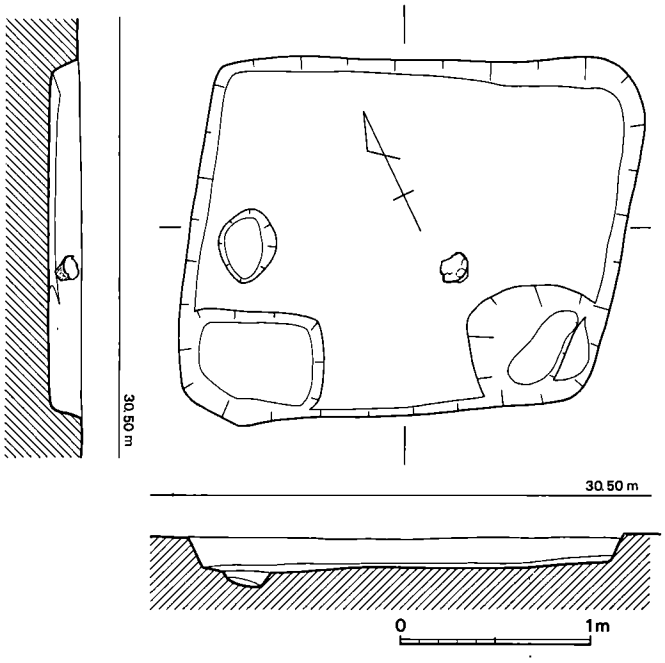
3号竪穴状遺構（図版12-(1)，第27図）

3号・5号竪穴住居跡の西側に位置する竪穴状遺構で，平面形態が長方形に近い形状をなす。規模は長辺2.15・2.30m，短辺1.80・1.90m，壁高約15cmで遺存状態は良くない。床面積は3.7m²である。ピットは西壁沿いと南壁の両隅に各1個づつ掘られている。この遺構は小型の竪穴住居跡とも考えられるが，対峙する柱穴もなく，附属施設や床面の焼痕も認められない。主軸方位はN65°Wを示す。

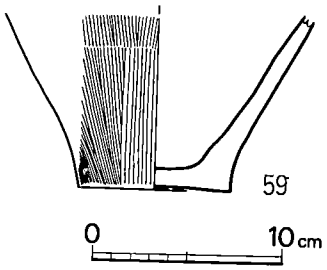
出土遺物は甕の底部が1点あり，出土土器から弥生時代中期前葉頃の所産である。



第26図 1号（上）・2号（下）竪穴状遺構実測図（1/40）



第27図　3号竪穴状遺構実測図（1/40）



第28図　3号竪穴状遺構出土土器実測図（1/4）

出土遺物

土　器（図版27，第28図）

(59)の甕の底部がある。やや太目の底部で僅かに上げ底をなす。調整は荒いハケとナデで仕上げ，底面は未調整に近く粗雑である。内外面とも強い二次加熱を受ける。胎土は砂粒少なく緻密で焼成は非常に堅固である。色調は明茶褐色を呈する。

(4) 土　壙

1号土壙（図版12-(2)，第29図）

3号竪穴の南側に位置する土壙で廻りには遺構は見当らず，竪穴住居相互の空間に設けられた掘り込みである。平面形態は楕円形を呈する。壁面は緩斜をなし，北壁側はテラス状に掘る。規模は長軸で1.83m，短軸で1.05m，深さは最深部で35cmを測る。遺構内の覆土は竪穴住居跡と同じ黒褐色である。土壙内からは床面よりやや上層で自然堆積層に沿って投棄された状態で壺・甕・鉢・花崗岩の石塊等が出土している。出土した土器には丹塗りを施したものも混在しており，集落祭祀遺構としての用途が想定される。主軸方位はN30°Eを示す。

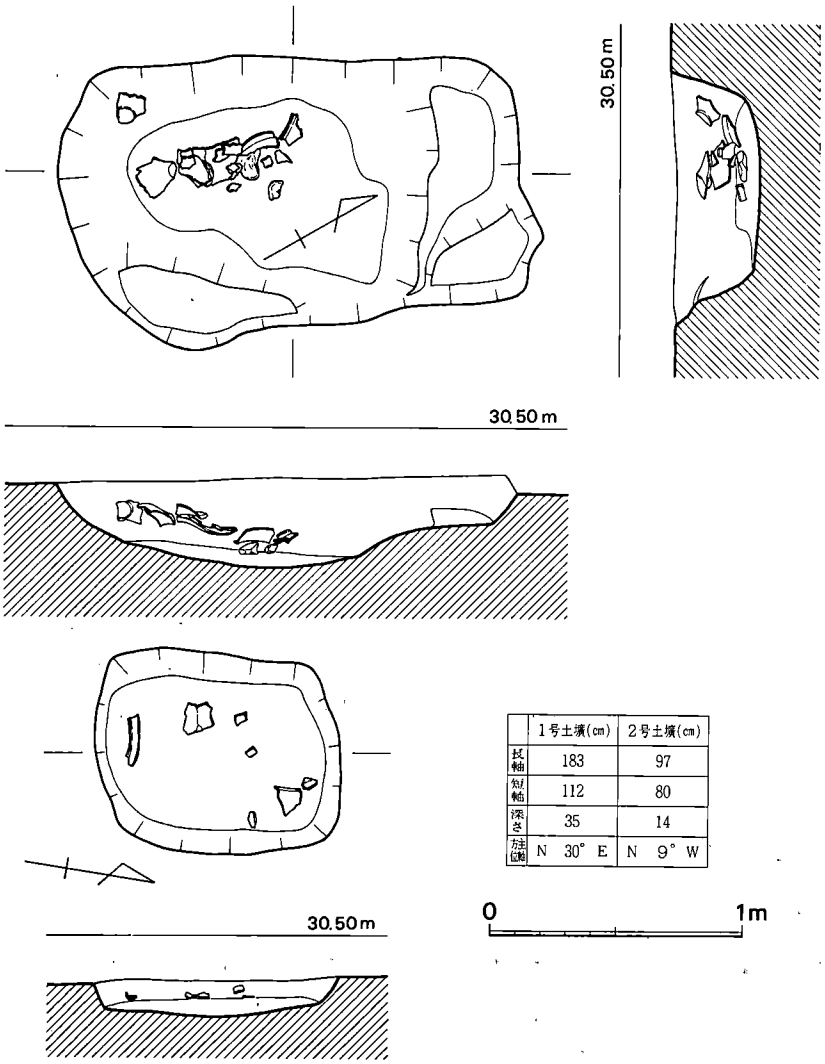
出土土器から当遺構の時期は竪穴住居跡と同じ弥生時代中期前葉である。

出土遺物

土　器（図版27，第30図）

壺は(60)がある。胴部の張り具合に比べて小さ目の底部をなし，前期的形態を残している。底部は僅かに上げ底で，細かいハケと丁寧なナデで仕上げる。

甕は(61)〜(63)がある。(61)は逆「L」字状口縁に平坦部は若干内傾する。肩から胴部にかけての



	1号土壙(cm)	2号土壙(cm)
長軸	183	97
短軸	112	80
深さ	35	14
方位	N 30° E	N 9° W

第29図 1号（上）・2号（下）土壙実測図（1/30）

張りは鈍い。ハケとナデで仕上げる。色調は灰白色で白っぽい感じを受ける。(62)は短い逆「L」字状口縁を持ち，内傾する肩部に張りのある胴部をなす。底部は細く締り上げ底を呈する。調整は内面口縁直下と外面は丹塗り研磨で，内面は丁寧なナデで仕上げている。精製された土器であるが，風化が著しく丹が殆んど剝離している。(63)は甕の胴下半部で器壁は薄くつくられている。内外面とも強い二次加熱を受けている。底面は製作時に砂上に置いたため砂の圧痕が著しく残る。

(64)は鉢で鋭く外反する口縁部を有し，平坦部は内傾し屈折部の稜線は明瞭である。胴部はやや丸みを持つ。二次加熱を受け風化著しいため調整は不明である。

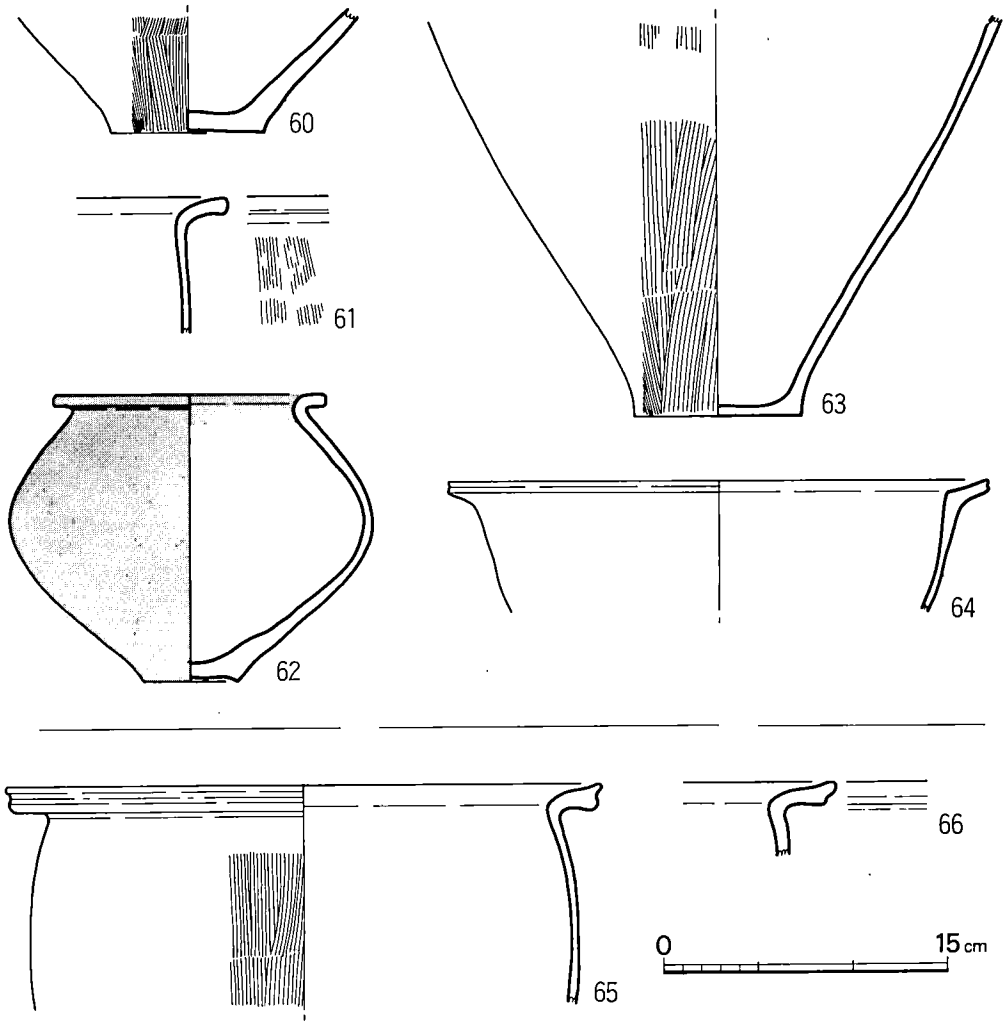
2号土壙（図版13-(1)，第29図）

南北に延びる細い溝状遺構の北端で検出した隅円長方形に近い小型の土壙である。遺構内に堆積した覆土は1号と同一の色調を持つ。規模は長軸97㎝，短軸80㎝，深さは10㎝前後で浅く，遺存状態は良くない。主軸方位はN9°Wを示す。土壙内からは甕形土器片が散在しているが数は少ない。出土した土器片から弥生時代中期前葉頃の所産である。

出土遺物

土　器（図版28，第30図）

甕は2個体ある。(65)は逆「L」字状口縁部に口唇部は肥厚させ，凹線を廻らすことで僅かに跳ね上げ口縁をなす。頸部はやや内傾し，胴部は僅かに張る。調整は細いハケと丁寧なナデで



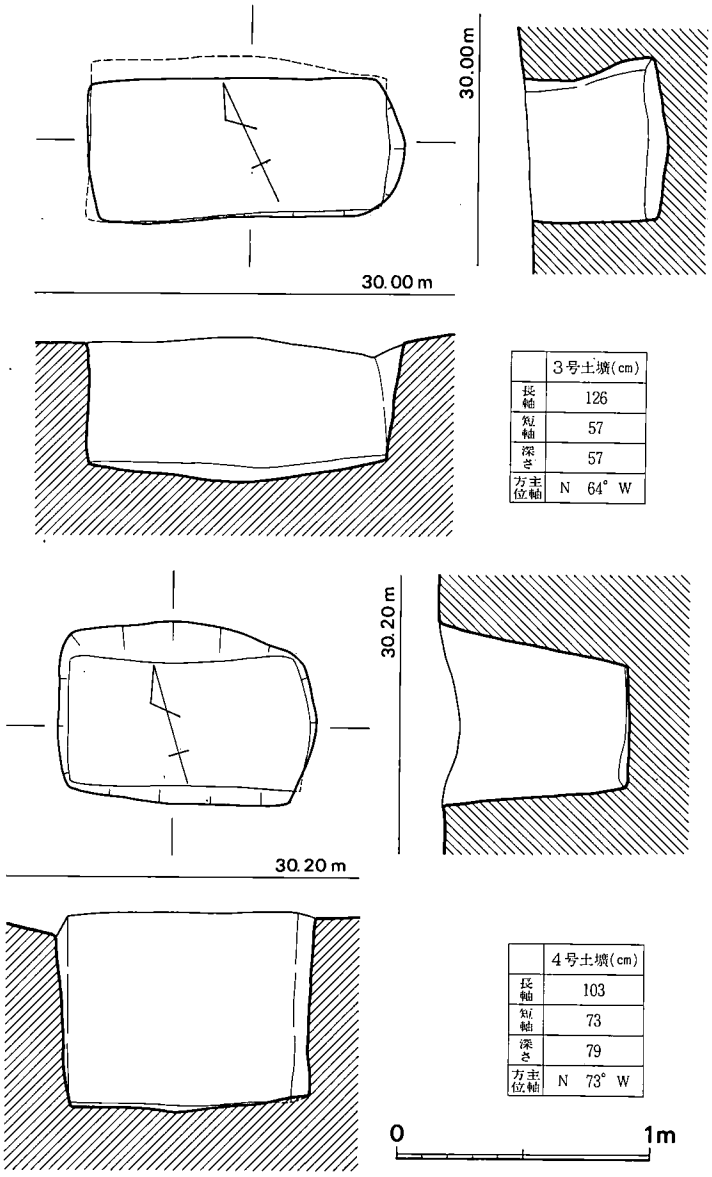
第30図　1号（60～64）・2号（65・66）土壙出土土器実測図（1/4）

仕上げる。胎土には金雲母を含み，焼成は頗る良好で暗黄灰褐色を呈す。(66)も同様な口縁を有すが，前者に比べて口縁部は長く，口唇部は段差をつけて肥厚させる。現存する部分での調整は横ナデで金雲母を含む。

3号土壙（図版13-(2)，第31図）

2号竪穴住居跡と重複し，床面下で検出した土壙である。平面プランは長方形を呈し，壁面が部分的にオーバーハング気味に掘られている。覆土は竪穴住居跡，竪穴状遺構，掘立柱建物，1号・2号土壙とは異り黒色土の火山灰で充塡され，明らかに前記の遺構とは掘削時期が異なることを示唆している。規模は長辺1.15m，短辺55cm，床面は緩斜をなし中央部が深く55cmを測るが，竪穴住居跡に切られていることから本来は現存より20cm前後は深くなる。床面積は0.7m²である。主軸方位はN64°Wを示す。

出土遺物は皆無で時期を判断する資料は無いが，竪穴住居跡との先後関係から弥生時代中期前葉以前であることは確かである。



	3号土壙(cm)
長軸	126
短軸	57
深さ	57
主軸方位	N 64° W

	4号土壙(cm)
長軸	103
短軸	73
深さ	79
主軸方位	N 73° W

第31図　3号・4号土壙実測図（1/30）

4号土壙（図版14-(1)，第31図）

2号竪穴住居跡の北側に隣接して検出した土壙で，平面形態が長方形を呈する。壁面は急傾斜乃至は直に立ち上がり，中には黒色土の火山灰が埋っていた。規模は長軸1.03m，短軸73cm前後で深さ79cmを測る。床面積は0.47m²で，主軸方位はN73°Wを示す。

出土遺物は皆無である。

5号土壙（図版14-(2)，第32図）

2号竪穴住居跡の北側で4号土壙に隣接して掘られた胴張り長方形プランを持つ土壙である。壁面は急傾斜をなし，4号同様の黒色土で充塡されていた。規模は長軸1.07m，短軸68cm，深さ68cmを測り，床面中央部には径27cm，深さ20cmのピットが掘られている。床面積は0.4m²と狭く，主軸方位はN64°Wを示す。

出土遺物は皆無である。

6号土壙（図版15-(1)，第32図）

4号掘立柱建物の北側で検出した土壙で，平面形態が不整楕円形を呈する。壁面は上部で屈折し略直に掘り込まれ，床面は緩斜をなす。覆土は黒色土で埋まっていた。床面の中央には斜めにピットが掘られている。土壙の規模は長軸1.18m，短軸95cm，深さは1.00mと深い。ピットは径23cm，深さは46cmである。床面積は0.47m²である。主軸方位はN55°Wを示す。

出土遺物は無い。

7号土壙（図版15-(2)，第33図）

5号土壙の北側に位置する土壙で，平面形態が長方形を呈する。壁面は直に掘られ，規模は長軸1.16m，短軸56cm，深さは57cmで浅い。覆土は同様の黒色土である。床面の西壁側には径16cm，深さ20cmのピットが斜めに掘られている。床面積は0.51m²である。主軸方位はN59°Wを示す。

出土遺物は無い。

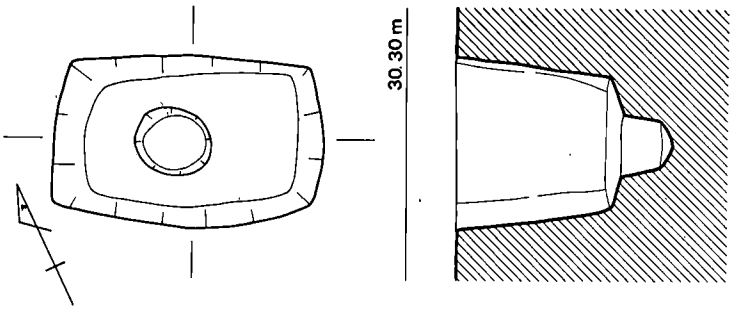
8号土壙（図版16-(1)，第33図）

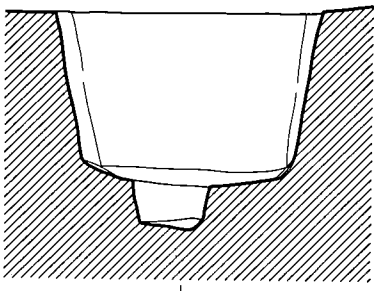
5号掘立柱建物の南側に位置し，長方形プランを有す土壙である。壁面は直に近く，床面は緩斜をなし中央ピット周辺が最も深い。規模は長軸1.02m，短軸68cm，深さ67cmを測り，ピットは楕円形で長径21cm，短径17cm，深さ23cmで北側壁方向に傾斜する。土壙内の覆土は黒色土である。床面積は0.45m²である。主軸方位はN74°Wを示す。

出土遺物は無い。

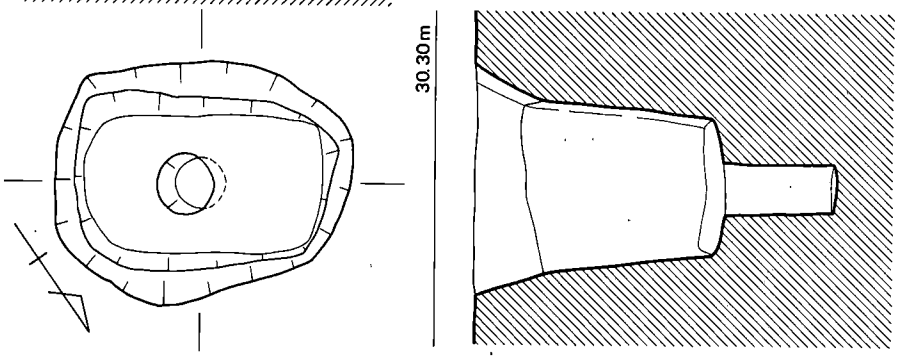
9号土壙（図版16-(2)，第34図）

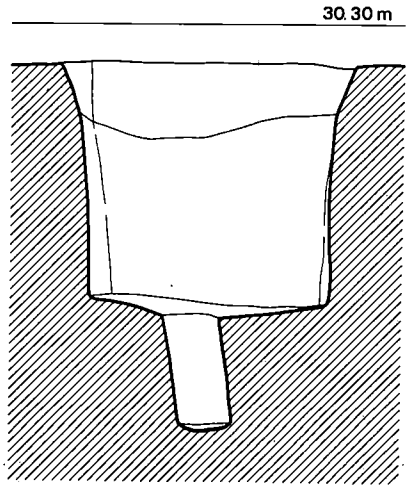
10号土壙の南で検出した長方形の平面形態を有す土壙である。断面が逆台形を呈し，床面は僅かに丸みを持つ。ここでは中央ピットは掘られていない。規模は長軸1.34m，短軸78cm，深





	5号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	107	欠
短軸	68	27
深さ	68	20
方位	N 64° W	





	6号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	118	欠
短軸	95	23
深さ	100	46
方位	N 55° W	

0 1m

第32図 5号・6号土壙実測図 (1/30)

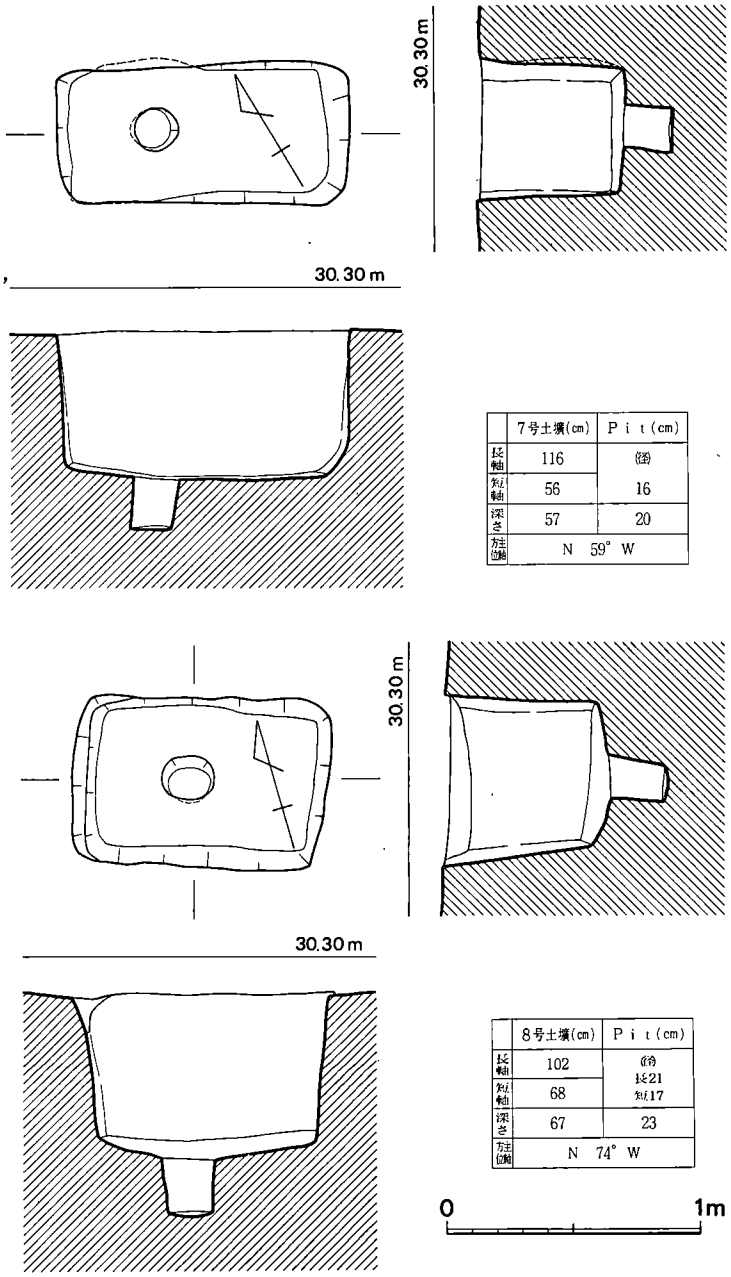
さ77cmを測る。床面積は0.57㎡である。主軸方位は N57°W を示す。

出土遺物は皆無である。

10号土壙（図版17-(1)，第34図）

5号掘立柱建物の東側で検出した土壙で，平面形態は方形に近い形状を呈す。土壙断面は逆台形をなすが，西壁側がやや緩い傾斜を持って掘られている。覆土は黒土色で埋まり，規模は長軸99cm，短軸80cm，深さは91cmと深い。中央ピットは浅くしかも大きく掘られており，径24cm，深さ16cmを測る。床面積は0.29㎡と狭く，中央ピットに何等かの構造物を仮定すればさらに狭くなる。主軸方位はN72°Wを示す。

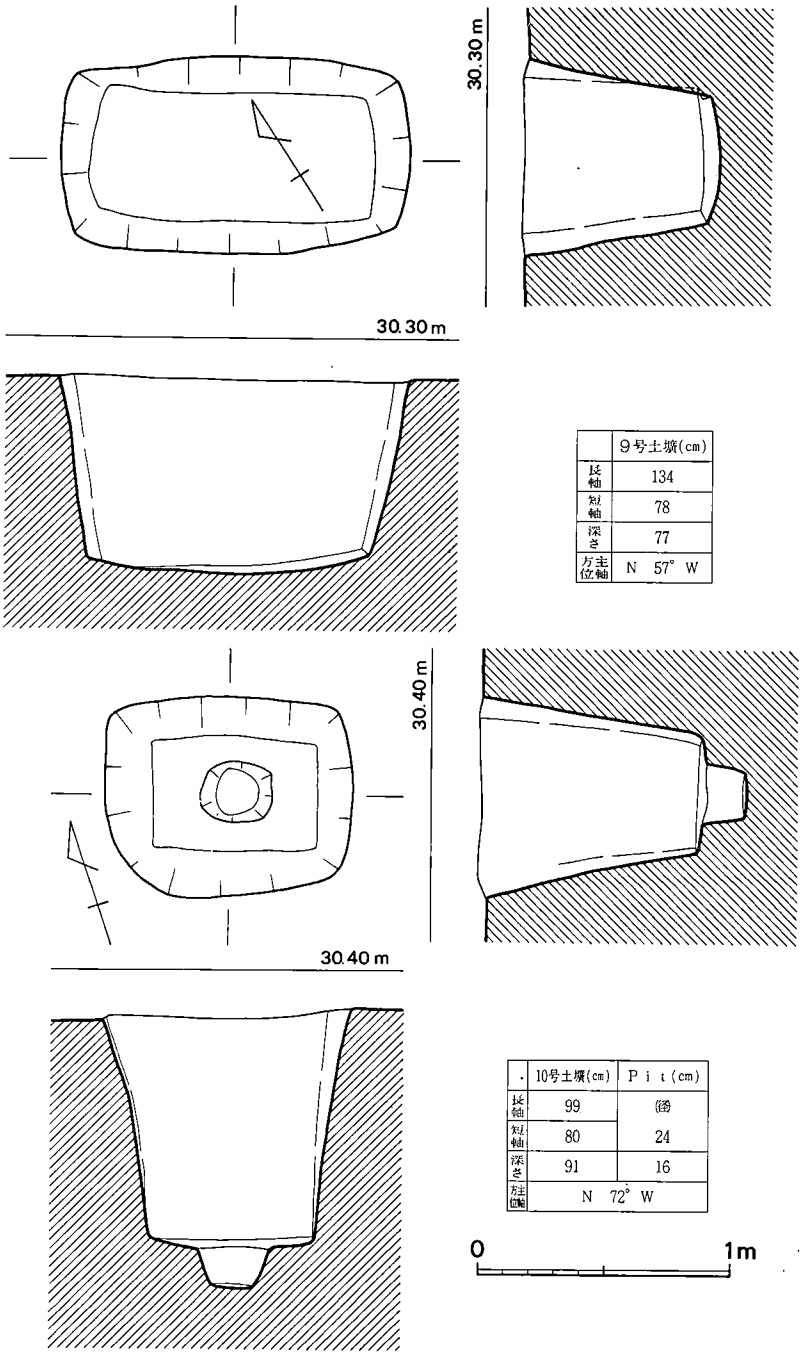
出土遺物は皆無である。



	7号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	116	径
短軸	56	16
深さ	57	20
方位	N 59° W	

	8号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	102	径
短軸	68	長21 短17
深さ	67	23
方位	N 74° W	

第33図　7号・8号土壙実測図（1/30）



	9号土壙(cm)
長軸	134
短軸	78
深さ	77
方位 主軸	N 57° W

	10号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	99	欠
短軸	80	24
深さ	91	16
方位 主軸	N 72° W	

第34図 9号・10号土壙実測図 (1/30)

11号土壙（図版17-(2)，第35図）

2号竪穴状遺構の南側に隣接して掘られた土壙で，西側を新しい植木穴で攪乱されている。平面形態は小判形を呈し，土壙の断面は逆台形をなす。床面は丸みを持つ。覆土は黒色土である。規模は長軸1.03m，短軸93cm，深さ70cmを測る。床面積は0.45m²である。主軸方位はN78°Wを示す。

出土遺物は皆無である。

12号土壙（図版11-(2)，第35図）

2号竪穴状遺構と重複し，貼床を施した床面下から検出した平面形態が隅円長方形を呈す土壙である。壁面は急傾斜をなし，床面は中央部が深く丸みを持つ。規模は長軸1.24m，短軸93cm，深さ90cmを測る。床面積は0.46m²である。主軸方位はN82°Wを示す。

出土遺物は皆無である。

13号土壙（図版18-(1)，第36図）

一連の土壙群からやや西側に逸脱した位置に掘られており，台地の西端で検出した土壙である。平面形態が隅円長方形を呈し，他の土壙と同様黒色土の覆土が充填していた。規模は長軸1.08m，短軸80cm，深さ66cmで小型である。床面の中央には径28cm，深さ22cmのピットが掘り込まれており，床面積はピットを含めて0.5m²である。主軸方位はN90°Eで東西に主軸を持つ。

出土遺物は皆無である。

14号土壙（図版18-(1)，第36図）

15号土壙の西側に隣接して掘られた土壙で，平面形態が隅円長方形を呈す。覆土は黒色土で，壁面は略垂直につくられている。規模は長軸1.02m，短軸77cm，深さは1.02mと平面規模の割には深く掘られている。床面中央には径38cm，深さ21cmのピットが掘り込まれている。床面積は0.36m²と狭く，中央ピットの構造物を想定すれば空間は非常に狭くなる。主軸方位はN78°Wを示す。

出土遺物は皆無である。

15号土壙（図版19-(1)，第37図）

6号掘立柱建物の南傍で検出した土壙で，平面形態は楕円形を呈し，床面は長方形である。土壙断面はオーバーハング気味に掘られ，上部で崩壊している。これら一連の土壙は本来垂直乃至フラスコ状に掘削していると推測される。このことは調査時に全ての土壙が床面より僅かに上層で黄褐色の地山土が層位を形成していたことから壁面の崩壊が考慮されるのである。規模は長軸1.20m，短軸80cm，深さ88cmを測る。床面積は0.58m²である。主軸方位はN73°Wを示す。

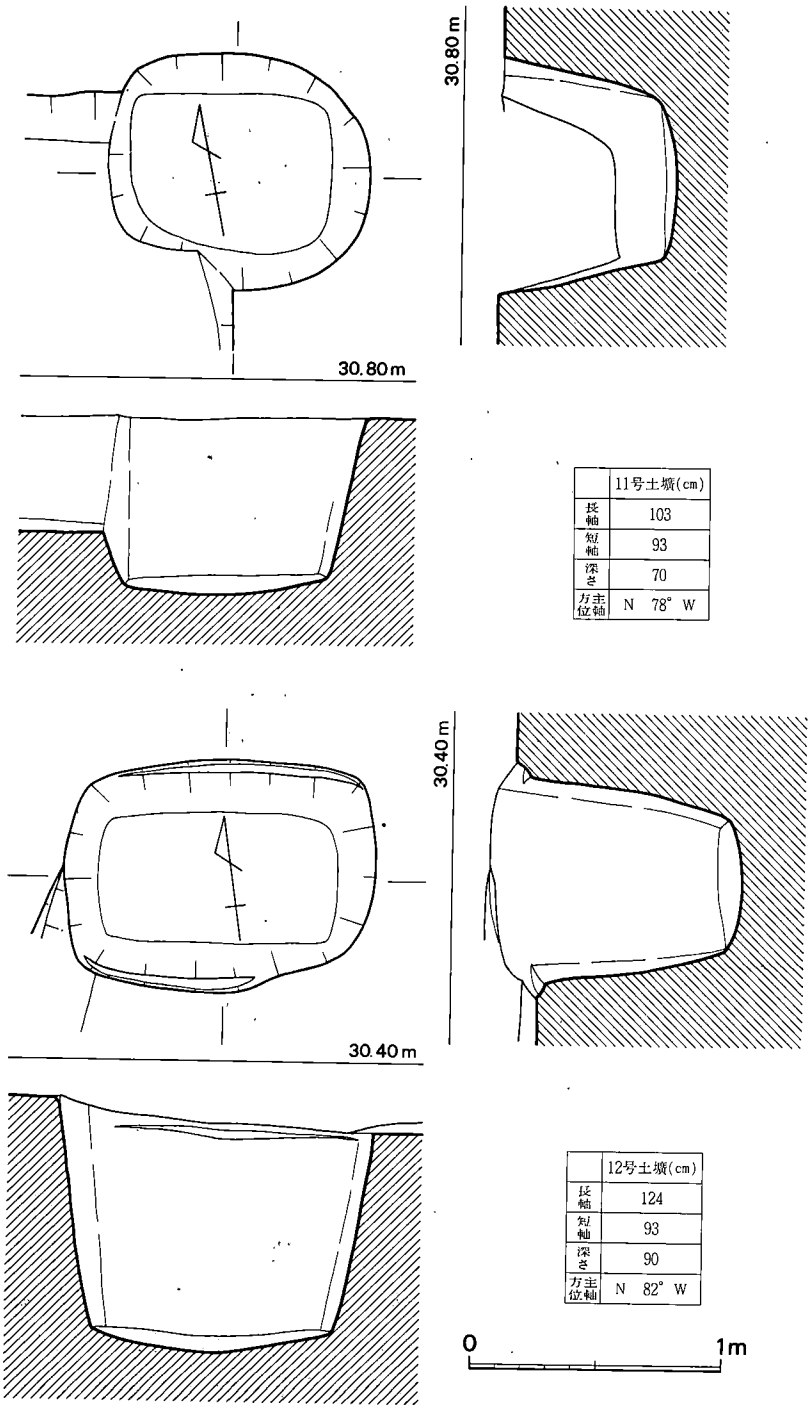
出土遺物は皆無である。

16号土壙

（図版19-(2)，第37図）

7号掘立柱建物の東側傍に掘られていた土壙で，平面プランが不整楕円形を呈する。土壙の西側は植木穴で攪乱を受けている。規模は長軸1.12m，短軸78cm，深さ95cmと深い。壁面は東側で急傾斜をなし，西側は僅かに内弯する。床面積は0.31㎡と狭い。主軸方位はN84°Eを示す。

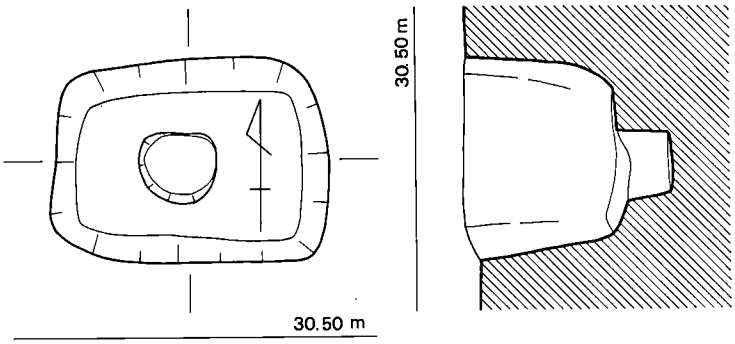
出土遺物は皆無である。

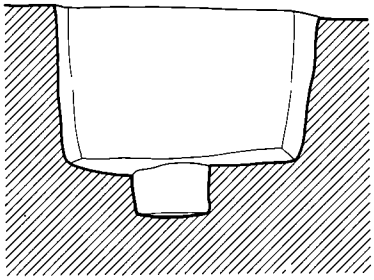


	11号土壙(cm)
長軸	103
短軸	93
深さ	70
主軸方位	N 78° W

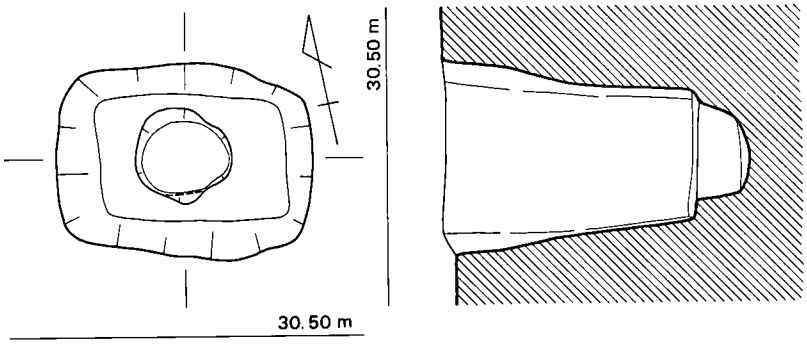
	12号土壙(cm)
長軸	124
短軸	93
深さ	90
主軸方位	N 82° W

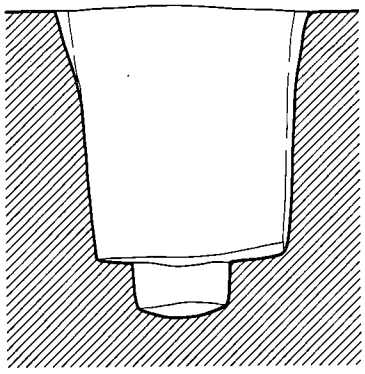
第35図 11号・12号土壙実測図（1/30）





	13号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	108	欠
短軸	80	28
深さ	66	22
方位	N 90° E	

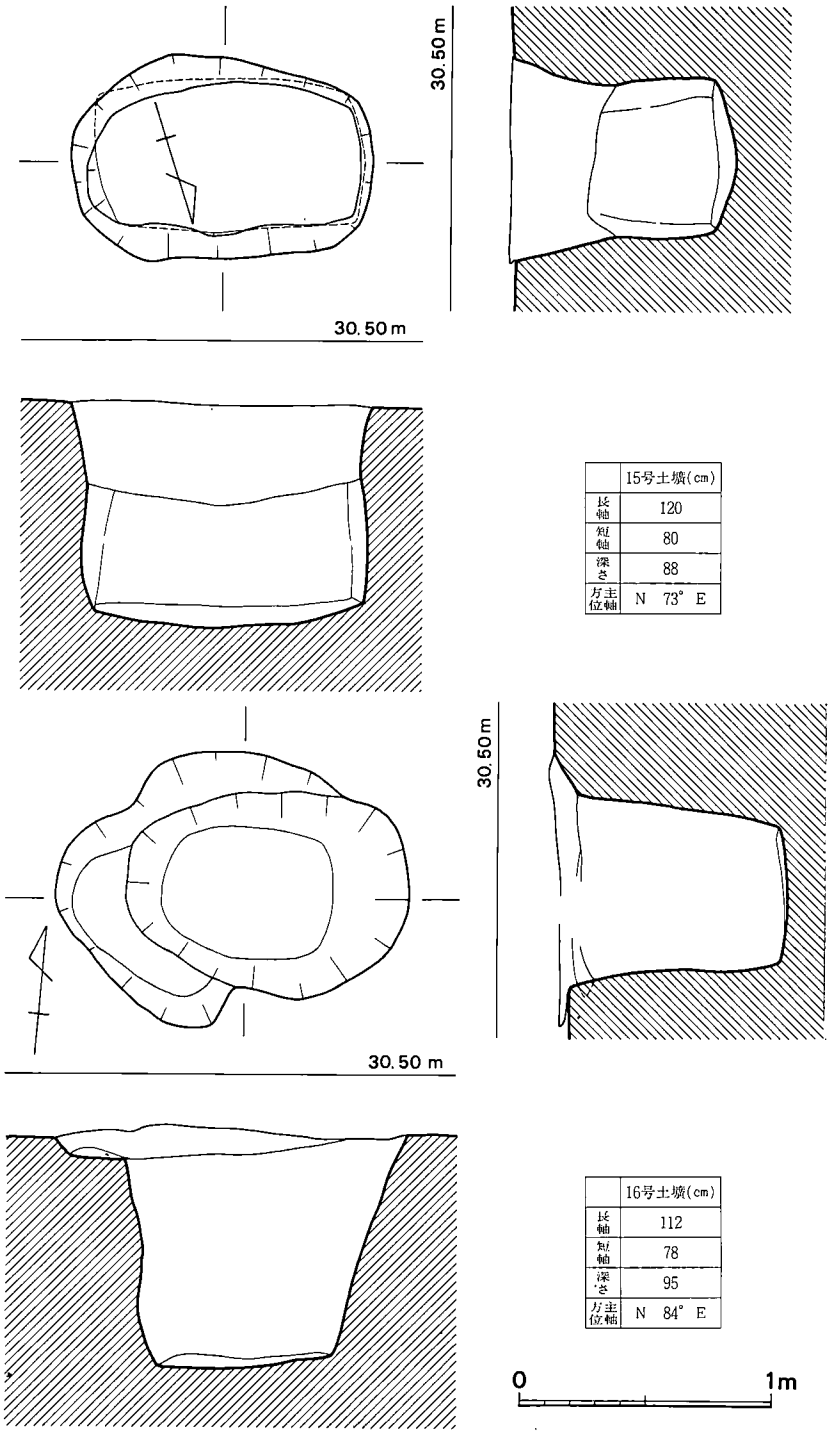




	14号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	102	欠
短軸	77	38
深さ	102	21
方位	N 78° W	

0 1m

第36図 13号・14号土壙実測図（1/30）



	15号土壙(cm)
長軸	120
短軸	80
深さ	88
方位主軸	N 73° E

	16号土壙(cm)
長軸	112
短軸	78
深さ	95
方位主軸	N 84° E

第37図 15号・16号土壙実測図 (1/30)

17号土壙（図版20-(1)，第38図）

18号の西側に隣接した位置にある土壙で，平面形態は小判形を呈し，床面は隅円長方形をなす。壁の断面はやや丸みを持ち，床面は緩斜を持って中央ピットに続く。覆土は黒色土で埋まっていた。規模は長軸 1.46m，短軸 1.12m，深さ 1.13m を測り，土壙群では最大の規模である。床面の中央には径32cm，深さ30cmのピットが掘られている。床面積は0.53m²である。主軸方位はN76°Wを示す。

出土遺物は無い。

18号土壙（図版20-(2)，第38図）

17号土壙の東側に隣接して検出した土壙で，平面形態が楕円形を呈す。床面は中央ピット方向に緩斜をなし，覆土は黒色土の火山灰で埋まっていた。床面近くでは黄褐色土の壁が崩壊して堆積していた。規模は長軸1.33m，短軸78cm，深さ88cmを測る。床面中央には径26cm，深さ12cmのピットを掘り込んでいる。床面積は0.46m²である。主軸方位はN77°Eを示す。

土壙からの出土遺物は皆無である。

19号土壙（図版21-(1)，第39図）

発掘区の北西隅にある17号土壙の北側に位置する土壙で，平面形態が長方形を呈する。壁面は略直に掘削されている。覆土は黒色土で，床面は中央ピット方向に緩い傾斜をなす。規模は長軸1.04m，短軸62cm，深さ70cmと浅い。床面中央には径29cm，深さ25cmのピットが掘られている。床面積は0.43m²である。主軸方位はN78°Eを示す。

出土遺物は皆無である。

20号土壙（第39図）

3号竪穴住居跡及び溝状遺構と重複した土壙で，3号竪穴住居跡の床面下で検出した。当土壙は台地の西端に列なる土壙群とは群を異にする。平面形態は長方形を呈し，規模は長軸1.33m，短軸で89cm，深さ54cmを測る。覆土は他の土壙と同様の黒色土で埋まっていた。床面積は0.73m²である。主軸方位はN85°Wを示す。

出土遺物は皆無である。

21号土壙（図版21-(2)，第40図）

溝状遺構の東側で検出した土壙で，他の土壙から著しく逸脱して掘削されており別の群の土壙とも考えられるが，試掘時に確認した結果，周辺に土壙群は遺存しなかった。平面形態は不整長方形を呈す。壁面は上部で傾斜し，屈折して直に掘り込まれ，床面は水平をなす。規模は長軸1.83m，短軸99cm，深さ81cmを測る。覆土は他の土壙と同様黒色土で埋まっていた。床面積は0.86m²である。主軸方位はN68°Wを示す。

土壙からの出土遺物は皆無である。

22号土壙（図版8-(1)，第40図）

2号掘立柱建物の中央部に掘り込んでおり，他の土壙群と形状・主軸方位が異り，別の用途を考慮する必要がある。土壙の在り方から恰も2号建物の付属施設とも把えられるが，高床式の倉庫として機能する場合の付設遺構と考えると用途が不明確になる。平面形態は隅円長方形を呈し，規模は長軸1.53m，短軸90cm，深さは20cmと浅い。覆土は黒褐色で土壙群との相違が認められる。床面積は0.97m²である。主軸方位はN8°Eを示す。

出土遺物は無く時期は明らかではないが，覆土から2号掘立柱建物と相前後する時期であろう。

23号土壙（図版22-(1)，第41図）

1号竪穴住居跡と1号掘立柱建物の間で検出した不整楕円形を呈する土壙である。壁面は略直に掘削され，黒色土の覆土で埋まっていた。規模は長軸1.06m，短軸80cm，深さ75cmを測り，床面中央には径24cm，深さ29cmのピットが掘られ，床面積は0.45m²である。主軸方位はN73°Wを示す。

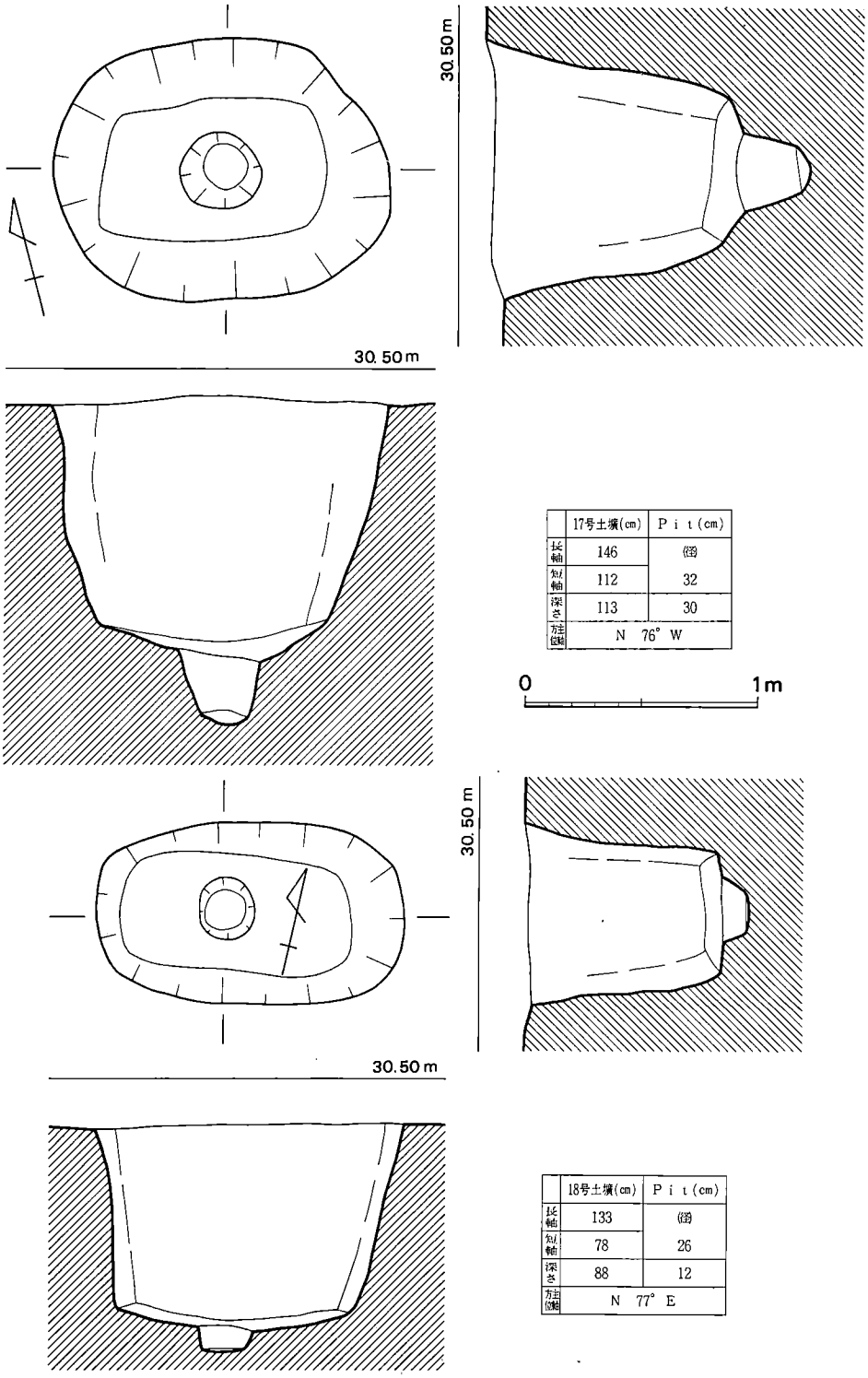
出土遺物は無い。

24号土壙（図版22-(2)，第41図）

1号竪穴住居跡の北側に位置する土壙で，平面形態は不整楕円形を呈する。壁面は中位程でやや膨らみ，床面は中央ピット方向に緩斜をなす。規模は長軸1.39m，短軸1.11m，深さ98cmと比較的大型の土壙である。床面中央には長径33cm，短径23cm，深さ35cmの楕円形のピットが斜めに掘り込まれている。覆土は黒色土を呈する。床面積は0.71m²で土壙群の中では広い部類である。主軸方位はN58°Wを示す。

出土遺物は皆無である。

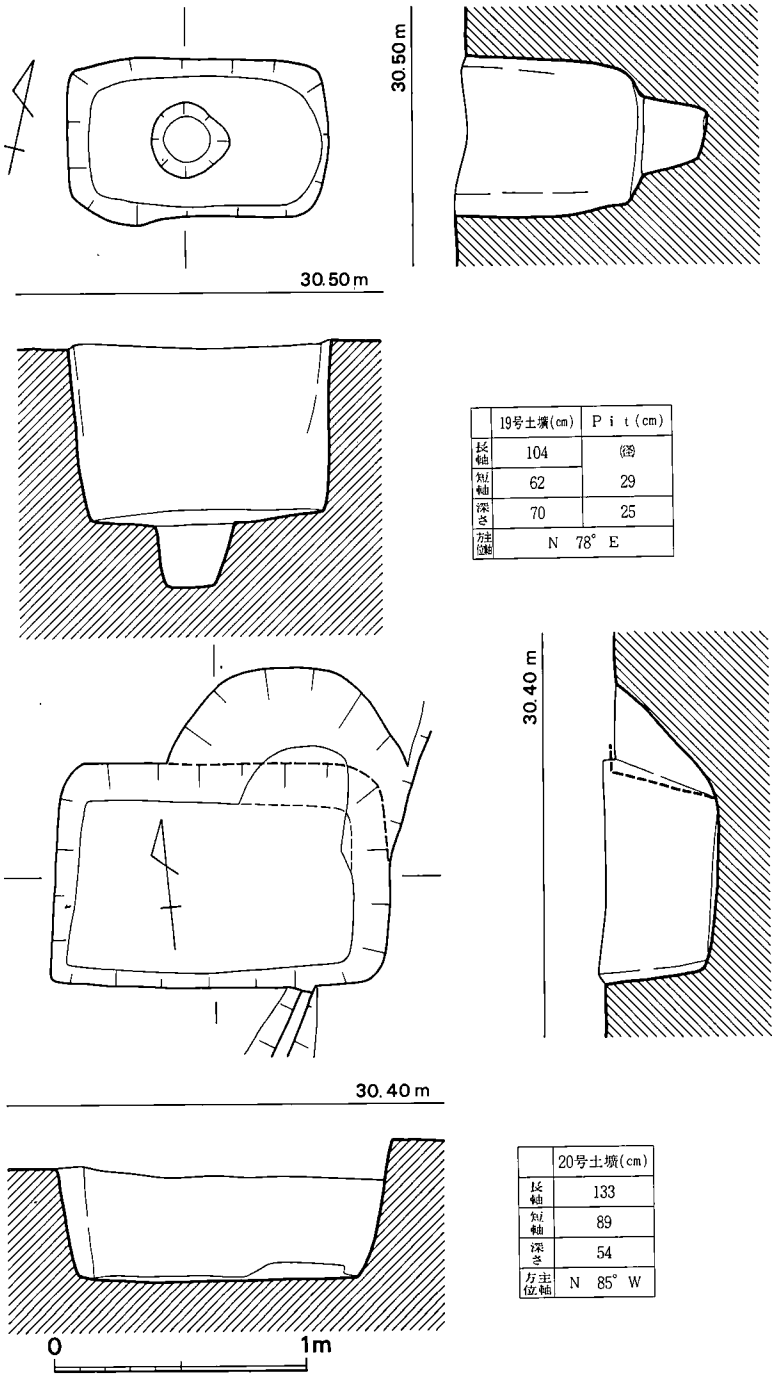
以上が土壙の概略であるが，1号・2号・22号土壙とその他の土壙とは性格が異なる。1号・2号土壙からは弥生時代中期前葉に比定される土器が出土し，22号土壙は出土遺物は無いものの浅く掘られている。両者の覆土はいずれも竪穴住居跡と同様黒褐色を呈している。これに対して他の土壙は深く掘り込まれ，しかも壁の断面が垂直乃至フラスコ状に掘削している。平面形態も楕円形或は隅円長方形で，床面にはピットを掘っている。覆土も1号・2号・22号土壙とは異り黒色土で埋まっていた。出土遺物は全く無い共通性がある。したがって前者の3基の土壙は弥生時代中期前葉の集落跡に伴う遺構として認識できるが，後者の土壙の用途が問題になる。最近での調査例では九州横断道路線内の立野遺跡で数基発見され，下原遺跡と同一の黒色の火山灰で埋まっていた。当土壙については別項で詳細に述べたい。



	17号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	146	(33)
短軸	112	32
深さ	113	30
方位	N 76° W	

	18号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	133	(33)
短軸	78	26
深さ	88	12
方位	N 77° E	

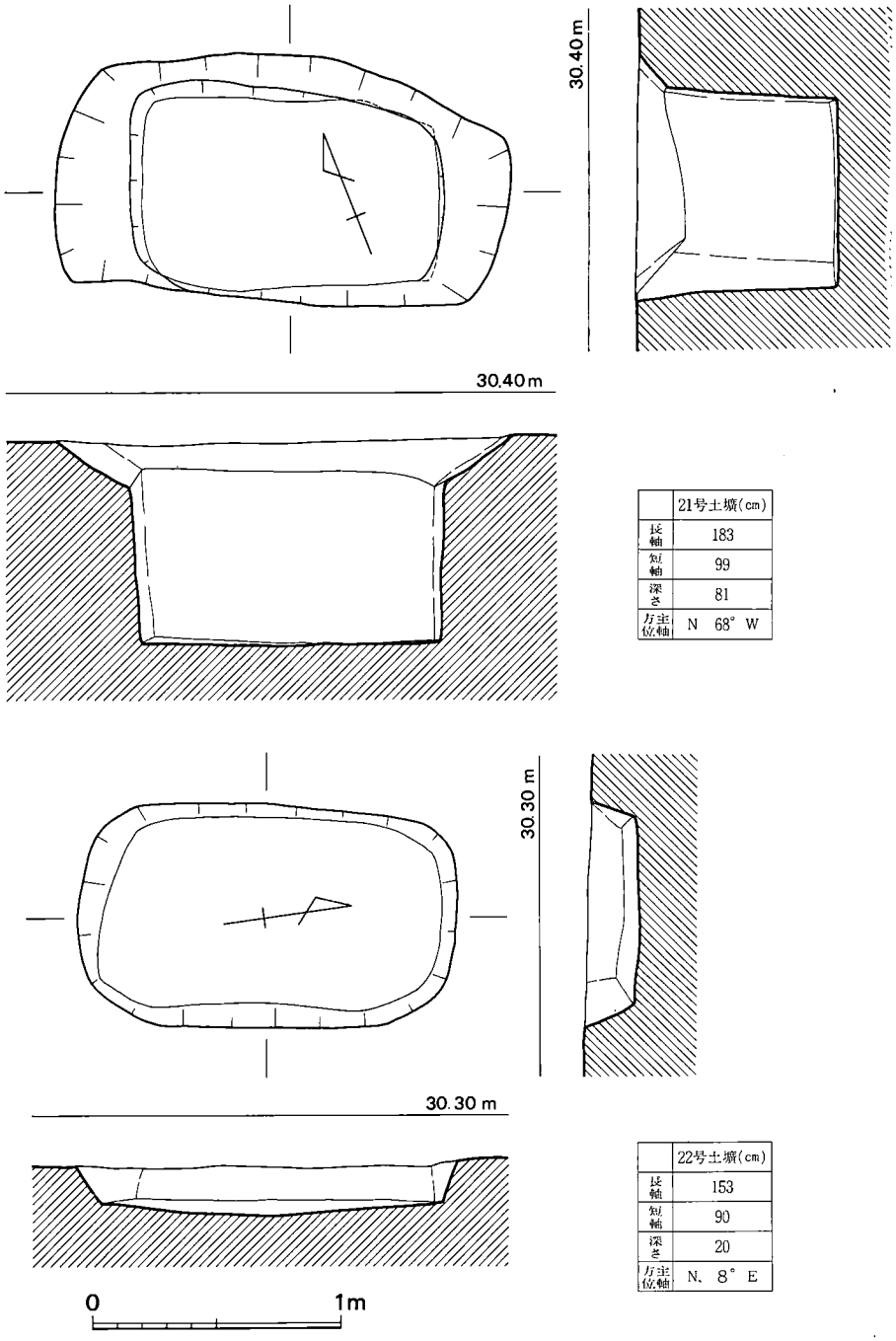
第38図 17号・18号土壙実測図 (1/30)



	19号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	104	(28)
短軸	62	29
深さ	70	25
方位	N 78° E	

	20号土壙(cm)
長軸	133
短軸	89
深さ	54
方位	N 85° W

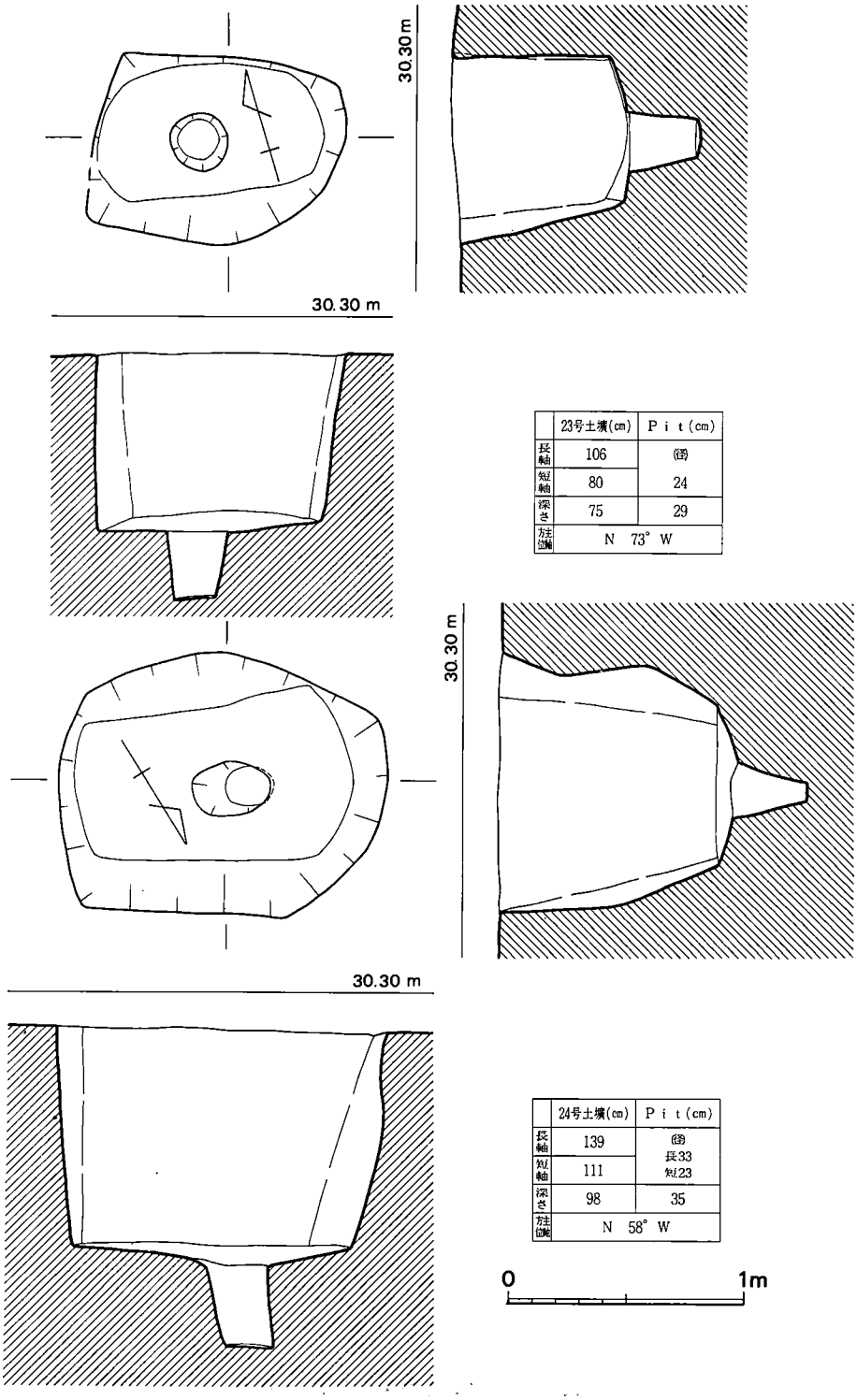
第39図 19号・20号土壙実測図 (1/30)



	21号土壙(cm)
長軸	183
短軸	99
深さ	81
主方位軸	N 68° W

	22号土壙(cm)
長軸	153
短軸	90
深さ	20
主方位軸	N、8° E

第40図 21号・22号土壙実測図 (1/30)



	23号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	106	(径)
短軸	80	24
深さ	75	29
方位	N 73° W	

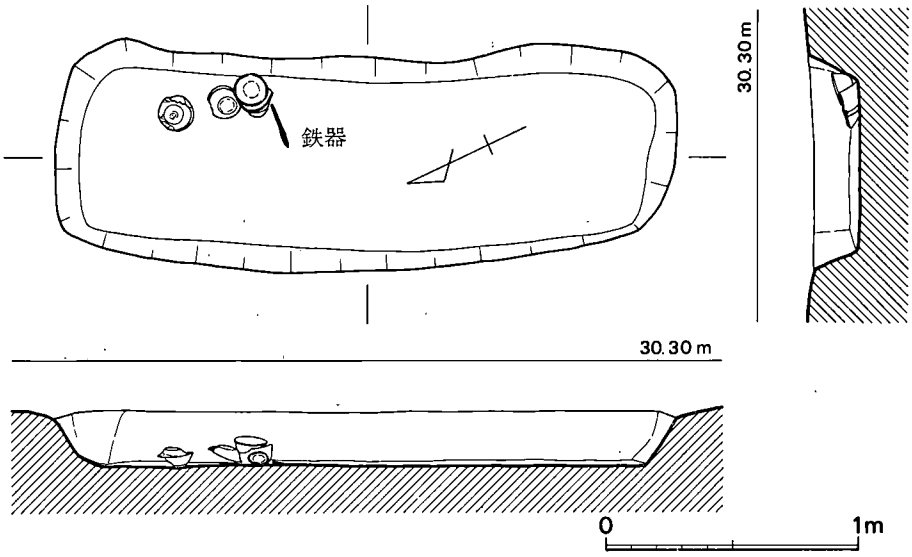
	24号土壙(cm)	Pit(cm)
長軸	139	(径)
短軸	111	長33 短23
深さ	98	35
方位	N 58° W	

第41図 23号・24号土壙実測図（1/30）

(5) 土 壙 墓（図版23-(1)・(2)，第42図）

発掘区の北側で検出した土壙墓で，墓と認められる遺構は調査区内では１基のみである。平面形態は隅円長方形を呈し，規模は長軸2.46m，南側小口辺70cm，北側で80cm弱で北側がやや巾広く掘られていることから頭位は北方向であろう。床面の規模は長軸2.26m，短軸66cm，深さは20cmと浅い。主軸方位はN25°Eを示す。

出土遺物は坏２・Ⅲ１・高台付埦３・刀子１があり，出土状態は(72)の高台付埦の上に(69)のⅢを被せており，(67)と(68)を重ねて被せていた。(70)と(71)の高台付埦は重ね合わせて坏の横に置いており，傍に刀子を副葬していた。出土土器から土壙墓の時期は遡っても９世紀中頃であろう。



第42図 土壙墓実測図（1/30）

出土遺物

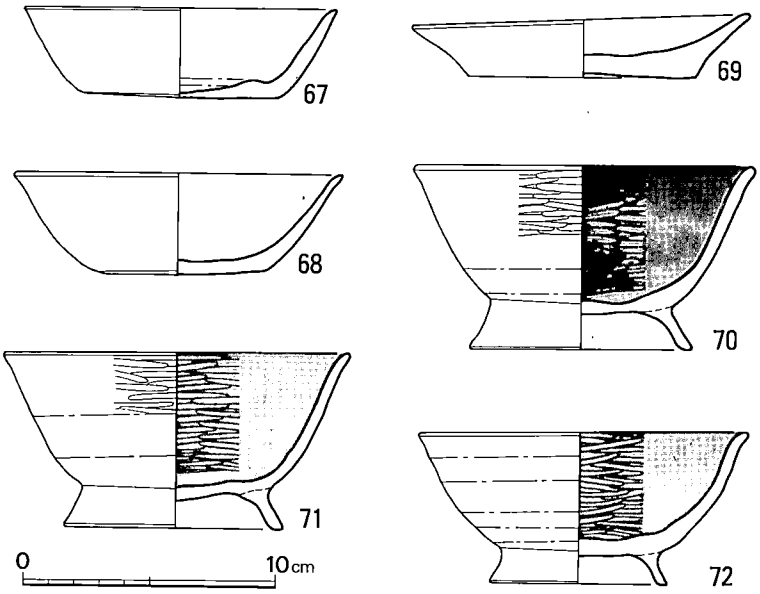
土 器（図版28，第43図）

坏には(67)・(68)がある。前者の底部はやや丸みのある平底をなし，直に近い胴部は尖り気味の口縁部に続く。口径12.4cm，底径7.8cm，器高3.5cmを計測でき，調整は丁寧な横ナデで仕上げ，底部は未調整に近いつくりで板状圧痕を残す。胎土は緻密で焼成は堅固である。淡い赤褐色を呈す。後者は前者と同様の底部に丸みを持つ胴部をなす。口縁部は僅かに外反する。底部に板状圧痕を残す。口径13.0cm，底径6.7cm，器高4.0cmを測り，胎土・焼成・色調は(67)と同じである。

Ⅲには(69)がある。直線的な平底で中心部は凹状をなす。底部から口縁部にかけては一旦屈折

して直に外反する。横ナデで仕上げる。口径13.4cm，底径9.0cm，器高2.2cmを測る。

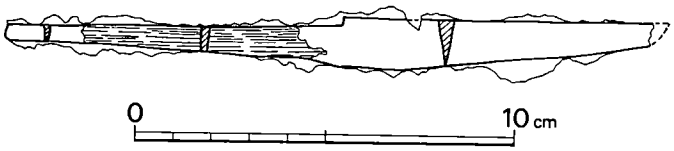
高台付埦は(70)～(72)がある。(70)・(71)は同タイプの内黒高台付埦で小さく外反する口縁部に若干の膨みを有す胴部を持つ。前者の口径は13.5cm，高台底径8.8cm，器高7.2cmを測り，後者は口径13.7cm，高台低径8.7cm，器高6.8cmである。両者の調整は内面と外面胴部上半は横ヘラ磨きで，胴下半と高台は横ナデで仕上げ，後者の胴下半の一部に回転ヘラ削りが認められる。胎土は緻密で赤色粒子を含み，焼成は頗る良い。(72)も内黒高台付埦で鈍く外反する口縁部に張りのある胴部を持ち，高台は低い。口径13.1cm，高台底径7.0cm，器高6.0cmを測る。胎土は(70)・(71)と同じで焼成は軟弱である。内面が横ヘラ磨きで外面はナデ仕上げである。



第43図　土壙墓出土土器実測図（1/3）

鉄　器（図版28，第44図）

切先を欠損した刀子である。現存長は17cm，最大幅は1.3cm，茎幅0.7cm，峰の厚さ0.5cmと厚い。明瞭な関は峰部にあり，茎から刃部は緩い曲線を描き一応両関をなす。刃部の先は研ぎ直しにより摩耗し，茎には木質が残る。



第44図　土壙墓出土鉄器実測図（1/2）

(6) 溝状遺構（付図）

発掘区の東側で検出した南北に走る細い溝状遺構で南と北の両方で完結する。3号・5号竪穴住居跡の一部を切っており，全長33.8mを確認した。最大幅は約70cm前後で深さは最深部で17cmと浅い。出土遺物は無く，掘削時期も明らかではない。

3 結　　語

(1) 下原集落遺跡について

下原遺跡は押型文土器片が出土したことから，古くは縄文時代の早い時期から平安時代にかけて間欠的に遺跡が営まれているが，当該遺跡での主体を占める遺構は時期不明の土壙群と弥生時代中期前葉の竪穴住居跡及びそれに伴う掘立柱建物群であることから，下原集落遺跡について若干述べておく。時期不明の土壙群については後の項で論を展開する。

下原集落は九州横断道本線内のみの調査で，面的に集落を検証することは不可能であったが，竪穴住居跡5軒とそれに付随する高床式の倉庫9棟を検出した。この内高床の倉庫跡と断言できる建物は7棟で，竪穴住居跡が散在するのに対して高床倉庫群は整然と建てられ，殆んどが東西棟である共通性が窺える。高床式倉庫は，弥生時代中期初頭頃まで継承された袋状竪穴形式の貯蔵穴からより貯蔵機能を有利にする手立てとして，当時の穀物の貯蔵形態の画期的な方法であるとともに集落内での穀物の管理形態にも変化が生じた現れでもある。弥生時代前期から中期初頭にかけての袋状竪穴は群構成をなし丘陵上に独立して設営される例が多く，集落構成内に付随する施設として設けられることは割と少ない。しかし，中期前葉を境に貯蔵施設が集落内で構成され，竪穴住居のある単位に1棟の割合で出現してくる。

北部九州では弥生時代中期の竪穴住居と高床式倉庫との相互関係を解明する資料は明らかにされておらず，岡山県沼遺跡，沼E遺跡Ⅱ，野田遺跡の他，鳥取県米子市の青木遺跡（Ⅰ期）の検出例があるが，青木遺跡（Ⅰ期）の例は竪穴住居跡に対して掘立柱建物の時期決定の資料が乏しい点に疑問が残る。

沼遺跡，沼E遺跡Ⅱ及び野田遺跡では5軒乃至7軒程度の竪穴住居跡に1棟から2棟の高床倉庫を伴っており，沼遺跡については詳細は明らかでないが，沼E遺跡Ⅱでは1間・2間の建物が2棟，野田遺跡では2間・4間の総柱建物1棟が確認されている。時期は中期後葉頃に比定されており，下原遺跡よりはやや時期は下る。前記の3遺跡はいずれも小グループの竪穴住居跡群で，分村の過程を経て営まれたと考えられることから，1単位の世帯が共有する高床倉庫跡と推測できる。

下原遺跡で検出した高床倉庫跡は沼E遺跡Ⅱ及び野田遺跡と比較すると小規模であり，出現時期から高床倉庫の祖型とも受けとられる。前記のように下原集落の南側が削平され不明な点いが，通常の倉庫群の配置から集落の母体は南側に集中したと考えられ，高床倉庫の数は僅かに増加すると推測される。高床倉庫1棟に対する竪穴住居跡の占有軒数は当遺跡では必ずしも解明できない。しかし，先にみた沼，沼E，野田の諸遺跡の例からすると5乃至6軒程度の住居による穀物の占有及び管理が推測されるのである。

参考文献

(1) 近藤義郎，渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」津山市津山郷土館—1957—

(2) 津山市教育委各会「沼E遺跡Ⅱ」（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集）—1981—

(3) 日本考古学協会編「日本考古学年報4」（岡山県勝田郡野田遺跡）—1951—

(4) 青木遺跡発掘調査団「青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ」（F・J地区）—1976—

(2) 出土遺物からみた屋内土壙の機能について

——弥生時代を中心として——

Ⅰ

弥生時代に限らず古墳時代の竪穴住居跡でも床面の一画に楕円形乃至方形に近い土壙を掘り込んでおり，屋内土壙あるいは屋内貯蔵穴の名称で呼ばれている（屋内貯蔵穴の表現が一般的である）。しかし，筆者は以前から屋内土壙に貯蔵穴の機能を与えることに疑問を持っており，今までの報文では屋内土壙または作業穴の表現方法を採用していた。

貯蔵穴については以前に石野博信氏が「弥生時代の貯蔵施設」と云う論文を掲載されたことがある（註1）。その中で「弥生時代の貯蔵の三形態は屋内小土壙、屋外土壙、高床倉庫が基本的な貯蔵形態」と指摘された。北部九州においては貯蔵機能を有す屋外土壙は主に弥生時代前期～中期初頭に出現する袋状竪穴跡がそれに相当するが、中期前葉以降貯蔵穴としての屋外土壙は高床式倉庫にその形態を変える。一部福岡県春日市門田遺跡の谷地区で検出されたドングリ(イチイガシ)の貯蔵穴があり，弥生時代後期末頃に比定されている。これはドングリの塊状貯蔵法で救慌食と考えられており（註2）一般的な穀物の貯蔵とは意を異にする。

ここで問題となるのが屋内土壙である。その用途は土壙内からの食物遺物が検証されていない現状では，屋内貯蔵穴と規定するには若干の疑問を感じる。そこで屋内土壙からの出土遺物を検討し，竪穴住居跡内の土壙の付設方法等から，その用途について北部九州の弥生時代の竪穴住居跡を中心に再検討してみる必要がある。

Ⅱ

弥生時代中期～後期の屋内土壙については，調査された集落遺跡が意外に少なく，検出された竪穴住居跡についても屋内土壙内からの出土遺物が記載されてない場合が多々ある。ここでは調査された19遺跡（一部山口県も含む）の竪穴住居跡に付設された屋内土壙から出土遺物が遺存するか，あるいは土壙に持殊な付属施設を設けた例が第10表に掲げた屋内土壙である。

弥生時代中期の円形住居跡では屋内土壙と認められる遺構には床面中央部のピットが相当する。中央ピットには焼痕が認められないのが一般的傾向で，中から灰の堆積が検証されてはいるが，浅い皿状の掘り込みの焼痕著しい遺構（炉跡）も併存する例があり，中央ピットが炉跡

として機能しない場合が多いことからも屋内土壙の可能性が高いと云わざるを得ない。円形住居跡の中でも北九州市の門田遺跡（文献４），福岡県宮田町の柳ケ谷遺跡東区（文献11）の例でみるように壁沿いに付設する場合も存在する。中央ピット（屋内土壙）には周溝と直結する溝状遺構が掘られている場合とピットの周囲に土手状の周堤を廻らす特殊な例もある。今度調査した下原遺跡の１号竪穴住居跡もその例にもれず，地域的にやや逸脱するが岡山県津山市の沼遺跡Ｅ・Ｇ竪穴住居跡（註３），沼Ｅ遺跡Ⅱの４号竪穴住居跡（註４），同県の惣図遺跡10号・15号竪穴住居跡（註５）等が好例で，畿内編年の中期末に比定されている。屋内土壙と結ぶ溝状遺構が周溝と直結している１例として柳ケ谷して西区の23号竪穴住居跡にみられる（文献17）。この溝は壁沿いの水を流入させる機能を持つ遺構と考えられる。

方形乃至は長方形の竪穴住居跡での屋内土壙は壁際に付設されるのが通例である。しかし，例外として小原遺跡の３号竪穴住居跡（文献12）は床面中央部に設けられる。方位でみる限りでは竪穴住居跡の東壁と南壁が圧倒的に多く，竪穴住居跡内での土壙の位置は両壁に略一定している。屋内土壙は周溝と直結するか，周溝と土壙を溝によって直結させる場合が多い。したがって，この場合も円形竪穴住居跡同様水の流入溝と考えた方が妥当とも思える。事実，小原遺跡18号竪穴住居跡に付設された屋内土壙は周溝と屋外排水溝と接続しており，周溝の底面レベルは土壙に向かって下降し，土壙から排水溝に向かって更に底面レベルを下げていることから直結する両者の溝は流入・排水の用途があったことが判る。しかも，途中で水溜めとして機能するのが屋内土壙である。この形態は弥生時代後期～古墳時代前期にも継承される普遍的な傾向と見てとれる。

Ⅲ

次に屋内土壙内からの出土遺物を検討することで更に深く機能を明確にしたい。

弥生時代中期初頭から中葉頃にかけての長方形乃至円形竪穴住居跡の屋内土壙からの出土遺物は石塊（作業台？）７例，石庖丁２例，砥石４例，扁平片刃石斧１例，石戈１例，土器（甕形土器・器台）３例，鉄斧１例が挙げられ，石塊（作業台？）及び砥石の出土が約60％を占める（註６）。

弥生時代中期後半から後期の竪穴住居跡では石塊（作業台？）７例，砥石６例，土器（高坏・鉢）５例，土錘１例，石庖丁１例等が確認でき，弥生時代の中期から後期にかけての屋内土壙の出土遺物は石塊（作業台？）と砥石が60％強と多く出土する特徴を示す。

弥生時代の竪穴住居跡に限らず屋内土壙は存在するが，今日まで土壙の用途は屋内貯蔵穴として認識されていたし，穀物等の出土遺物は認められないにしろ表現方法として屋内貯蔵穴の機能を持たせていた。これは集落総体での穀物管理と分配の中での世帯の管理の二元性から分有する貯蔵形態として位置づけられていた。しかし，検討してきた屋内土壙は形態的に入水溝が付設されるか周溝と直結されており，一定の水位を保つための排水溝と直結する形状を採用

第10表　弥生時代の屋内土壙一覧表

遺跡名	住居番号	土壙平面形	屋内土壙の位置	出土遺物	時期	備考	文献
大板井Ⅰ	5号	円形	東壁	石庖丁，精製甕，石塊（作業台）	中期前葉		(1)
〃	11号	不整円形	〃	土器	〃		〃
〃	13号	円形	〃	——	中期中葉		〃
〃	14号	不整形	〃	土器(?)	〃		〃
〃	16号	方形	中央（円形住）	石塊	〃		〃
〃	17号	隅円長方形	〃	土器(?)	〃		〃
大板井Ⅲ	1号	円形	東壁	砥石	〃	周溝と土壙が溝により直結	(2)
〃	2号	楕円形	〃	?	〃		〃
〃	4号	円形	南西隅	?	中期後半		〃
野方勧進原	1号	不整円形	東壁	——	後期	周溝と土壙が直結	(3)
〃	2号	〃	〃	花崗岩角礫，土器	〃	周溝と土壙が溝により直結	〃
〃	3号	〃	〃	鉢形土器（完形）	〃		〃
門田	2号	円形	東壁（円形住）	砥石		中央ピット内にも砥石	(4)
〃	4号	不整楕円形	北壁（円形住）	石戈		焼失住	〃
下稗田	G区3号	円形	東壁	——		周溝と土壙が溝により直結	(5)
浄泉寺	6号	方形	中央（円形住）	扁平片刃石斧	中期初頭		(6)
古大間	1号	楕円形	〃	石塊（作業台）	中期前葉		(7)
〃	3号	隅円長方形	東壁	砥石	後期初頭	排水溝につづく周溝と土壙が溝により直結	〃
〃	6号	楕円形	中央（円形住）	鉄斧	中期前葉		〃
辻田	5号	不整円形	東壁	砥石	後期末	周溝と土壙が直結	(8)
〃	10号	方形	不明	石庖丁土錘	後期		〃
〃	20号	不整形	南壁	粘板岩板状砥石	後期末	周溝と土壙が直結	〃
伊倉	8号	方形	〃	?	後期末～	排水溝につづく周溝と直結	(9)
〃	9号	不整形	〃	作業台か砥石	後期末	幅広い周溝と直結	〃
金山	1号	円形	〃	石塊	中期末		(10)
〃	2号	不整形	〃	石庖丁	〃	土壙周辺に砥石が散乱	〃
〃	3号	〃	北壁	砥石2個	〃	北壁沿いにも1個のピットがあり，作業台らしき石塊あり	〃
柳ケ谷西区	4号	楕円形	南壁	——		住居の隅から出る溝と直結	(11)
〃	5号	〃	東壁	——		周溝と土壙が直結	〃
〃	2号	長方形	南壁	——		床面を走ると直結	〃
都地原東区	1号	円形	〃	——		周溝と土壙が溝により直結	〃
小原	3号	隅円長方形	中央（方形住）	石塊（作業台?）	後期末		(12)
〃	5号	円形	西壁	?		床面を走る溝と土壙が直結	〃
西中ノ沢	1号	不整形	東壁	玄武岩の石塊	後期		(13)
〃	2号	方形	南壁	高坏，鉢の完形	〃	土壙内に石塊か	〃

遺跡名	住居番号	土壙平面図	屋内土壙の位置	出土遺物	時期	備考	文献
西中ノ沢	4号	不整形	南壁	石塊2個	後期		〃
〃	5号	方形	〃	石塊	〃		〃
〃	6号	〃	東壁		〃	周溝と土壙直結	〃
野口	1号	不整形	南壁	砥石	〃	周溝と土壙が直結	〃
道添	3号	瓢形	〃	砥石,鉢(完形)	〃		〃
〃	5号	円形	東壁	甕(完形)	〃		〃
〃	7号	楕円形	〃	土器多数	〃		〃
〃	9号	方形	南壁	——	〃	周溝と土壙が直結	〃
千塔山	36号	円形(?)	中央(円形住)	石塊	中期	土壙は半壊	(14)
〃	44号	?	東壁	砥石	後期	土壙は半壊	〃
〃	55号	方形	南壁	砥石	〃		〃
宝台(D地区)	1号	長方形	〃	底に灰が堆積	中期後葉	周溝と土壙が直結	(15)
赤井手	47号	楕円形	〃	——	後期(?)	周溝と土壙を溝で直結	(16)
〃	56号	隅円長方形	〃	砥石	後期	土壙のそばで砥石 土壙と周溝直結	〃
〃	61号	楕円形	東・西壁		?	2個の土壙が周溝に直結し,排水溝につづく	〃
柳ケ谷西区	23号	円形	南壁		?	周溝と土壙を溝で直結	(17)
〃	25号	楕円形	中央(円形住)	石塊(作業台?)	中期前葉		〃
〃 東区	27号	〃	南壁(円形住)	〃	〃		〃
〃 西区	24号	方形	東壁		後期	床面に走る溝と土壙が直結	〃
下原	1号	方形	中央(方形住)		中期前葉	ピットの周囲を土手状の遺構が廻る	
〃	3号	円形	東壁	器台,甕の底部2個体	〃		

※住居跡の時期は報告書に記述されているとおりである。

※住居跡の平面形態は(円形住)の他は全て,方形乃至長方形である。

している例もある。しかも,土壙内から出土する遺物は食物ではなく,例え食物と考えた場合,炭化した食物が遺存することも充分考慮されるがいまだ見い出せず,石塊(この場合全てではないにしろ作業台的な用途が考えられる。),砥石が大半を占め,その他石庖丁,扁平片刃石斧,石戈,鉄斧等の生産用具・工具の出土が目立つ。

Ⅳ

これら屋内土壙の付設方法及び出土遺物から考慮される用途として作業穴(作業土壙)—主に生産用具・工具の研ぎ場—の可能性が高いことが指摘できる。

農耕に勤しんだ村の人々は雨天になると屋根から壁を通して漏れる雨水を利用し,屋内作業穴に水を溜め用具・工具の研ぎ直しを行うことで晴耕雨研の生活を営んでいたように思える。したがって,集落から世帯に分配される食物の貯蔵は甕乃至壺等の用器に入れ,竪穴住居の隅に置いていたか,あるいは道添遺跡5号(文献13),野口遺跡9号(文献13),坊野遺跡2号(文献13)等の竪穴住居跡の例にみるように住居の隅に別の貯蔵用のピットを掘り,甕等に食物を貯蔵していた可能性が考えられ(註7),屋内貯蔵穴に水引きの溝を設けることは無意味であ

ると考える。

文 献

(1)・(2) 小郡市教育委員会「大板井遺跡Ⅰ・Ⅲ」（小郡市文化財調査報告書第11集）—1981，1982—

(3) 福岡市教育委員会「福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告Ⅰ」（福岡市埋蔵文化財調査報告第64集）—1981—

(4) 北九州市教育委員会，財団法人北九州市教育文化事業団「門田遺跡」（北九州文化財調査報告書第33集）—1979—

(5) 行橋市教育委員会「下稗田遺跡調査概報Ⅲ」（行橋市文化財調査報告書第11集）—1982—

(6) 福岡市教育委員会編，東洋開発株式会社発行「浄泉寺遺跡」—1974—

(7) 粕屋町教育委員会「古大間池遺跡」（粕屋郡粕屋町所在遺跡調査報告書）—1977—

(8) 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」（第7集）—1978—

(9) 山口県教育委員会「伊倉遺跡」（山口県埋蔵文化財調査報告第16集）—1973—

(10) 夜須町教育委員会「金山遺跡」（夜須町文化財調査報告書第4集）—1981—

(11) 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」（Ⅷ）—1977—

(12) 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」（Ⅺ）—1977—

(13) 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」（XⅨ）—1977—

(14) 基山町遺跡発掘調査団「千塔山遺跡」—1978—

(15) 日本住宅公団「宝台遺跡」—1970—

(16) 春日市教育委員会「赤井手遺跡」（春日市文化財調査報告第6集）—1980—

(17) 福岡県教育委員会「若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告」（第3集）—1980—

註1 関西大学考古学研究会「関西大学考古学研究年報1」—1967—

註2 福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」（第11集）—1979—

註3 近藤義郎・渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」津山市津山郷土館—1957—

註4 津山市教育委員会「沼E遺跡Ⅱ」（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集）—1981—

註5 岡山県赤磐郡山陽町教育委員会「惣図遺跡発掘調査概報」—1971—

註6 下原遺跡3号竪穴住居跡の屋内土壙から出土した2個の甕の底部は割れ口が著しく磨耗しており，例えば水汲み器等の再利用が考えられる。

註7 九州横断道立野遺跡の弥生後期末頃の住居跡からも屋内作業穴とは別にベット状遺構上に貯蔵用ピットが設けられ，上部には木蓋の痕跡を残していた。

(3) 下原遺跡出土土壙群の用途について

Ⅰ

当初，下原遺跡の土壙群は土壙墓的な発想のもとで調査を進展させていたが，調査途中で遺

の床面規模，深さ，覆土の堆積状況等から墓と認定するには疑問な点が随所にみられ，視点を変えて観察するとともに再検討を余儀無くされた。計らずも調査報告の執筆中に同形状の遺構が鳥取県米子市の青木遺跡で出土していることに気付いた。同報告書によると土壙状遺構を「落し穴」として報告されている（註1）。そこで下原遺跡出土の土壙群と周辺の同タイプの土壙を抽出し，遺構の共通性等を検証することで土壙の用途について検討してみたい。

Ⅱ

下原遺跡での土壙群の構成は東と西の2群に大別できる。東側の土壙は2基検出したのみで群を構成するか否かは明らかでない。（少なくとも試掘時では東側に広がる傾向はみられない）西側の一群は台地の西端沿いを概ね2列に掘り込まれており，土壙の主軸を略東西に有すことから明らかに作為的な掘削方法が窺える。2列の掘削傾向から逸脱する土壙は8号・13号土壙のみで，その大半が6.5～7.5mの幅員内に掘られている。土壙は長方形乃至楕円形を呈し略一定した形状をなす。最大規模を有す土壙は17号で長軸1.46m，短軸1.12m，深さ1.13mで，規模の平均をとると長軸1.19m，短軸81cm，深さ80cm，床面積は0.51m^2となる。後世の削平を考慮すれば深さは更に深くなる。土壙内でのピットの保有率は57%で半数強に床面掘り込みのピットが窺える。

Ⅲ

県外での同形状の土壙の分布状況をみると神奈川県の霧ケ丘遺跡（註2），鳥取県の青木遺跡，茶畑遺跡（註3），小松谷遺跡（註4），岡山県の谷尻遺跡（註5），二宮遺跡（註6），惣図遺跡（註7），等で出土している。

県内での発掘例は少なく，二丈町の広田遺跡Ⅰ～Ⅲ区（註8），立野遺跡（註9），門田遺跡辻田地区（註10），門田遺跡門田地区（註11）が知られる。

広田遺跡（Ⅰ～Ⅲ区）では1例検出されている。丘陵裾部に掘られており，楕円形の形状をなし長軸1.17m，短軸90cm，深さ90cmを測り，中央ピットを持つ。覆土は地山土の薄汚れた土で埋まり，弥生時代の貯蔵穴の一種との指摘がなされている。

門田遺跡（辻田地区）では13例が調査されている。平面形状が長方形乃至楕円形をなす土壙が弥生時代の袋状竪穴，住居跡，甕棺墓と重複して台地上に掘られている。土壙群は台地を横断する形で配置されていた。長軸1.3m～99cm，短軸94cm～55cm，深さ39cm～74cm，床面積の平均0.69m^2の規模の土壙群で，深さに差違があることは後世の削平によると思われる。床面には1個～4個のピットが掘られている。土壙内からは石塊の出土がみられる。堆積土は「全体的に識別が困難なものが多く，単純な同一層と考えた方が適当かもしれない」との指摘がなされている。

門田遺跡（門田地区）では1例が確認されている。辻田地区に隣接する台地で6号竪穴として報告されている。長円形で長径1.4m，短径1.1mで床面には2個のピットが掘られている。

出土遺物は無い。

立野遺跡は九州横断自動車道に関連して調査された遺跡で現在も調査継続中である。立野遺跡からは10基前後出土しており今後増加する可能性がある。土壙の形状は下原遺跡のそれと同様で，近年中に報告書が刊行される予定である。

Ⅳ

以上列挙した諸遺跡の土壙例の共通点を抽出すると，数基から数十基の群構成をなすことが多い。形状が長方形あるいは楕円形を呈している。土壙の規模は長軸1.0m以上，短軸1.0m以内，深さ1.0m以下が県内での出土例の普遍的な法量であるが，青木遺跡の土壙群はこれらよりやや大型のものが多い。床面積の平均は0.5〜0.7㎡内で，土壙の床面には1乃至3個程のピットが掘られている例が多々ある。覆土は黒色土系の土で埋まり層位の識別が困難である。土壙内からの出土遺物は皆無であるか，または数個の石塊が出土することもある等々が挙げられる。これらの諸条件は青木遺跡の土壙群についても共通性が見い出せ，群構成は認められないが惣図遺跡，二宮遺跡，谷尻遺跡の例にも共通するものである。

Ⅴ

この種の土壙は今までの報文では一種の貯蔵穴として捉えられており「ピット中央に1本の柱を安定した状態で建て，その柱のまわりに「物」を入れ，地表面に柱を心柱として葺き流した屋根の存在を連想させる」等の指摘がなされていた（註12）。県内での出土例は前項のような共通的要素が確認され，しかも出土遺物が皆無に近いことから，下原遺跡出土の土壙群は青木遺跡の土壙群と同一の機能を有した「落し穴」遺構と考えた方のが妥当である。しかも下原，門田（辻田地区）の土壙配置を観ると一定の幅員内に掘られており，土壙の主軸は連続する土壙群の方向と直交する形で配される。これは当時の獣道に沿って掘られた「落し穴」で，獣道内での捕獲の効率を考慮したうえでの面的広さを確保する配置とも受けとられる。

「落し穴」で捕獲される獲物としては土壙の広さから「兎，狸から猪の子程度」との指摘がある（註13）。床面中央のピットは土壙内に杭を立て，それに獲物が体を打ち当てる目的に使用されたとする（註14）。この想定には一考の価値があり首肯できるが，更に視点を変えて土壙の中央に棒杭を設けることにより，獲物が跳ね上るための空間をより狭くし，自由を奪う障害物としての機能を持たせたとも考えられる。しかも，「落し穴」に灌木等で覆いを施し，獲物がその覆い物と同時に落下することにより一層の効果をはたしたことであろう。土壙内から稀に出土する石塊は獲物に対する投石の痕跡とも捉えられ，投石が必要な獲物も捕獲できたのではなかろうか。

「落し穴」が掘削された時期は出土遺物が無いため明らかではないが，青木遺跡では周辺の遺構から推測して縄文後・晩期の時期が与えられており，一連の土壙群も同期の所産と考えられるのである。

註1　青木遺跡調査団「青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ」（C・D地区）—1977—

註2　霧ケ丘遺跡調査団「霧ケ丘」—1973—

註3　青木遺跡の報告書によると未発表資料であるが，6基検出されている。

註4　青木遺跡の報文中で4基が検出されるとある。

註5　岡山県文化財保護協会「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6」（岡山県埋蔵文化発掘調査報告11」—1976—

註6　岡山県文化財保護協会「二宮遺跡」（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28）—1978—

註7　岡山県赤磐郡山陽町教育委員会「惣図遺跡発掘調査概報」—1971—

註8　福岡県教育委員会「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ」—1982—

註9　現在福岡県教育庁文化課により調査継続中であり，昨年度の調査区で検出されている。

註10　福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」（第7集，上巻）—1978—

註11　福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」（第3集）—1977—

註12　註7に同じ

註13　註1に同じ

註14　註1に同じ

(4) 下原遺跡出土土器の様相

—主に甕形土器を中心として—

北部九州の弥生時代中期前葉頃の甕形土器は，逆「L」字状口縁に張りの鈍い胴部を持ち，細みの僅かな上げ底をなす等の特徴を有す遠賀川以西に普遍的に分布する甕形土器と，鋭く屈折する口縁部に平坦面が内傾し口唇部が肥厚乃至跳ね上げの技法をなし，肩部から胴部にかけての張りは鈍く，底部は細まり上げ底を呈す等の前期的色彩を残すといった遠賀川系統の甕形土器とが存在する。後者の甕は口縁部の破片が出土した場合では中期末から後期初頭頃の甕と非常に酷似しており識別が困難な場合が多く，全体的な形状か共伴する土器構成で区別できるもので，差異を強いてあげれば肩及び胴部の張りの鈍いことが指摘できる。前者の甕は弥生時代時代前期の遠賀川以西で分布する如意形口縁から発展したものでこれを便宜上Aタイプとする。後者は遠賀川流域で分布する弥生時代前期末頃の初原的な跳ね上げ口縁から展開し発達した甕でこれをBタイプとして以下を説明する。

下原遺跡における甕形土器はA・B両タイプの共伴関係が窺え，しかもその出土比率をみると（実測不可能な細片を含めて）Aタイプの甕形土器が27個体，Bタイプの甕形土器が23個体出土しており，A—54%，B—46%を示し，僅かにAタイプの出土量が多いことが指摘できる。しかし，Bタイプの甕の出土量も見逃せない事象であり，素地を形成した甘木地域の弥生時代前期の土器様相が問題になる。

Ⅲ 各遺跡の調査

弥生時代前期の土器の様相については井上裕弘氏を中心としたグループによる優れた業績がある（註1）。それによると「甘木・朝倉地域は，八女地域系と思われる口縁端部外面と口縁下に三角凸帯を付す甕が多く，次に遠賀川流域に多い甕と，「く」字状口縁下に三角凸帯を付す甕で，福岡平野地域に多いいわゆる如意形口縁の甕は少ない」傾向を示すと云う。この現象から「前期末の甘木・朝倉地域は，八女地域と深い繋がりを持つと同時に二日市地域を介して福岡平野との関係と山塊を越えての嘉穂盆地との関係も存在する。さらに東九州的な土器の流入もある」と指摘されている。

遠賀川系統の甕は前期末頃に口縁端のふくらみをなし胴部の張りの鈍い，原初的な跳ね上げ口縁の甕が発生する（註2）。前期末に遠賀川流域で自生したBタイプの甕は中期に至ると甘木地域に多大な影響を与える。それは前期末に開始された立岩産の輝緑凝灰岩製の石庖丁の交易と無縁ではなく，前期の朝倉山塊での峠越しの交易ルートが土器及び石庖丁の流入経路となる。下原遺跡でも中期のBタイプの甕の出土比が約半数近くにのぼることから前期同様，嘉穂地域との繋がりの強さを示唆する。これは中期以降になると立岩産の石庖丁の交易とともに人間の交流，ひいては婚姻関係とも深い係りを示すものであろう。さらに，他の交易ルートとしては米ノ山峠，冷水越え等が考えられ，好資料に乏しく不明な点が多いが，僅かに高雄遺跡でBタイプの甕がみられる（註3）。最近の調査では三郡山塊の裾部に位置する大島遺跡が挙げられる（註4）。内容は竪穴住居，貯蔵穴，土壙，溝等で構成され，弥生時代前期の遺構が主で一部貯蔵穴，土壙，溝上層に中期の土器群が出土している。当該遺跡からは顕著なBタイプの甕はみられず，僅かに甕の口縁下に沈線を廻らす手法の甕があることから嘉穂盆地及び遠賀川下流域の影響を少なからず受けており（註5），山塊の裾部に位置する遺跡の中でも流入の強弱を示すものと思われる。平野部においては小郡地域で弥生時代中期前葉から始まる大板井遺跡が調査されているが，同遺跡ではBタイプの甕は出土していないことから広い地域でのBタイプの甕の流入傾向はみられない。しかし，運び込まれた土器から人間の交流が顕著であったことは想像にかたくないことで，中期前葉頃に峠を越した狭い地域での婚姻関係が窺えるのである。

註1　福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」（第7集，下巻）—1978—

註2　立岩遺跡調査委員会編「立岩遺跡」—1977—

註3　橋口達也「初期鉄製品をめぐる二・三の問題」（考古学雑誌60巻第1号）—1974—

註4　福岡県教育委員会「冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告」—1982—

註5　井上裕弘氏らの業績によると1条のヘラ描き沈線は嘉穂盆地に中心をもち，複数の沈線を廻らす甕は遠賀川下流域に中心があると指摘されている。

参考文献

嘉穂地方史編纂委員会「嘉穂地方史」（先史編）—1973—

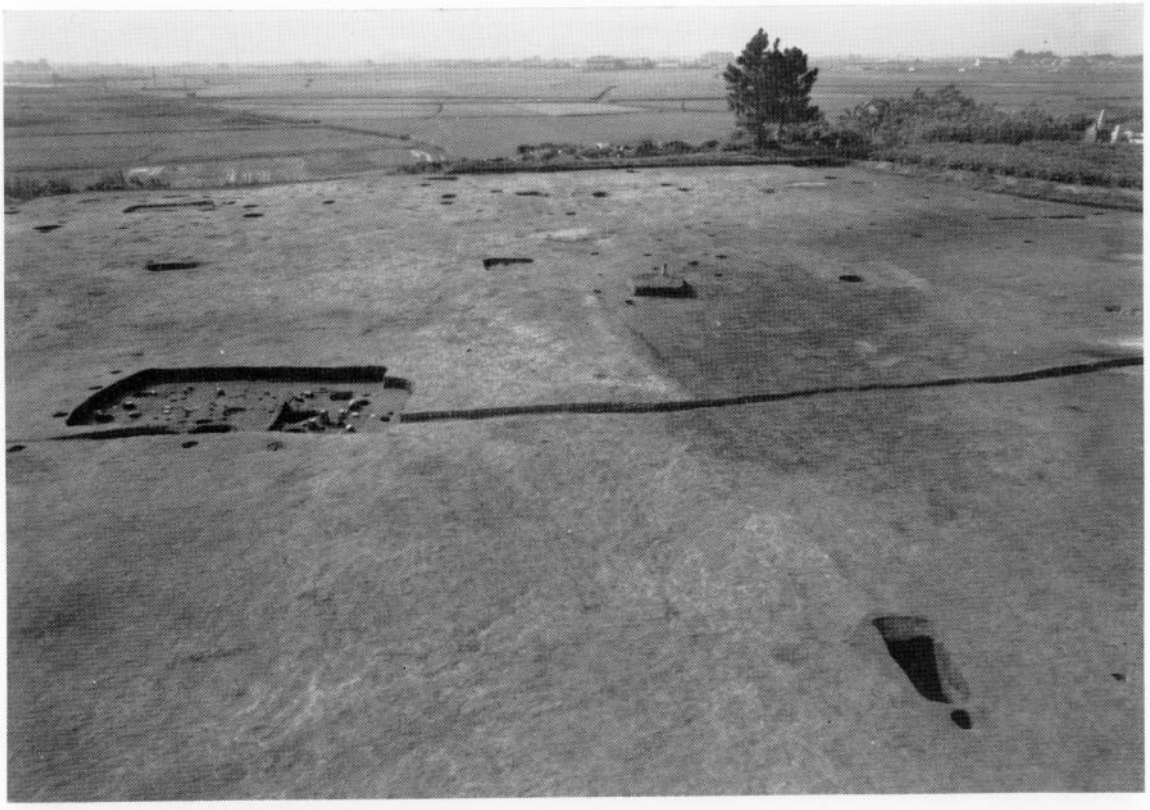
文末ではあるが文化課の浜田信也氏に新資料の提示をうけたことに謝意を表します。

図　版

下原遺跡航空写真（1/7,000）

(1)　下原遺跡遠景（西から）

(2)　下原遺跡近景（北から）



(1) 下原遺跡全景（東から）

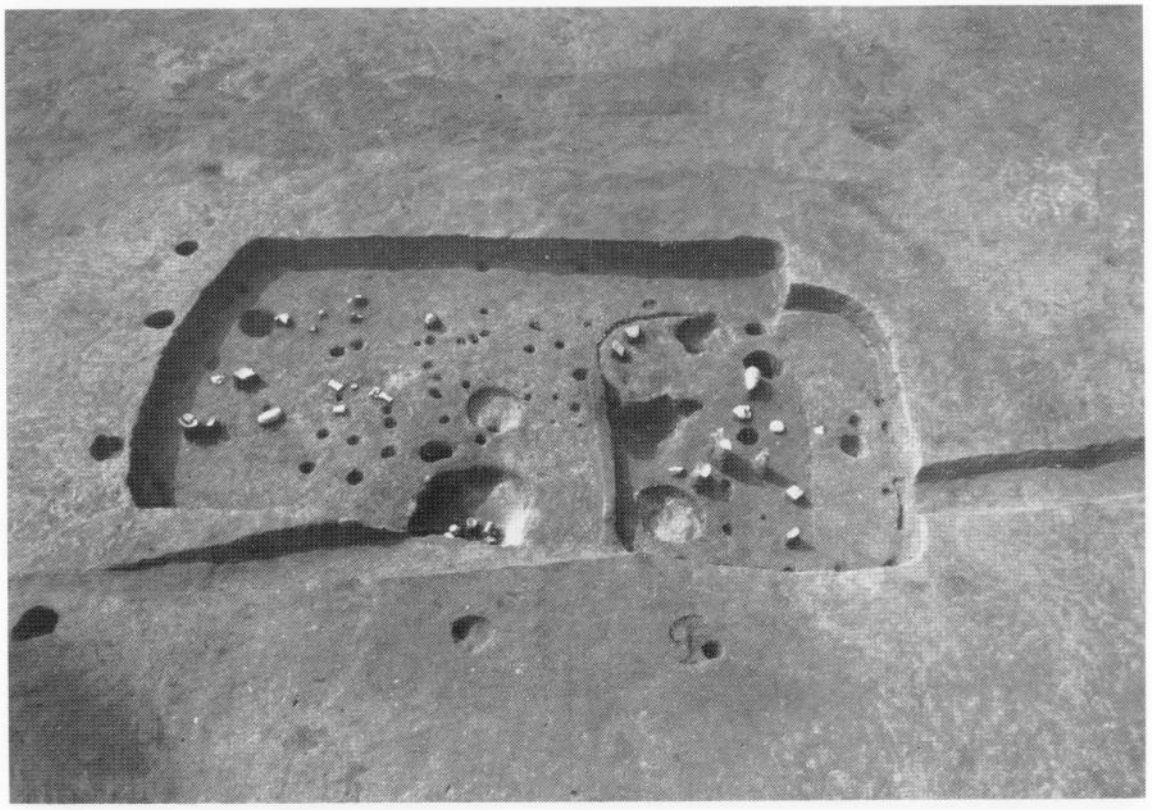
(2) 竪穴住居跡・掘立柱建物・土壙群（北から）

(1)　1 号竪穴住居跡遺物出土状態

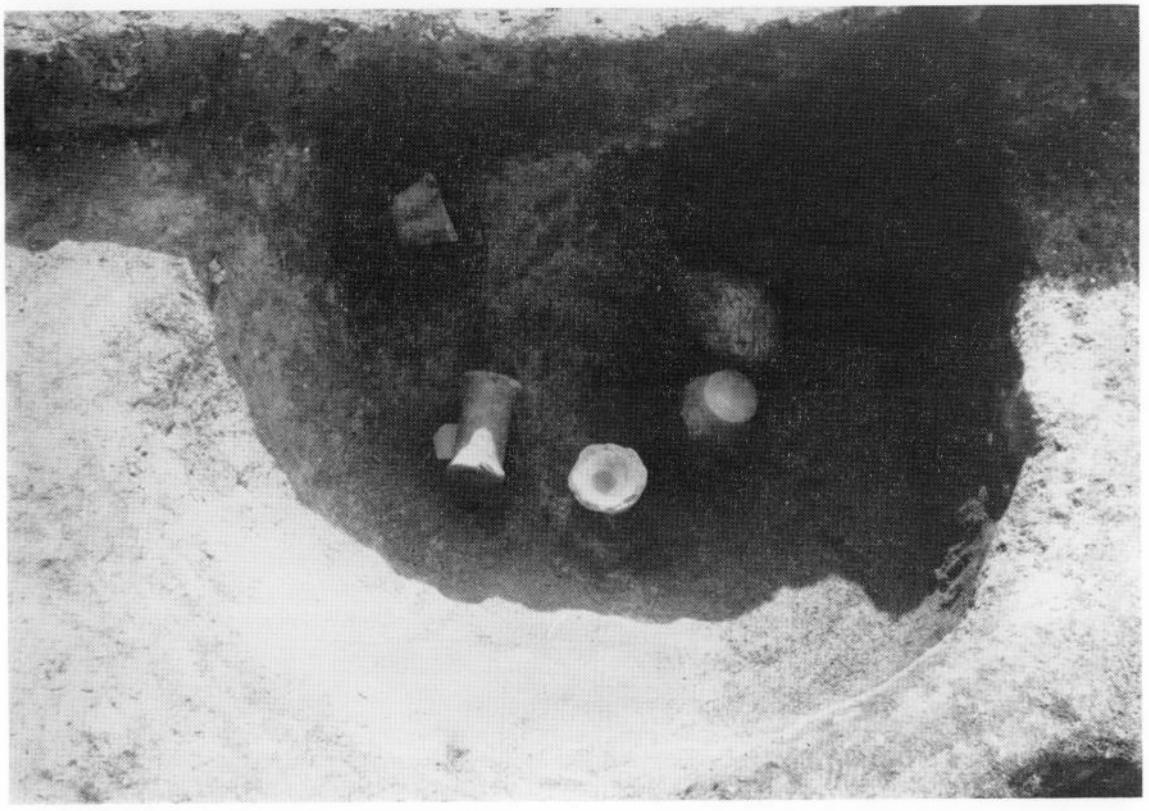
(2)　1 号竪穴住居跡（北から）

(1)　2 号竪穴住居跡遺物出土状態

(2)　2 号竪穴住居跡（東から）



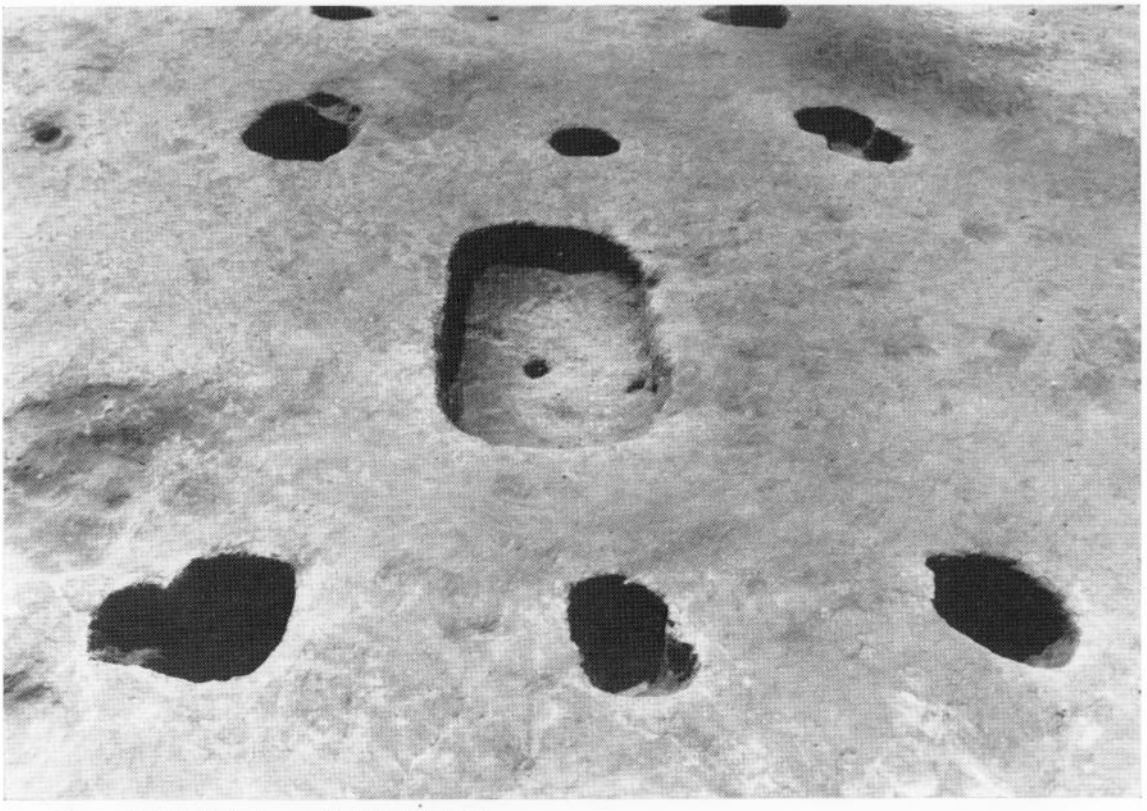
(1)　3 号・5 号竪穴住居跡（東から）



(2)　3 号竪穴住居跡屋内土壙遺物出土状態

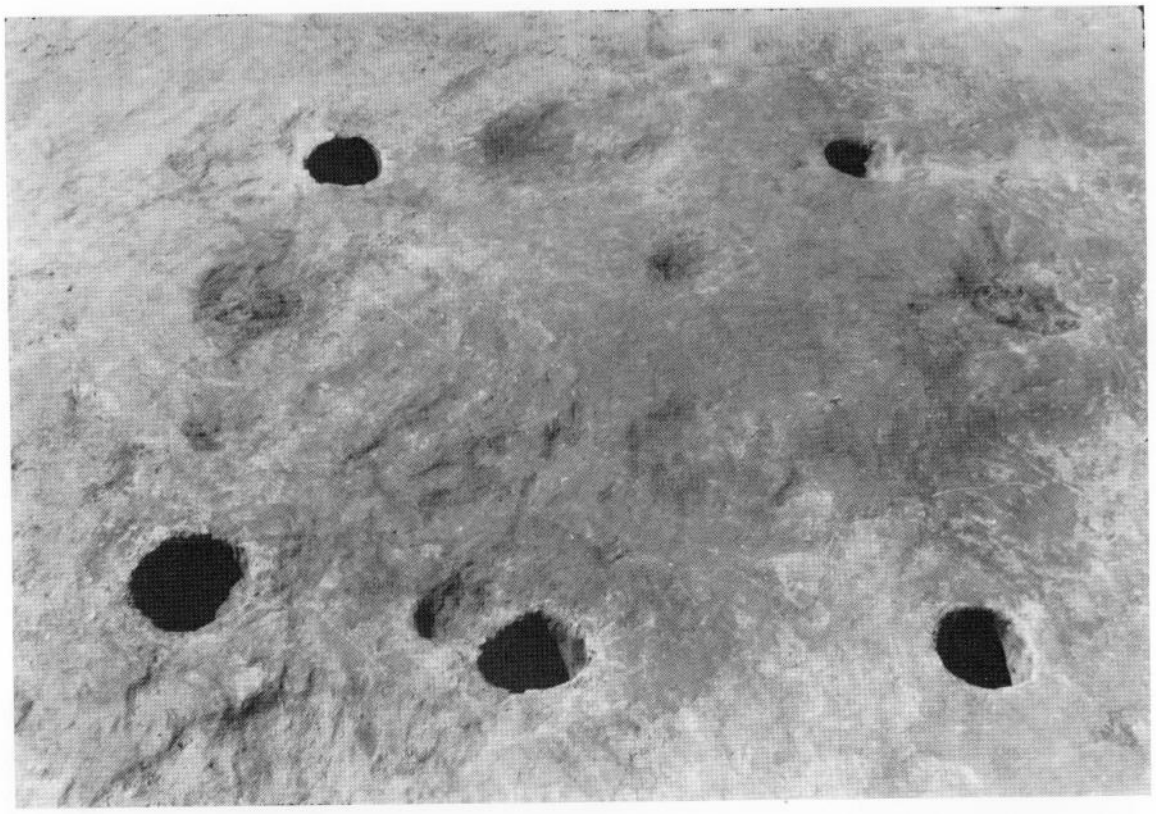
(1)　4 号竪穴住居跡（東から）

(2)　1 号掘立柱建物（北から）

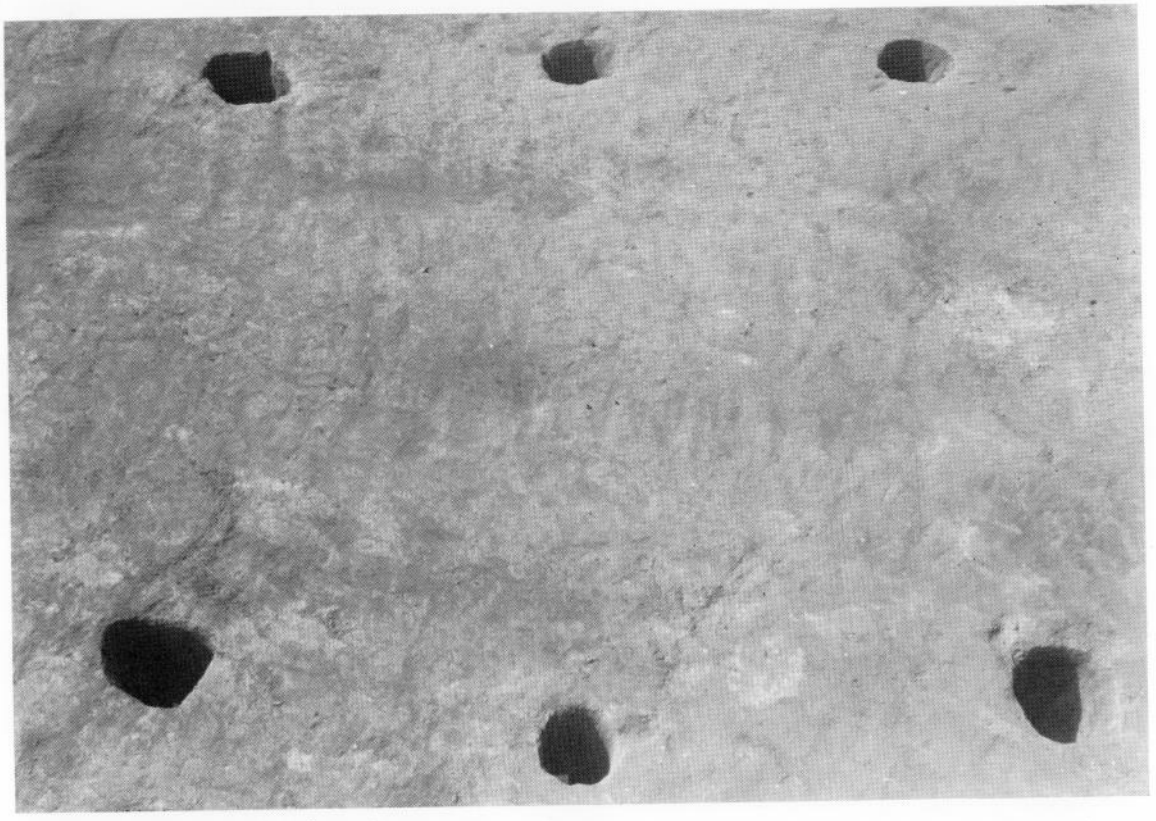


(1)　2 号掘立柱建物・22号土壙（北から）

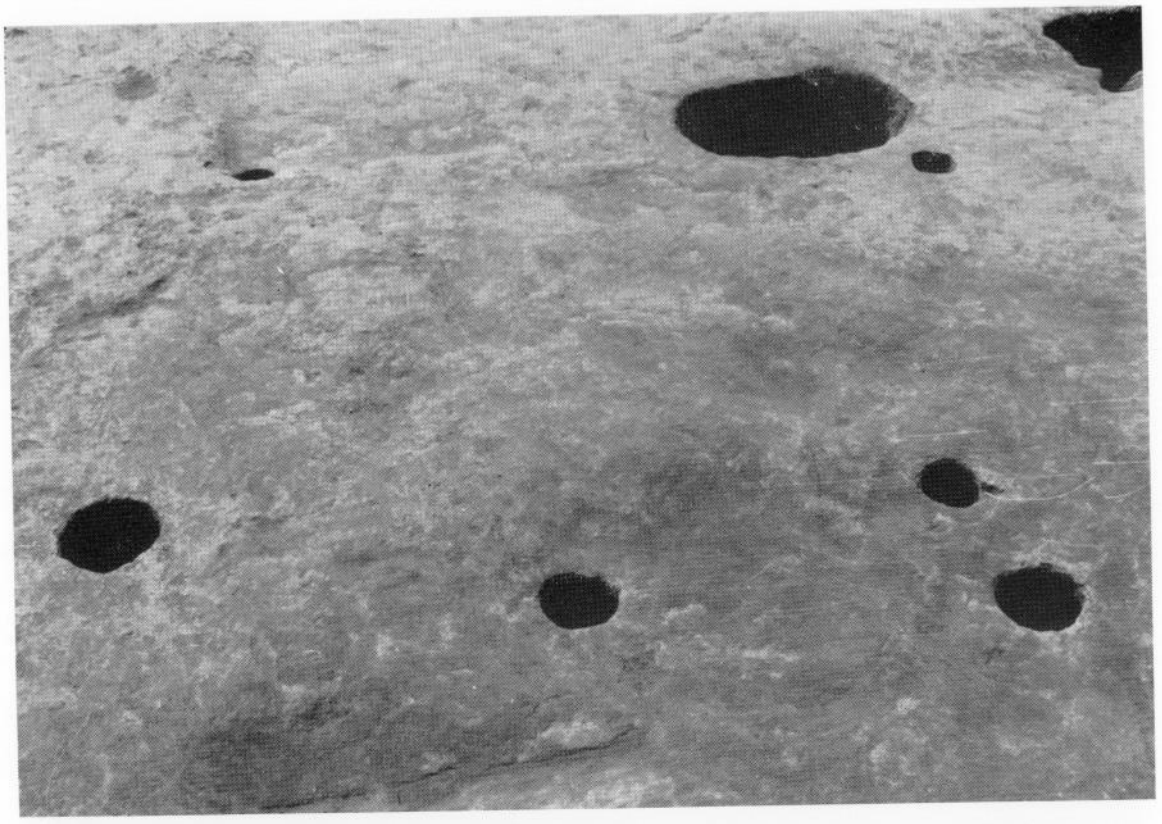
(2)　3 号掘立柱建物（北から）



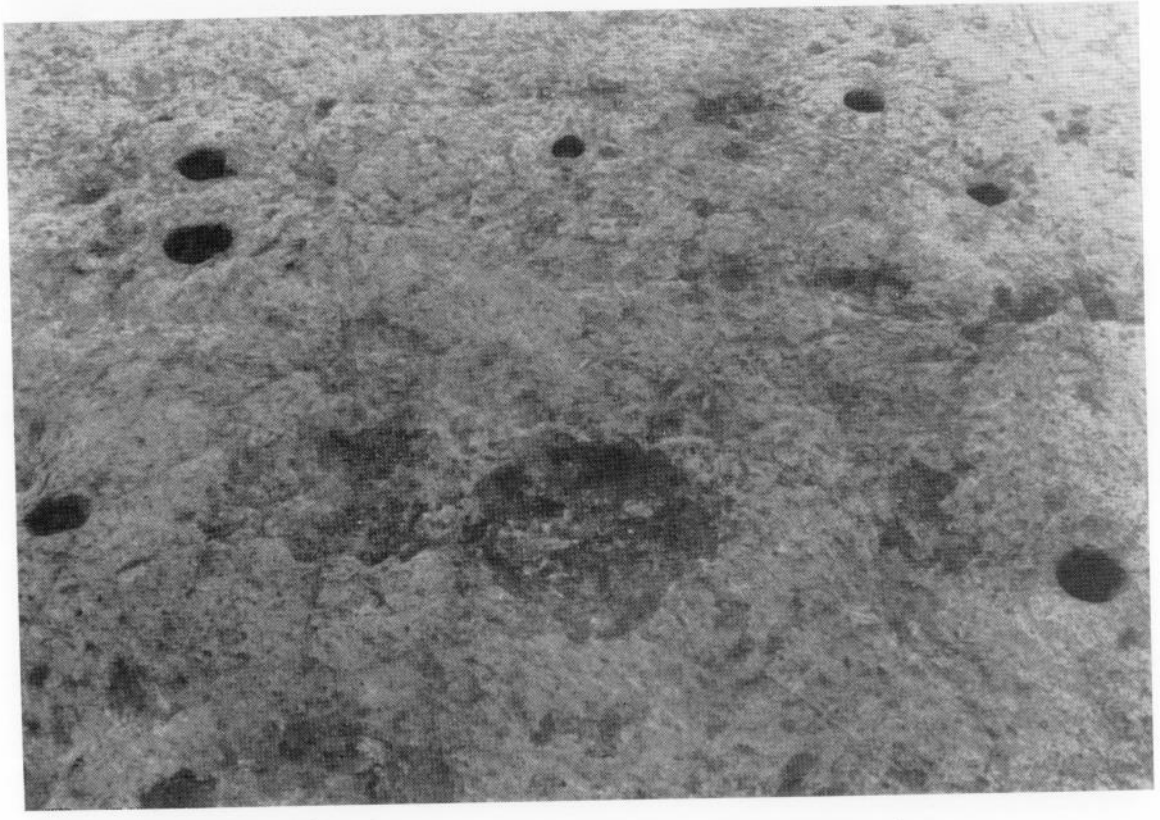
(1)　4 号掘立柱建物（北から）



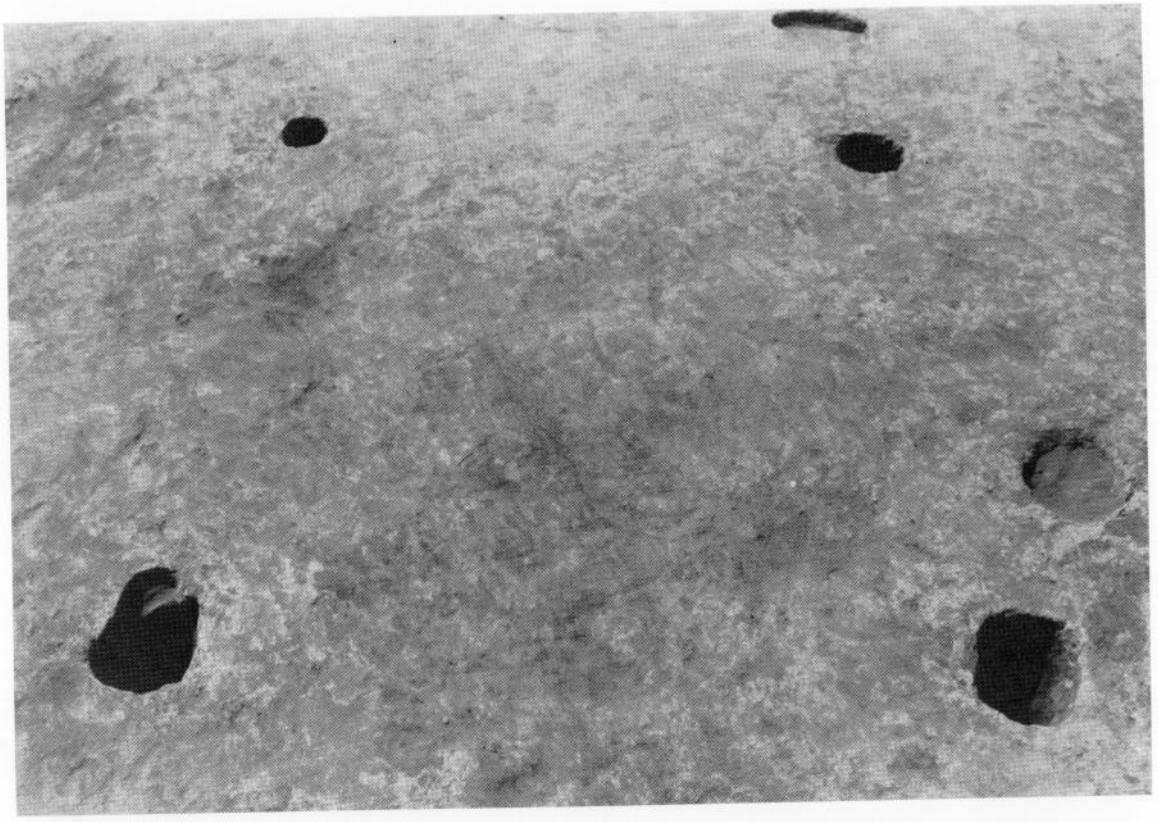
(2)　5 号掘立柱建物（北から）



(1)　6号掘立柱建物（北から）



(2)　7号掘立柱建物（北から）



(1)　8号掘立柱建物（北東から）

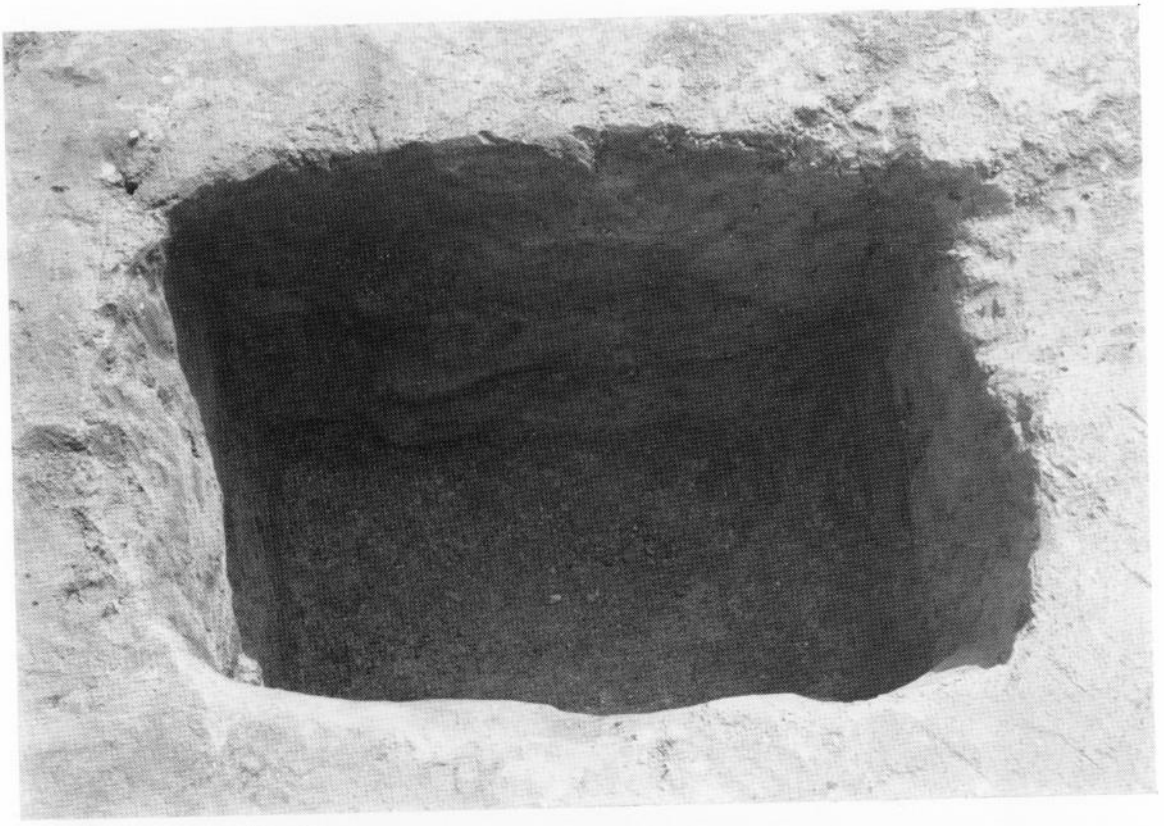
(2)　2号竪穴状遺構，12号土壙（北から）

(1)　3号竪穴状遺構（北から）

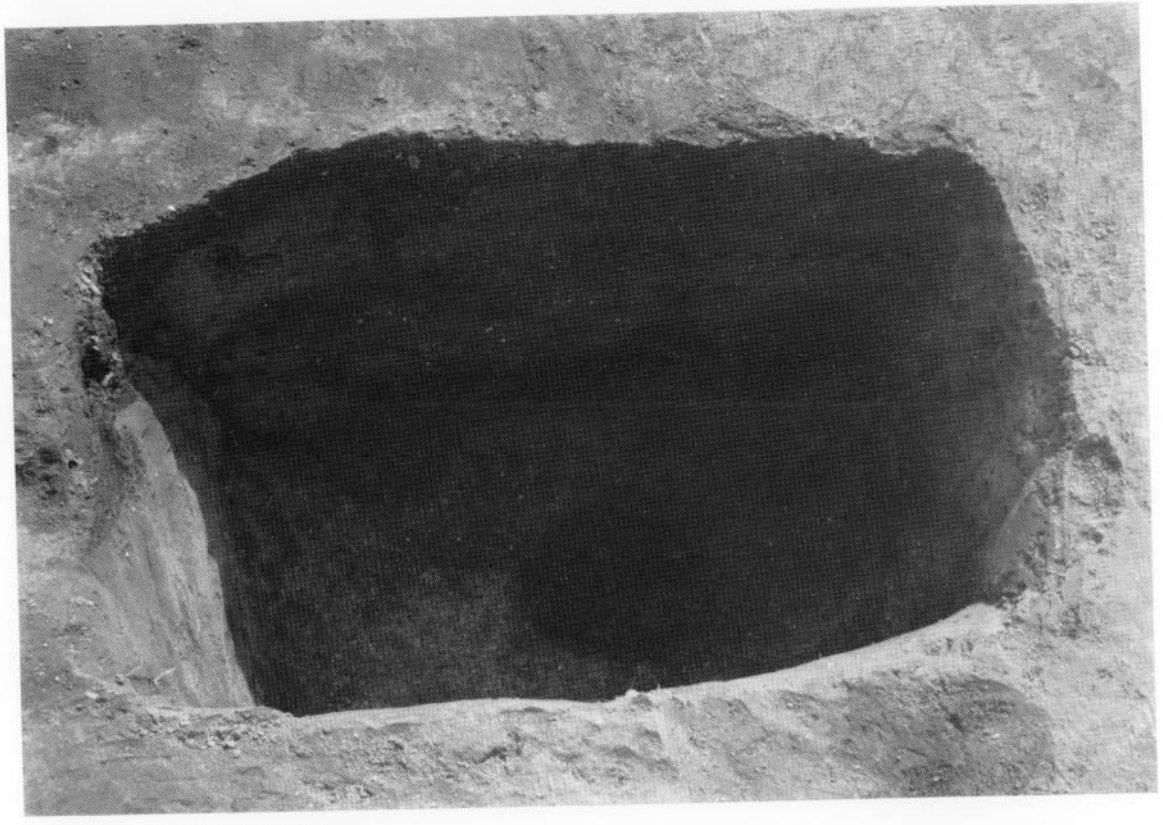
(2)　1号土壙（東から）

(1)　2号土壙（東から）

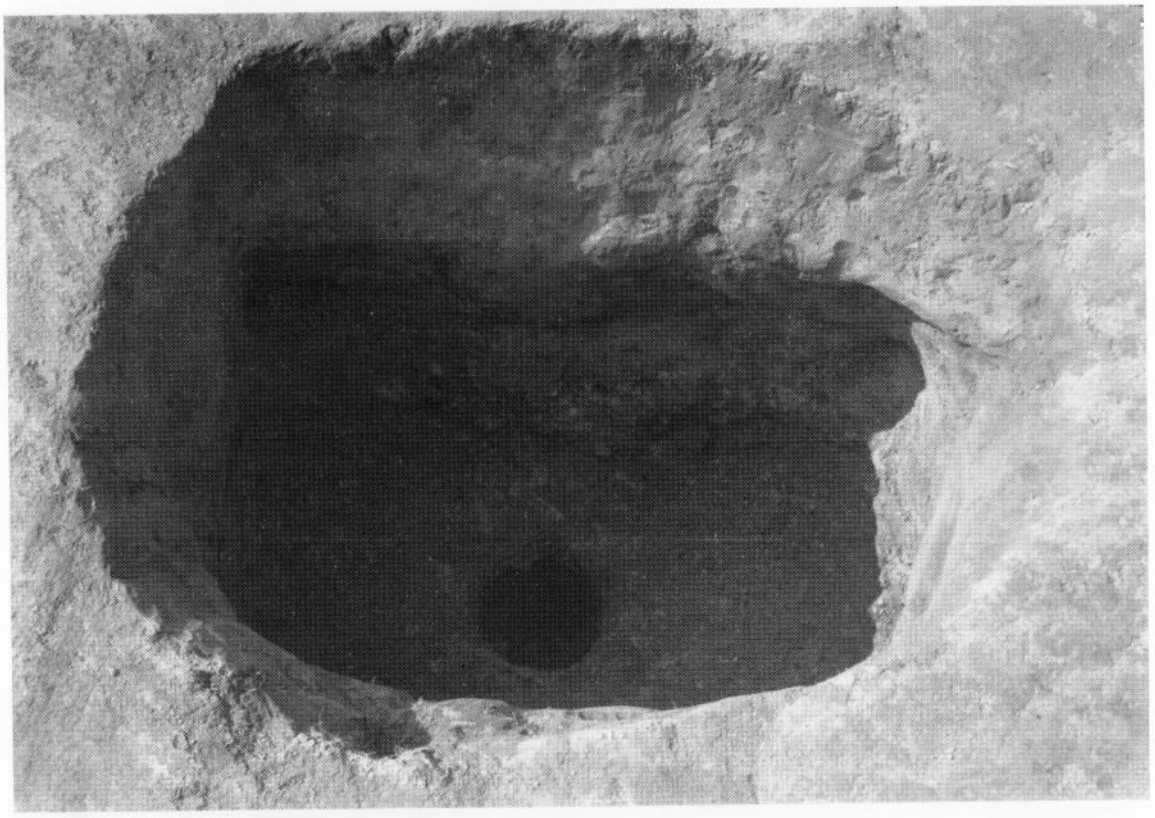
(2)　3号土壙（南から）



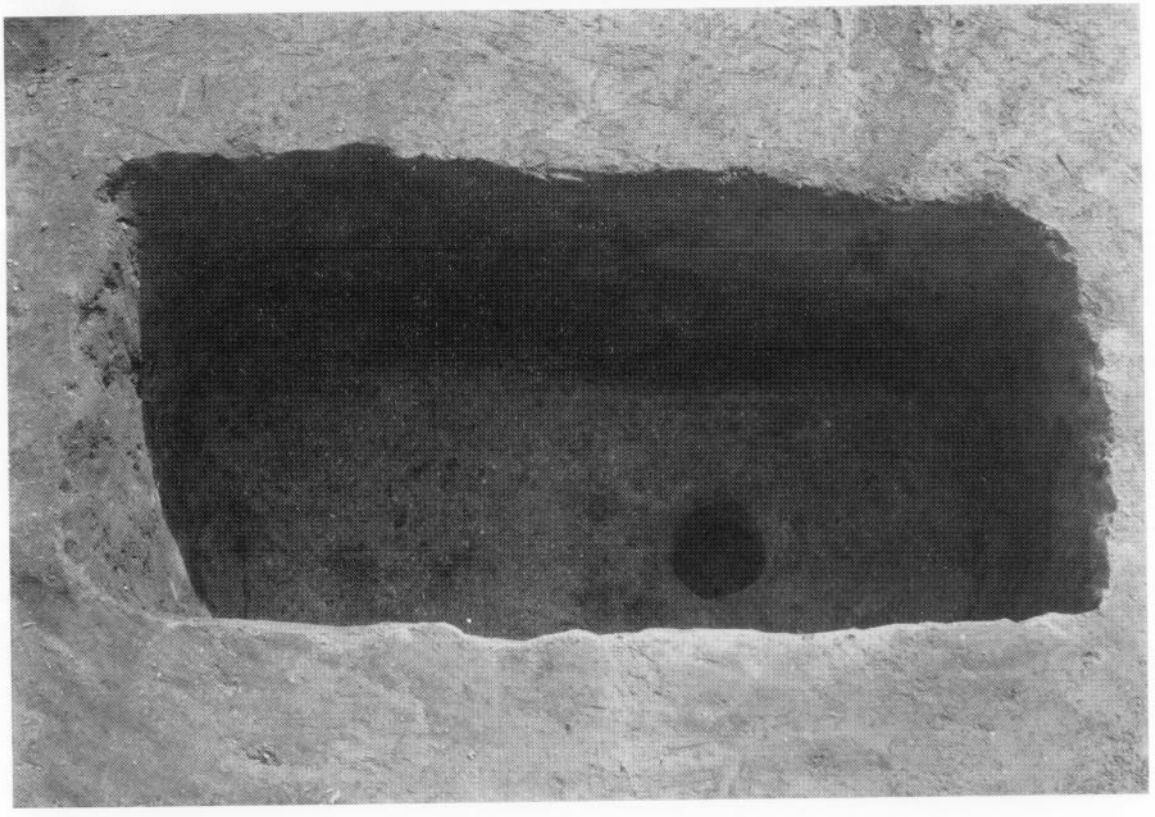
(1)　4号土壙（北から）



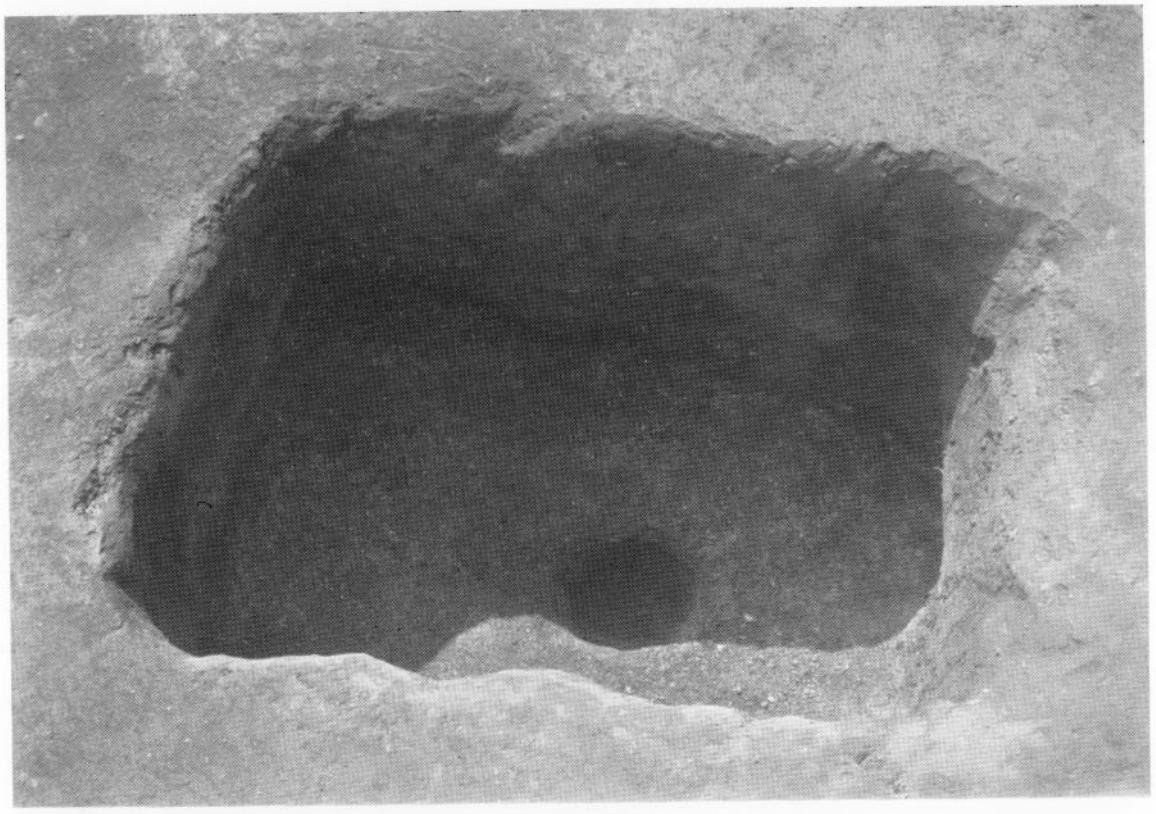
(2)　5号土壙（北から）



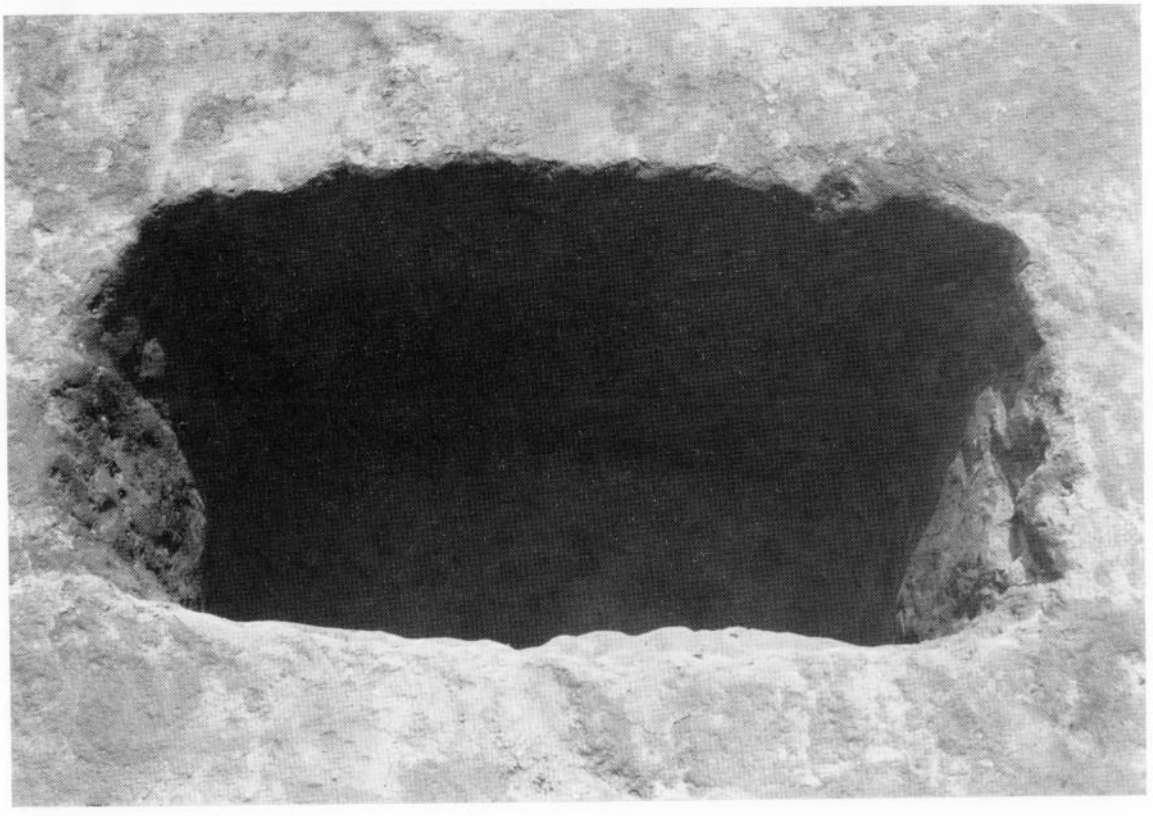
(1)　6号土壙（北から）



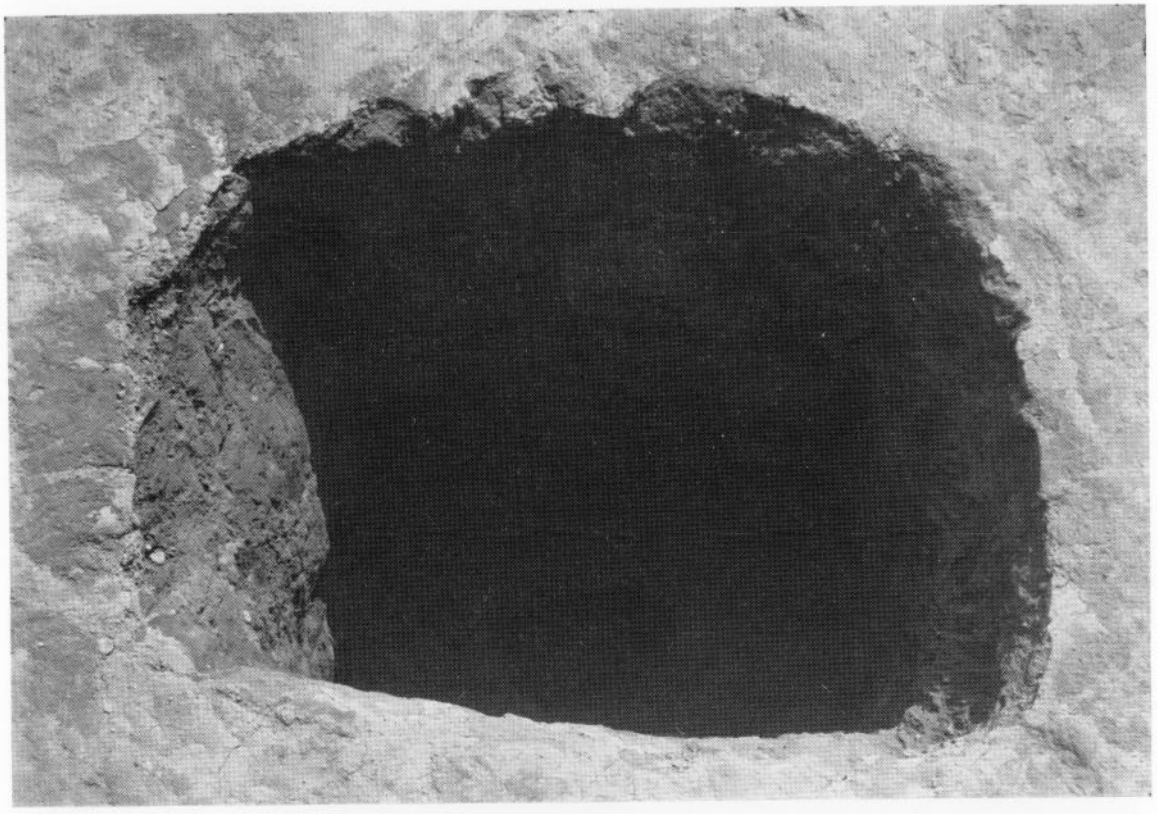
(2)　7号土壙（北から）



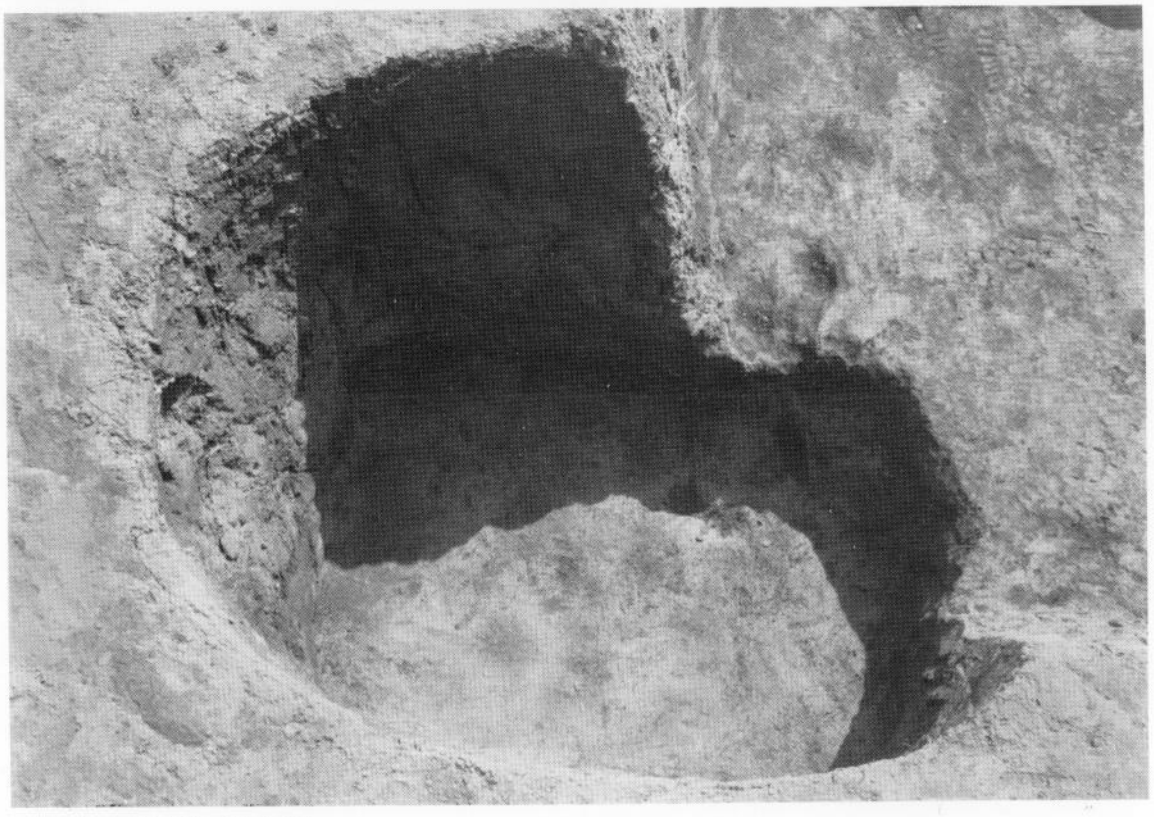
(1)　8号土壙（北から）



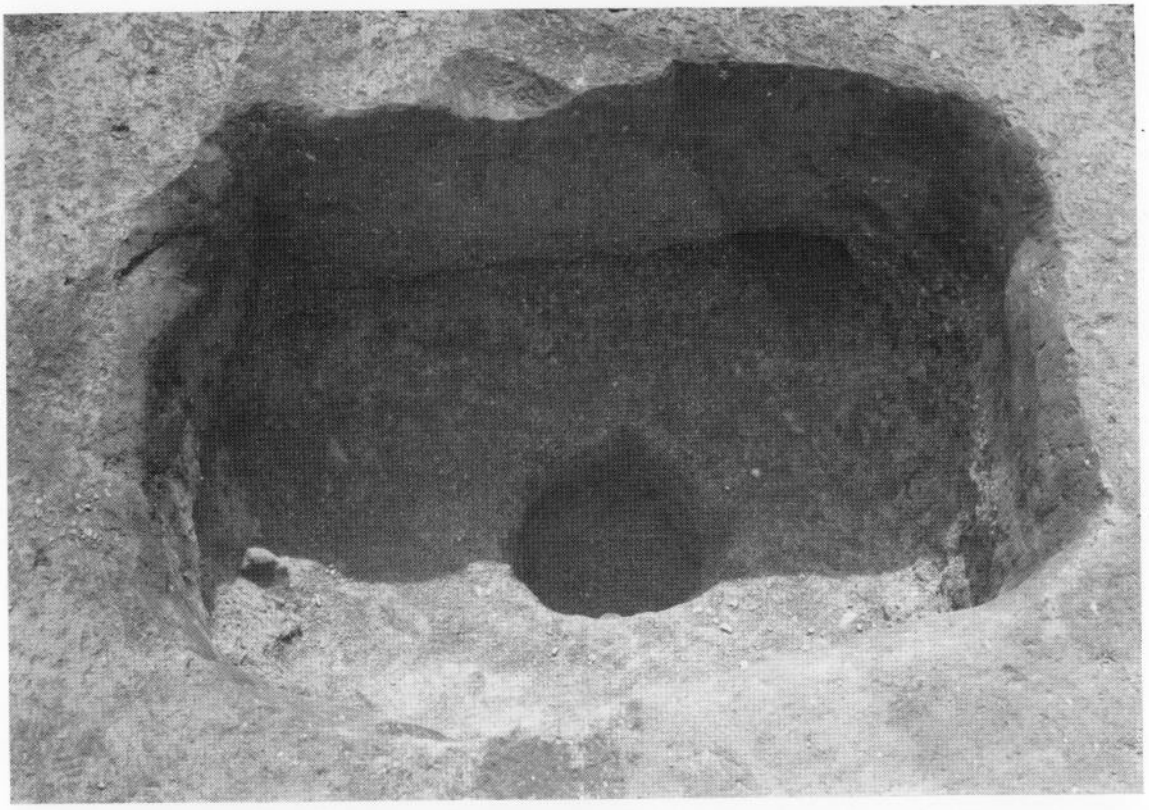
(2)　9号土壙（北から）



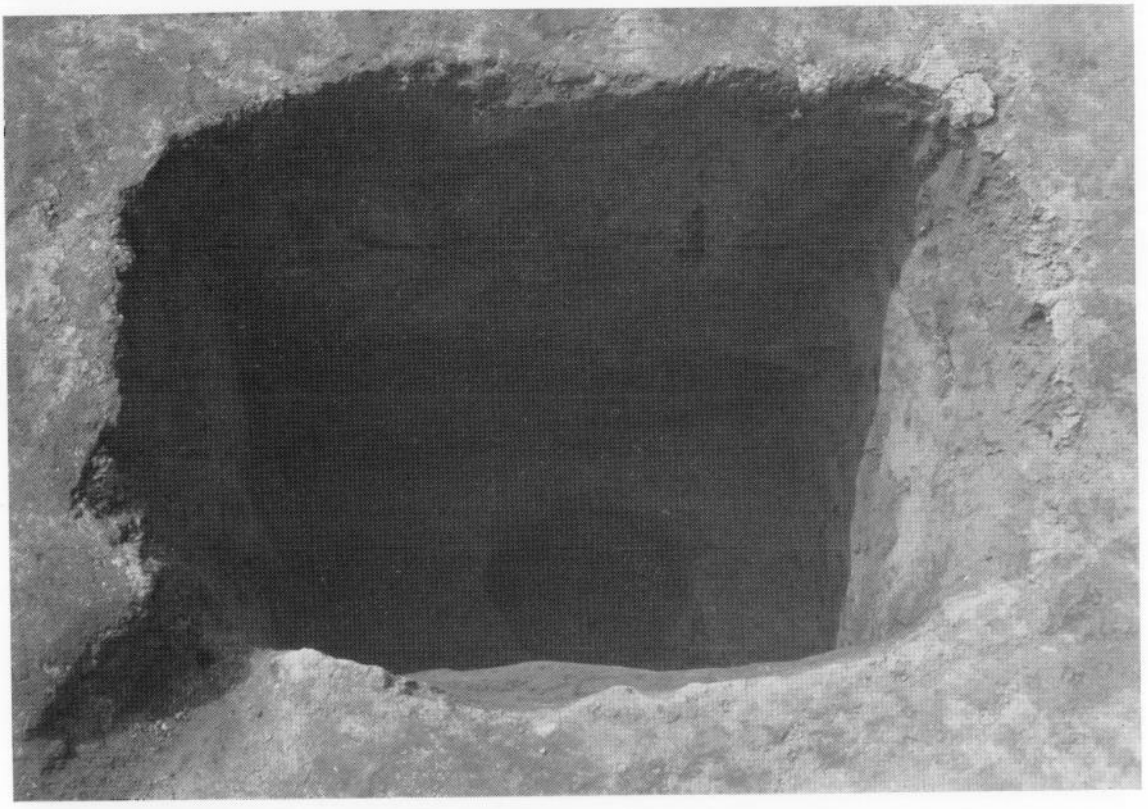
(1)　10号土壙（北から）



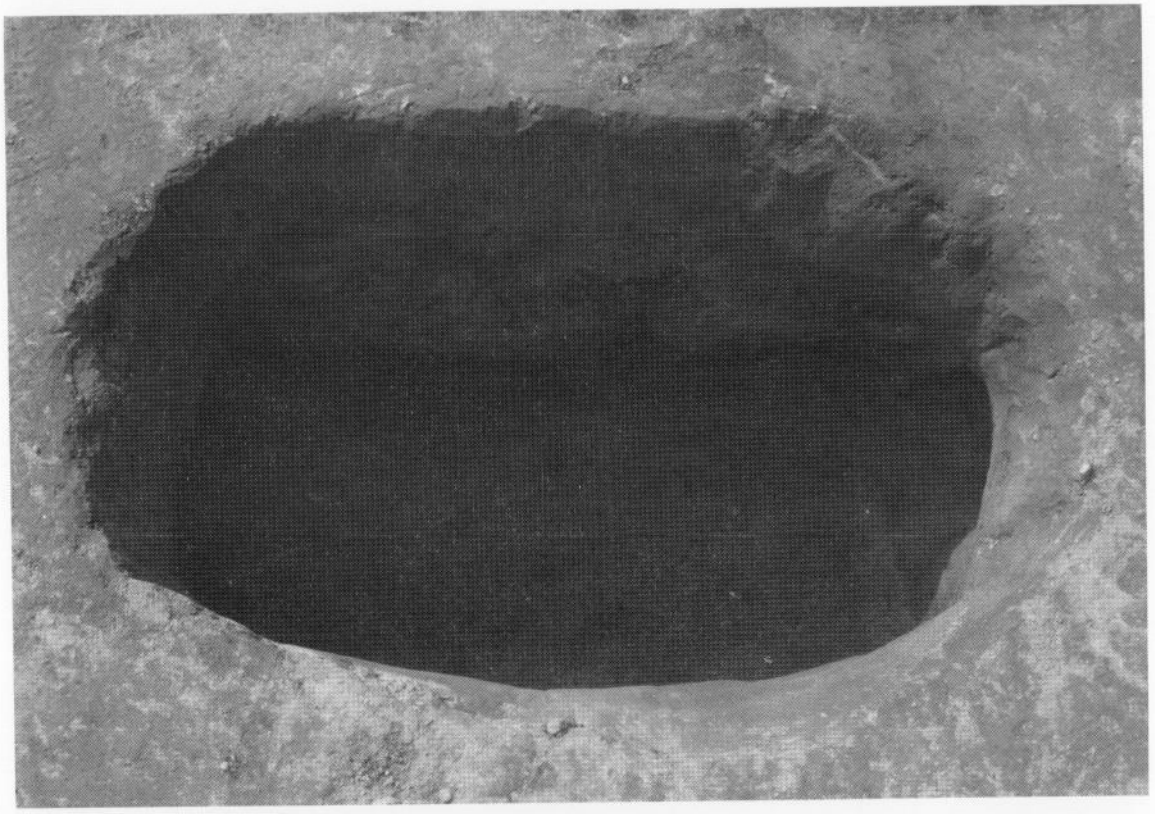
(2)　11号土壙（北から）



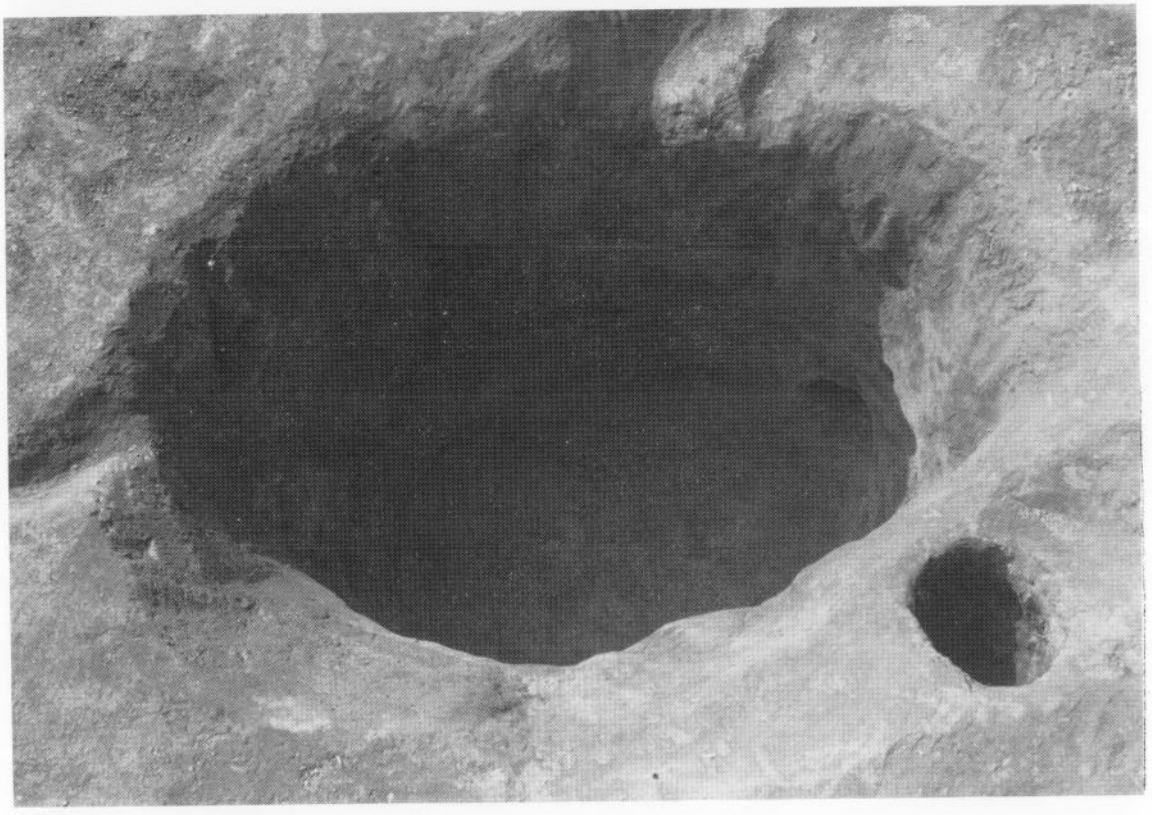
(1)　13号土壙（北から）



(2)　14号土壙（北から）

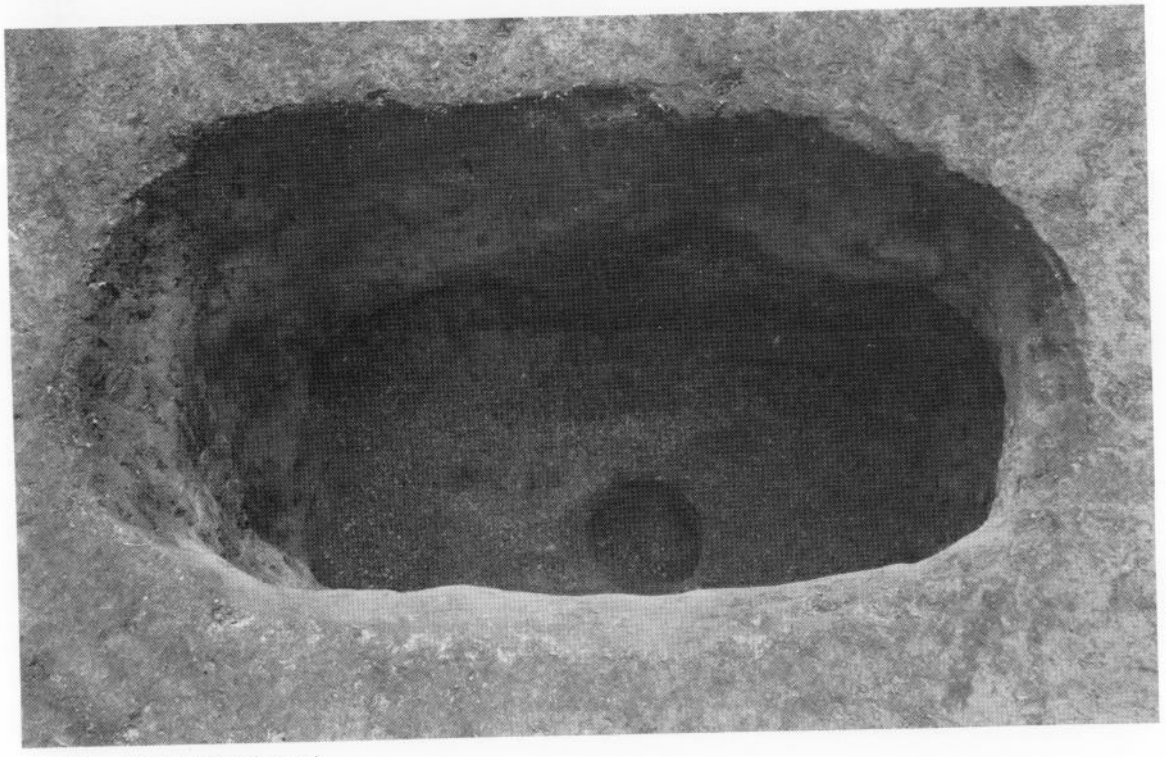


(1)　15号土壙（南から）



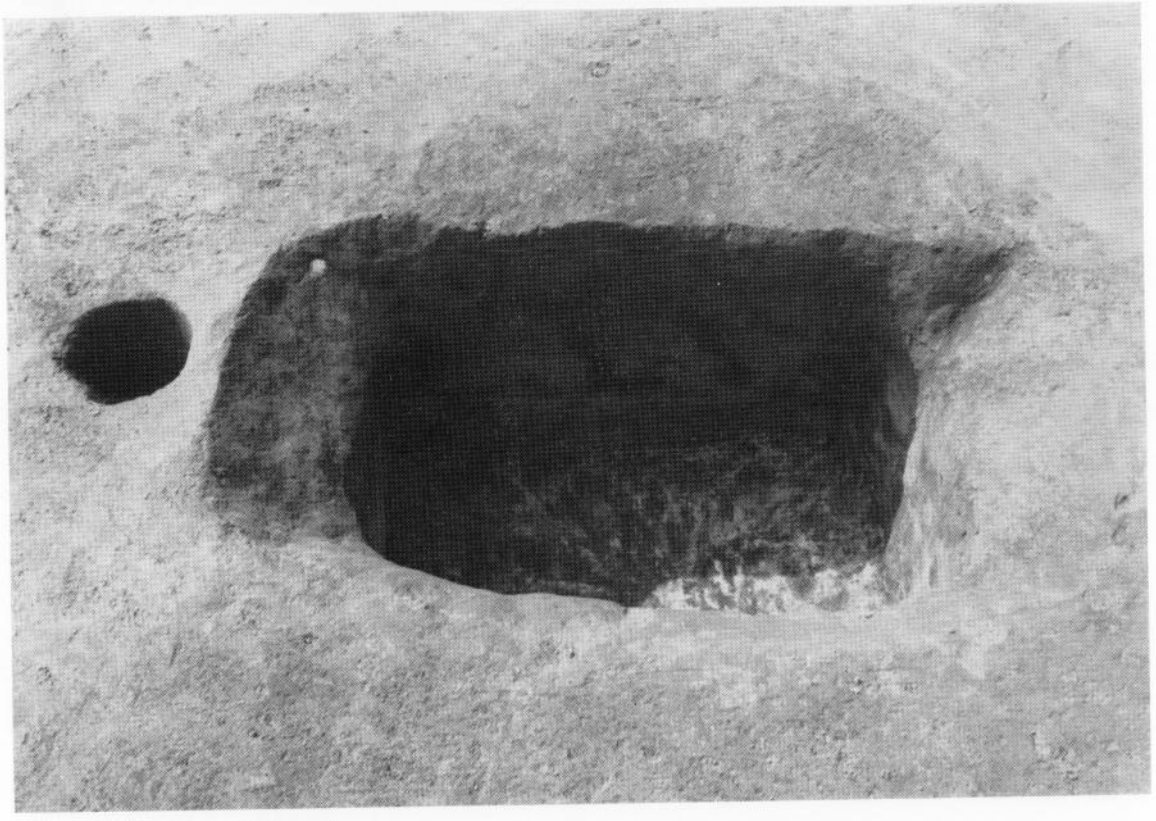
(2)　16号土壙（北から）

(1)　17号土壙（北から）

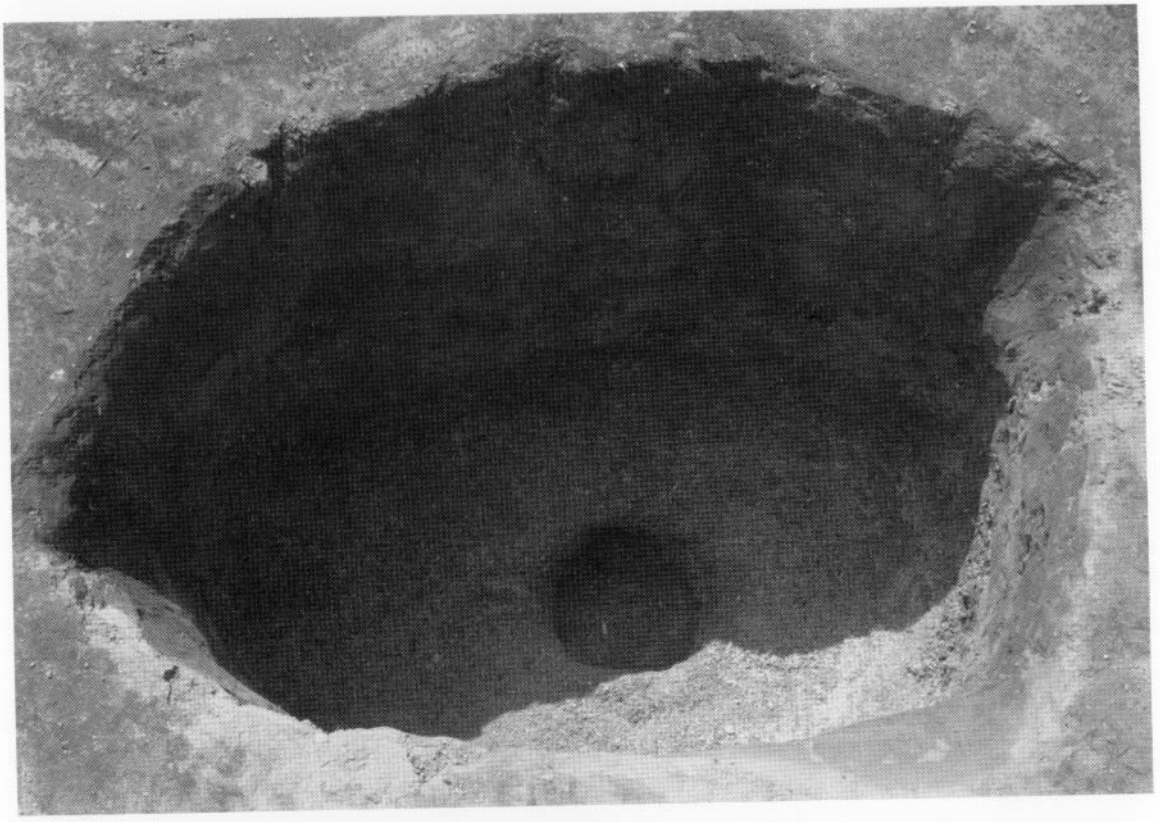


(2)　18号土壙（北から）

(1)　19号土壙（南から）

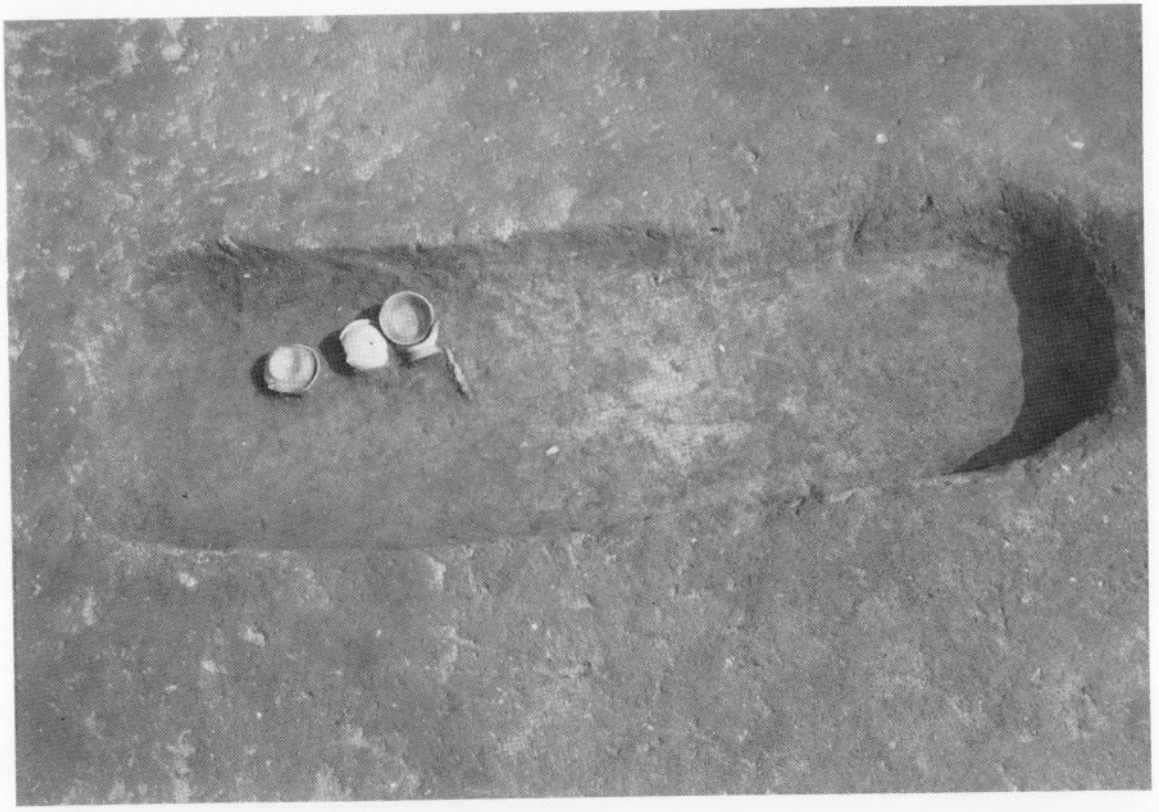


(2)　21号土壙（北東から）



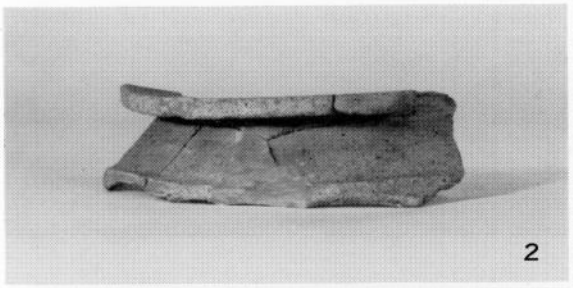
(1)　23号土壙（北から）

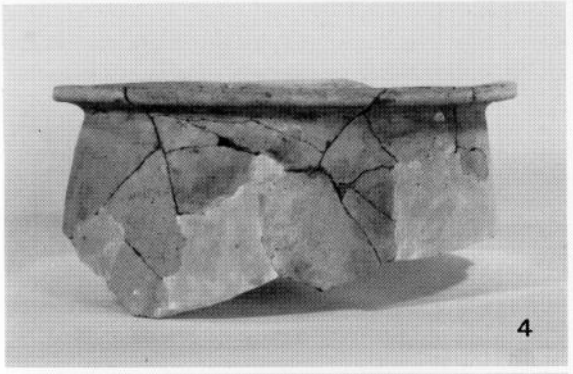
(2)　24号土壙（北から）

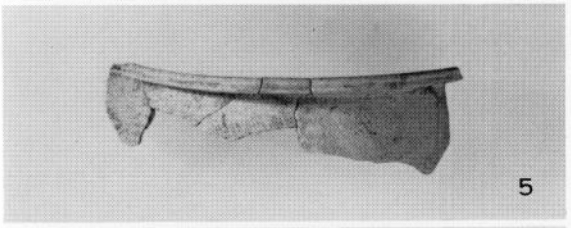


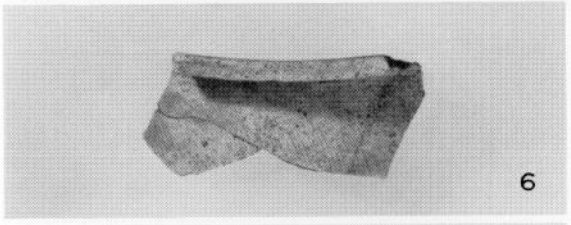
(1) 土壙墓（西から）

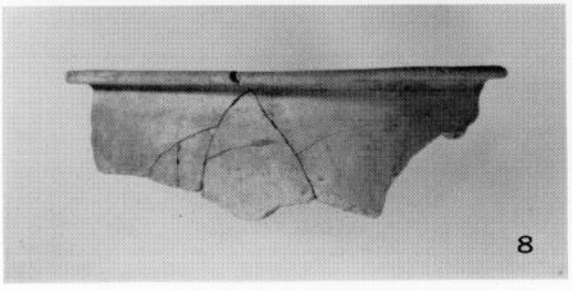
(2) 土壙墓内遺物出土状態

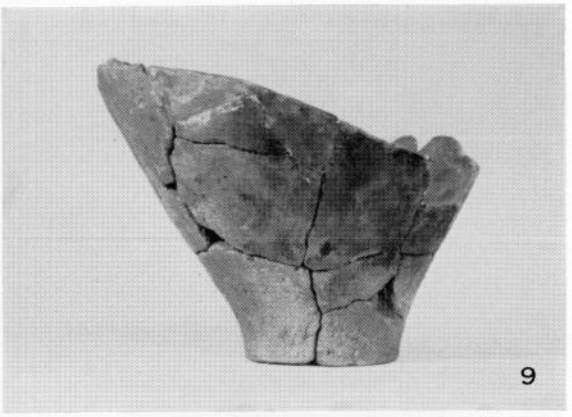


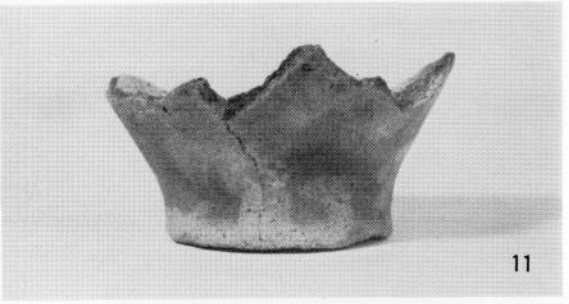


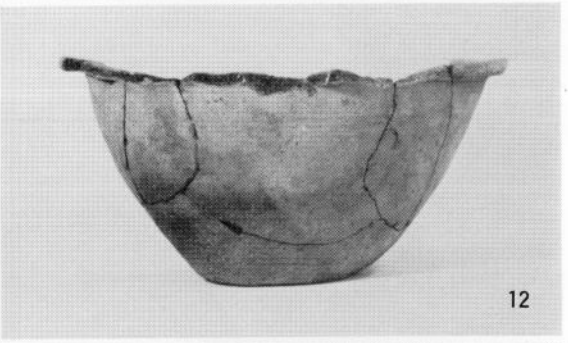




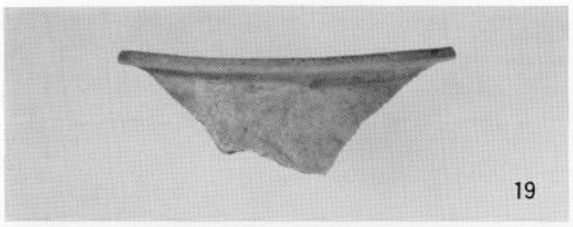


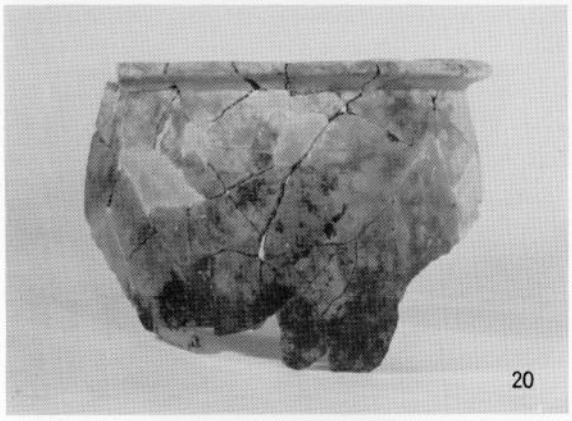


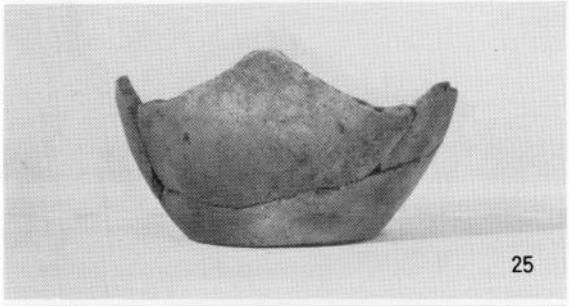


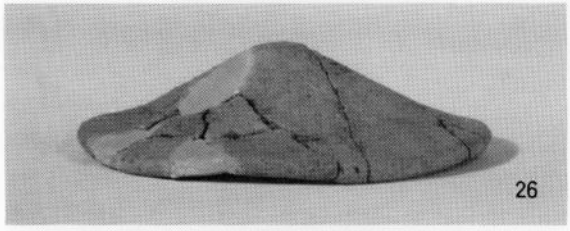


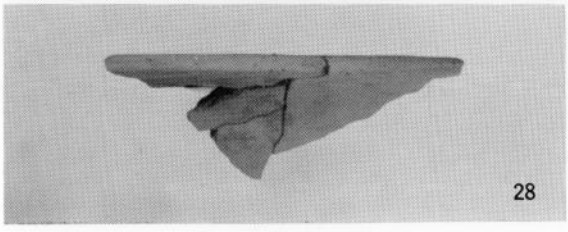
1号竪穴住居跡出土土器

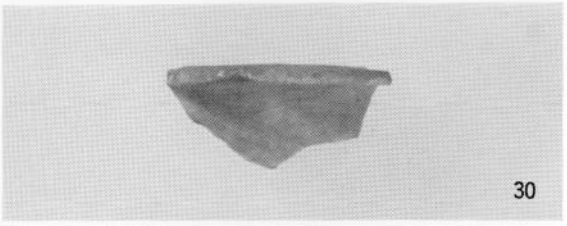


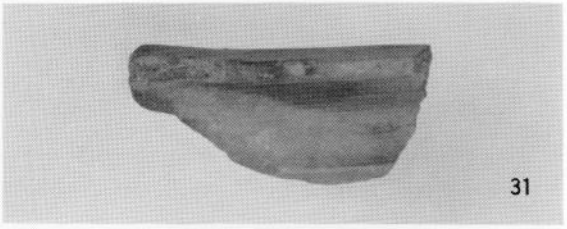


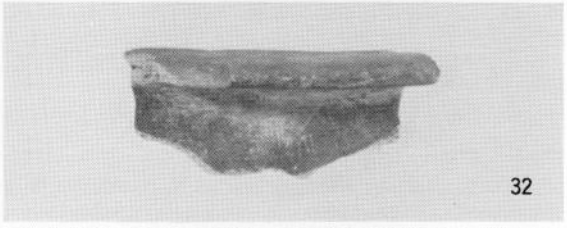




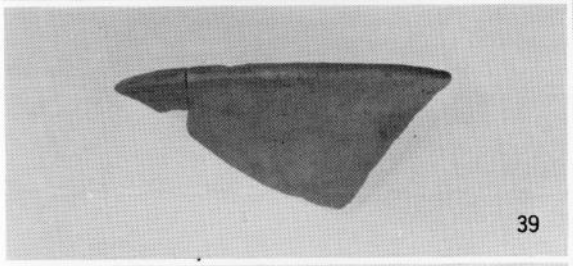


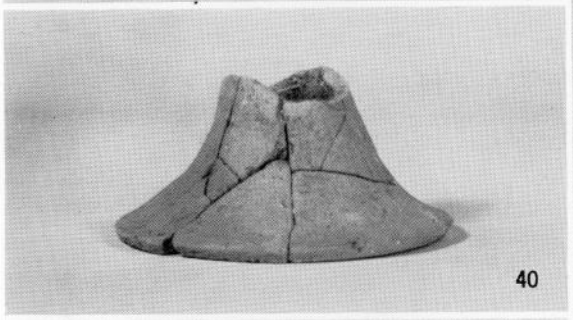


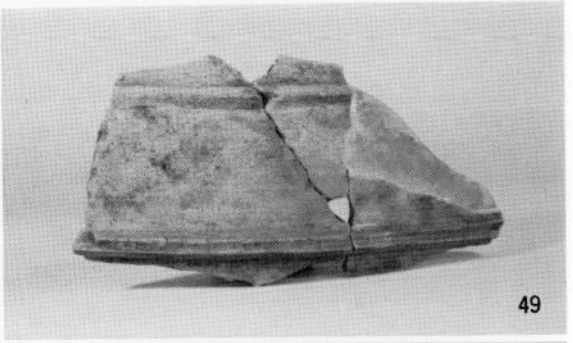


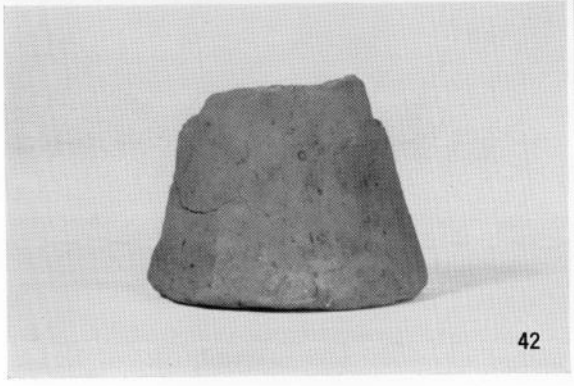


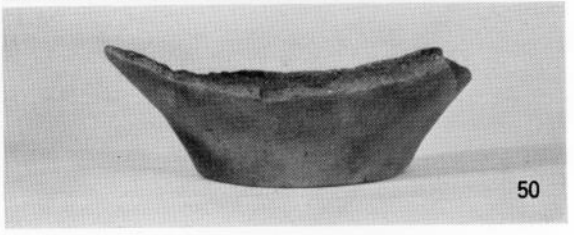
2号（19～29），3号（30～37）竪穴住居跡出土土器



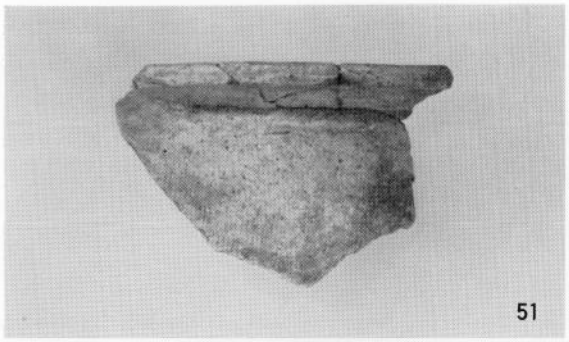


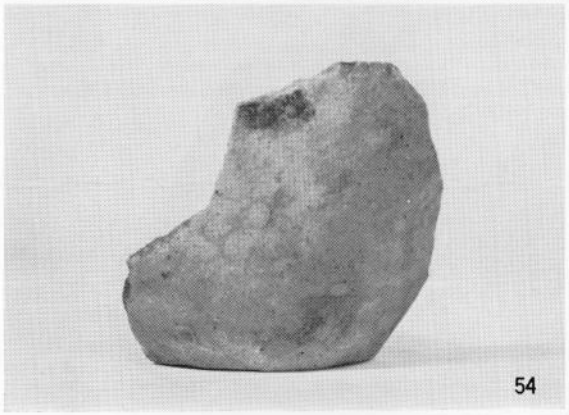


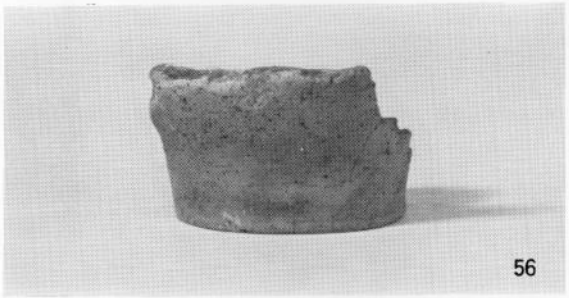


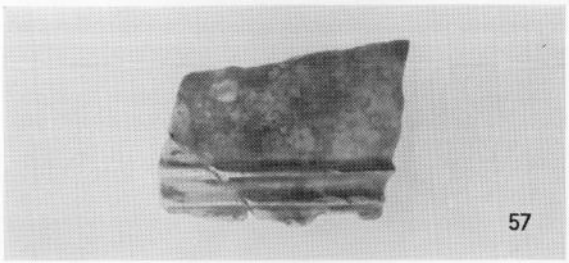


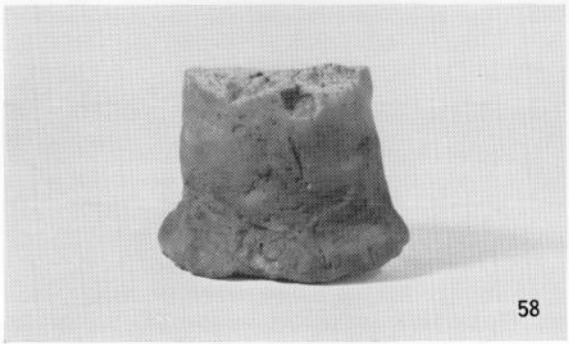
3号（38〜43），4号（44），5号（49・50）竪穴住居跡出土土器

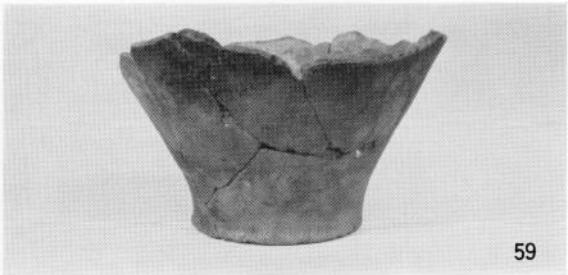


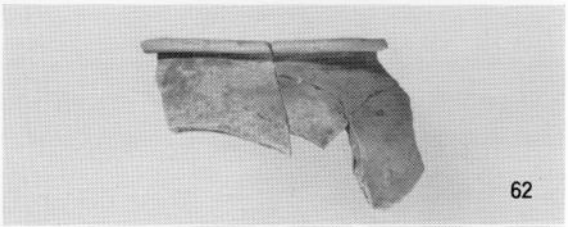


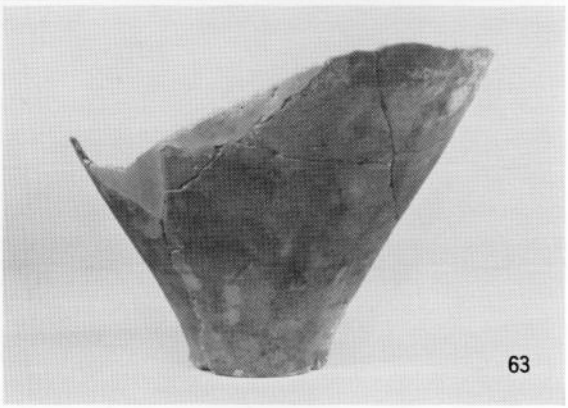




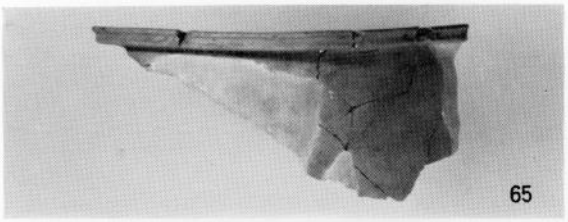


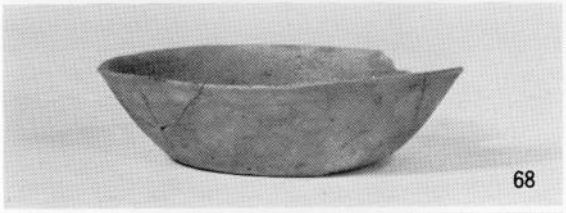


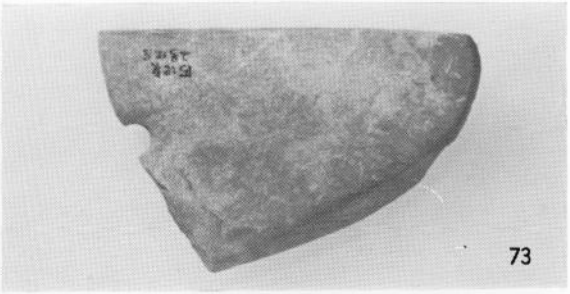


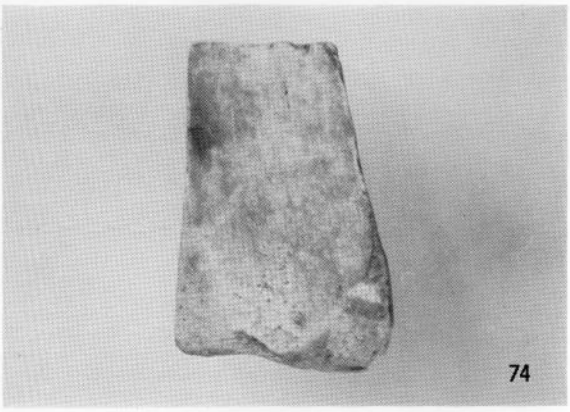


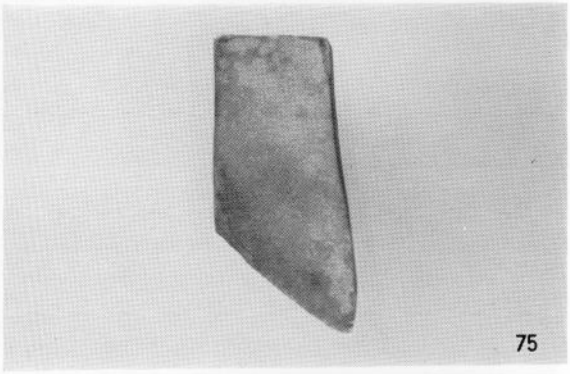
5号（51・54）竪穴住居跡，3号（56），5号（57・58）掘立柱建物，3号（59）竪穴状遺構，1号（60～63）土壙出土土器

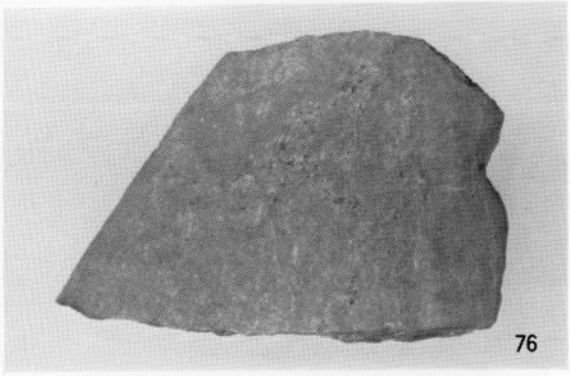


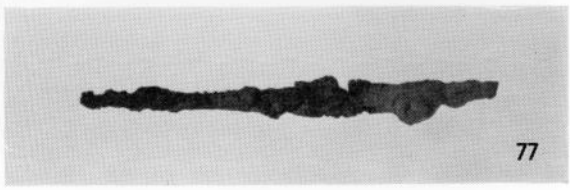












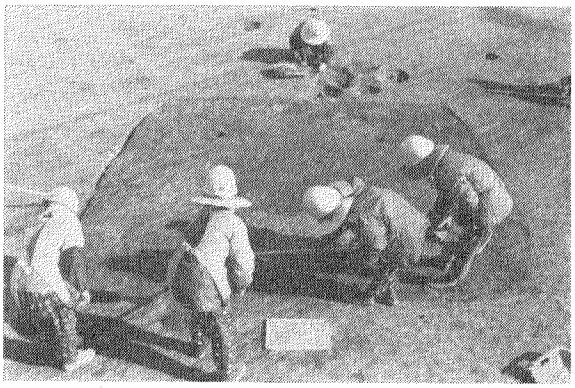
2号（65）土壙，土壙墓（67～72・77），2号（73），3号（74）4号（75），5号（76）竪穴住居跡出土土器・石器・鉄器

立野遺跡の調査

1　調査の概要

完成すると広大な筑後平野を佐賀県鳥栖市から大分県日田市にかけてほぼ東西に走ることになる横断道は，当然，幾多の遺跡・遺構を寸断することになる。試掘なしに関係遺跡・遺構の範囲を確定することは困難であり，当委員会では氾濫原よりも一段高い低台地のほぼ全てを一応調査対象地としている。無論，昭和54年度以降順次ユンボによる試掘調査を実施して本調査の必要な範囲を限定しつつあるが，立野・宮原両遺跡の所在する広濶な低台地もそれらのうちの一つである。

この台地には馬田上原甕棺墓群など数多くの遺構が存在するが，それらの大半は旧陸軍大刀洗飛行場建設に際して破壊されたものとみられていた。従って，この台地南端部をかすめる形となる横断道建設予定地についての発掘調査も，土器片は夥しく散布してはいるものの，比較的容易ではないかと予測されていた。



立野遺跡B地区の調査風景

昭和56年度は，横断道関係埋蔵文化財の現地調査が本格化した年でもあるが，この年のスタートは決して順調なものではなかった。建設予定地の多くは，用地買収は済んでいても麦・野菜などの耕作は依然続けられており，実際に発掘調査が可能な箇所は極めて限られていたからである。しかも，発掘人夫10数名を雇用して最初に着手した三井郡大刀洗町所在第10地点東半部では，予期に反してほとんど遺構はなく短期間のうちに調査は終了してしまった。

それだけに，同年5月18日から着手した甘木市所在第11地点の僅か1,700㎡ばかりの芝生畑（宮原遺跡A1区）は今後を占う試金石のごとく思われた。この畑で遺構が出なければ，他に発掘可能地がないため麦刈後つまり梅雨明けまで調査を中断しなければならないからである。それだけに土器を包含する層が意外に厚く遺構面の確認に若干手間取ったものの，黒々とした柱穴と住居跡とがユンボのバケットの下から続々と現われた時には思わず安堵したことであった。

台地の東端にあたる宮原遺跡での遺構の残り具合が予期に反して頗る良好であることが判明したため，逆にその広がりが心配となった。一方，公団側からも工事用道路確保のため側道予定地の調査を先行させて欲しいとの要望が寄せられていた。このため，宮原遺跡A1区の本調

査を実施する一方で，6月3日から遺跡の西限を確認するためのユンボによる試掘調査を併行した。

立野遺跡D地区の調査風景

この結果，後章にて詳述するように，住居や倉庫群の他に石棺もが確認された。路線内ほぼ全面，800m以上にも達する大遺跡であることが判明したため，字名に従ってこのうちの東半部を宮原遺跡，西半部を立野遺跡と呼ぶこととした。両遺跡の内部は，各々道路などにより便宜的に数地区に分割している（付図2）。

工事用道路は，宮原遺跡内では北側の側道部分を使用し，これを立野遺跡のA・B区付近で切り替え，以西は南側の側道を利用するとのことであった。さらに，側道建設工事は西側の大刀洗町側から東へと進めたいというのが公団側の意向でもあった。このため，ひとまず宮原A1区の調査を中断し，同年9月1日から立野遺跡西端のD～F区の本調査を開始した。これら3地区については全面調査をし，終了後は直ちに埋め戻して続いて調査したC区からの排土置場に充てた。C区の調査範囲は，側道工事の竣工期との絡みもあってほぼ中心杭以南とした。B区は，今回の施工範囲には含まれないとのことであったので，C区北半と同様57年度にまわすことにしていた。しかし，側道切替位置の変更，北側に用水路を設置するなど工事計画が変更されたため，急遽調査地点に加えることとなった。

農道・通行路の確保，防災，土置場など諸条件に規制されて，路線内全面を掘り返すことは不可能であり，未掘の部分が残るのもまた止むを得ない。また，工事用道路の確保を主眼としたため，これ以降に行った他地区の調査に比べて不充分な箇所もある。しかし，これらの欠は，次回以降の報告の内容によって補完されるであろう。　（石山）

2 遺構と遺物

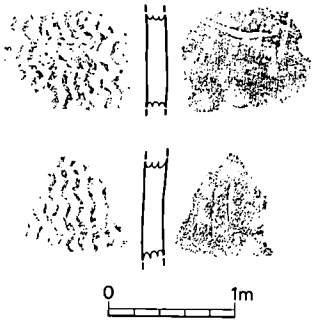
立野(タテノ)遺跡の調査範囲は路線幅50～60m，長さ約400mに及び，農道で区切られた部分におのおのA～F地区という呼称名を与えた（付図2）。以下に報告するのはB・D・E地区の集落遺構に限ったものである。A・C地区は現在調査の途上にあるが，立野遺跡の遺構の分布の中心はC地区にあり，B・D・E地区の概観とともに上記両地区についても簡単に触れておく。

現在，立野(タテノ)遺跡で検出している遺構は縄文時代晩期の土壙，弥生時代後期後半～終末期頃の竪穴住居跡と掘立柱建物，古墳時代前期の各種埋葬遺構，6世紀後半以降の竪穴住居跡・掘立柱建物・土壙，7・8世紀代の土壙墓などである。このうち，埋葬遺構は遺跡の東端（A地区）と西端（D地区）にだけ存在し，多数の集落遺構はC地区に密集し，B・D・E地区に散在している。本遺跡の中心的な存在はこの集落遺構である（付図3）。

A地区　10基以上の方形周溝墓，2基の円墳の他に箱式石棺墓，石蓋土壙墓や7世紀以降の土壙墓からなる墓地である。円墳に先だって方形周溝墓が営まれ，方形周溝墓3基が調査済だが，周溝から豊富な土器が出土し，方形周溝墓は布留式の古い時期から営まれ始めたようである。

B地区　竪穴住居跡13軒，掘立柱建物12棟，ピット群を検出した。竪穴住居跡は6世紀後半～末以降のもので東半部は散漫な在り方を示している。9～11号住居跡，15～17号住居跡，15～17号住居跡におのおの切り合い関係が見られる。前者は出土土器から判断して順次建て替えたもののようで，東に移動するに従って主軸を西に振っている。後者は住居の主軸方位をほとんど変えずに南・西に移動しているが建て替えの可能性が強いものの，建て替えの判断材料に乏しい。カマドは北側に設置されるものが多く，奥が壁より外側に突出した住跡が2軒（13・17号）存在し，同様なカマドはC地区で1例検出している。カマドの支脚は小型甕を倒立させて使用するのが一般的であるが，10号住居跡では円柱状の土製支脚を使用し，同様な例がC地区で1例ある。掘立柱建物は東側に7棟，西側に5棟存在し，中央部（15～17号住居跡南）にあたかも建物が建つかのように見受けられる柱列状のものがあるが，建物はない。東側の建物（14～20号）は柱掘り方の大きいものが多く，15号建物では建物の中央にさらに1個の柱穴を有し，C地区の同様な1例とともに特異な例である。ここでは建物の主軸方位が同じもの（14・15号，18・20号）があり，それぞれ同時併存したと推測され，他の建物を含めて主軸方位の相違から4時期程度を想定している。西側は5棟（9～13号）が重複あるいは接近しており，複数の建物の同時併存は不可能で5時期を考えなければならない。竪穴住居跡と掘立柱建物の関係は両者の主軸方位の合否や柱間寸法の比較検討を経て考えねばならず，それは後述されるのでここでは省略する。

C地区　現在，竪穴住居跡56軒，掘立柱建物20棟以上，土壙9基，ピット群を検出している。



第45図 D地区出土縄文土器（1/3）

北西部分およびB地区との間の農道部分が未調査のため，遺構・遺物の出土量はおびただしいものになろう。弥生時代後期後半～終末期頃の住居跡や建物を含むものの，その主体は6世紀後半～末以降のものであり，遺構の拡がりはさらに南にのびる。住居跡の重複関係は異常な程で中央部南側では20軒程が切り合い関係にあり，最下層で6棟程度の掘立柱建物がさらに切り合っている。切り合い関係を持たない遺構はごく僅かである。

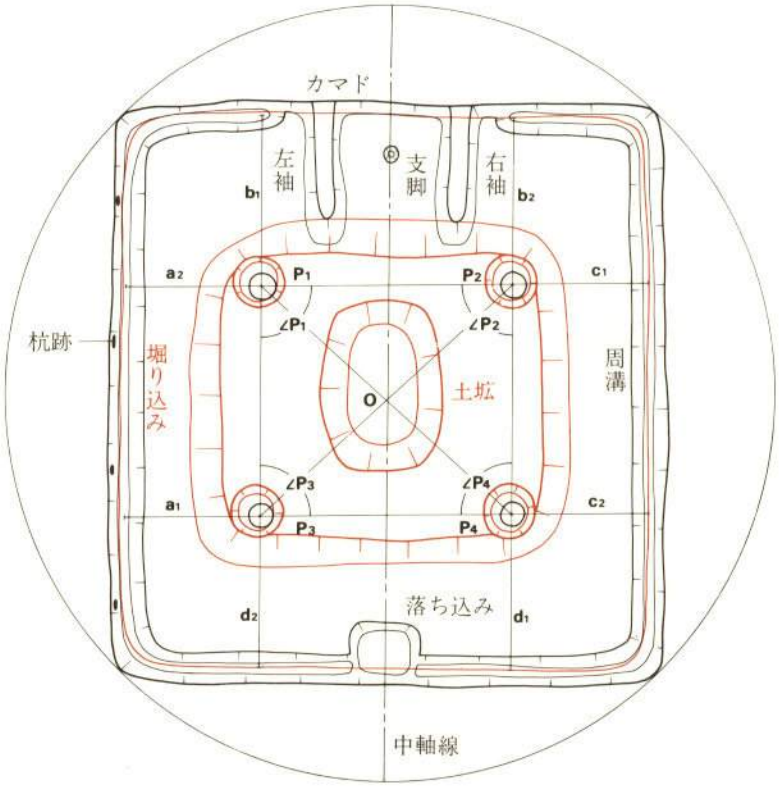
D地区 先行して構築された6基の古墳を避けながら竪穴住居や掘立柱建物が営まれている。C地区との間には空白部分があるようである。遺構相互の切り合い関係はなく，住居跡に限っていえば，その配置や出土土器から存続期間は6世紀末前後を中心に短いものであったようである。縄文土器が2点出土している。

E地区 竪穴住居跡2軒，掘立柱建物6棟を検出した。西側の1号住居跡は今回報告分の中では床面積が最大で，ⅢB期の新しい時期の須恵器坏蓋が床面から出土し，本集落の初期段階のものである。掘立柱建物は，多少疑問のある3号を徐いて他の5棟は調査区外にのびるものが多く（1・2・4・5号建物），実体が不明なものが多い。中でも5号建物は総柱に復原したが，北側の農道下に伸びており，あるいは，2棟の別々の建物になる可能性も残している。2号建物と4～6号建物の主軸はほぼ直交するようで，2号と4～6号のうちの1棟は併存する可能性が強い。なお，4～6号建物は机上で線引きを行った中での一つの案であり，問題をはらんでいることを付記しておく。

F地区 トレンチ調査の結果，何らの遺構も存在しなかったので調査対象からはずした。よって立野遺跡の西限はこのあたりかとも推測され，あるいは路線の南側に遺構が存在する可能性は，他地区の情況から十分に予想される。

以上が立野遺跡の遺構の分布面での概観である。次に，立野遺跡（宮原遺跡においても）では，6世紀代以降の竪穴住居跡の床面はすべて貼床で，床面下に土壙と溝状の掘り込みが存在する場合が多い。以下の竪穴住居跡の記述の理解の一助として，住居跡の各部の名称の説明をしておく（第46図参照）。

床面を検出した時点で住居跡に関係する遺構は，カマド，径10㎝前後の主柱痕，周溝（ない場合もある）である。時としてさらに，壁面に杭を打ち込んだ径5㎝前後，深さが10㎝あるいはそれ以上の杭跡，カマド対面に壁に接して見られる長軸0.6m，短軸0.5m程の落ち込み，同じくカマドの対辺に床面との間に住居覆土と同じ土をかんで黄灰色粘土（厚さ5～10数㎝）の不規則なひろがりがある。杭跡については出土例が乏しく，その役割りは想像の域を出ない。落ち込みについても同様で，現在は資料の蓄積をはかっている。粘土は，床面との間に覆土と



第46図　竪穴住居跡模式図と各部の名称（赤線は床面の下層遺構を示す）

同じ土をかんでいるので住居廃棄後に流入したと考えられ，住居への入り口をカマドの対面に想定するならば，入り口の構造と何らかの関係があったのではないかと推測される。しかし，入り口は遺構として明確には検出していないが，16号住居跡にみられるカマドの対辺の壁に見られる張り出し段部の存在は示唆的である（第84・110図）。

次に厚さ5㎝前後の貼床をはずした段階で床面下の埋め土がある。さらに埋め土をはずして，径30～50㎝程の主柱穴掘り方，4本の主柱穴の内側に径1～1.5m程で深さ20㎝程の不整形な土壙，4本の主柱穴の外側に掘り込みを検出する。住居によっては，土壙と掘り込みの両方があるもの，どちらかがあるものとバラエティがあるが，両方ともないものはごく稀である。土壙・掘り込みとも，その埋土は床面下の埋め土と視覚的に区別しずらいものが多く，同じ土だと思われる場合がしばしばある。それらの遺構から，祭祀に関する遺物など特別な出土品があるわけではなく，その機能や性格については重要な検討課題であり，資料の蓄積をはかっている。

最後に，本遺跡の調査において，調査期限の切迫，複数地区の同時調査，6名の調査担当職員の出入いり，先述の床面下遺構に対する共通の認識の欠除といった不幸な原因の隅然の重な

りによって，遺跡の内容を最もよく把握しているのが調査担当者ではなく，常時調査を手助けしてくれた調査補助員であるという不幸な事態におちいってしまった。よって，時として時間の切迫と連絡不徹底により，遺構の図化を忘れたり，遺物の出自の不明なものが多々残った。以下の報告は上記の限界性を持つものであり，調査担当者の一人として深く反省し，今後に備えたく思っている。

（児玉）

(1)　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版32，第48図）

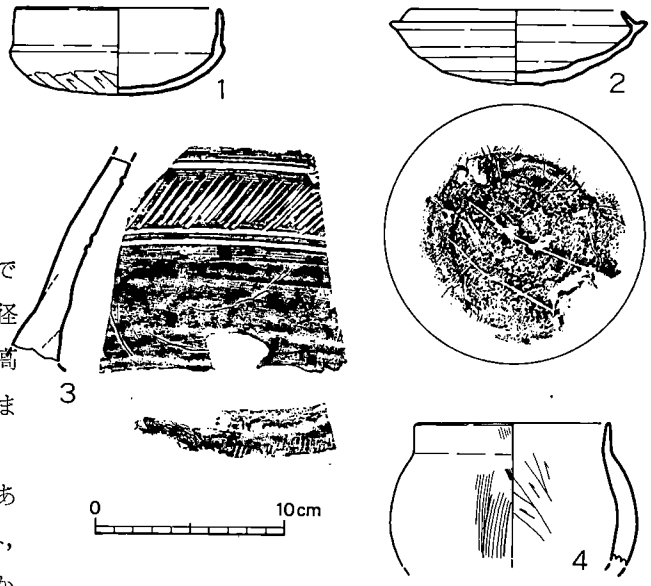
E区北西隅で検出した住居跡で，後世の溝に南側の大半を切削され，また住居内の4箇所で後世の攪乱をうけている。北壁で10cmの壁高を測るが，南側は床面が削平された残存状態の悪い住居跡である。平面形態は隅円方形を呈し，規模は長軸6.18m，短軸5.8mで床面積約35.5m²を計測する大型住居跡である。主軸の方位はN17°Wである。主柱穴は4本で，深さはほぼ均一である。主柱穴を結んだ平面形は方形を呈する。主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁は，西壁と P_1～P_3 以外は平行である。床は薄い貼床を施しており，床面下層には明瞭な遺構はなかった。周溝も存していなかった。北壁中央部が攪乱されているが，攪乱の埋土に焼土が混ざっており，攪乱された周辺にも焼土が若干認められたので，この付近にカマドが設置されていた可能性がある。この周辺部に日常雑器の椀1と完形の須恵器坏身2が床面上より出土した。

（武田光正）

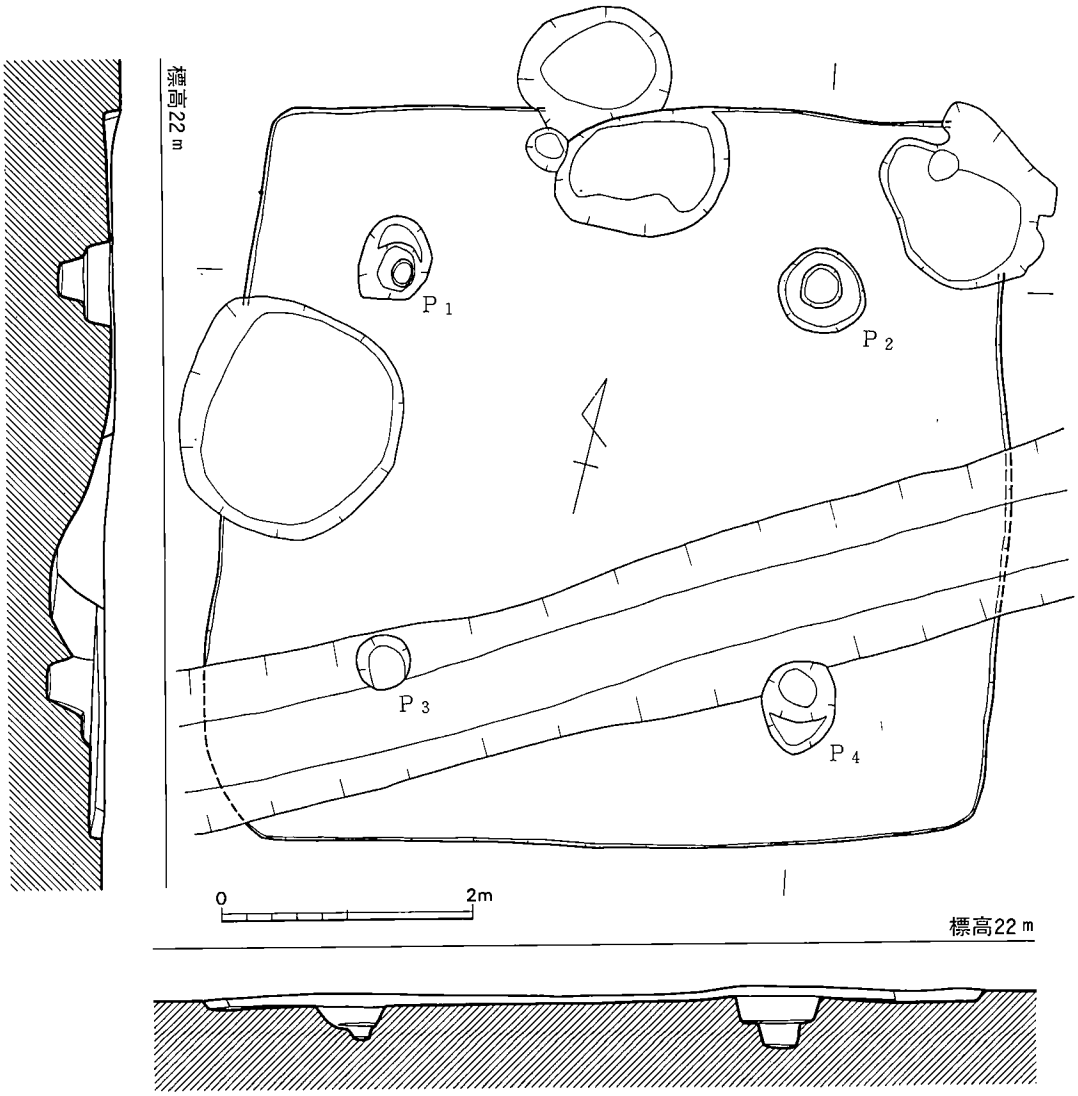
出土遺物（図版50，第47図）

攪乱と削平がはげしく，床面出土遺物は2の須恵器坏身1点である。

須恵器（2・3）　2は床面で検出した完形の坏身で，口径11.2cm，受け部径13.8cm，器高4cmを測る。外底面は逆時計まわりの回転ヘラケズリを施し，外底面には二条のヘラ記号がある。胎土に白色砂粒を多く含み，焼成良好にして堅固で，灰をか



第47図　1・2号竪穴住居跡出土土器実測図
（1/4，4は2号住居跡出土）



第48図 1号竪穴住居跡実測図（1/60）

ぶって暗灰色を呈する。3は大甕の頸部破片で体部との接合面には継ぎ目の固定をはかるための刻み目が観察される。焼成良好で，黒灰色～暗灰色を呈する。

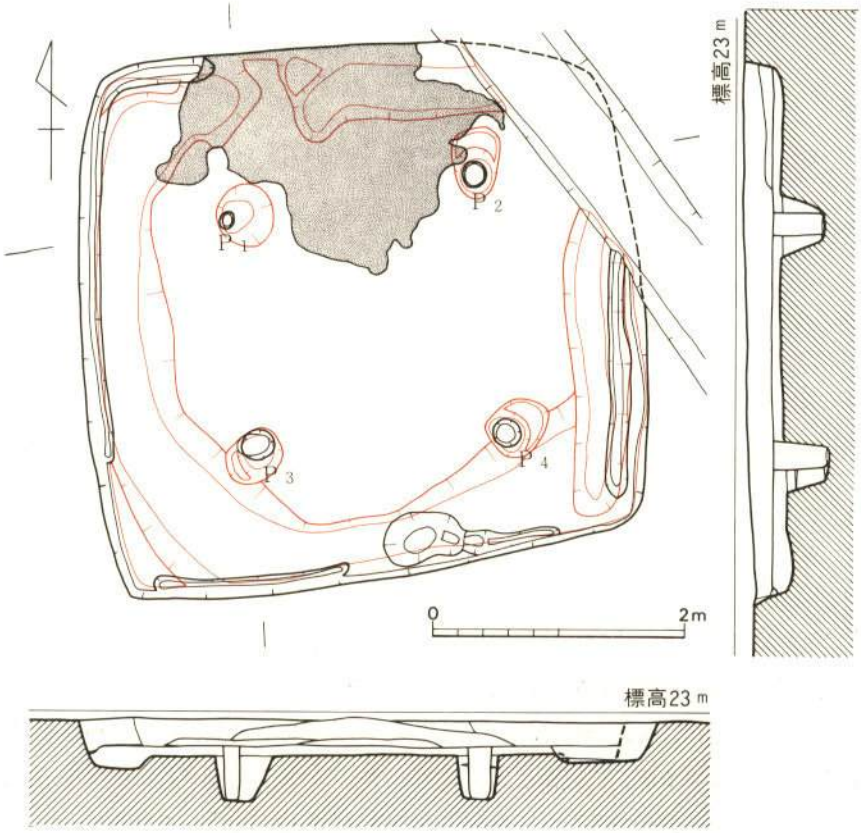
土師器（1） 口径10.7cm，器高4.6cmを測る坏状の土器で，外底面は静止ヘラケズリを行い，口縁部内外面はヨコナデ，内底面はナデ調整を行っている。精撰された胎土を用い，焼成良好で灰褐色を呈する。図示できなかったが，他に甕形土器片が出土している。

上述の土器のうち，床面出土の坏身は口縁部の傾斜角度等の特徴から，ⅢB期の新しい様相

を呈しており，６Ｃ後半の新しい時期のものと考えられ，本住居跡の所属時期は６Ｃ後半の新しい時期に求められる。 （児玉）

２号竪穴住居跡（図版33，第49図）

Ｅ区東端で検出し，北東隅を後世の溝で切られている住居跡である。平面形態は隅円方形を呈し，規模は長軸4.47m，短軸4.23mで床面積16.5㎡を計測する。主軸の方位はＮ11°Ｗで，壁高は10～22cmを測る。主柱穴は４本で，深さはほぼ均一である。主柱穴を結んだ平面形は，P_2～P_4間がやや広い台形状を呈する。主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁は，西壁とP_1～P_3のみが平行である。北壁中央部から主柱穴P_1とP_2の間にかけて灰白色粘土が堆積しており，最も高い所で20cmを測る。北壁付近には焼土が若干混じっており，他の住居跡から類推してこの付近にカマドが設置されていた可能性がある。南壁中央部に落ち込みを検出した。規模は長軸65cm，短軸35cmで上端面積0.2㎡を測り，平面形態は楕円形を呈する。出土遺物は全くなく，性格は不明である。同様の例として13・14号住居跡がある。周溝は繋がってはいない



第49図 ２号竪穴住居跡実測図（1/60）

が，推定カマド跡と落ち込みを除いて検出した。床は厚さ５～８㎝の堅固な貼床で，床面下層より掘り込みを検出した。掘り込みは最大幅95㎝から35㎝で壁に沿って廻っており，深さは一定でなく５～10㎝である。　（武田）

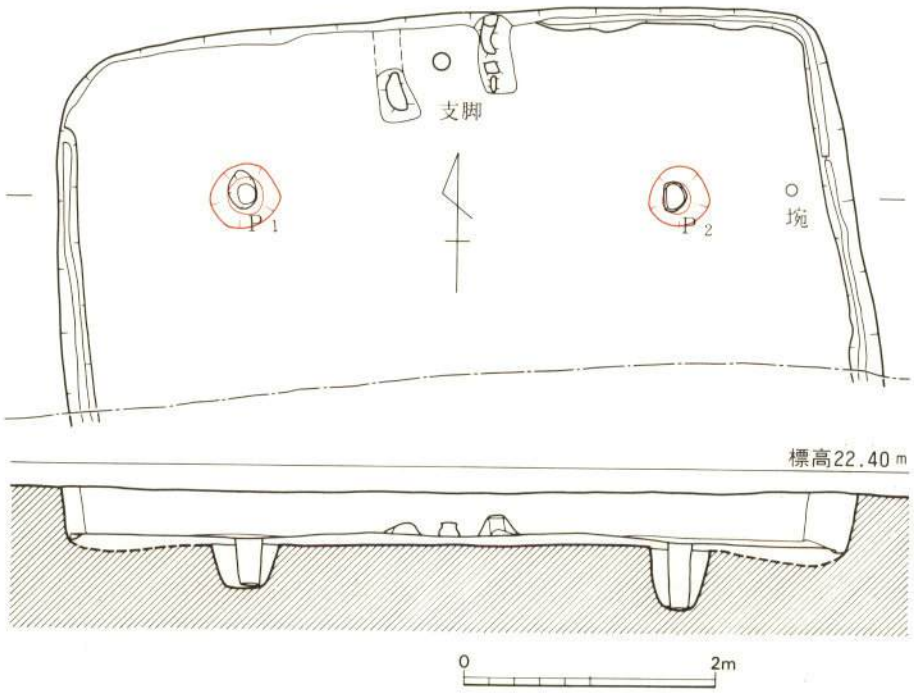
出土遺物（第47図）

覆土や貼床下層の埋め土から少量の土器が出土した。床面出土はなく，小破片資料のため図示できるものは１点であるが確証はない。

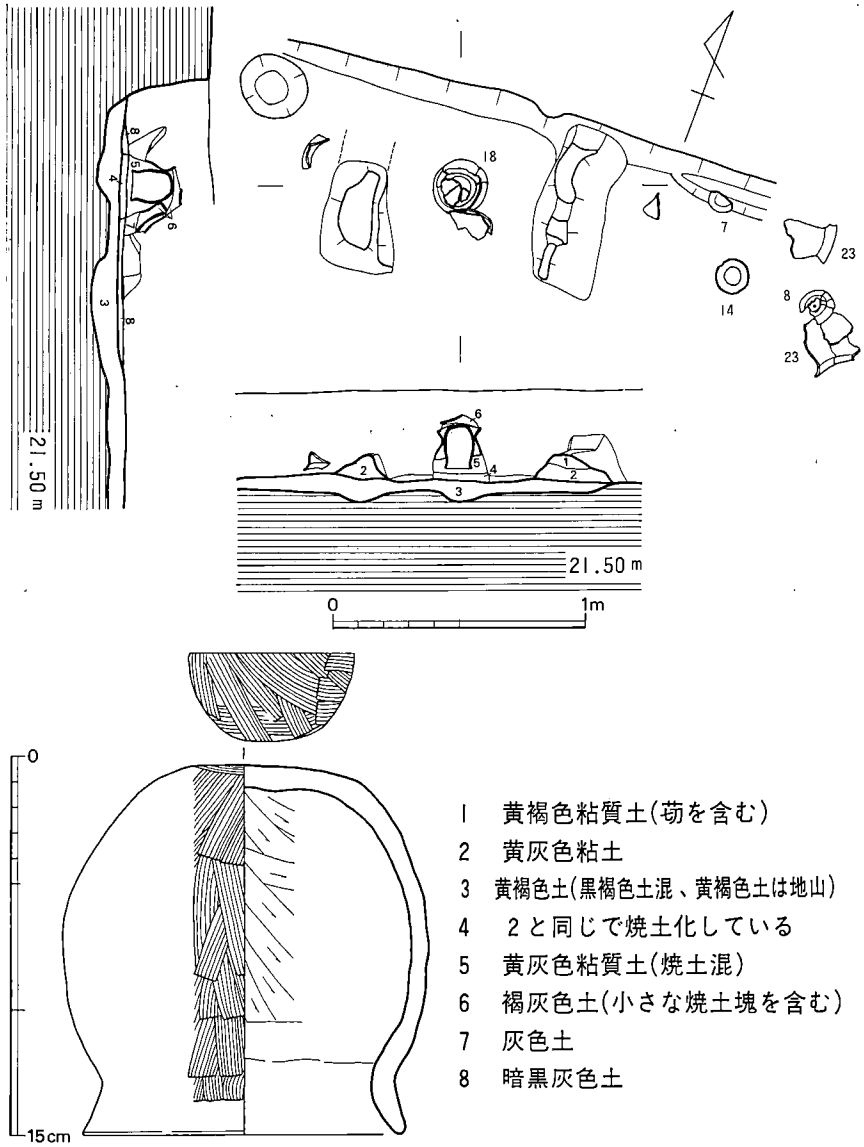
土師器（４）　口径10㎝に復原される小型の甕である。口縁部はほぼ直立し，胴部は球状に近い形態を示すものと考えられる。胴部の器壁は厚く，頸部から口縁部に向かって厚味を減ずる。胎土は砂粒を多く含み，焼成良好で暗茶褐色を呈する。

本住居跡は時期判断可能な資料に乏しいが，周辺の住居跡の状況から，６世紀末前後のものと推定するが確証はない。　（児玉）

３号竪穴住居跡（図版34，第50・51図）



第50図　３号竪穴住居跡実測図（1/60）



第51図 3号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図 (1/30, 1/3)

D区中央部で検出し，約⅔程が用地外に広がる住居跡であるが北辺6.1mを測り大型住居と推定される。壁高は最も高い所で40cmを測る。主柱穴は4本で，その内2本を検出した。P_1は38.5cm P_2は51.5cmの深さで若干の違いがある。用溝の深さは5cmを測る。床は厚さ5～8cmの貼床で，黒褐色土と黄褐色土（地山）がブロック状に混じり合って堅固に造られている。床面下層より明瞭な遺構は検出されなかった。

遺物の出土状況は，カマド右袖付近から煮沸用土器と考えられる甕と，土師器の埦と高坏，

須恵器の坏蓋が出土した。貼床内からもミニチュアの埦が出土した。

カマド（図版34・50，第51図）　北壁中央部にカマドが設置されている。左袖は大半が崩れてはいるが，支脚は原位置を保っている。両袖とも芻を含む黄灰色粘土を用いて築造している。支脚は「く」字状に外反する口縁部がつく小型甕と胴部より半截した甕の上半部を組み合わせて使用している。先ず火床面に倒立した甕を粘土で固定し，半截した甕を上から被せて狭間にも粘土を挿入して固定させている。倒立した甕底部も粘土で覆っており支脚全体の高さは22cmに達する。他の住居跡の支脚が小型甕を倒立させて使用しているのに比較して，本住居跡の支脚は堅固に造りあげている。

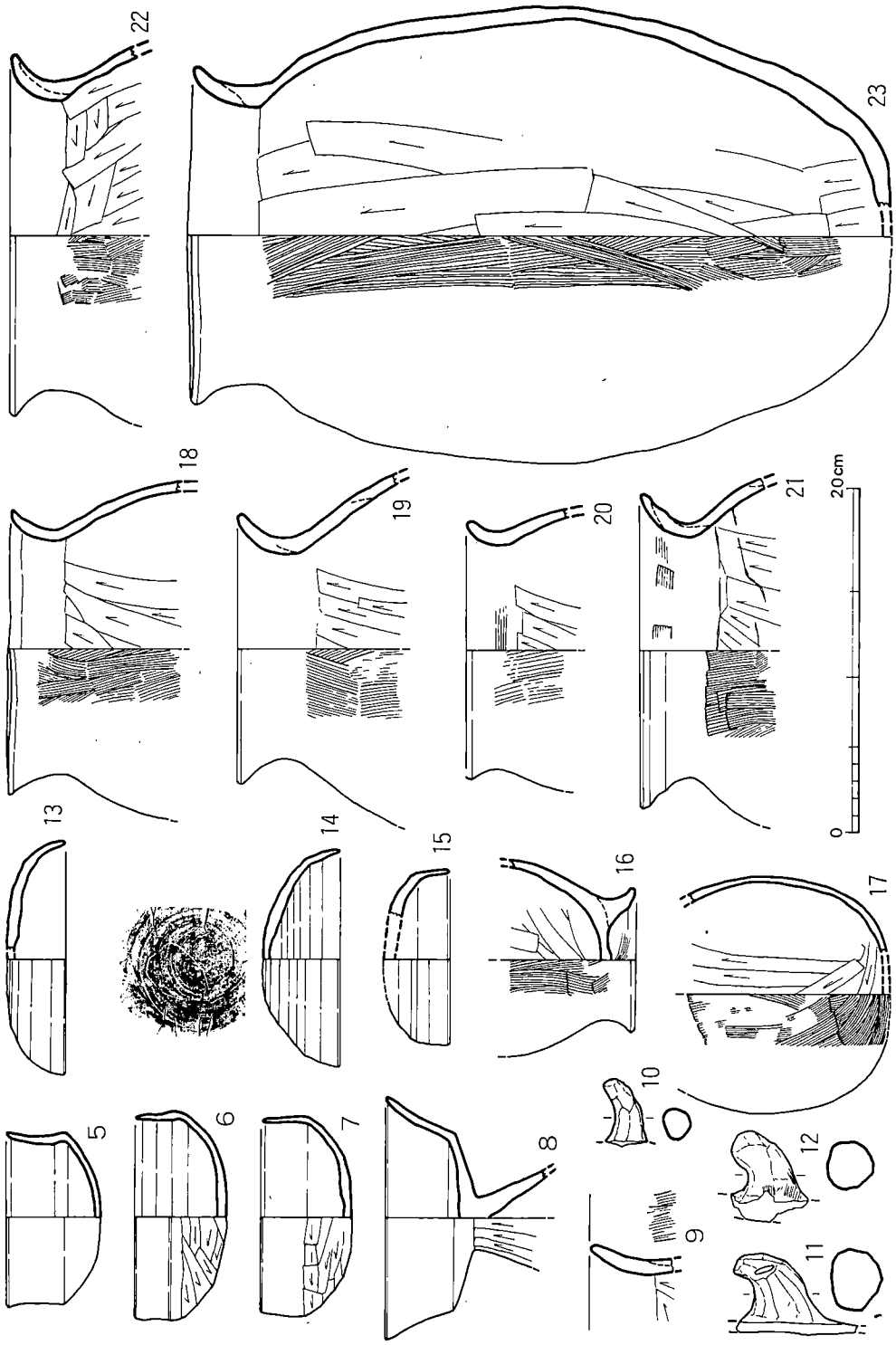
小型甕は「く」字状にやや外反する口縁部がつく器高 14.6cm，口径 12.5cm の完形土器である。底部外面は丁寧な刷毛を施し，その後胴部外面も縦•斜方向の刷毛目調整を行なっている。胴部内面は縦方向のヘラ削りを施し，頸部付近の内面はヘラナデを行なっている。口縁部内外はヨコナデで仕上げている。底部内面に指頭痕が僅かに残っている。色調はやや赤味を帯びた茶灰色で，胎土は微砂を含み焼成は普通である。　（武田）

出土遺物（図版50・51・63，第51・52図）

カマド右側床面と覆土中からかなり豊富な量の土器が出土している。土師器が9割以上を占め，その主体は甕形土器である。須恵器は小型品ばかりで蓋3点，坏身小片2点で，完形品の14はカマド右側床面からの出土である。土師器の器種は割と豊富で，坏・高坏・甑・甕（脚台付を含）がある。5・6・7・8・16・23は床面で検出し，18はカマドの支脚にセットされた状態で出土した。他は覆土中からの出土である。そのほかに貼床内から手捏ね土器が1点出土している。

須恵器（13～15）　14は完形品，他は反転復原図である。13・14は坏蓋で天井部外面は時計まわりの回転ヘラケズリを行う。天井内面はナデ，他は回転ナデを施す。法量は13が復原口径13.8cm，器高3.6cm，14が口径13cm，器高4.5cmである。15は復原口径10.5cm，器高4cmを測る蓋で，現存部は回転ナデの調整を施している。図示できなかったが，他に坏身小片2個体分が覆土中から出土している。

土師器（52図-5～12・16～23，第図-1）　5・6・7は極めて作りの良い土器で，器面に若干の砂粒が目につくものの精撰された胎土を用い，器肉を薄く仕上げ，硬質堅緻で焼きしまっている。外底面は静止ヘラケズリを行い，他はナデ，ヨコナデ調整を施す。5・6は完形品で前者は口径10cm，器高5.5cm，後者は11.5cm，5.4cmを測る。6は全体の⅓程欠損するが，口径11cm，器高5.3cmを測る。ともに淡茶灰色を基調とするが，5はやや赤味をおびて光沢を放っており，内底面は漆状のものかと思われる膜面が残っている。8は口径14cm，現存高10.5cmを測る高坏で，胎土，焼成，色調は5～7に準ずる。脚柱部外面は縦位ヘラケズリを行い，内面は



第52図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

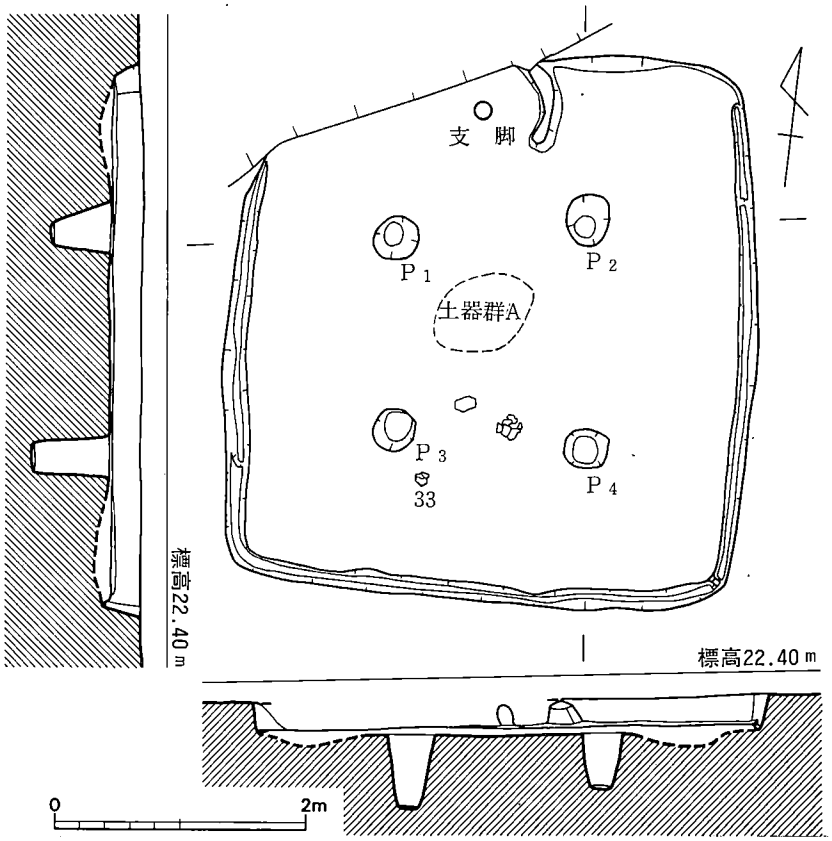
ヘラを回転させて横位にヘラケズリを行う。他の部分はナデ・ヨコナデ調整である。坏部外底面には一条のヘラ記号状のものを付している。他に脚部上半の破片が覆土中から出土している。甑の口縁部は9の1個体分しか出土していないが，把手は4個（図示したのは3個）出土し，おのおの別個体のものである。これらは必ずしも甑の把手とはいい難く，10は小型で細長く，甑とは異なった別の土器につくものであろう。またこれらは覆土中からの出土であり，本住居跡に直接に伴う甑は存しない。16・17はカマドの支脚として使われた甕で，二次加熱を受け，ススが付着している。他は支脚転用小型甕の法量から推測して，器高は15cmを大きく超えることはなかろう。内面は荒いヘラケズリを行い，外面は丁寧な刷毛目調整である。出土土器の中で量的に主流を占める甕形土器は，覆土中のものを含めると15個体程の口縁部や体部破片が出土している。長胴形の甕がほとんどで口縁部を外側にかるく折り曲げ，胴部外面は縦位刷毛目調整を，内面は底部から頸部に向かってダイナミックなヘラケズリを行うのが特徴である。18は支脚にセットされた状態で出土し，カマドにかける土器底部を受けて安定させる用をなしたものである。支脚にセットし固定するために灰色粘土を用いており，それが口縁部に付着している。20は小片よりの反転復原図であるが，二次加熱を受け，支脚をセットする時に使用される灰色粘土が口縁部内外面に付着している。23は口径19.5cm，器高41cmに復原される大型の長胴甕である。口縁部以下はススがうすく付着している。第87図—1は貼床内から出土した手捏ね土器である。口径2.1cm，器高2cmを測る。外面は指圧痕が残り，内面はヨコナデされる。胎土に金雲母片を含み，焼成良好でくすんだ茶褐色を呈する。

上述の床面出土の土器のうち14の坏蓋はⅢB期の新しい時期におくことができ，本住居跡の時期は6世紀後半の新しい頃と考えられる。（児玉）

4号竪穴住居跡（図版35，第53・54図）

3号住居跡の北々東5mで検出した。北西隅からカマド中央付近まで後世の溝に切られている。平面形態は隅円方形になるであろう。規模は長軸4.22m，短軸4.18m，床面積約15m²を計測する。主軸方位はN8°Wである。壁高は最も高い所で25cmである。主柱穴は4本で，深さは46～61cmと深い。主柱穴を結んだ平面形はP_2～P_4間が広い台形状を呈する。主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁はほぼ平行である。周溝は北東部隅から後世の溝に切られた北西部まで廻っており，深さは5cm程である。床は貼床を施しており，床面下層より土壙と不明瞭な掘り込みを検出した。土壙は主柱穴間内やや西側に位置していた。

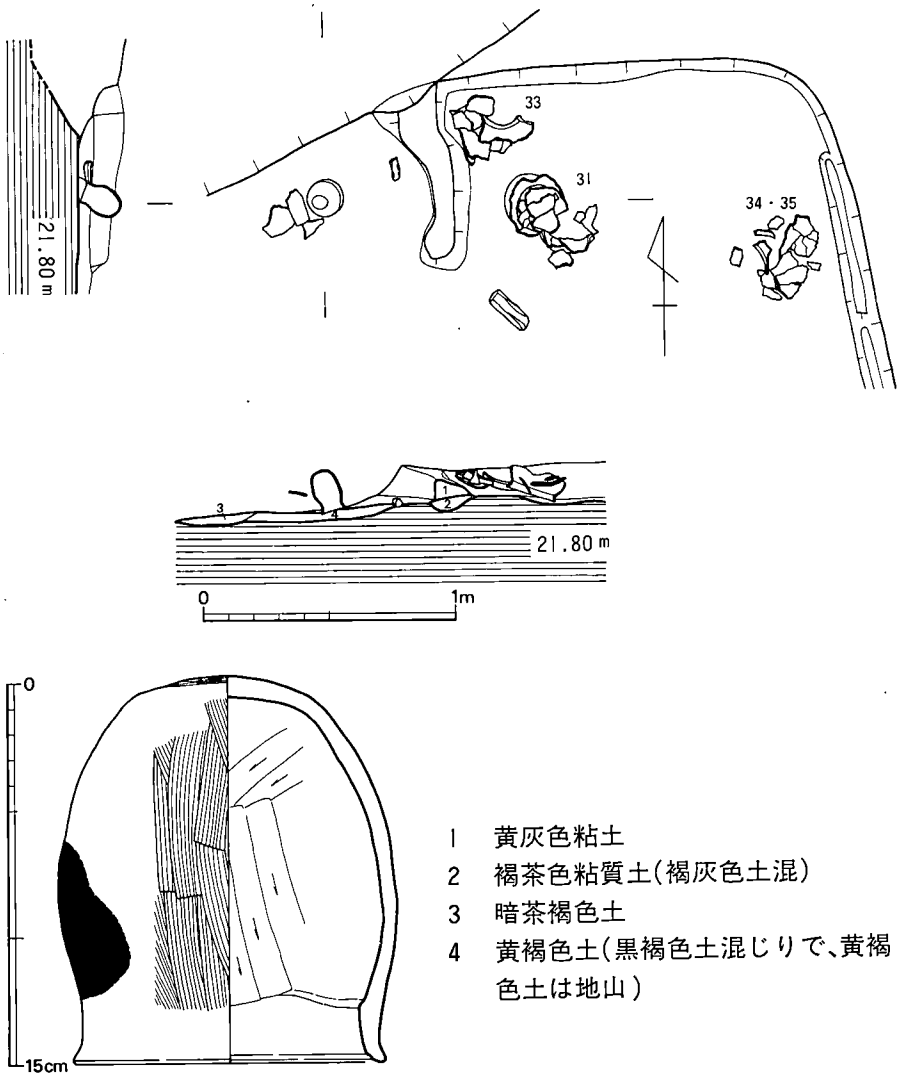
遺物の出土状況は，カマド周辺の床面から多量に出土した。細かい破片が多く器形も分らないものが多かったが，煮沸土器の大型甕33と35が右袖付近より，甑38がカマド近くの土器溜りから出土した。



第53図 4号竪穴住居跡実測図（1/60）

カマド（図版51，第54図） カマドは北壁中央部に設置されており，左袖部と煙出し部は後世の溝で壊されている。支脚は小型甕を倒立させて用い火床面に粘土で固定させている。北東よりの力を受けやや傾いてはいるが，原位置はほとんど変らない。築造過程は，先ず火床面と袖部の下を掘り窪めて，褐茶色粘質土・暗茶褐色土と黒褐色土混じりの黄褐色土（地山）の埋土で成形して袖部を黄灰色粘土を用いて積み上げている。

支脚に使用されている小型の甕は，口縁部がやや外反している器高15.2cm，口径12.3cmの完形土器である。頸部より縦方向の刷毛目調整を施した後に底部外面を不規則な刷毛目調整を行なっている。胴部内面は縦・斜方向のヘラ削りで，底部に若干指頭痕が残っている。口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し，胎土は微砂を含み，焼成は普通である。胴部下半に煮溢れが認められ，その上に煤が付着している。（武田）



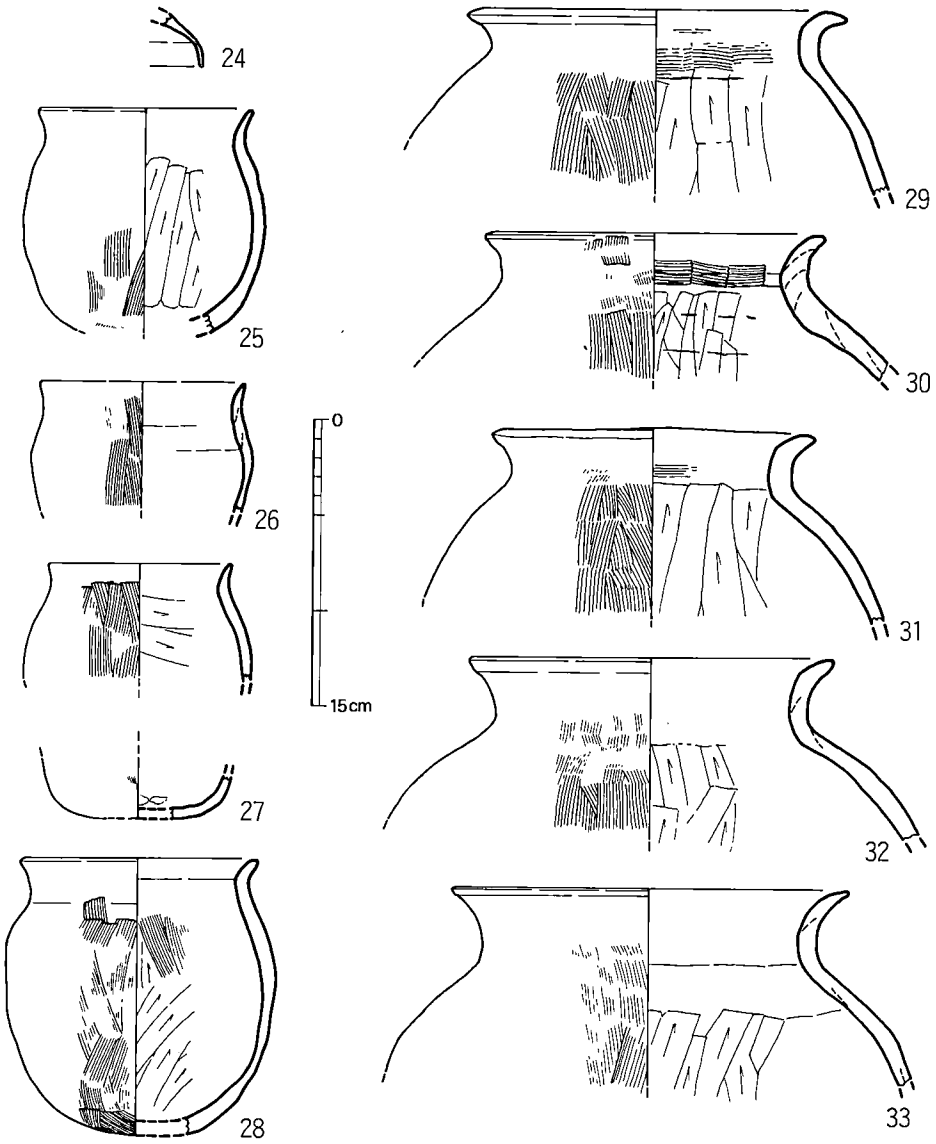
第54図 4号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図 (1/30, 1/3)

出土遺物 (図版51・52, 第54～56図)

カマド周辺と覆土中から多量の土器が出土し，整理箱にして4箱の量である。そのうち須恵器は6点で他はすべて土師器である。須恵器は坏・甕，土師器は大・小の甕と甑であり，土師器の破片中にも他の器種は見あたらない。なお3・33～35・38が床面出土である。

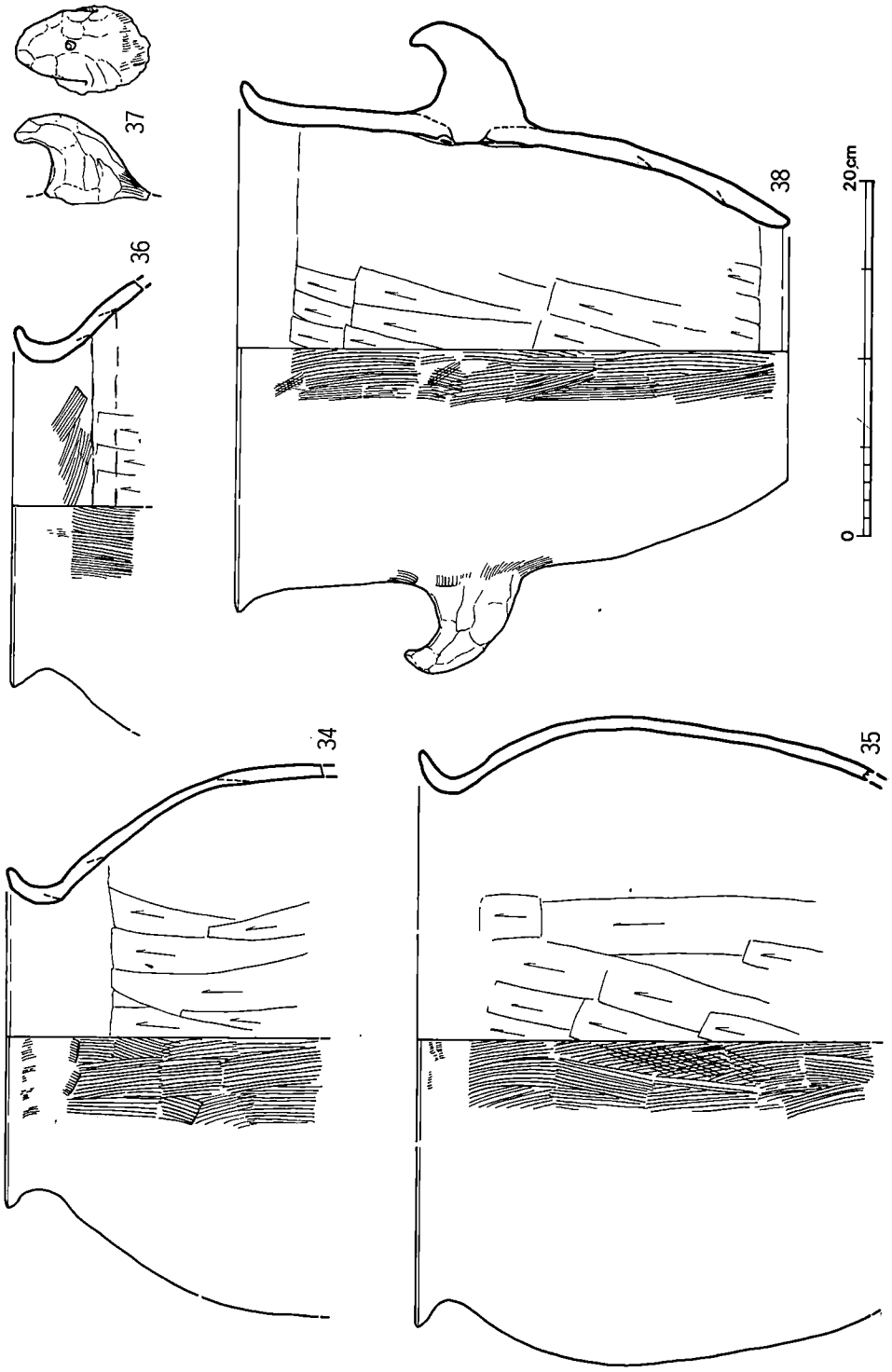
須恵器 (24)　覆土中からの出土である。極小片のため，径が出せず傾きも不正確である。現存部の内外面は回転ナデの調整で，ヘラケズりの範囲は狭いようである。Ⅳ期に属する。

土師器 (25～38)　甕は25～28の小型品と29～39の大型品にわかれる。ただし，35は⅓～¼程



第55図 4号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)

度の残りの反転推定図であり，あるいは把手がついて土鍋になる可能性がある。25～28は口径11～12cm，器高12～15cmを測る甕で，カマドの支脚に用いられた後に廃棄されたものである。ともに二次加熱のために器壁が脆くなっている。器面の調整等は，外面は縦位刷毛目調整，内面は縦位ヘラケズリを行って共通しているが，26・27は内面が風化しており，28は内面上半部に縦位刷毛目調整を施している。これらの土器は胎土に砂粒を多く含み，焼成は良好であったようだが，二次加熱のため変色している。29～34・36は口径20cm前後の甕である。口縁部は外



第56図　4号竪穴住居跡出土土器実測図②（1/4）

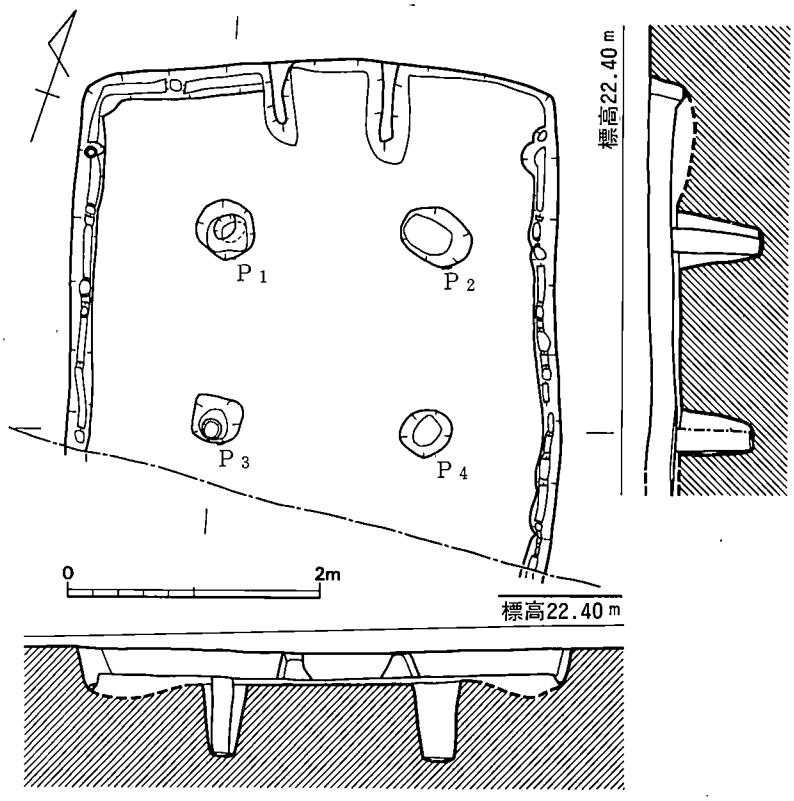
傾する頸部からさらに一度外側に折り曲げられ、頸部はすぼまって肩が張っており，3号住居跡出土の長胴甕23と各部の形態に相違が見られる。しかし，体部外面は縦位刷毛目調整を，内面は縦位ヘラケズリを上方に向かって行う点は共通している。本住居跡出土の甕は体部内面や断面で粘土の継ぎ目を視認可能なものが多く，30については，粘土の細かな継ぎ目が認められる。また頸部内面に横位あるいは斜位刷毛目を残すものがある。33は口縁部から頸部直下の内面に煮こぼれた黒い異物が膜状に付着している。これらの土器は総じて胎土が荒くて砂粒が目だち，焼成は割と良好である。色調はくすんだ淡茶灰色を基調とする。35は口縁部がごく一部しか残っておらず，頸部の曲率から推定復原したもので，口径，傾きなどは不正確であるが，上述の甕とは異なってかなり口径の広い甕で土鍋の可能性がある。土器のつくりは上記の甕と変わるところはない。38はカマド近くの床面直上から出土した甑で一方の把手を欠失するだけでほぼ完形品である口径30cm，器高31.5cmである。体部は直線的で、口縁部は外側に軽く折り曲げ、底部付近は内弯する。把手は体部中位よりやや上位に差し込むようにとりつけられている状態が視認される。体部内面は細かなヘラケズリを施し，外面も刷毛目がきれいに残っている。二時的な加熱で部分的に赤変し，体部下半には黒斑が認められる。

上述の出土土器のうち，床面出土の甕形土器は3号住居跡出土の甕と異なった形状を示すが38の甑は口縁部が外反して体部は全体にやや丸味を帯びており，本住居跡は6C後半〜末頃の所産と考えられる。覆土中から出土した須恵器の坏蓋24は本住居跡の下限を示すものであり，上記の推定年代に大きなへだたりはないだろう。 （児玉）

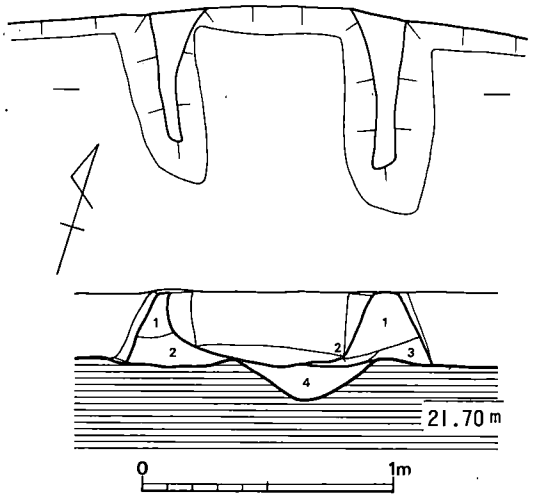
5号竪穴住居跡（図版36，第57・58図）

3号住居跡より東へ4.6m，6号住居跡に隣接して検出した住居跡である。約1/5が用地外となり調査出来なかった。平面形態は隅円方形と考えられ，規模は東西辺4.85mを計測する。主軸の方位はN17°Wを指し，壁高は20cmである。主柱穴は4本で，深さはP_2が47cmを測るがその他は62〜70cmと深い。主柱穴を結んだ平面形はほぼ正方形を呈し，それに対応する壁はほぼ平行である。周溝は深さ6〜8cm程で，東側は北東隅より南側端まで，西側はカマド付近より南側端まで検出した。周溝内に杭状の窪みを検出したが，20〜50cm間隔で不規則に配列しており，深さは床面より8〜12cmを測る。床は薄い貼床で，床面下層より土壙を検出した。掘り込みは不明瞭であった。

カマド（図版36，第58図） 北壁中央部に設置されており，天井部と支脚は遺存していない。火床面は正方形を呈する。築造過程は、火床面と右袖の一部に掘り込みが行なわれ暗黒灰褐色土の埋土で成形し，両袖を積み上げていた。 （武田）

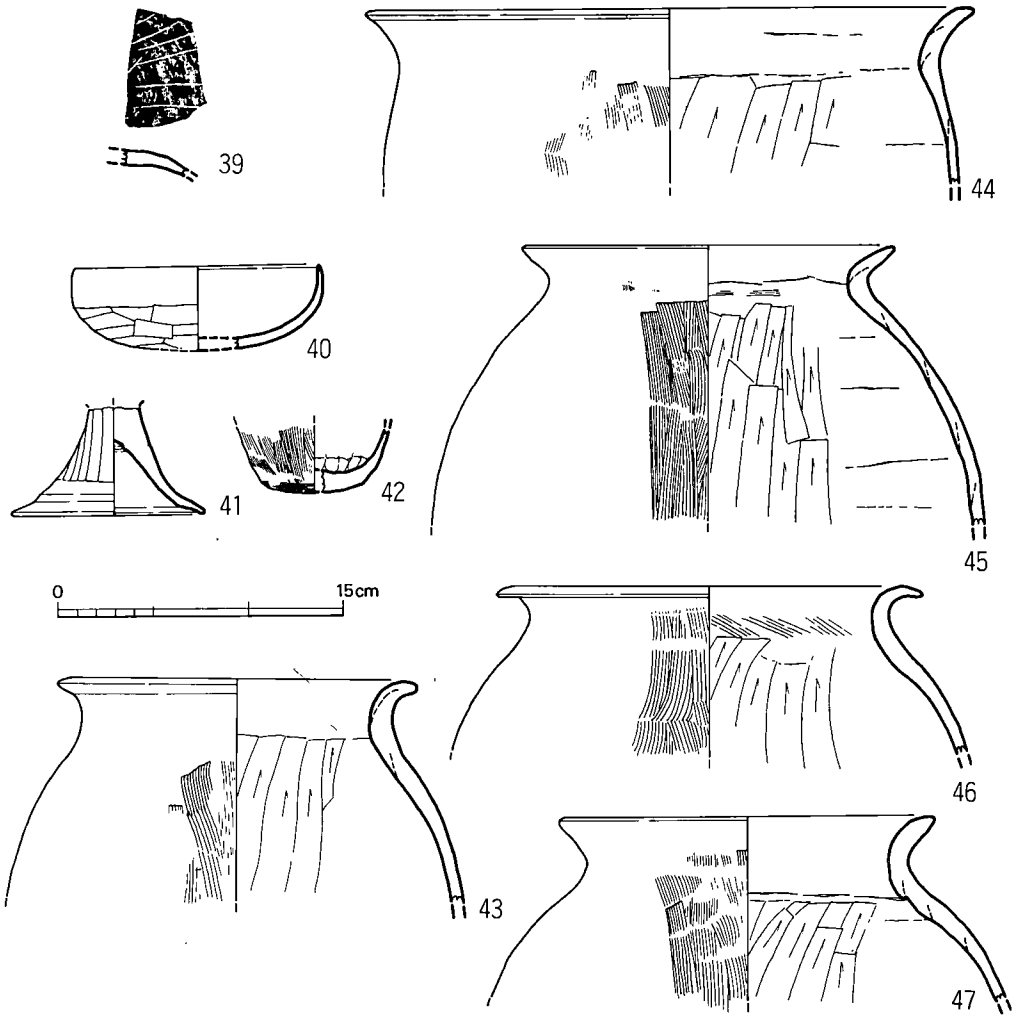


第57図 5号竪穴住居跡実測図（1/60）



1 暗黄褐色粘質土
2 淡黄褐色土(黒灰褐色土混)
3 暗黄褐色粘質土(淡黒灰褐色土混)
4 暗黒灰褐色土(黄褐色土混)

第58図 5号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第59図 5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

出土遺物（図版53，第59図）

多くの土器が出土したが，破片ばかりで図示できるのは11点である。41・43～45・51は床面から，他の覆土から出土した。その中に手捏ね土器が1点出土している。須恵器片を極く少量含むが主体は土師器で甕形土器片が全体の9割を優に超える。

須恵器（39） 39は坏蓋として図示したが身かも知れない。外面にヘラ記号を有し，ⅢBの新しい時期からⅣの古い時期のもののように見受けられる。

土師器（第53図40～47，第87図―2） 40は埦形土器で口径13cm，器高4.5cmに復原される。精良な胎土で，焼成は良好である。外底面は静止ヘラケズリを行っている。器面は平滑で明るい

淡茶色を呈する。41も精撰された胎土で焼成良好な高坏である。脚柱部外面は縦位にヘラケズリされ，内面はヘラを用いて上部を軸に回転させて削っている。淡茶色を呈する。42は砂粒が目立ち，荒いタッチの造りの土器ではあるが，外面全体に刷毛目調整を行い，化粧土を施していたのか，淡茶色の生地の上に部分的に赤茶色を呈する所がある。43・45～47は口径20cm前後の甕で，頸部がすぼまって肩が張り，口縁部はほぼ直立する。頸部からさらにもう一度外側に折り曲げるクセを有する。調整・整形技法は共通している。また，45は粘土の継ぎ目がよく分る例であり，幅3～4cm間隔で継ぎ目が認められる。44は口径32.5cmに復原される甑で，胎土に大粒砂粒が目立ち荒いヘラケズリにより頸部以下の器肉は薄くなっている。調整・整形技法は先述の甕と同様である。焼成良好で明淡茶色を呈する。第87図―2は手捏ね土器で口径2cm弱，器高2.6cmを測る。外面は指圧痕が残り，内面はヨコナデされる。胎土に白色砂粒を多く含み，焼成良好で暗灰色を呈する。完形品ではあるが，惜しい事に出土位置の記載がなく，本住居に伴うか否かは確証がない。

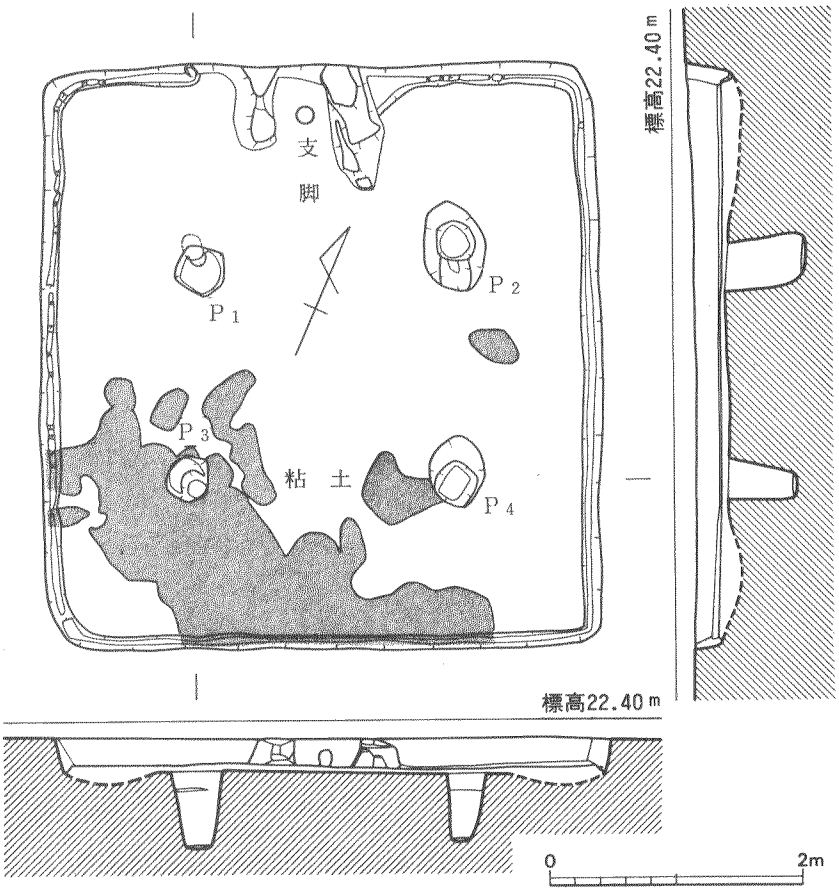
これらの出土土器のうち，甕形土器は3・4号住居跡出土のものと同様なものであり，床面出土の高坏41の製作技法は3号出土のものと変ることはなく，3・4号住居跡と同時期頃におかれよう。（児玉）

6号竪穴住居跡（図版37・38，第60・61・62図）

5号住居跡に隣接して検出された住居跡である。平面形態は隅円方形を呈し，規模は長軸4.6m・短軸4.45mで，床面積は18.1㎡を測る。主軸方位はN23°Wで，壁高は25cmである。主柱穴は4本で，深さは49～67cmと深い。主柱穴を結んだ平面形は方形を呈し，それに対応する壁は平行である。南壁からP_3周辺にかけて灰白色粘土が堆積しているのを検出した。床面より最も高い所で8cm堆積しており，一部は周溝を覆っている。周溝はカマドを除いて廻っており，深さは4～8cmである。周溝内に一部分ではあるが杭状の痕を検出した。床は厚さ2～3cmの堅固な貼床である。床面下層より掘り込みを検出したが土壙はなかった。

遺物の出土状況は，カマド周辺部において細かく割れた状態で多量に出土した。土師器の埦が右袖近くの床面より，煮沸土器53・56・58と59の甕も同様に出土した。カマド内の土器は生活時に使われたと推定されるが器形は不明である。

カマド（図版38，第61・62図）　北壁中央部に設置されている。遺存する左袖は最大幅28cm，長さ68cm，右袖は最大幅30cm，長さ93cmを測る。天井部の一部が残っており，内面は火を受けた痕が観察出来た。火床面は焚口より奥壁に向って少し下降気味に造られており，両袖間の幅も焚口付近を狭くしている。熱効果を考えて築造されたのかもしれない。支脚は両袖間のほぼ中央部に位置している。小型甕を倒立させて使用しており，甕内に土を詰め込み頸部以下は粘土を用いて床に固定させている。本体の築造過程は，土層図の淡黄灰色粘土層と暗茶褐色粘土（黒

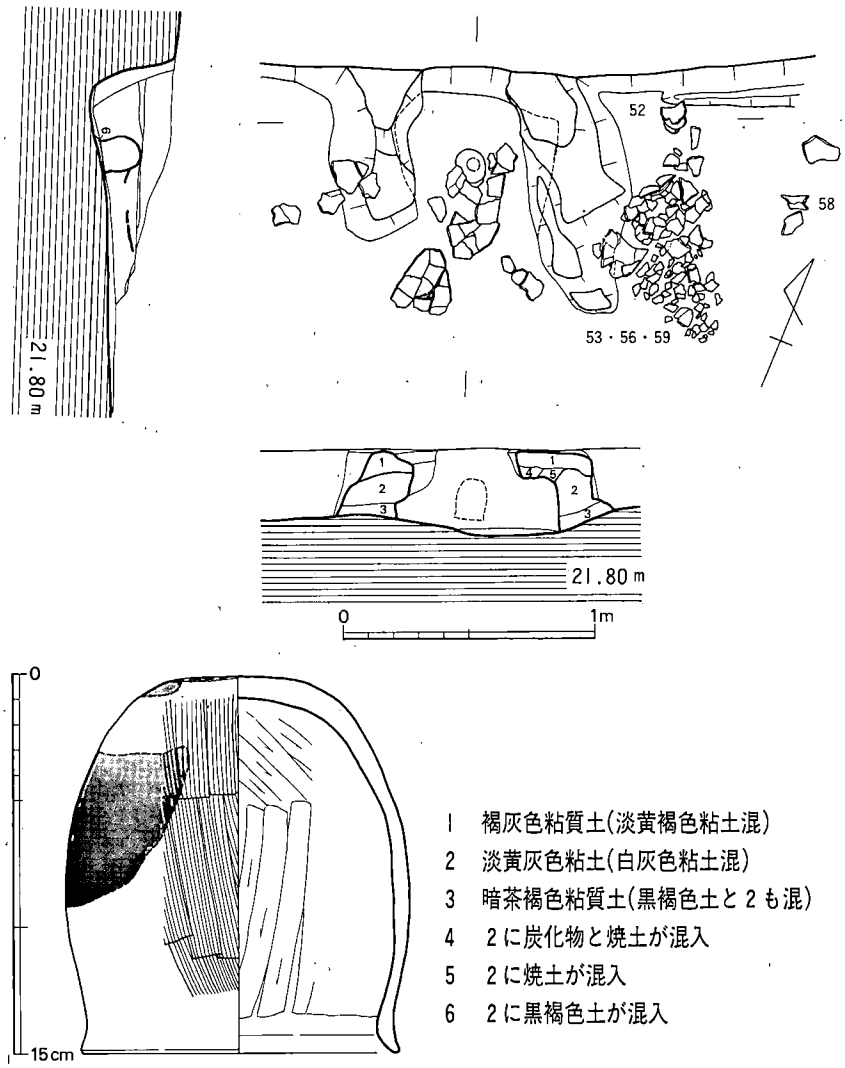


第60図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）

第61図　6号竪穴住居跡支脚

褐色土と淡黄灰色粘土混じり）層が以前に築造されており，修復時に淡黄灰色粘土層より上層を積み上げたと考えられる。

支脚に用いられている小型の甕は，やや「く」字状に外反する口縁部がつき器高14.8cm，口径12.6cmの完形土器である。胴部外面は縦方向の刷毛目調整，底部外面は不規則な刷毛目調整を行なっている。胴部内面は縦・斜方向のヘラ削りで，底部内面は僅かに指頭痕が残っている。口縁部内外をヨコナデで仕上げている。色調は燻んだ茶灰色を呈し，胎土はやや粗い砂粒を含む。焼成は普通である。胴部中央よ



第62図 6号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図 (1/30, 1/3)

り上に煮こぼれがあり，煤が付着している。特に底部は著しい。 (武田)

出土遺物 (図版53～55, 第62・63図)

カマド周辺の床面から多くの土器片が出土したが，そのうち図示できるのは，52・56・58・59の4個体である。他に図示した土器は覆土中等からの出土で必ずしも本住居跡に伴うものとはいい難い。出土土器のうち，土師器が主体でなかでも甕が多い。

須恵器 (48～51) ともに本住居跡に伴うと確言できるものではないが4個体分出土してい

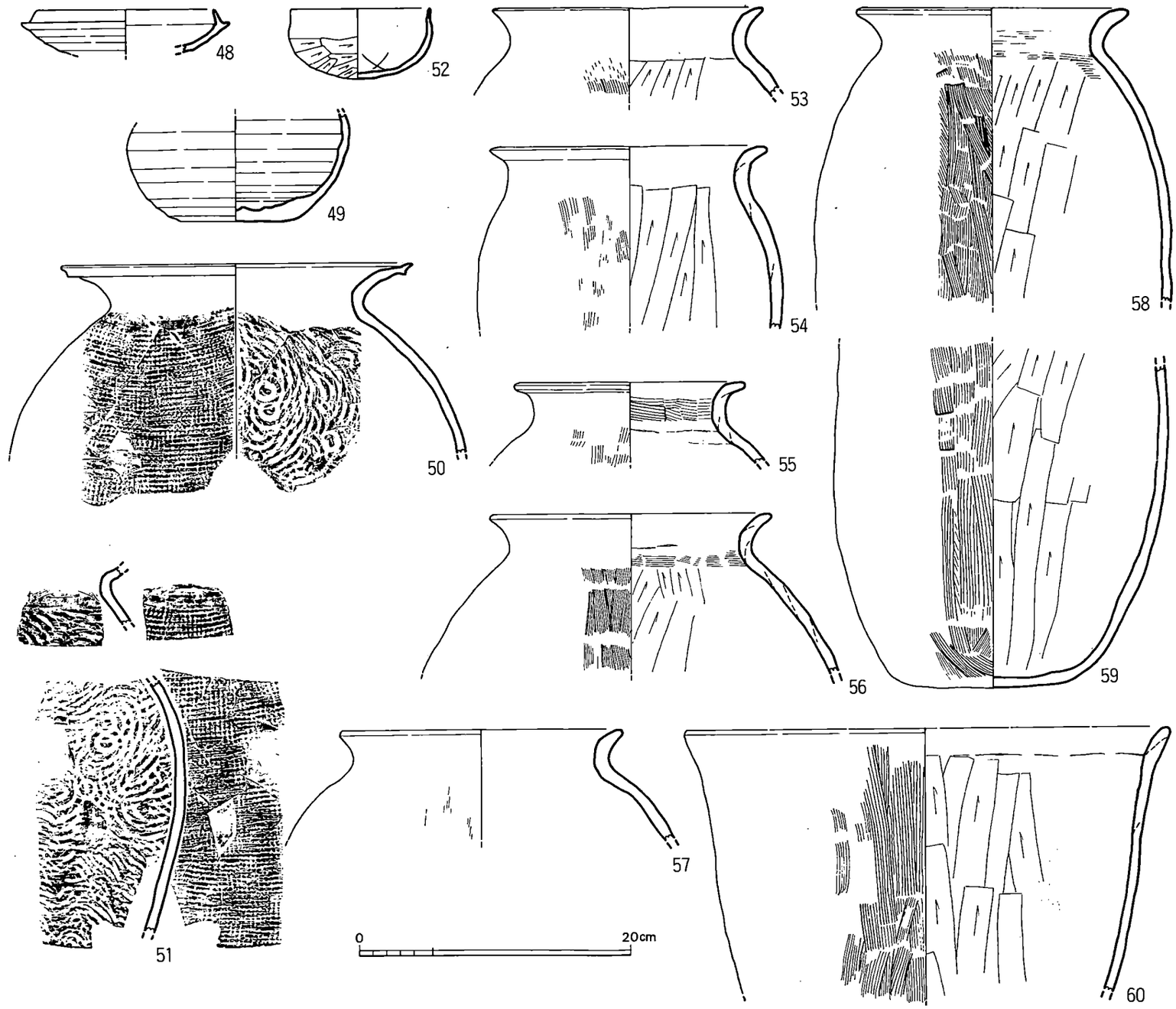
る。48は小片の坏身で口径12cm程度に復原できる。外底面は時計まわりの回転ヘラケズリを行っている。49は壺で長頸壺になるかも知れない。内面は強いヨコナデ，外面下部は時計まわりのヘラケズリを行う。50は口径27cm現状での器高14cmに復原される。口縁端部の形状が特徴的である。51の甕は径を出せる状態ではないので断面だけ示す。

土師器（52～60）　52はカマド右袖から約20cm離れて壁際で割れて検出した土器で完形品に近い。口径10cm，器高 5.2cm を測る。わずかな頸部を有し，口縁部は指ではさんでヨノナデしたためであろうか．器肉が薄く造られており、内底面にヘラ記号状のものが残る。頸部以下の外面は静止ヘラケズリを行い，他は丁寧なヨコナデ調整を施す。特に内面の器面は平滑で水びき状の調整である。胎土は微砂粒を含み精良で，焼成は良好で軽く焼き上がっている。色調は，淡茶灰色だが，口縁部の一部が二次加熱のため赤変している。53～59の甕のうち，56・58・59はカマド右側床上から出土したものである。55～57は肩が張るタイプの甕で，53はやや不明な点があるが，54・58・59は肩の張らないタイプの甕である。両者共体部内面は縦位ヘラケズリ，外面は縦位刷毛目調整を行う点は共通しているが，55だけは，体部内面の現存部にヘラケズリがなされた痕跡はみられず，ナデ調整を行っている。ただ、口頸部の形状に若干の相違が見られ，肩の張る甕の頸部は直立に近く，口縁部は直立した頸部から外に折り曲げられているが，他方の甕は頸部の直立の度合いがゆるいように見受けられ，口縁部は頸部から外側に折り曲げられる傾向にあるようである。これらの土器は両者とも砂粒を多く含み，おおむね焼成良好で明・暗の差はあれ，茶褐色を基調とする。60は口縁部1/7程からの推定復原で，口径 35cm前後と思われる。把手の部分が残っておらず図示していない。調整・整形等は甕と同様である。

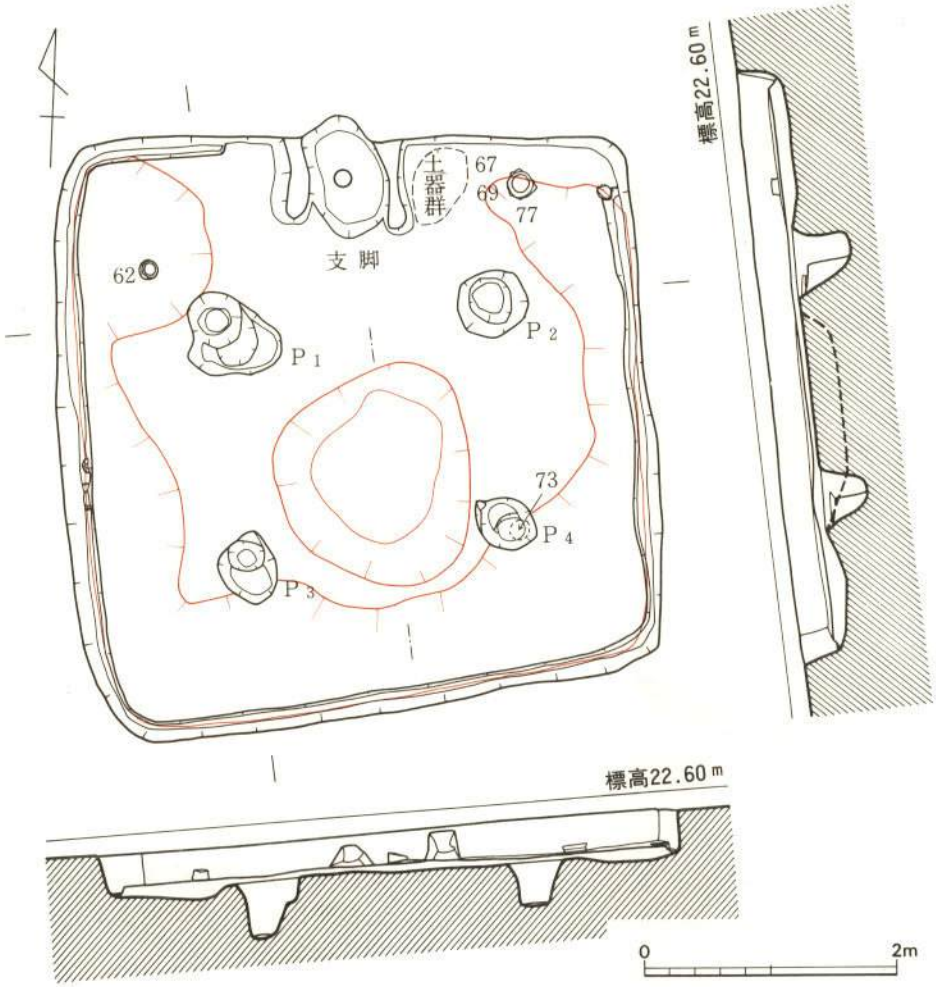
これらの土器は先述した3～5号住居跡，あるいは後述する7号住居等の甕ときわだった相違はみられず，6C末～7C初頭頃を中心とした前後のものであろうと推定する。（児玉）

7号竪穴住居跡（図版39・40，第64・65図）

D区南東隅で検出した住居跡である。平面形態はやや台形状の隅円方形を呈し，規模は南辺で4.75m，北辺で 4.15m，短軸は4.65mを測り，床面積は17.9㎡である。主軸方位はW10°Sである。壁高は25～30cmと比較的遺存状態の良好な住居跡である。主柱穴は4本で，全てに抜き取り跡が認められる。P_4に略完形の甕73が壊れた状態で出土した。主柱穴の深さは40～49cmとほぼ均一であり，主柱穴を結んだ平面形は方形を呈する。主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁の平行関係はP_3～P_4と東壁のみ平行である。周溝はカマド左袖より北西隅まで廻っており，深さは4～8cmである。床は黒灰褐色土を用いた厚さ3～4cmの堅固な貼床である。床面下層より長軸1.8m，短軸1.5m，深さ25cm，上端面積 2.2㎡ を計測する不整円形の土壙を検



第63図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

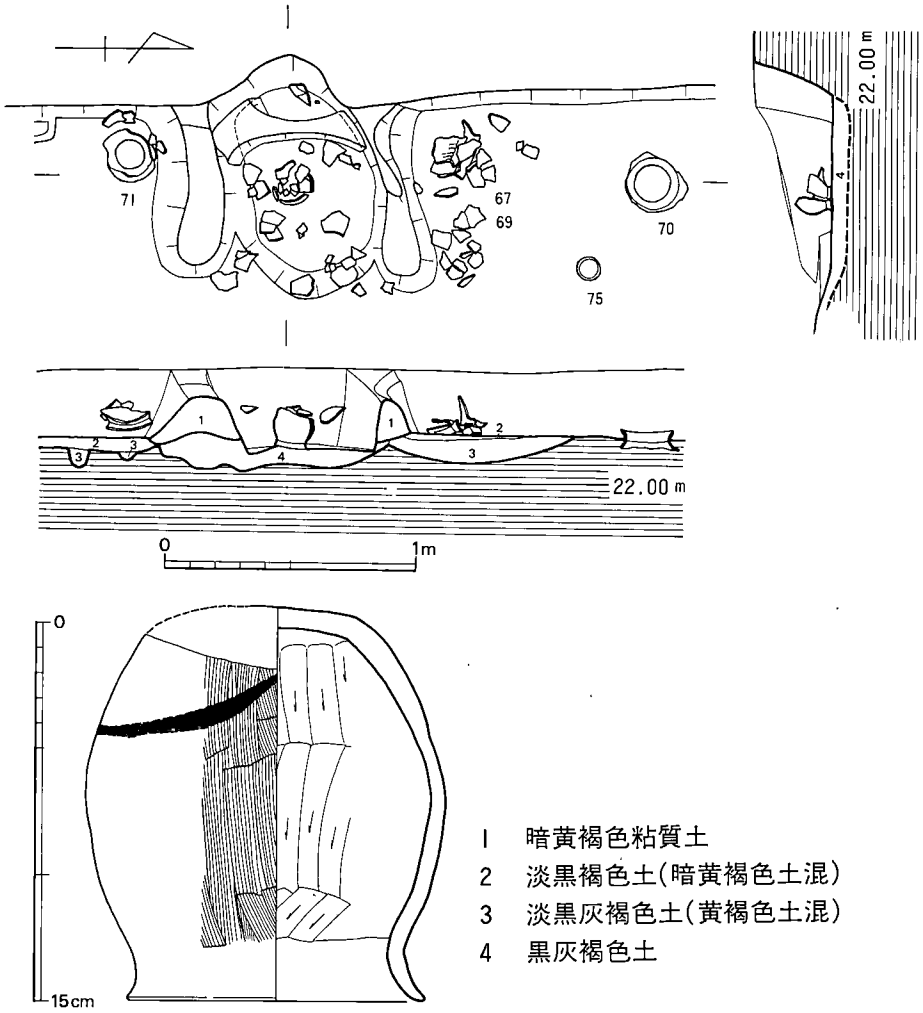


第64図 7号竪穴住居跡実測図（1/60）

出した。埋土は上層が淡黒褐色土，下層は淡黄褐色土（地山）と淡黒褐色土の混じったものである。土壙内からは小破片の土器が僅かに出土した。同じく床面下層より明瞭ではないが掘り込みを検出した。埋土は床面下層土壙の下層と同じである。

遺物の出土状況は，カマド周辺部で多量に出土した。右袖より北へ1 m程の所に，70の甕が頸部まで正座した状態で貼床内に埋められていた。肩部より下が欠損しており器台的用途として使われている。カマド右袖近くから67の小型甕と煮沸土器の69の甕が出土した。小型甕は支脚として使用されていた可能性がある。62の小型の壷は床面上に正座しており，64の坏はカマド内からの出土である。

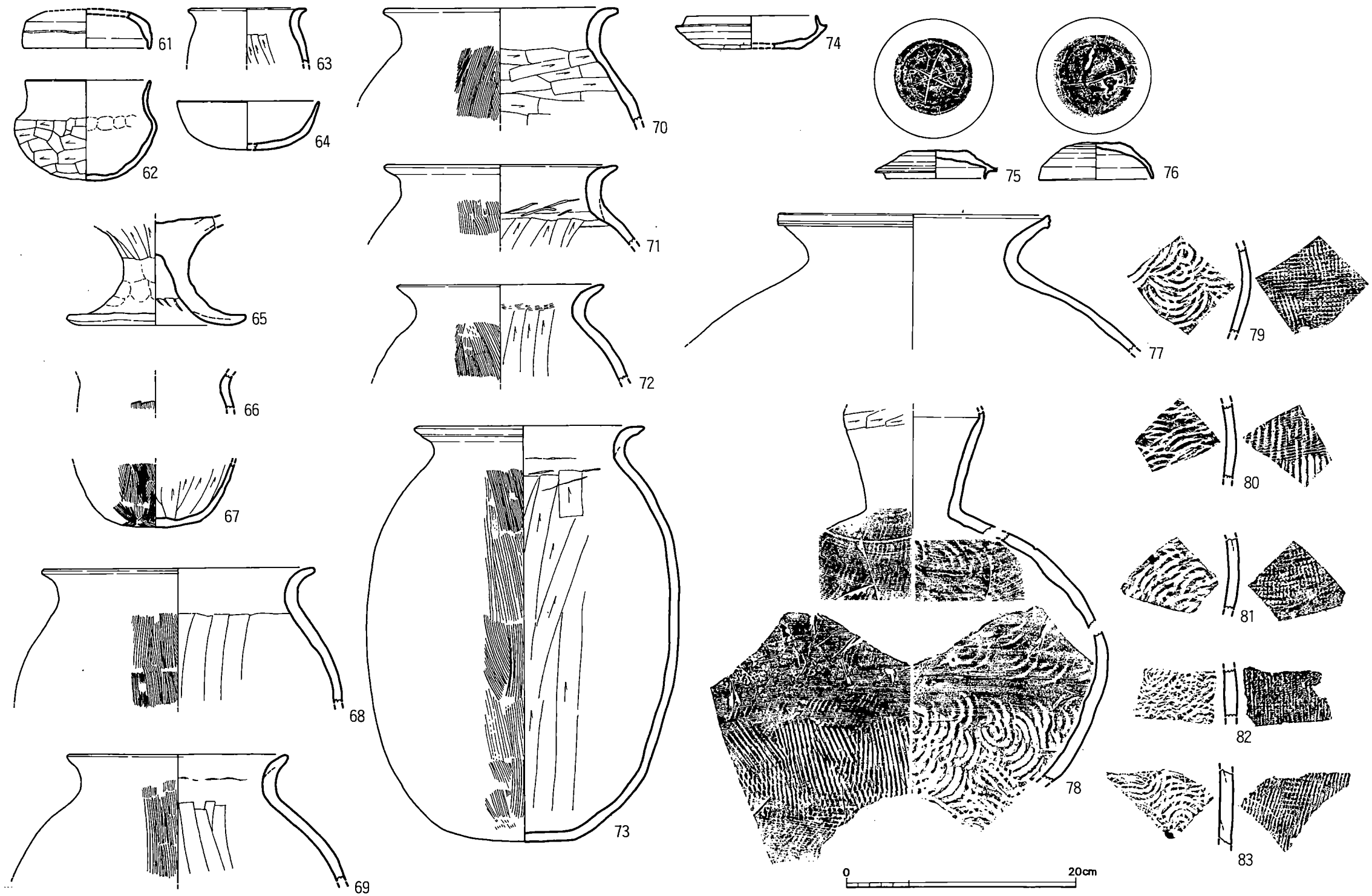
カマド（図版40，第65図） 西壁中央部に設置されている。両袖と支脚が遺存しており天井部



第65図 7号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図 (1/30, 1/3)

は崩れ落ちた状態で検出した。中央の突出部は煙出しと考えられる。左袖は幅32～37cm，長さ65cm，右袖は幅16～31cm，長さ75cmを計測する。火床面は7cm程落ち込んで水平に成形されている。支脚は「く」字状に外反する口縁がつく小型甕を倒立させて用い床に固定させている。本体の築造過程は，掘り込みが行なわれた後暗黄褐色粘質土を積み上げて両袖が造られている。崩れ落ちた状態の天井部の土層図は写真撮影後に霜などの為に崩れて作図出来なかった。

支脚に使用されている小型甕は器高15.6cm，口径11.9cmのほぼ完形土器である。「く」字状に外反する口縁部がつき，胴部は張り平底を呈している。胴部外面は縦方向の，底部外面は不規則な刷毛目調整を施している。胴部内面は縦方向のヘラ削りで，口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は燻んだ茶灰色で胎土は微砂を含む。焼成は普通である。胴部上半に煮こぼ



第66図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

れがありその上に煤が付着している。煙出しに面した表面は二次加熱により著しく剝離している。 （武田）

出土遺物（図版55～57，第65・66図）

覆土中はもとより，カマド内やその周辺と住居床面から，甕（大形・小形）を主体に，埦，坩，脚台等の土師器や，坏身・蓋，長頸壺・長頸壺蓋，甕等の須恵器が主に破片で出土している。土師器では62・64・67・69～71・73がカマド内やその周辺および他の部分の床面から，須恵器では75がカマドからやや離れて床面下層から出土している。しかし，65は破片資料で，その出土状態から本住居跡に伴うか否かは判然としない部分がある。他に紡錘車が1点出土している。

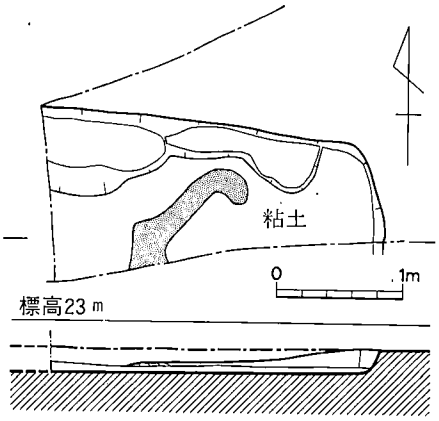
須恵器（74～83） 床面から出土した76，貼り床下から出土した75をのぞいて他は覆土中からの出土である。74は小片で口径11.5cm，器高3.5cmに復原され，外底面は静止ヘラケズリをされるが方向は不明。75は完形品で口径8.6cm，受け部径10.7cm，器高2.5cmを測り，天井部外面にヘラ記号を有する。天井部平坦面はロクロ台から切り離されたままに近い状態で，他の部分は天井内面に到るもで丁寧な回転ナデ調整を行っている。胎土に白色砂粒を多く含み，焼成は良好で暗灰青色を呈する。76は口縁部の一部を欠失するが略完形品で口径10cm，器高3.2cmを測る。天井部外面は通有の回転ヘラケズリの痕跡はなく，75と同様にロクロから切り離された状態に近く，他の部分は回転ナデ・ナデ調整を行っている。天井部外面にヘラ記号がある。白色砂粒を多く含み、焼成はややあまく，外面はくすんだネズミ色，内面は紫灰色を呈する。77は口径23.6cmに復原され，現存高12cmを測る甕である。胎土に小砂粒を多く含み，焼成はあまく軟質で濁灰色を呈す。78は小片からの推定復原図であり，傾き，径などは不正確である。器面に大粒白色砂粒が目立ち，焼成良好で内面は灰色，外面はネズミ色～暗灰色を呈する。79～83は覆土中出土の甕破片である。

土師器（61～73） 61は覆土中より出土した須恵器的な器形の土器である。極小片で口径11cmに復原される。天井部外面はヘラケズリされるが磨滅のため，ロクロの回転方向は不明である。胎土は緻密だが，焼成はあまりよくなく軟質で明淡茶色を呈する。62は精撰された胎土を用いて作られた土器とは異質である。床面のくぼみに据えつけられた状態で出土した完形品で口径11cm，器高8.8cmを測る。胴部最大径以下は横位のヘラケズリを行い，内面は指圧痕が残り，口径部は丁寧なヨコナデを行う。器肉は薄くつくられ極めて軽い。焼成は極めて良好で，堅緻である。63・66・67は小型の甕で，66・67は支脚であった可能性がある。67はカマド右側の土器群の中からの出土で，63・66は覆土中からの出土である。64はカマド中から出土した坏で，口径12cm，器高4.2cmに復原される。胎土に微砂粒を混入し，焼成はふつう程度で明茶褐色を呈する。底部はヘラケズリされているが器面の磨滅が著しく，調整等の詳細は不明であ

る。65は北辺周溝側の床面から出土した脚台部分である。器肉が厚くぼてっとした感じで，全体に雑なつくりである。脚台上半部はヘラケズリされ，中位付近は指圧痕が残る。胎土は大粒砂粒が目立ち，焼成良好で淡茶色を呈する。脚台の上は甕がのるものと思われる。68〜73の甕は，68・72が覆土中からの出土であるが，71はカマド左に倒立し，70はカマド右約1m離れて胴部を欠いた状態で床面に埋め込まれて正立し，73は柱抜き跡の床面から，69はカマド右に散乱した土器群の中から出土した。よって，69〜71・73は本住居跡に伴う資料である。70は図の状態では欠損する所がなく，口径21cm，現存高10cmを測る。頸部以下の内面が横位にヘラケズリされるのが他の甕と異なる点である。73は細片に割れていたがほぼ完形に復原され，口径20.5cm，器高36.2cmを測る。3号住居跡出土の甕23と比べて，口頸部の形状や胴部の形態に若干の相違が見られ，本例はやや肩が張って胴部全体に丸味をおび，口縁部が外側に折り曲げられて寝る傾向にある。しかし，ヘラケズリや刷毛目調整の手法の点では異なる所はない。これらの甕は全体に大粒の砂粒が器面に目立ち，内面に荒いヘラケズリと外面の縦位刷毛目調整を行うのが共通的な特徴で，焼成はおおむね良好で濃淡の差はあるが茶褐色を基調とする。

防錘車（図版63，第87図—4） 一部を欠失するが全形を知るに支障はない。径5.3cm，厚さ0.9cm，孔径0.9cm〜0.7cmを測り，現状で41.5gである。表面に使用痕かと推定される細い条痕状のものが残る。滑石製である。

前述の土器より，76はⅣ期の特徴を備えており，7世紀の初頭頃におかれると思われ，本住居跡の所属時期はこの時期頃と考えられる。 （児玉）



第67図 8号竪穴住居跡実測図（1/60）

8号竪穴住居跡（図版41，第67図）

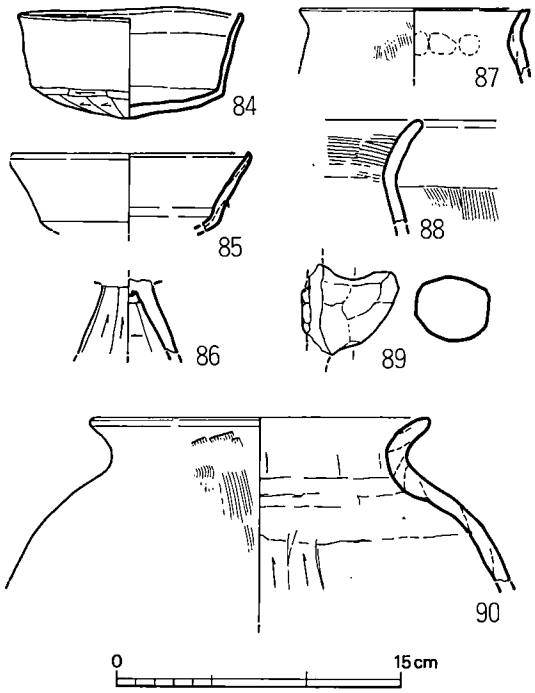
B地区西隅で9号住居跡に隣接して検出した。大部分が調査区外に広がるため，規模など詳細については不明である。 （武田）

出土遺物（図版58，第68図）

須恵器の坏小片と土師器が出土している。須恵器坏は，口縁部片ではなく小片で図示してはいない。身か蓋かわらないが，ヘラケズリの仕方や天井部付近の形状はⅢBの新しい所からⅣの古い頃の特徴を備えている。他に図示した土師器は本住居跡に伴うと確認できるものはないが，84は底部のごく一部と口縁部を½近く欠失するがほぼ完形

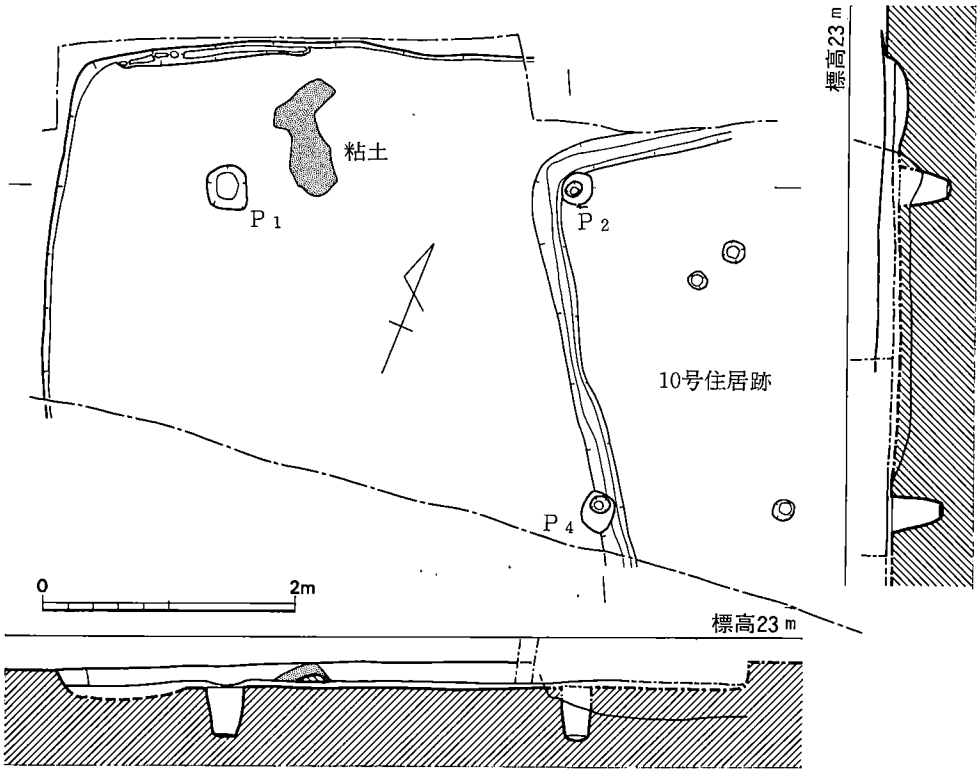
に復原され，本集落の他の住居跡出土例のように，完形に復原される土器は住居跡に伴う例が多いことから，出土位置は不明だが84は８号住居跡に伴う可能性はつよい。

土師器（84～90）　坏，高坏，大・小の甕，甑の把手が出土している。覆土中には甕の破片が多い。88は口径12cm，器高5.8cmを測る。形態上に整美さはなく，歪んでおり，底部はややとがり底気味を呈する。しかし，精撰された胎土を用い，焼成は他の日常用土師器と比して良好で軽く焼き上がり，やや銀色がかった明炎橙色を呈する。85・86は別個体の高坏である。ともに反転復原図で85は口径12.8cmに復原される。口縁端部をつまんで内側にやや曲げるクセは84と同様である。85・86ともに精撰され，緻密な胎土を用い，焼成良好である。色調は85は84に酷似し，86は淡茶灰色を呈する。87は小形の甕で口径12cmに復原される。口縁端部が特徴的で沈線状のものが観察されるが小片のため一巡するか否かは不明である。胎土は少量の白色砂粒を含む程度で良好であり，焼成は良く茶褐色を呈する。88は肩の張らない長胴の甕の口縁部片である。89は甑（あるいは鍋）にはめ込むようにとりつけられた把手である。90は口径18cmに復原され，口縁径に比べてかなり肩の張る甕である。二次加熱により赤変し，頸部には黄褐色粘土が付着している。器面には白色砂粒が目立ち，二次加熱のため脆くなっており，明茶褐色を呈する。



第68図　８号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

以上より，８号住居跡は６Ｃ末を前後する頃のものと推定するが確証はない。　（児玉）



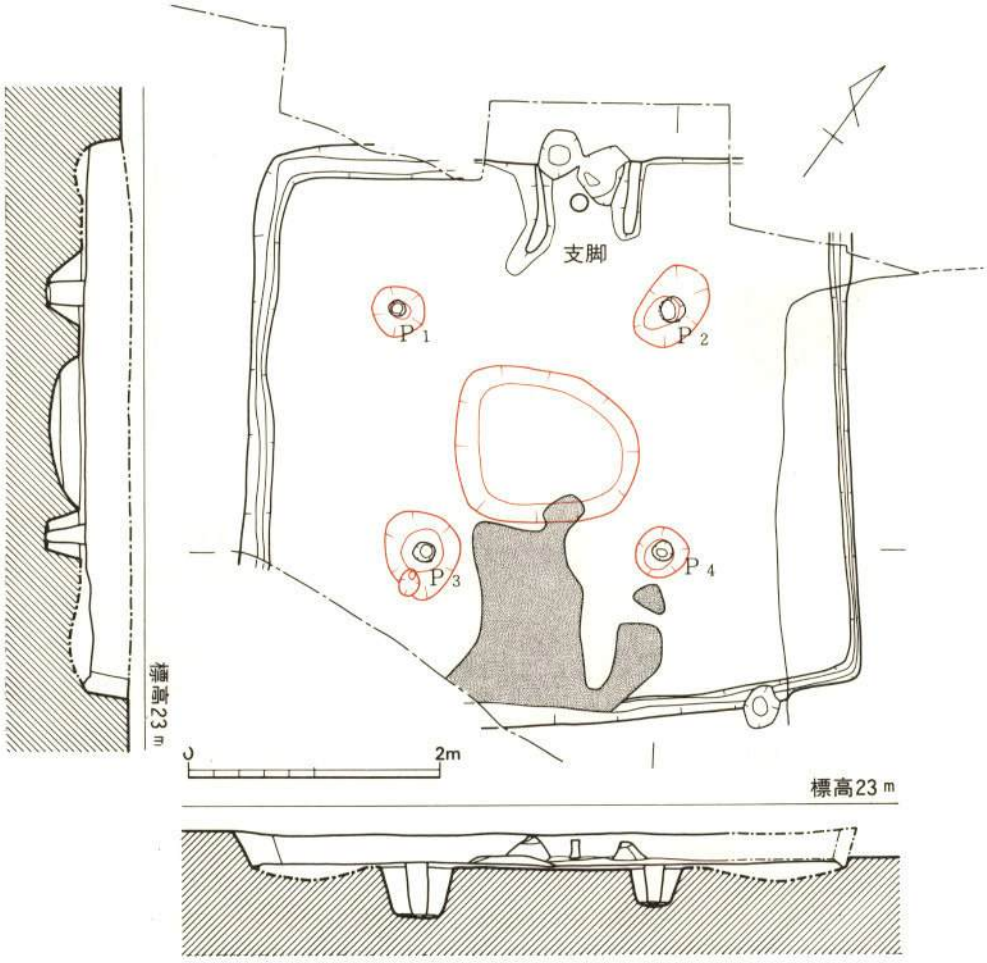
第69図 9号竪穴住居跡実測図（1/60）

9号竪穴住居跡（図版41，第69図）

8号住居跡の東に隣接し，10号住居跡に切られている。南側が調査出来なかったので正確な平面形態は分からないが，隅円方形となるであろう。主柱穴は4本で，内3本を検出した。深さは40～45cmを測りほぼ均一である。主柱穴間隔が広いので大型住居跡と推定される。周溝は北壁に一部検出したのみである。床は薄い貼床で，床面下層には明瞭な遺構はなかった。カマドも検出されず，遺物もほとんど出土しなかった。（武田）

10号竪穴住居跡（図版41，第70図）

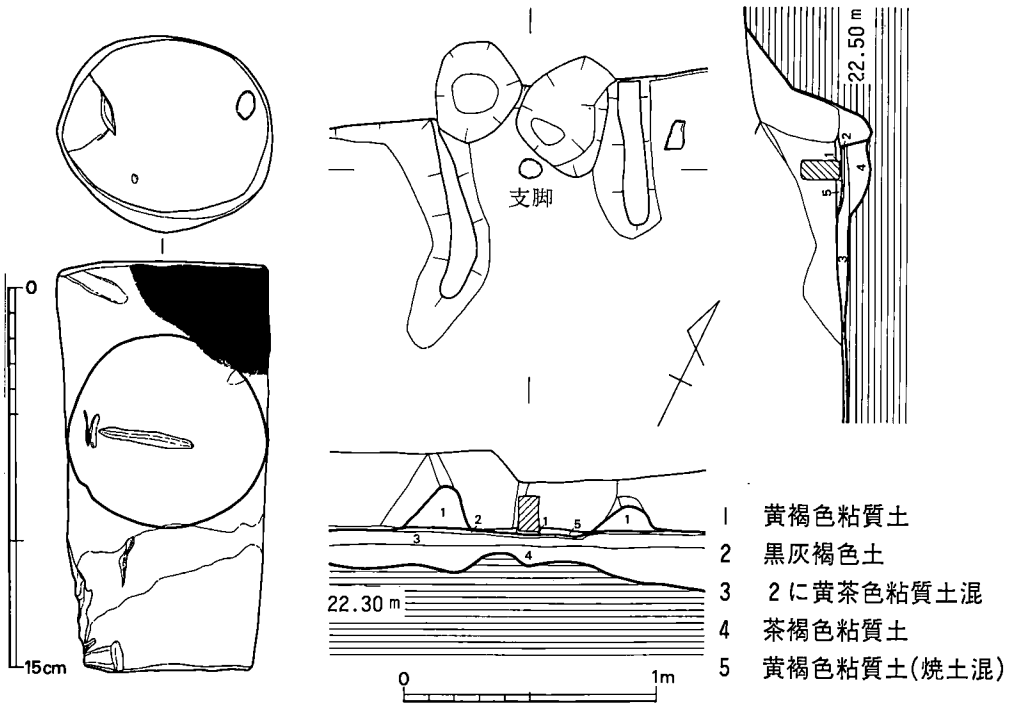
東壁を11号住居跡に切られ，9号住居跡を切っている住居跡である。北東隅と南西隅は調査出来なかった。11号住居跡の床面下で本住居跡の周溝を確認した。平面形態は隅円方形となるであろう。規模は長軸4.78m，短軸4.44mを測り，主軸方位はN39°Wである。主柱穴は4本で，深さは26～32cmでほぼ均一である。主柱穴を結んだ平面形はP1～P2が広い台形を呈する。南壁中央部からP3～P4間に粘土が堆積しており，厚さ5～10cmで6号住居跡と同様の状況を呈している。周溝はカマド左袖付近から北東部まで廻っており深さは4cmである。床は



第70図 10号竪穴住居跡実測図（1/60）

3 cmの貼床で，床面下層より土壙を検出した。平面形態は不整円形を呈し，規模は長軸1.45m，短軸1.18mで深さ30cmを測り上端面積は 1.5m² である。埋土状況は黄褐色粘質土（地山）と黒褐色土がブロック状に混じり合った状態である。掘り込みは明瞭には検出されなかった。

カマド（図版41，第71図） 北壁に設置されており，煙出し部は後世のピット 2 個に切られている。遺存しているのは両袖と支脚のみで，左袖は幅30cm，長さ90cmで右袖は幅25cm，長さ63cmである。両袖間の中央に円柱状の土器を粘土で床に固定させて支脚としていた。火床面はやや落ち込んで造られている。支脚は器高16.1cm，上部直径8.4cm，下部直径6.6cmを測る。調整は丁寧なヘラミガキを施した後にナデており，僅かに指痕が残っている。色調は燻んだ茶褐色で，上部付近に煤が付着している。胎土はやや粗い砂粒を含み，焼成はやや良好である。煙出しに面した側の底部より上へ 7 cmまでは二次加熱により剥離が著しい。（武田）

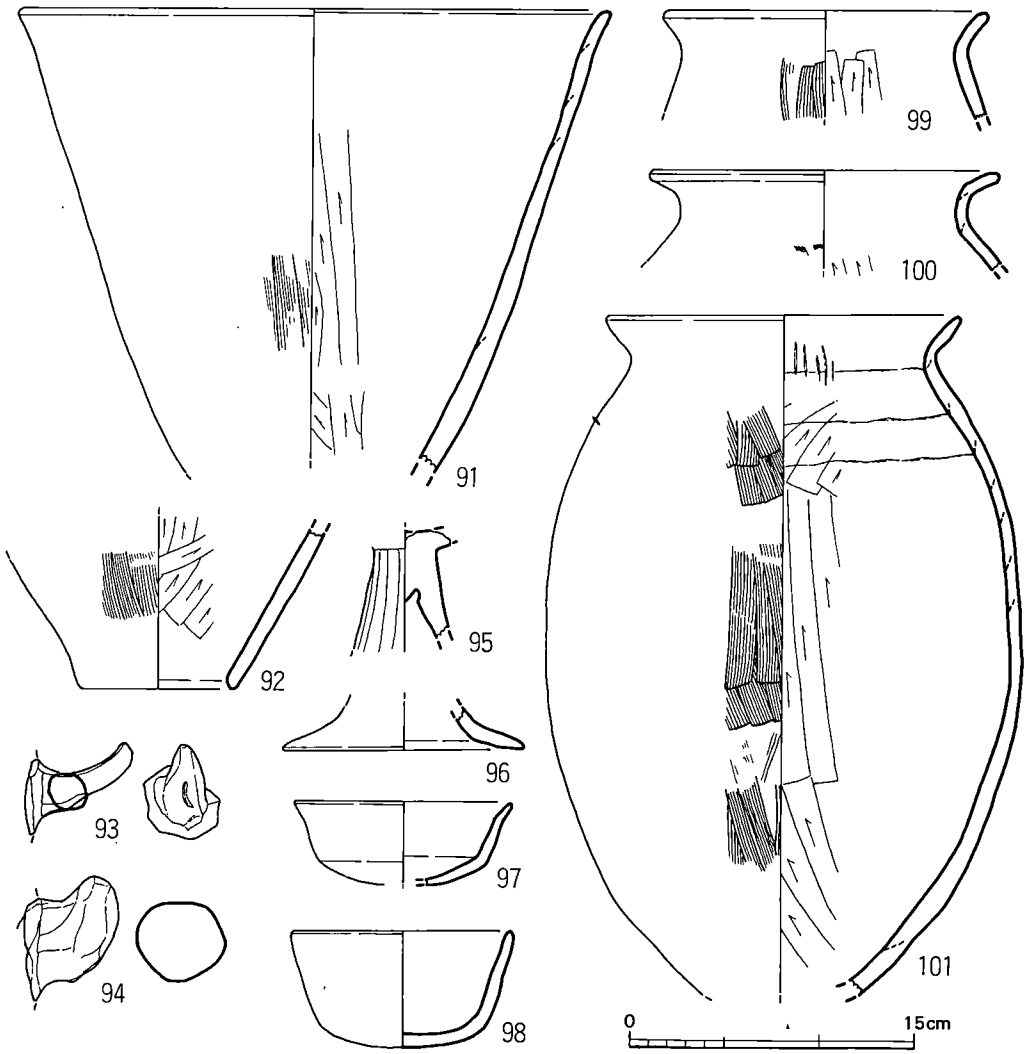


第71図 10号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30, 1/3）

出土遺物（図版58・59, 第72図）

床面出土の土器はなく，すべて覆土中から検出した。器種のバラエティは比較的多い方である。

土師器（91～101） 91・92は甑で94は鍋の把手かと思われる。91は小片の反転復原図のため把手を図示できなかった。口径31.5cmに復原され，現存推定高24cmを測る。体部下半は内弯してやや丸味をもつが，体部上半は直線的で口縁部は外反しない。器面の風化が進行しており，外面の縦位ハケ目調整と内面の縦位ヘラ削りが部分的に観察される。92は甑底部付近残片で体部から口縁部の形状は不明である。調整・ヘラケズリ技法は91と同様である。91は雲母片・小砂粒を含むが割と緻密な胎土であるが，92は大粒砂粒を含み，荒い胎土である。ともに二次加熱で変色し，赤褐色～赤灰色を呈する。93の把手は甑の通有のものとは異なり，椀あるいは深鉢状の土器につくものであろう。95・96は別個体の高坏の破片である。95の外面は縦位のヘラケズリを行っている。ともに胎土は精撰されたものを使用し，明淡茶灰色を呈する。97・98は椀形の土器で，復原口径は12cm弱で，器高は97が4cm，98が6cm程度である。97は高坏の坏部に形態が近似するが，脚はつかない。胎土は精撰され，焼成は良好で淡茶灰色を呈する。98は

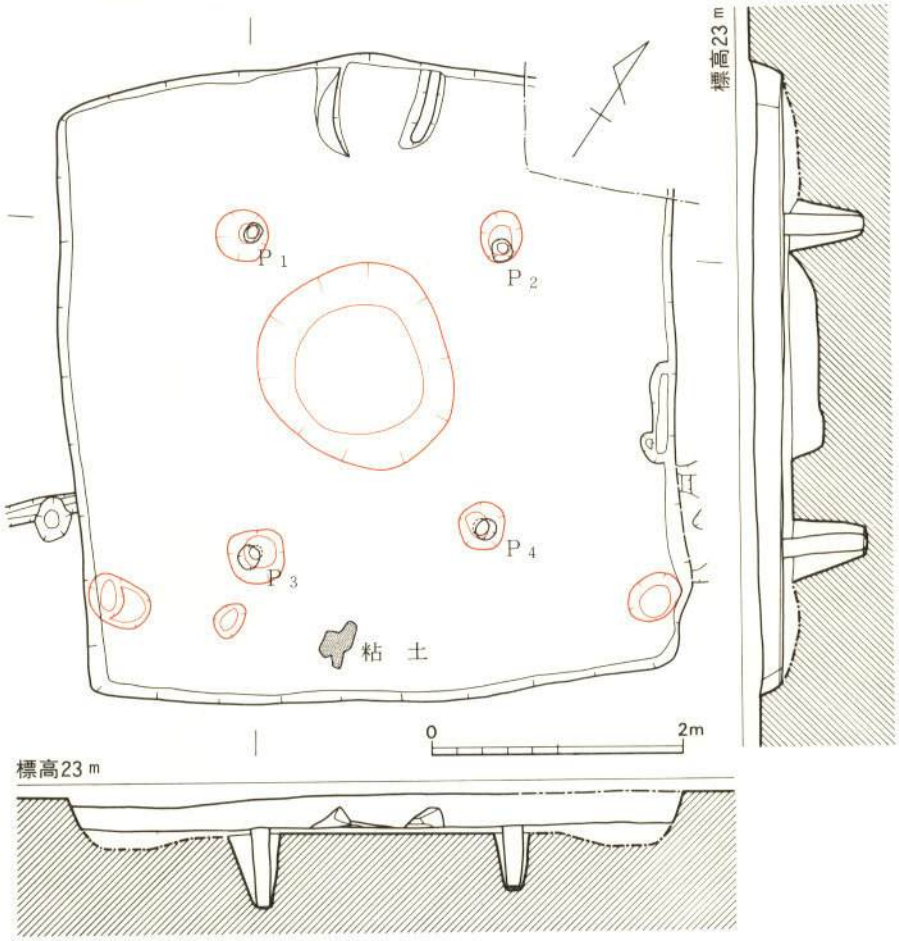


第72図 10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

胎土が荒く，焼成は良好で淡茶灰色を呈する。99～101の甕は口径18cm前後に復原され，101は36cm前後の器高になると思われる。99は肩が張らず，100は肩が張り，101は肩が張り，101は肩は張らないが胴部最大径は体部中位より若干下にあり，おのおのやや異った形態を示すが，刷毛目調整やヘラケズリの技法は共通している。なお，101の甕頸部内面にはヘラにより刻み目状のものが認められ，5条1組のもの，3条1組のものが1ケ所づつ付されている。

上述の土器は床面出土のものを含まず，本住居跡の所属時期を特定できない。しかし，9号住居跡を切っており，また11号住居跡から切られている。9号住居跡の出土土器は調査中に9

～11号住居跡のものとともに上がっており，その時期は不詳であるが，11号住居跡出土土器よりその下限を推定することができ，6C代のうちに含まれるものであろうと思う。（児玉）



第73図 11号竪穴住居跡実測図（1/60）

11号竪穴住居跡（図版41，第73・74図）

10号住居跡を切っており，北東部隅が用地外のため調査出来なかった住居跡である。平面形態は隅円方形になると考えられ，規模は長軸5.1m，短軸4.88mを測る。主軸方位はN38°Wである。主柱穴は4本で，深さは50～66cmと深く，主柱穴を結んだ平面形はP_1～P_3が広い台形を呈する。主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁は平行ではない。周溝は東壁中央部に長さ80cm，深さ6cmで検出したのみである。床は厚さ3～5cmの貼床で，床面下層より土壙を検出した。平面形態は不整円形で，規模は長軸1.63m，短軸1.47mで深さ20cm，上端面積2㎡を測る。埋土は黒灰褐色土に黄茶褐色粘質土（地山）がブロック状に混じり合っていた。掘り込み

は明瞭には確認されなかった。

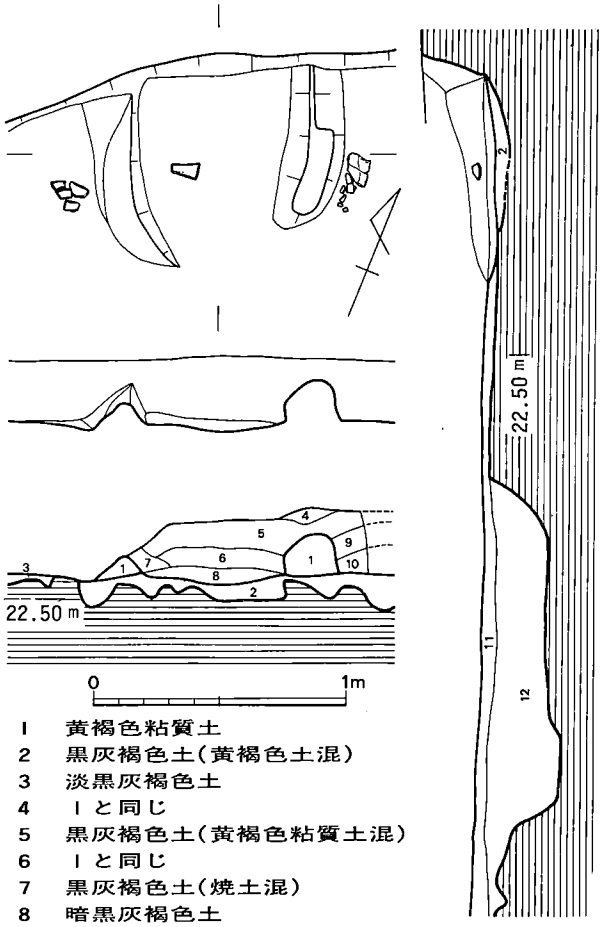
カマド（第74図） 北壁中央部に設置され大半が崩れた状態で検出された。遺存しているのは両袖のみで左袖は幅23cm，長さ71cmで右袖は幅 25cm，長さ 63cm を計測する。火床面はやや落ち込んでおり中央部が広い形態である。支脚はなかった。 （武田）

出土遺物（図版60，第75図）

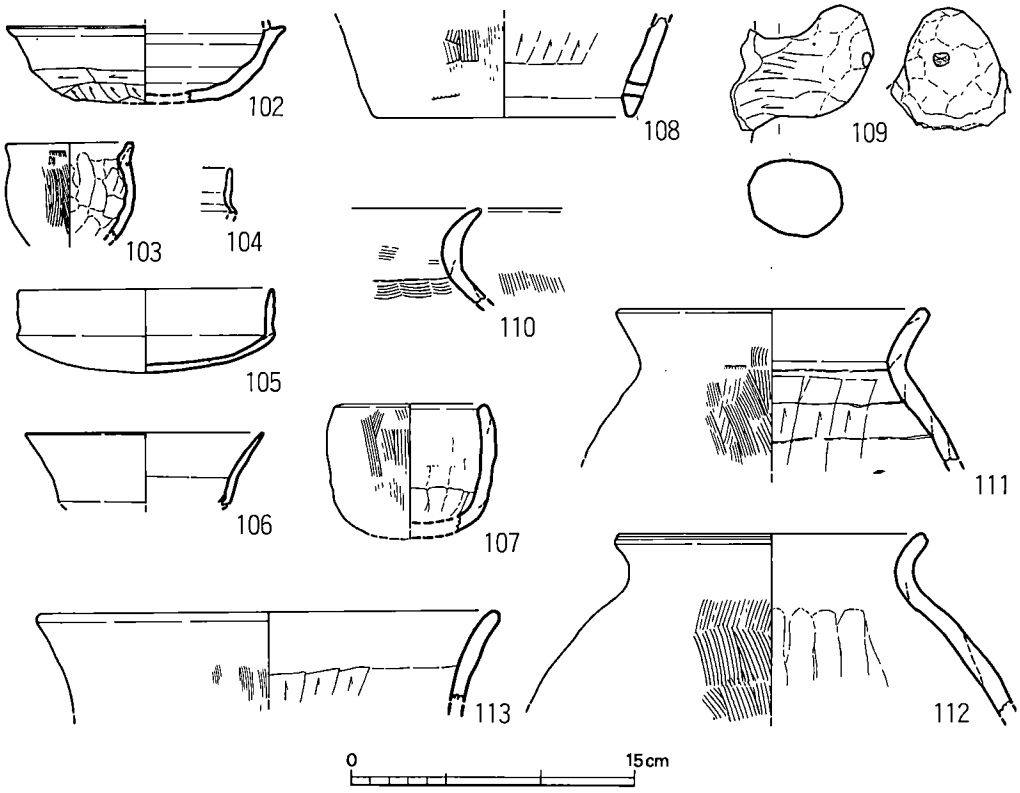
須恵器・土師器が出土しているが，土師器が圧倒的に多い。覆土中からの出土片が多く，111・112がカマド対辺の２本の主柱穴周辺床面から出土しているだけである。

須恵器（102） 受け部から底部にかけての小片で覆土中から出土した。外底面は静止ヘラ削りを，内底面はナデ，他は回転ナデ調整を行う。口縁部のたち上がりは弱いようである。

土師器（103～112） 103は小形の甕片で口径 6.8cm に復原される。内面は荒いタッチの指圧痕が残り，外面は縦位刷毛目調整を行う，口頸部はくの字形に外反し、口縁部内面はヨコナデ調整時にくぼませている。白色砂粒を含み，焼成良好で赤茶褐色を呈する。104・105は別個体同形の坏である。104は105に比して口縁部と体部の境のくびれがきつい。105は口径13.5cm，器高4.3cmに復原される。器面が風化して調整は不明である。胎土は微砂粒を含み緻密である。焼成良好で明茶褐色を呈する。106の高坏片は口径 13.6cm に復原される。胎土は精撰されて緻密で雲母片を含み，焼成良好で淡茶褐色を呈する。他に１～２個分の高坏片が出ている。107は荒いつくりの土器で口径・器高とも７cm程に復原される。内底面に指圧痕が残り，口縁部内外面はヨコナデをする。１～２mmの砂粒が目につき，焼成良好で赤茶色を呈する。108は甑底部片で

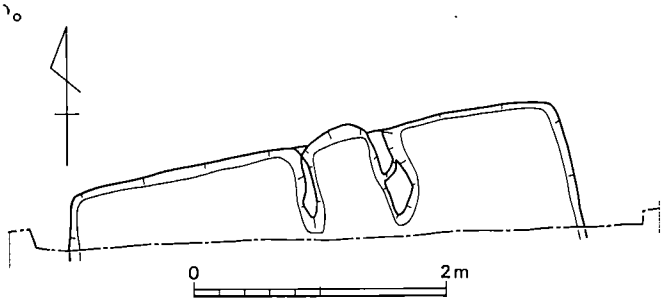


第74図 11号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第75図 11・12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4, 113は12号出土）

底面より1㎝上に径5㎜程の孔を有する。小片なので孔の数は不明である。109の把手は先端付近に刺突痕を有する。胎土・色調から108と同一個体とは思えない。110〜112の甕は口径16㎝前後に復原される。112の肩はかなり張るが，111はそれ程でもなく，両者の口頸部の形状にも相違が見られる。しかし，刷毛目調整やヘラケズリ技法において特にきわだった差異はない。



第76図 12号竪穴住居跡実測図（1/60）

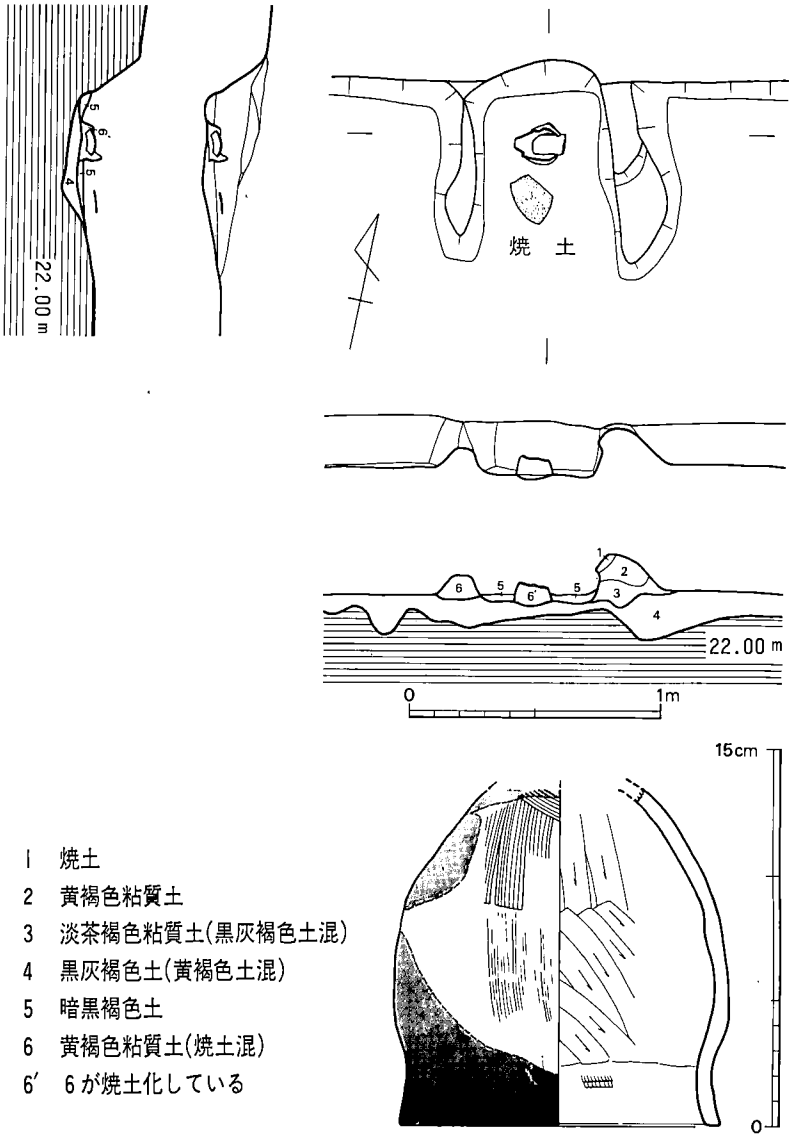
上述の土器のうち，床面出土の111・112は3〜7号住居跡出土のものと大差はなく，102が覆土中から出土しており，本住居跡の所属時期は6C後半の新しい時期かやや降る頃であろう。（児玉）

12号竪穴住居跡（図版42, 第76・77図）

11号住居跡より南東9m，13号住居跡より南西2mの地点で検出した。カマドを含め北壁側の一部分が調査対象区で主柱穴などは検出されなかった。北辺3.95m，壁高20cmで周溝はなかった。

カマド（第77図）

北壁中央部よりやや東寄りに設置され，遺存する左袖は最大幅21cm，長さ71cm，右袖は最大幅26cm，長さ78cmを計測する。支脚は小型甕を倒立させ粘土で床に固定して用いている。胴部中央より底部までは壊れていた。火床面はやや落ち込んでおり，支脚から焚口方向へ10cm離れた所が焼土と化している。同様に右袖内の一部にも火を受けた痕が認められた。左袖内に焼土が混じっており改修されたと考えられる。



第77図 12号竪穴住居跡カマドおよび支脚実測図（1/30, 1/3）

支脚に使用されている小型甕は底部が欠けてはいるがほぼ完形となる土器である。口径12.4cmを測り推定器高は14.5cm程であろう。口縁部はほぼ直立し肩部は張っていない。胴部外面は

縦方向の，底部近くは斜方向の不規則な刷毛目調整を行なう。胴部内面は縦・斜方向のヘラ削りを行ない口縁部内外をヨコナデで仕上げている。口縁部内外面とも刷毛目が僅かに残っておりやや粗雑に作られている。色調は少し赤っぽい茶灰色を呈し，外面は二次加熱により燻んでいる。胎土は微砂を含み，焼成は普通である。（武田）

出土遺物（図版59，第75図）

住居跡全体の2割程度しか掘っていないので土器の出土量は少ない。

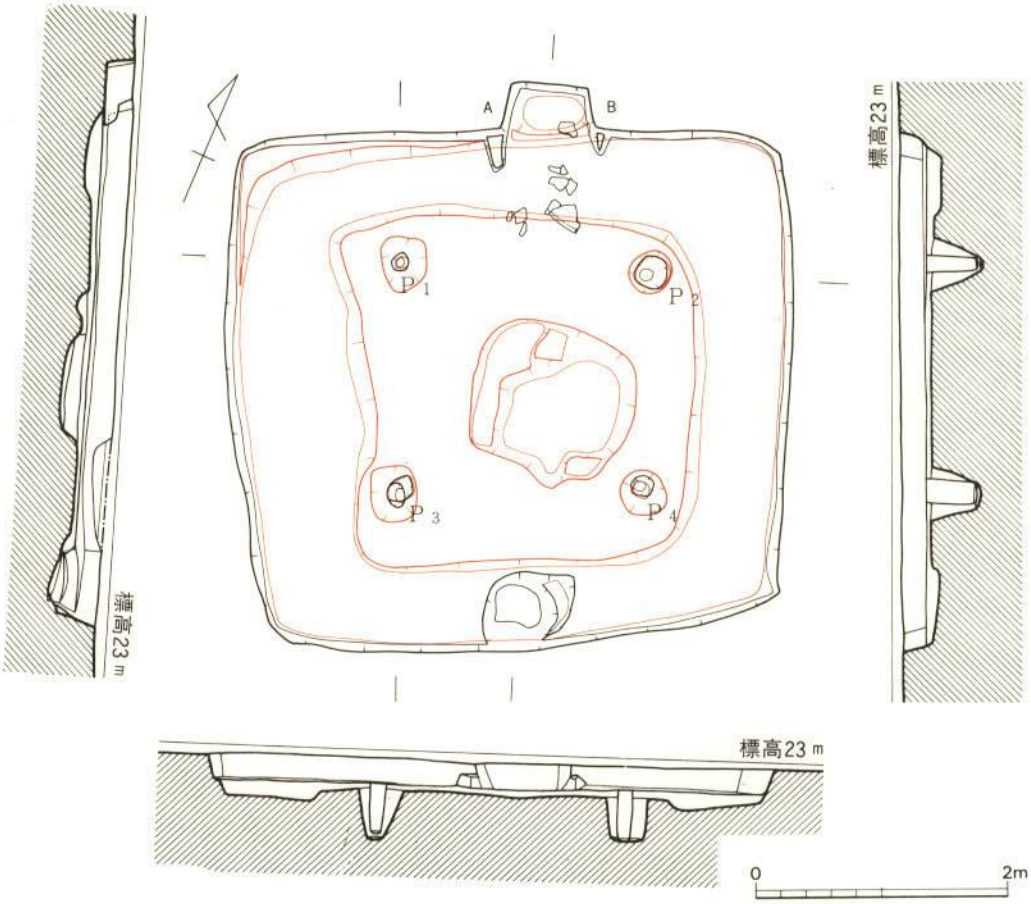
土師器（113）　ここに図示できるのは113一点で，他にカマドの支脚に使用した小形甕（第77図）があるだけである。113は床面出土で口径24.4cmに復原される甑で口縁部内外面をヨコナデし，その下部の内外面は縦位のヘラ削りと刷毛目調整を行っている。胎土に大粒砂粒を多く含み，焼成はふつう程度で淡茶灰色を呈する。

上記の甑とカマド内出土の支脚に使用された小型甕は本住居跡に確実に伴うものである。しかし，時期を判断しやすい土器の量が乏しい。小型甕は口頸部の屈曲がほとんどなくほぼ直立し，甑も口縁部の外側への折り曲げは顕著ではなく，3号住居跡出土の支脚や4号住居跡出土の甑と比べて刷毛目調整やヘラ削り技法において共通するが形態上に差異があり，そこに時期差を認められそうである。12号住居跡の時期的な位置づけについては，本集落遺跡の出土土器の大半が未整理の状況にあり差し控えておきたい。（児玉）

13号竪穴住居跡（図版43，第78・79図）

南東隅を後世の溝に切られ14号住居跡より南西2mの地点で検出した。平面形態は突出型のカマドがつく隅円方形を呈し，規模は長軸4.48m，短軸4.13m，壁高18～20cmを測り，床面積は16.1m²である。主軸方位はN19°Wである。主柱穴は4本で深さは36～50cmを測り，主柱穴を結んだ平面形はほぼ台形を呈する。主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁はほぼ平行となる。南壁中央部に長軸70cm，短軸55cm，上端面積0.3m²の落ち込みを検出した。深さ13cmで遺物は全く出土していないが本住居跡に伴なう遺構である。周溝は検出しなかった。床は厚さ3cmの貼床で床面下層より土壙と掘り込みを検出した。土壙の平面形態は不整円形を呈し，規模は長軸1.3m，短軸1.15m，上端面積1.3m²である。掘り込みは幅0.55～1.05mで壁に沿って住居内を廻っており，最も深い所で12cmを測る。

カマド（図版43，第79図）　北壁中央部やや東寄りに設置されている突出型のカマドである。遺存しているのは両袖だけであり，突出部を延長する様に黄褐色粘土をA点とB点に付着させ積み上げている。左袖は最大幅19cm，長さ31cm，右袖は最大幅19cm，長さ54cmを計測した。火床面はやや落ち込んで水平に造られていた。突出部は長軸67cm，短軸35cmを測り検出面より21



第78図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）

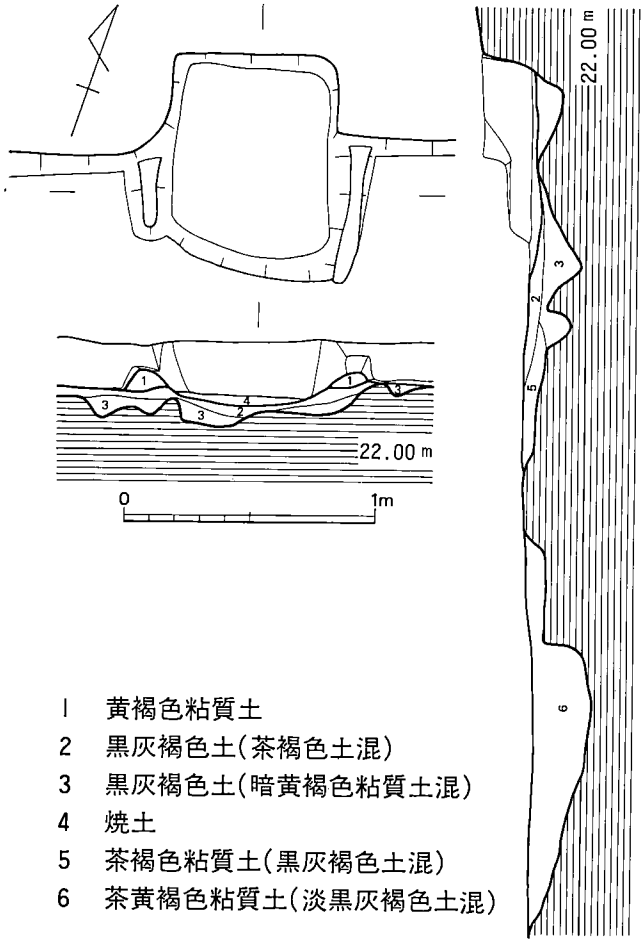
cmの深さで掘られ，突出部壁面に粘土は付着していない。　（武田）

出土遺物（第81図）

須恵器と土師器が出土しているが土器の出土量は少ない。図示した土器は，117の甑がカマド前面の床面から出土しているが，他は覆土中からの出土である。

須恵器（114）　極小片のため径・傾きは不正確である。外面の受け部以下は灰をかぶっている。他の部分は内面を含めて灰の付着はなく重ね焼きされたようである。Ⅳの古い時期に想定される。

土師器（115～118）　115は小型甕の底部片でススの付着具合から支脚に使われていたものである。116は口径18.8cmに復原される甕で，口頸部内面にススの付着が見られる。117は¼程度の残片からの反転図のため把手を図示していない。口縁部は12号住居跡出土の甑と比べて外反



第79図 13号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

の度合いが強く，刷毛目調整やヘラケズリはきめ細かく行われている。118は土鍋の底部であろう。本資料も破片からの反転復原図のため把手は図示していない。これらの土器は，外面は縦位刷毛目調整，内面は縦位ヘラケズリをされており，総じて白色砂粒を多く含み，焼成は良好で茶褐色、暗褐色を呈する。

上述の出土土器のうち，117の甑は4号住居跡出土のそれに通ずる形態を有し，114は覆土中からの出土であることを考えれば，本住居跡の所属時期は6C代のうちに含まれるのではないかと推定する。 (児玉)

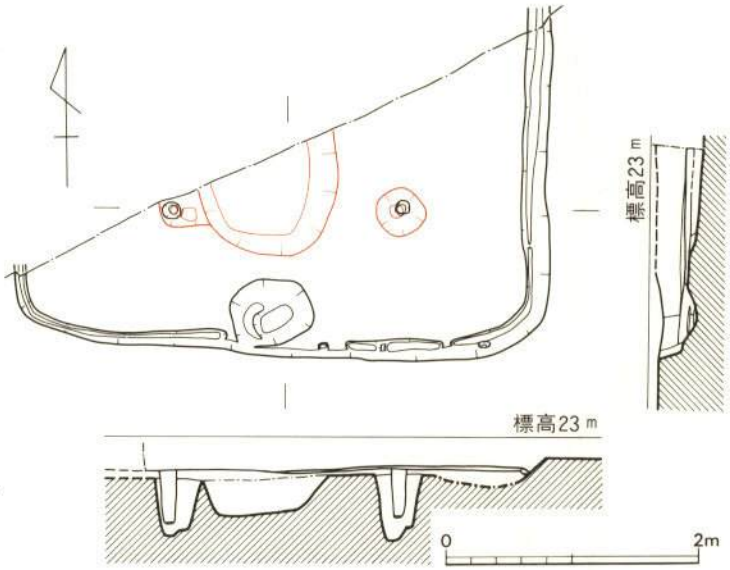
14号竪穴住居跡 (図版42, 第80図)

13号住居跡より北へ2mの地点に位置し，約¼程が調査区内にある。南辺は4.25mを測り壁高は10cm程である。主柱穴は4本でその内2本を検出した。深さは55cmと57cmと深く，主柱穴間隔は1.76mを測る。南壁中央部に13号住居跡と同形態の落ち込みを検出し，規模は長軸63cm，短軸52cm，上端面積0.3m²で深さは8cmである。周溝は不連続ながらも廻っており，落ち込みとは繋がっていた。深さは3～5cm程である。床は厚さ5cm程の貼床で，床面下層より土壙を検出した。半分程が調査区外となるが平面形態・規模などは他の住居跡と同様になると推定される。最も深い所で27cmを測る。 (武田)

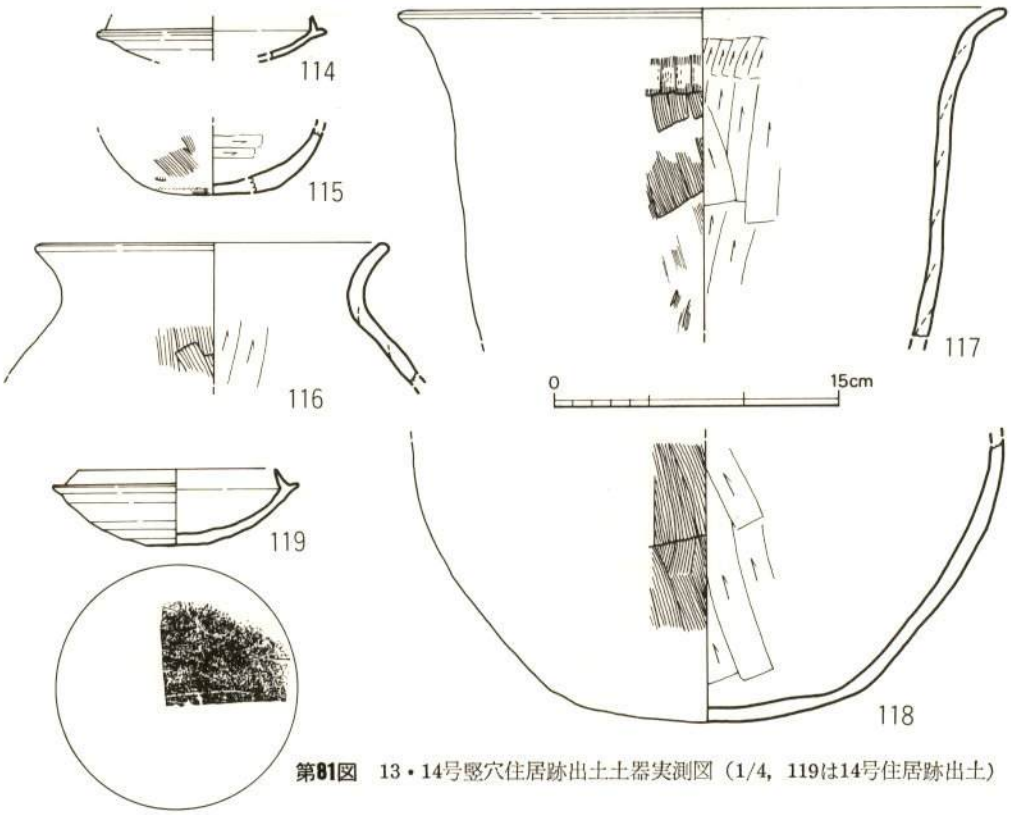
出土遺物（図版61，第81図）

住居跡全体の¼程度が調査区内にあるだけなので，土器の出土量は少なく，床面出土として上がった資料はない。

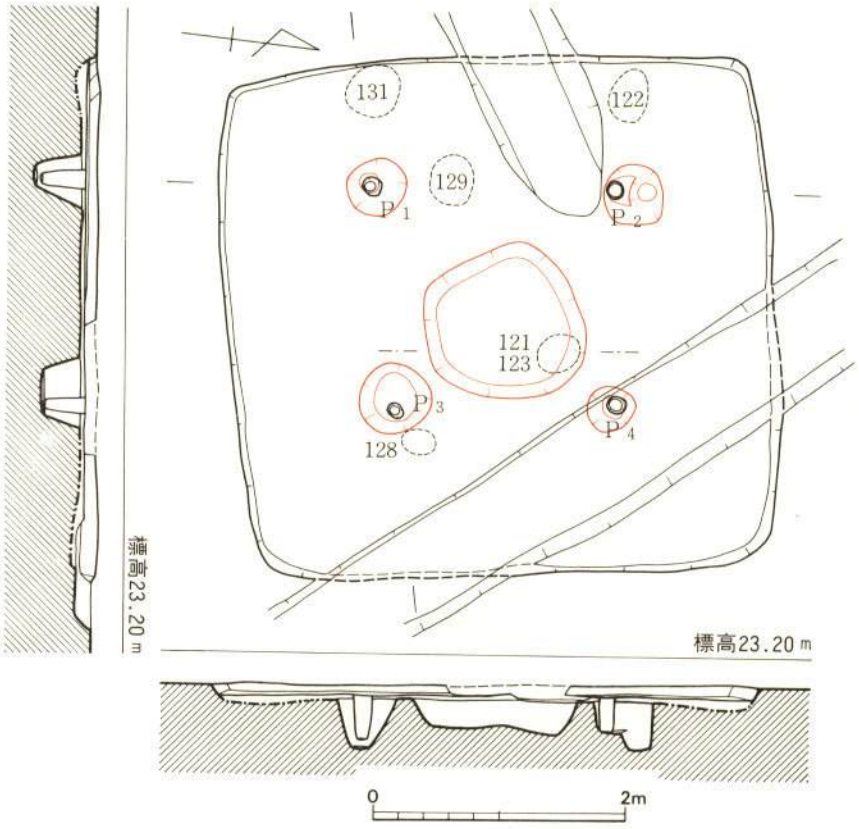
須恵器（119）　口径10.4cm，受け部径13cm，器高4cmに復原される。出土層位が不明で本住居跡の時期は不明である。　（児玉）



第80図　14号竪穴住居跡実測図（1/60）



第81図　13・14号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4，119は14号住居跡出土）



第82図 15号竪穴住居跡実測図（1/60）

15号竪穴住居跡（図版44，第82図）

16号住居跡を切り２条の後世の溝で切られた住居である。壁高は５㎝程で遺存状態は悪い。平面形態は隅円方形を呈し，規模は長軸4.35m，短軸4.1mで床面積は約 16.5㎡ を測る。主軸方位はＷ７°Ｓと推定される。主柱穴は４本で，深さは 24～36㎝とほぼ均一である。主柱穴を結んだ平面形はP_1～P_3が広い台形状を呈し，主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁はほぼ平行である。床は厚さ３㎝の貼床で，床面下層より土壙を検出したが，明瞭な掘り込みは存在しなかった。土壙の平面形態は不整円形を呈し，規模は長軸1.31m，短軸1.2m，上端面積1.3㎡で最も深い所は25㎝を測る。周溝は存在しない。

遺物の出土状況は，121の埦，122と123の高坏・128と129の甕と131の甑が床面上より出土した。甑が出土した周辺部にカマドが設置された可能性がある。カマドの支脚として使用されたと考えられる小型の甕は埋土中からの出土である。（武田）

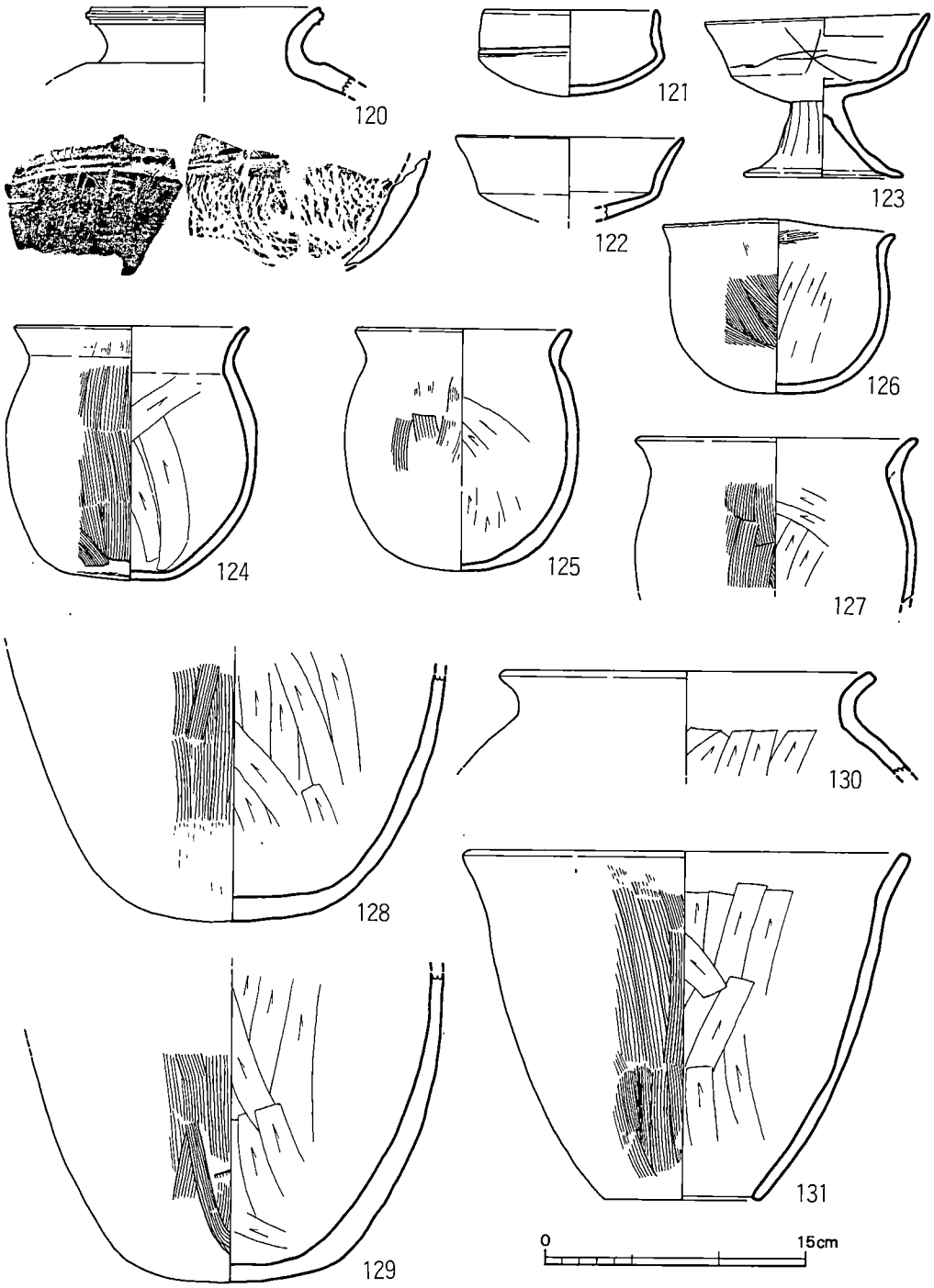
出土遺物（図版61・62，第83図）

新しい溝２条に攪乱されていたが、Ｂ地区においては比較的豊富な量の土器を出土した住居跡である。床面から５群に分かれて土器が出土している。それは121～123の小型の土器と128・129・131の甕・甑である（第　図）。他に124～126のように完形品に近いものもあるが，出土位置の記載がないので，一応，他の土器と同じく覆土中出土としてとりあつかう。

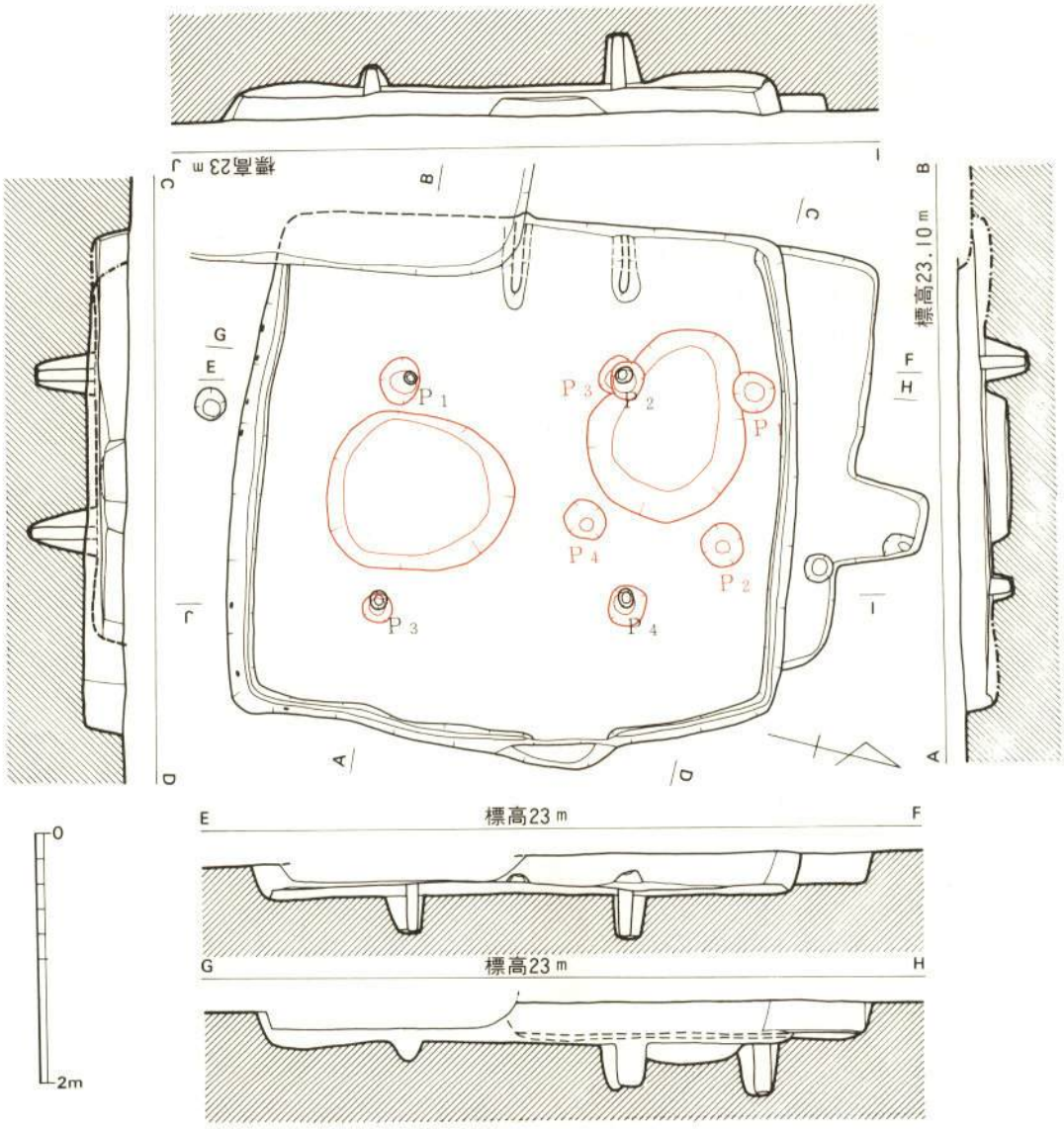
須恵器（120）　口径13cmを測る甕で，器肉が厚く，軟質の土器である。体部の破片も出土しているが，図上復原も困難なくらいの小片である。

土師器（121～131）　121は床面出土で細かく割れていたがほぼ完形に復原された。口径10cm・器高５cmを測る。器面の風化が進行しているが，外底面はこの器形の土器特有のヘラケズリを行っていたものと推定される。全体につくりが荒く明茶褐色を呈する。122・123も床面出土で，123は細かく割れていたが完形に復原された。口径13cm，器高9.3cmを測る。坏部外面に「×」印のヘラ記号と横位に不連続に付した細いヘラ描き状沈線がある。胎土は精撰され，焼成良好で淡茶褐色を呈する。122も123と同様である。124～127はカマドの支脚に使用されていたもので，127をのぞいてほぼ完形に近い。126は器高が10cmで，124・125が器高14cmを測るのに比べて４cm低い。口径は12～13cmとほぼ同じであるが，127は小片の反転復原図のため口径は正確ではない。口縁部のつくりは，124は口縁部が大きく外反し，127もそれに準ずるが，125はやや歪小化する。126は器形自体が他の３者と異なるため，口縁部だけの比較はできない。これらの甕と鉢はつくりや調整面の上で差異はほとんどなく，おおむね焼成は良好で，ススが外面に付着し，二次加熱により赤変している。128・129は床面出土の甕底部でこれらに接合する縁部は出土していない。ともに体部下半に黒斑を有している。砂粒を多く含み，焼成良好で淡茶褐色系統の色調である。130は口径21cmに復原される肩の張った甕である。胎土に砂粒をあまり含まず，焼成良好で茶褐色を呈する。131は¼程の破片からの反転復原図で把手は残っておらず図示していない。口径25cm、器高20cmに復原される。口縁部はやや外反し、胴下半部はやや内弯して丸味をもつ。胎土は大粒を多く含み，焼成良好でくすんだ茶褐色を呈する。

これら出土土器のうち，122・123の高坏は３号住居跡の高坏と器形，整作手法も同一のものであり，出土位置不明ながら124の小形甕は口縁部は大きくしっかりとしており，本遺跡出土の支脚の中では古い部類に属する。よって15号住居跡は６Ｃ代のうちに含まれるだろうと考えられる。（児玉）



第83図 15号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



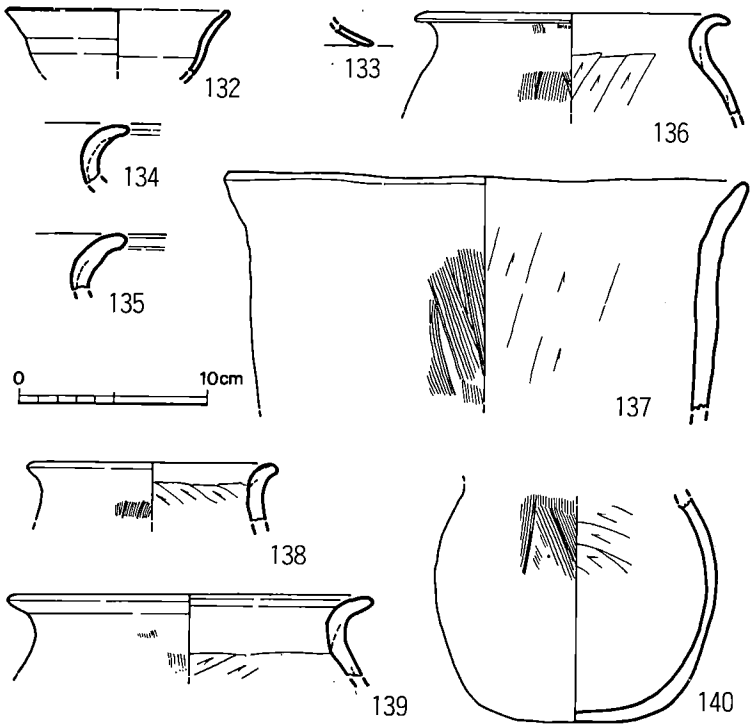
第84図 16・17号竪穴住居跡実測図（1/60）

16号竪穴住居跡（図版44，第84図）

15号住居跡にカマドより南西部を切られ，17号住居跡の大半を切っている。平面形態は隅円方形になるであろう。規模は長軸4.52m，短軸4.27m，床面積は約16m^2で壁高は25cmを測る。主軸方位はW14°Sである。主柱穴は4本で，深さはP$_4$が極端に浅く他はほぼ均一である。主柱穴を結んだ平面形はP$_2$～P$_4$が広い台形状を呈し，主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁はP$_2$～P$_4$と北壁，P$_1$～P$_3$と南壁がほぼ平行である。東壁中央部付近に張り出し部を検

出し，幅95cmにわたって最大15cm張り出して床面より5cm上に段がついている。張り出し部には周溝が途切れていることから，何らかの施設が設けられていたと考えられる。堆積状況に何ら変化したところは観察されなかったので，この遺構については今後の課題としたい。また，本住居跡に関連する遺構と考えられる杭状の痕跡を壁面より検出した。南壁の4本は床面より10cm上に25～30cm間隔に並んでおり，南東隅付近の3本は床面よりの高さ，間隔とも不規則である。性格については類例を待ちこれも今後の課題としたい。周溝は東壁中央部60cmとカマド右袖から北西隅までを除き検出し，深さは5cm程である。床は厚さ5cm程の貼床で，床面下層より土壙2個と柱穴4本を検出した。P_1～P_3間に位置する土壙が本住居跡に伴なうと考えられ，北側の土壙はP_2が切っているので本住居以前の遺構であり17号住居跡に伴なうと考えられる。P_3は南西の柱穴も切っていた。本住居跡の土壙の平面形態は不整円形を呈し，規模は長軸1.5m，短軸1.25mで上端面積1.6m²，深さ18cmを測る。掘り込みは明瞭には検出されなかった。

カマド 西壁中央部に検出したが，15号住居跡に左袖を崩され右袖も大半が崩れ旧態をとどめず，規模・形態とも不確かである。 （武田）



第85図 16・17・18・19号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4，16号—132～137，17号—138，18号—139，19号—140）

出土遺物（図版63，第85図）

図示した土器は137の甑がカマド周辺から出土した以外は覆土中からの出土である。須恵器は出土しておらず，弥生時代末頃の土器片が覆土中から10片程出土している。

土師器（132～137）

132は高坏坏部かと思われる。極小片のため，傾き・径は不正確だが口径は12cm程度に推定復原される。133は高坏脚裾部分片である。両者とも胎土は精撰され，焼成はややあまく，132はくすんだ灰色，133は明る

い淡茶褐色を呈する。器面が風化し，調整は不明である。134〜136は覆土中出土の甕で136は口径17cm弱に復原される。口縁端部は外側に折り曲げられ，136はその傾向が特に強い。136は胎土が緻密だが他は砂粒を多く含み，焼成はともに良好で茶褐色を基調とし，136は灰色を帯びる。137は1/8程の残片からの復原図のため，口径・傾きは不正確である。口縁部は外反し，ゆるい「く」字形を呈する。大粒砂粒を多く含み，焼成良好で淡い灰褐色を呈する。

以上の土器のうち，137の甑小片だけが本住居跡に伴う可能性があるだけで，住居跡の時期を推定する資料に乏しい。だが，16号住居跡は15号住居跡に切られており，後者は6C代に含まれる可能性があるので，16号住居跡は7C代まで降ることはないと考える。（児玉）

17号竪穴住居跡（図版44，第84図）

16号住居跡に大半を切られた突出型のカマドを持つ住居跡である。平面形態・規模は不明である。主柱穴は16号住居跡床面下より検出した4本である。深さはほぼ均一で，主柱穴を結んだ平面形は台形を呈する。16号住居跡と同様の杭状の痕を西北隅の壁面で検出した。柱穴と同様に16号住居跡床面下北側の土壙が本住居に伴なう遺構である。平面形態は長楕円形を呈し，規模は長軸1.55m，短軸1.25mで上端面積1.5m²，深さ21cmを測る。床は薄い貼床で周溝は存在しなかった。主軸方位はN8°Wである。

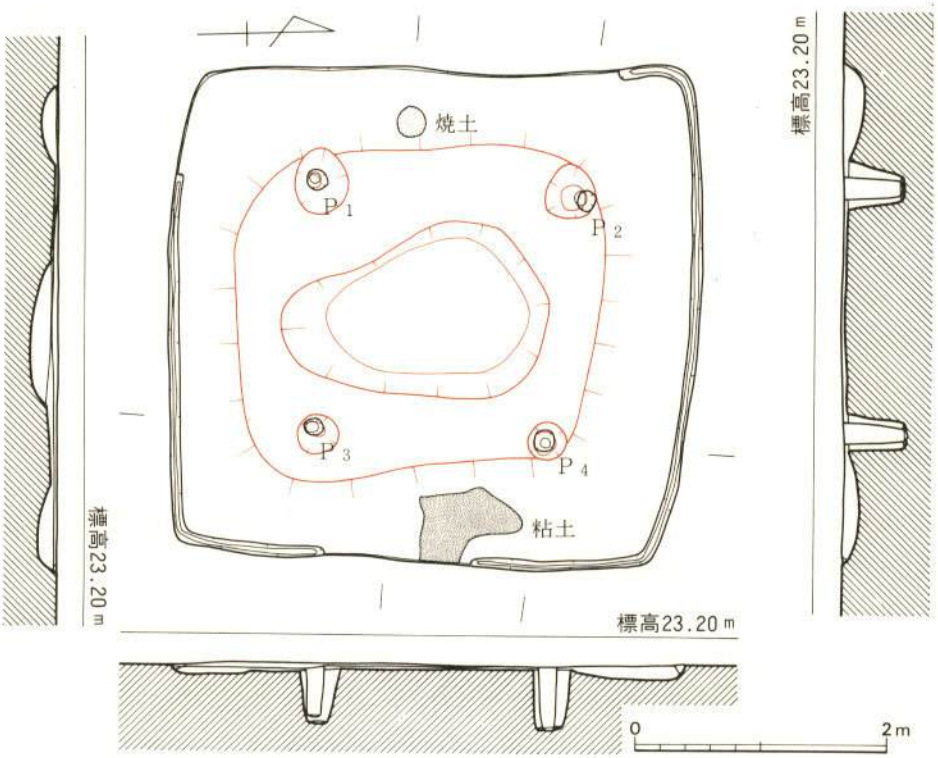
カマド（図版44） 13号住居跡と同様の突出型カマドである。突出部の平面形態は台形を呈し両袖は存在しなかった。突出部壁面に粘土は付着しておらず，火床面はやや窪んでおり一部に焼土と化した面を観察した。（武田）

出土遺物（第85図）

本住居跡は16号住居跡に大きく切られているので出土遺物はごく少なく，住居跡に伴う資料はない。ただ，カマドの下層と記名された小形甕片があり，貼り床下層に相当する層位からの出土品である。

土師器（138） 貼り床下層に相当する所で出土した小形の甕で，口径12cmに復原される。ススが付着しており，この小形甕の他の出土例より考えて支脚に使われていたものである。胎土は緻密で，焼成良好で暗褐色を呈する。

この住居の居住時期を示す資料はないが，16号住居跡に切られており，先述した理由から6C代に含まれるとみて差し支えなかろう。（児玉）



第86図 18号竪穴住居跡実測図（1/60）

18号竪穴住居跡（図版45，第86図）

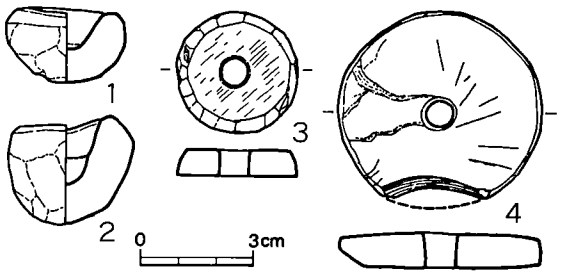
B区東端で19号掘立柱建物より南へ2m離れて検出した。壁高はほとんどなく遺存状態の悪い住居跡である。平面形態は隅円方形を呈し，規模は長軸4.22m，短軸3.89mで床面積は15㎡を測る。主軸方位はN88°Wとほぼ西向となる。主柱穴は4本で，深さは38〜48cmとほぼ均一である。主柱穴を結んだ平面形はP1〜P2の広い台形を呈し，主柱穴を結んだ線とそれに対応する壁はほぼ平行である。東壁中央部に6・11号住居跡と同様の粘土が堆積していた。床面と粘土の間に薄い黒褐色土が層をなしているので，何らかの施設が崩れた可能性が考えられ，粘土中より甕片と把手が出土している。周溝は西壁及び東壁中央部1.2mを除いて検出した。幅8cm，深さ3〜6cmを測る。床は厚さ3cm程の貼床で，床面下層より土壙と掘り込みを検出した。土壙の平面形態は長楕円を呈し，規模は長軸2.15m，短軸1.3mで上端面積2.1㎡と深さ12cmを測る。掘り込みは幅60〜80cmで住居内を壁に沿って廻っており，最も深い所で12cmを測る。

南壁中央部の周溝近くの床面より滑石製の紡錘車が出土した。

カマドは遺存しないが西壁中央部周辺で焼土が観察され，この付近に設置されていた可能性がある。（武田）

出土遺物（図版63，第85・87図）

貼り床がほとんど残らないまでに削平されており本住居跡の時期を直接的に知る資料はない。東側壁の床面から紡錘車が1点出土している。出土土器はほとんどないに等しいが，貼り床下層の埋め土の中から土師器が少量出土している。



第87図 手捏土器・紡錘車実測図（1/2，1—3号住，2—5号住，3—18号住，4—7号住出土）

土師器（139） 口径19cmに復原される甕で頸部は直立し，口縁部は外反する。口縁部内面にススが付着している。

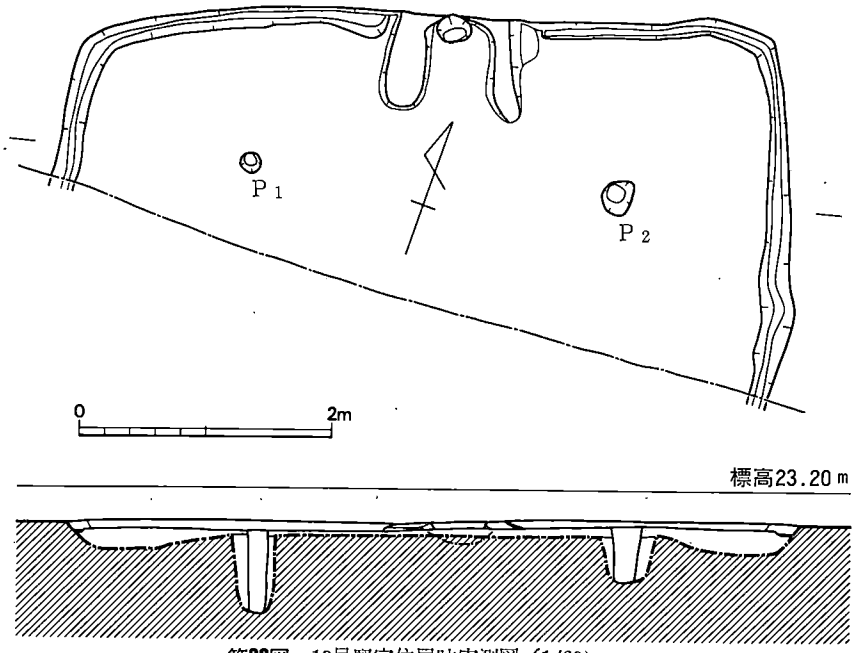
紡錘車（第87図-3） 径3.2cm，厚さ7mm，孔径7～8mmを測る完形品である。側面は研磨の際の稜が鈍く残り，上面には同一方向の擦痕が残る。12.45gを測る。石材は良質の滑石である。

本住居跡は直接に所属時期を示す資料がなく，その居住期間を判断することは困難だが，その上限は，貼り床下層の埋め土内出土の139にみることができる。頸部が直立し，口縁部が外縁部が外反するこのタイプの甕は，既述資料の中で3・6・7号住居跡から出土している。これらの土器は6C後半の新しい時期に含まれると考えているが，139は先述3軒の出土甕の口縁部よりも外反の度合いが少し強く，やや新しいかと思われる。よって，18号住居跡の上限は6C未におくとしても，その居住時期は7C代以降である。（児玉）

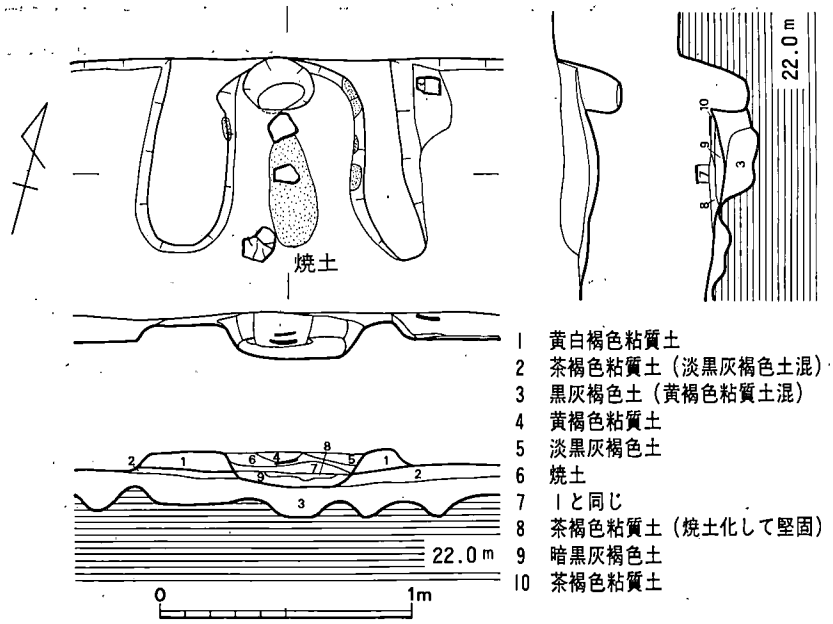
19号竪穴住居跡（図版45，第88・89図）

掘立柱建物が密集するB区東端で検出し，½以上が調査区外となり正確な規模が不明な住居跡である。北辺は5.5m，主柱穴 P_1～P_2 が2.92mを測る隅円方形を呈する大型住居跡と推定される。主柱穴は4本でその内2本を検出した。周溝はカマド部を除いて廻っており深さは3～4cmである。床は厚さ3～5cmの貼床で，床面下層より部分的に不明瞭な掘り込みを確認した。

カマド（第89図） 壁高が7cm程なので遺存するのは両袖のみである。北壁のほぼ中央部に設置されており後世のピットにより一部崩されていた。両袖の規模は左袖が最大幅38cm，長さ78cm，右袖が最大幅28cm，長さ80cmを計測する。火床面の平面形態は長方形を呈し，中央部周辺に長楕円形の焼土化した床を検出した。また両袖の内面にも焼土化した部分がある。築造過程は掘り込みと貼床を施した後にカマド本体を積み上げている。土層図で火床面がくぼんでいるのは意識的に造られたか灰の掻き出しにより生じたかは不明である。（武田）



第88図　19号竪穴住居跡実測図（1/60）



第89図　19号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物（図版62，第85図）

住居後全体の⅔が調査区外にあり，出土遺物は少ない。カマド左袖前面の床面から小形の甕が出土している。

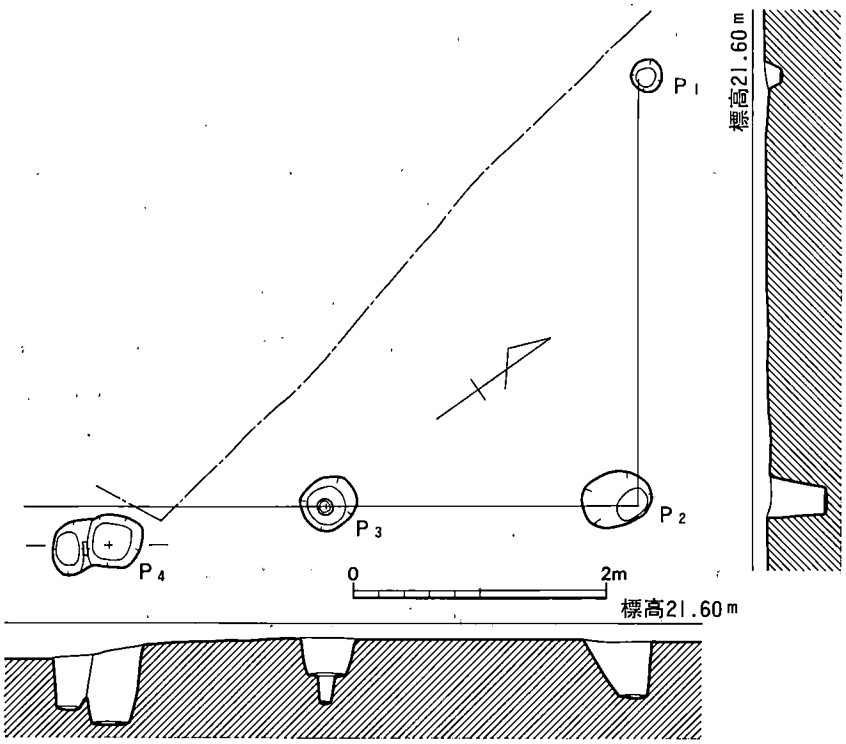
土師器（140）　口縁部を欠失し，破片資料である。全形は15号住居跡出土の小形甕124に近似すると思われ，口縁部がわりとしっかりとして大きなタイプのものだろう。胴部最大径以下は二次加熱で器壁が荒れている。砂粒を多く含み，焼成は良い方で赤色した淡褐色を呈する。

本住居跡も出土資料に乏しく時期比定が難しいが，図示した土器は支脚として古いタイプのものである。この土器は，支脚として使用していた時に割れるなどして取り外されて床に置かれたのではないか，と思われる状態で出土している。よって，19号住居跡は6C代に含まれるだろうと推定する。（児玉）

20号竪穴住居跡

16号住居跡より北東9mの地点で検出した。主柱穴を含めて大半が調査区外のため規模は不明である。壁高は12cmを測るが，遺物は全く出土しなかった。図面は省略した。（武田）

(2) 掘立柱建物



第90図　1号掘立柱建物実測図（1/60）

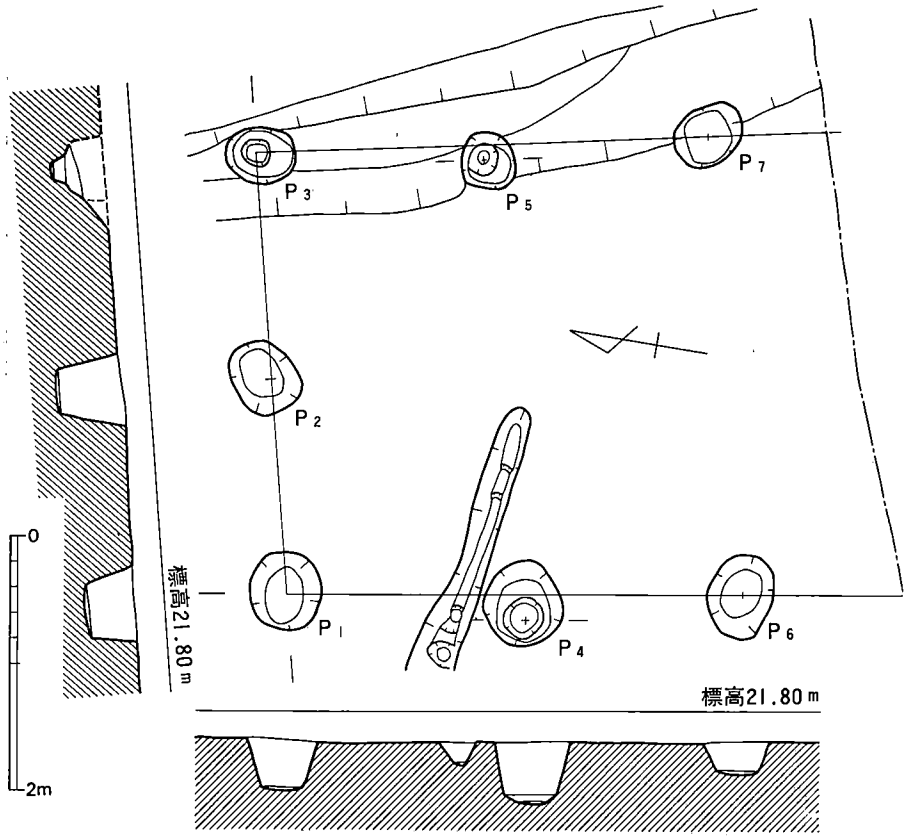
1号掘立柱建物（第90図）

E区東部南に位置し，西側は植木畑で削平され，南側は路線外で調査出来ず，詳細は分からない。P_2—P_3の方位はN35°Eを示す。

第11表　1号掘立柱建物計測表

	柱間寸法		柱間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P_1 P_2	335	P_2 P_3	247	1	15	25×27	3	50	45×45
		P_3 P_4	175	2	47	45×55	4	62	42×42

（単位はcm）



第91図 2号掘立柱建物実測図（1/60）

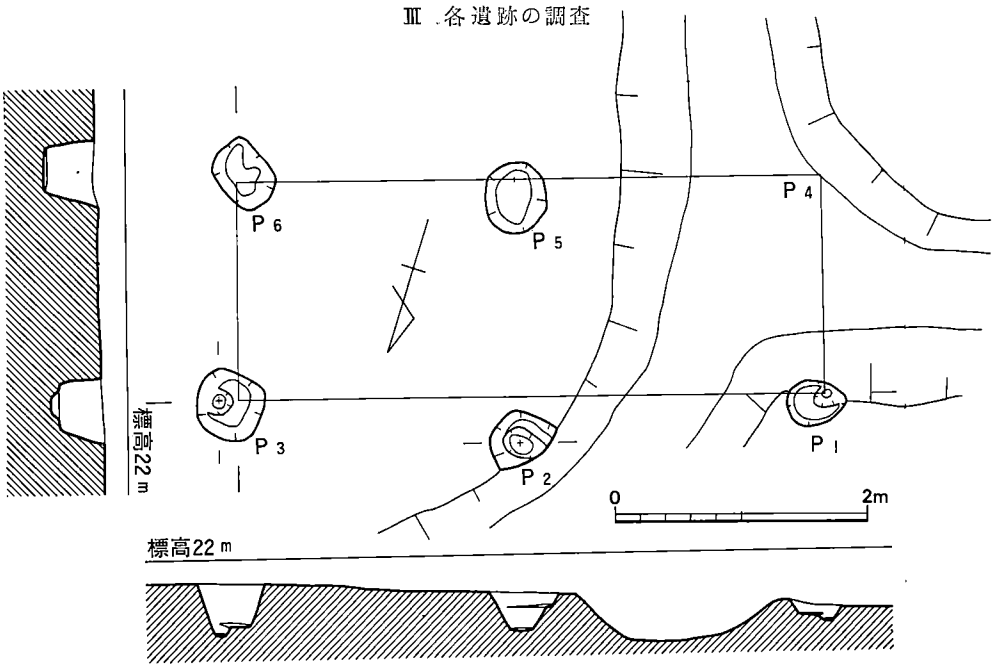
2号掘立柱建物（図版46，第91図）

E区南部に位置し，南側は路線外で未発掘のために詳細は分からないが，梁行2間×桁行3間の建物であろう。P₃ P₅ P₇は近代の溝によって上面を削平されている。柱穴底面中心を結んだ∠P₆ P₁ P₃の角度はおよそ94°30′，∠P₁ P₃ P₇は88°である。P₄はP₁—P₆線上から略西に15cmずれ，P₅はP₃—P₇線上から略西に10cmずれるが，P₁—P₃・P₄—P₅・P₆—P₇はほぼ平行で桁行柱間は約1.8m，梁行柱間は約3.6mで全体に西側に歪んだ長方形を呈する。P₃—P₇の方位はN11° Wを示す。

第12表 2号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	p	深さ	掘方径	p	深さ	掘方径
P_1 P_2	175	—	P_1 P_4	190	—	1	42	57×62	6	28	50×65
P_2 P_3	175	350	P_4 P_6	175	—	2	54	50×60	7	36	45×58
P_4 P_5	—	362	P_3 P_5	180	—	3	37	45×55			
P_6 P_7	—	362	P_5 P_7	180	—	4	48	63×67			
平均	175	358	平均	181	—	5	32	42×45			

（単位はcm）



第92図　3号掘立柱建物実測図（1/60）

3号掘立柱建物（第92図）

E区中央部北に位置し，1号住居跡の東側にある。P_4は後世の溝に切られて未確認である。現状で梁行1間×桁行2間の建物が建つが，北側の部分が道路のために未調査なので2間×2間の総柱建物の可能性がある。現状で，規模は梁行1.89m×桁行4.80mで，P_1—P_3の方位はN72°Eである。

第13表　3号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法
P_1 P_4?	?	?
P_2 P_5	208	—
P_3 P_6	170	—
平均	189	—

	桁行柱間寸法	桁行間寸法
P_1 P_2	245	—
P_2 P_3	240	480
P_4 P_5	?	—
P_5 P_6	220	?
平均	235	480

P	深さ	掘方径
1	16	36×50
2	29	50×50
3	42	50×52
4	?	?
5	34	50×55
6	43	40×55

（単位はcm）

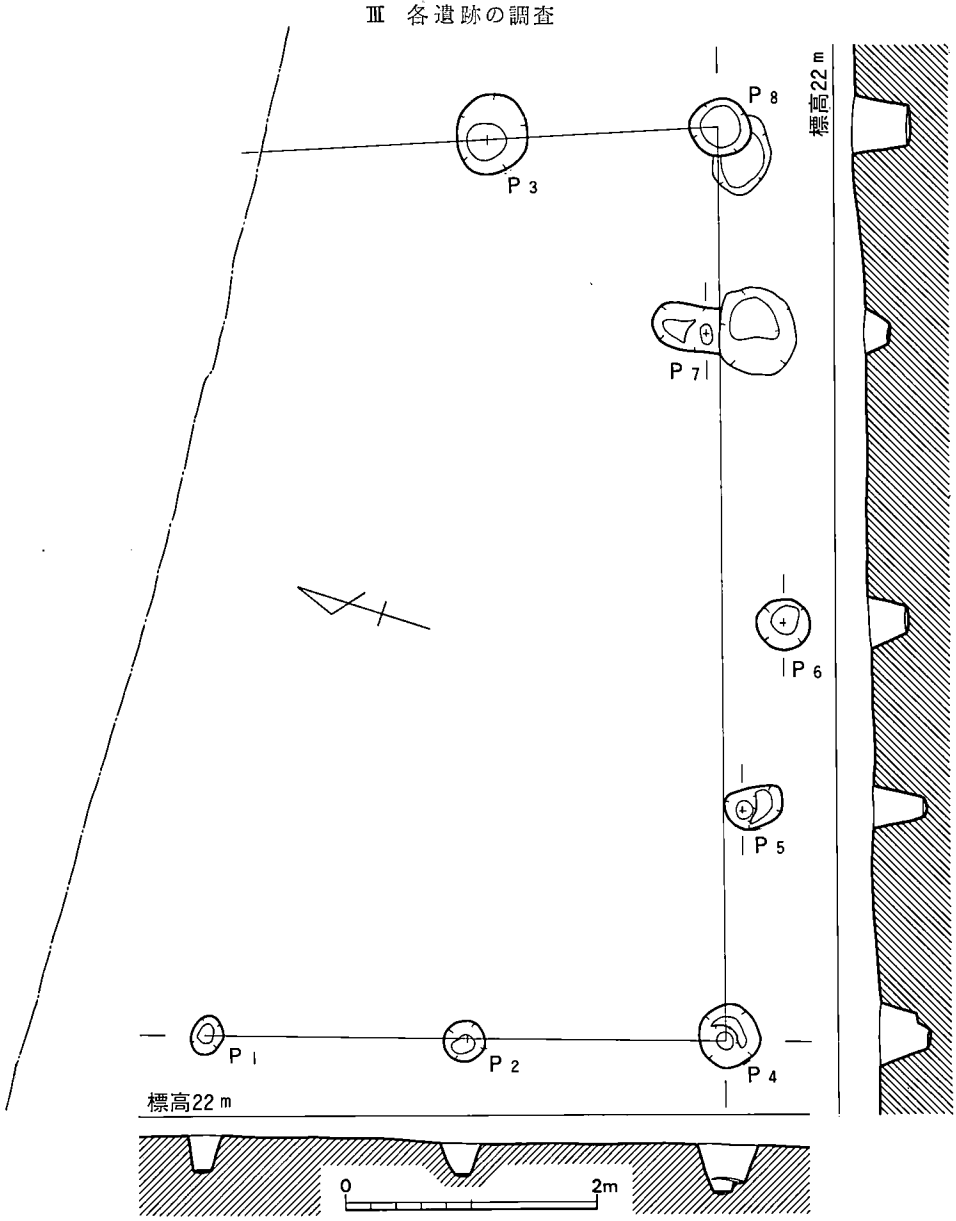
第14表　4号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法
P_1 P_2	210	—
P_2 P_4	205	—
P_3 P_8	185	—
平均	200	—

	桁行柱間寸法	桁行間寸法
P_2 P_3	—	705
P_4 P_5	180	—
P_5 P_6	150	—
P_6 P_7	235	—
P_7 P_8	165	720
平均	183	713

P	深さ	掘方径
1	30	25×30
2	26	32×32
3	53	56×65
4	39	50×50
5	42	32×46
6	31	42×42
7	22	30×40?
8	43	45×50

（単位はcm）

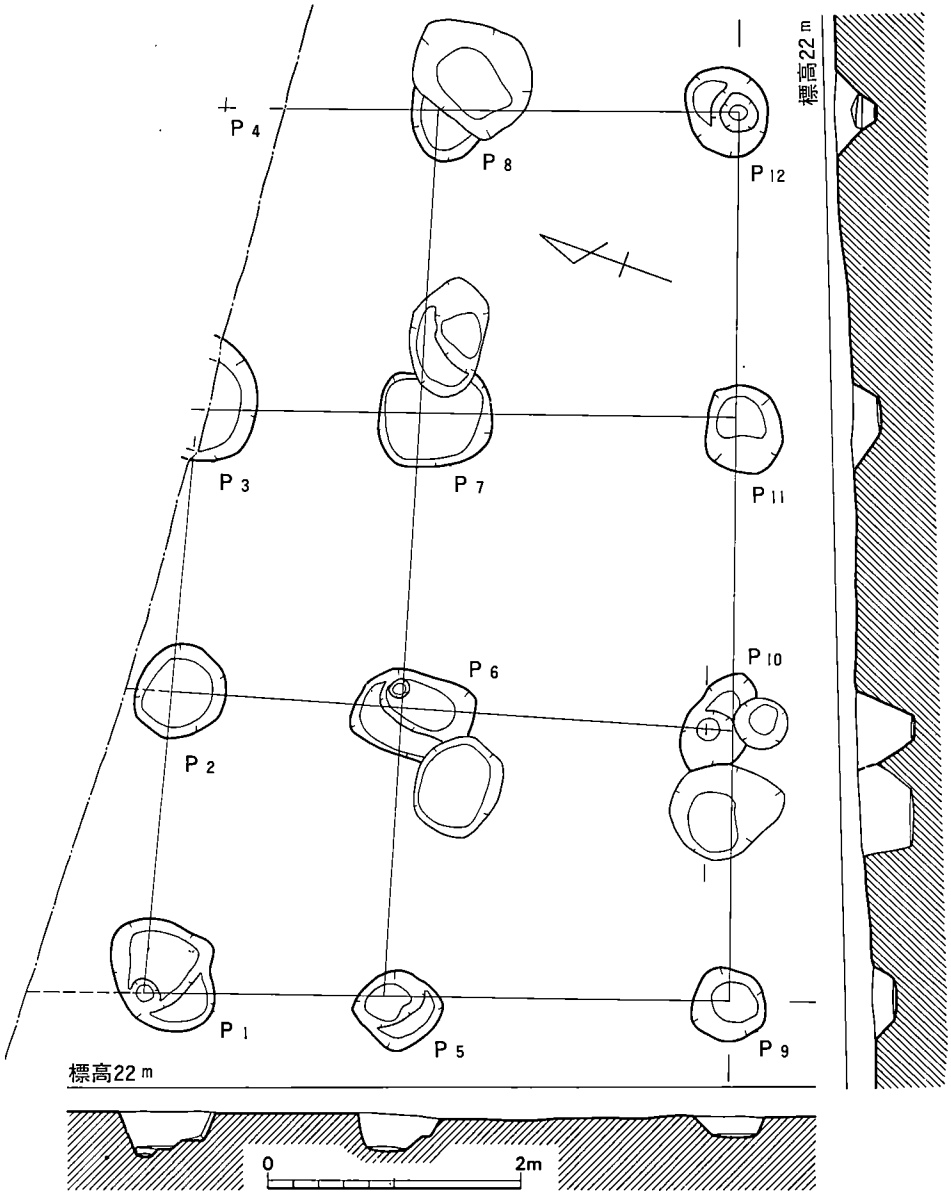


第93図 4号掘立柱建物実測図（1/60）

4号掘立柱建物（図版46，第93図）

E区中央部北方に位置し，5・6号建物と重複しているが建物相互の掘方の切り合いはない。北側が道路のために未発掘であるが梁行3間×桁行4間の建物であろう。内角はおよそ∠P_1 P_4 P_8は89°；∠P_4 P_8 P_3は87°30′である。桁行柱列はP_4—P_8線上からP_5は略南に15cm，P_6は略南に50cm，P_7は略北に10cmずれ，雑然と並んでいる。

P_4—P_8の方位はN72°Eを示す。



第94図　5号掘立柱建物実測図（1/60）

5号掘立柱建物（図版46，第94図）

P_3 P_4 は全掘していないが，現状では梁行2間×桁行3間の総柱の建物であるが，北側は道路のために未発掘であり，広がって3間×3間の建物になる可能性もある。四隅の内角はおよそ∠P_9 P_1 P_4 は85°30′，∠P_1 P_4 P_{12} は94°30′，∠P_4 P_{12} P_9 は90°，∠P_{12} P_9 P_1 は90°である。P_{10} は P_9—P_{12} 線上より略北に20cmずれるが，柱列の桁行方向はほぼ2.3

mの間隔を保って平行である。梁行方向をみると北側はほぼ1.8mの間隔で南側は P5—P9 の2.75mを除いて2.4mか2.5mである。現状で規模は梁行4.38m×桁行7.00mで，主軸は N74° Eである。

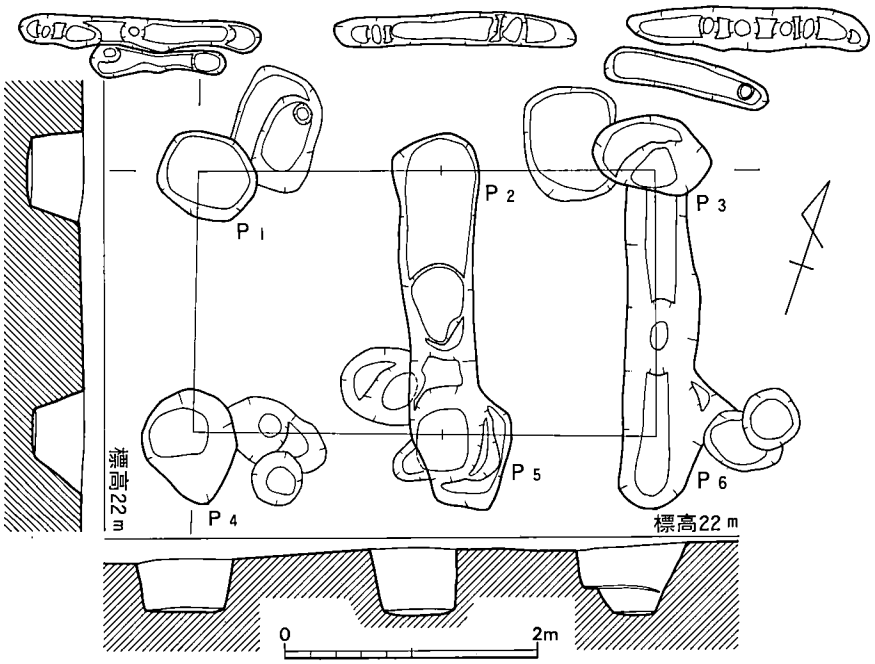
第15表　5号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法
P1\P5	190	—
P5\P9	275	465
P2\P6	185	—
P6\P10	240	425
P3\P7	175	—
P7\P11	250	425
P4\P8	?	—
P8\P12	240	?
平均	222	438

	桁行柱間寸法	桁行間寸法
P1\P2	240	—
P2\P3	225	—
P3\P4	?	?
P5\P6	230	—
P6\P7	230	—
P7\P8	240	700
P9\P10	215	—
P10\P11	245	—
P11\P12	240	700
平均	233	700

P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
1	35	75×90	11	24	60×70
2	47	70×75	12	35	65×70
3	34	90?×100			
4	?	?			
5	29	60×60			
6	36	65×90			
7	34	75×90			
8	31	65×90			
9	15	60×60			
10	46	55×70?			

(単位はcm)



第95図　6号掘立柱建物実測図（1/60）

6号掘立柱建物（図版46，第95図）

梁行1間×桁行2間の建物であろう。梁行方向 P2—P5・P3—P6 は中央部から南側は数個の柱穴が切り合い溝状になっており，北側は50cm～60cm巾で溝状に中央部まで掘られている。これらはこの建物に関連したものなのか否か分からなかった。細い断続的な溝が建物の桁行方向と平行して北側にあるがその性格は不明である。規模は梁行2.10m×桁行3.63mで，主軸は

N72°E である。

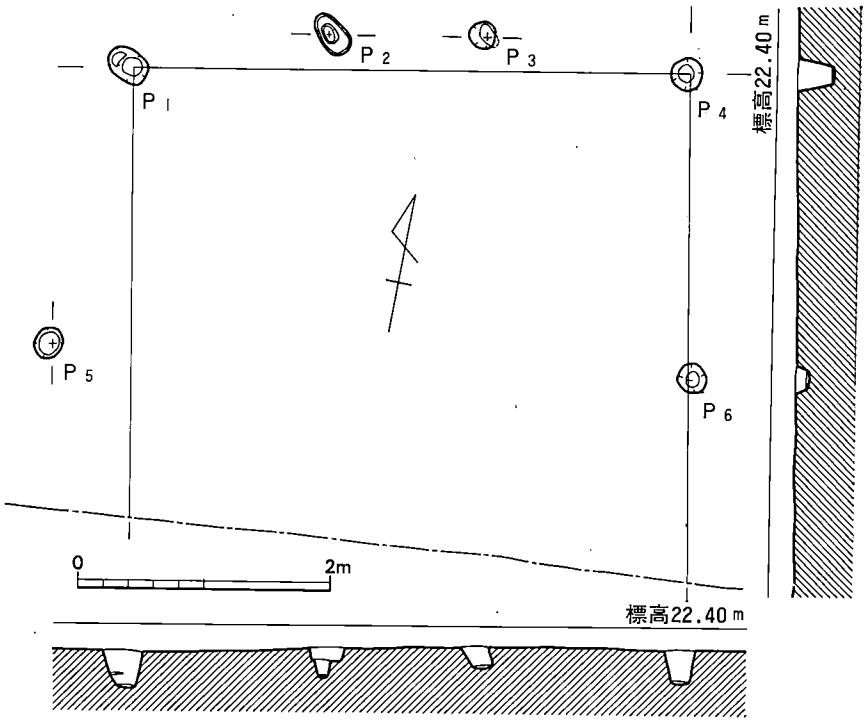
第16表　6号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法
P1 P4	—	210
P2 P5	—	210
P3 P6	—	210
平均	—	210

	桁行柱間寸法	桁行間寸法
P1 P2	190	—
P2 P3	170	360
P4 P5	195	—
P5 P6	170	365
平均	181	363

P	深さ	掘方径
1	44	66×75
2	54	70×70?
3	56	60×90
4	42	75×90
5	52	60×80?
6	52	60×?

（単位は*cm*）



第96図　7号掘立柱建物実測図（1/60）

7号掘立柱建物（第96図）

D区南側中央部に位置し，西隣りに3号住居跡がある。南側は道路のために未発掘で，広がりは分からない。東西方向の柱列はP1—P4線上からP2は略北に28*cm*，P3も略北に27*cm*ずれる。P5はP1を基点にP4—P6と平行に結んだ線上より略西に62*cm*ずれる。P1—P4の方位はN80°Eである。

第17表　7号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法
P1 P2	157	—
P2 P3	125	—
P3 P4	165	440
P5 P6	—	505
平均	149	473

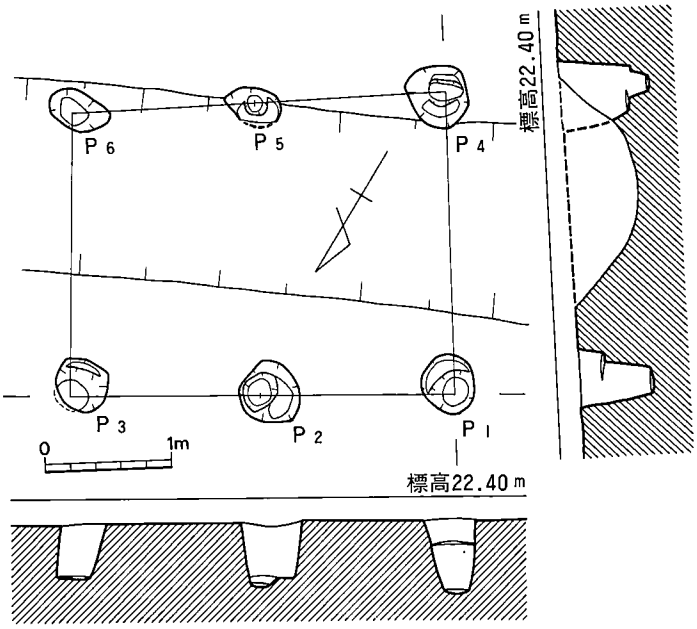
	桁行柱間寸法	桁行間寸法
P1 P5	225	—
P4 P6	240	—
平均	230	—

P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
1	29	25×32	4	29	25×25
2	22	20×35	5	9	24×24
3	15	21×21	6	10	24×24

（単位は*cm*）

8号掘立柱建物（図版46，第97図）

7号建物の北に位置し，東南に4号住居跡がある。梁行1間×桁行2間の建物である。四隅の内角はおよそ∠P₆P₄P₁が88°30′，∠P₄P₁P₃が88°30′，∠P₁P₃P₆が90°，∠P₃P₆P₄が93°である。梁行柱列はほぼ平行に配置し，桁行柱間はほぼ1.5mの間隔である。南側の柱穴は近代の溝によって上面を切られているが，直径45cm前後の円形の掘方で，深さは50cm前後でしっかりしたものである。規模は梁行2.30m×桁行3.00mで，主軸はN58°Eである。



第97図 8号掘立柱建物実測図（1/60）

第18表 8号掘立柱建物計測表

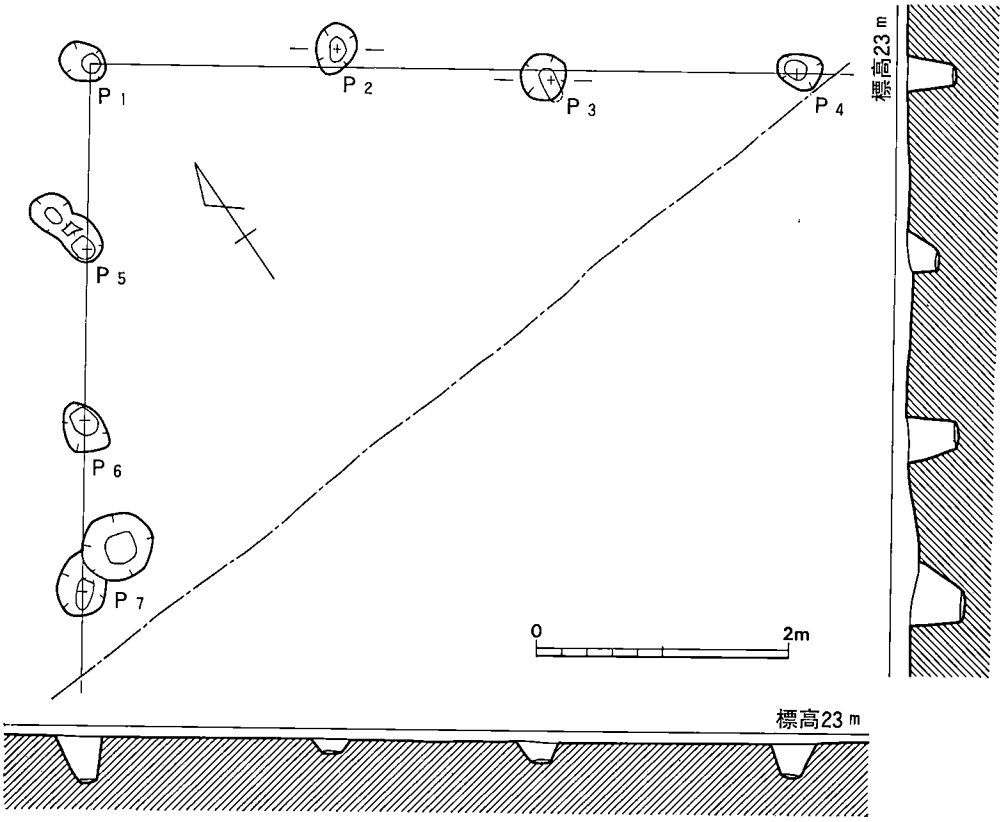
	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P₁ P₄	—	238	P₁ P₂	155	—	1	58	40×47	6	37	30×40?
P₂ P₅	—	230	P₂ P₃	150	305	2	52	48×50			
P₃ P₆	—	222	P₄ P₅	150	—	3	45	40×40			
平均	—	230	P₅ P₆	145	295	4	65	50×50			
			平均	150	300	5	53	45×45			

（単位はcm）

第19表 9号掘立柱建物計測表

	柱間寸法		柱間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P₁ P₂	195	P₁ P₅	145	1	37	30×32	5	26	30×35
P₂ P₃	172	P₅ P₆	135	2	11	32×35	6	40	35×38
P₃ P₄	195	P₆ P₇	135	3	17	35×35	7	43	40×45
平均	187	平均	138	4	27	28×35			

（単位はcm）



第98図 9号掘立柱建物実測図（1/60）

9号掘立柱建物（図版41，第98図）

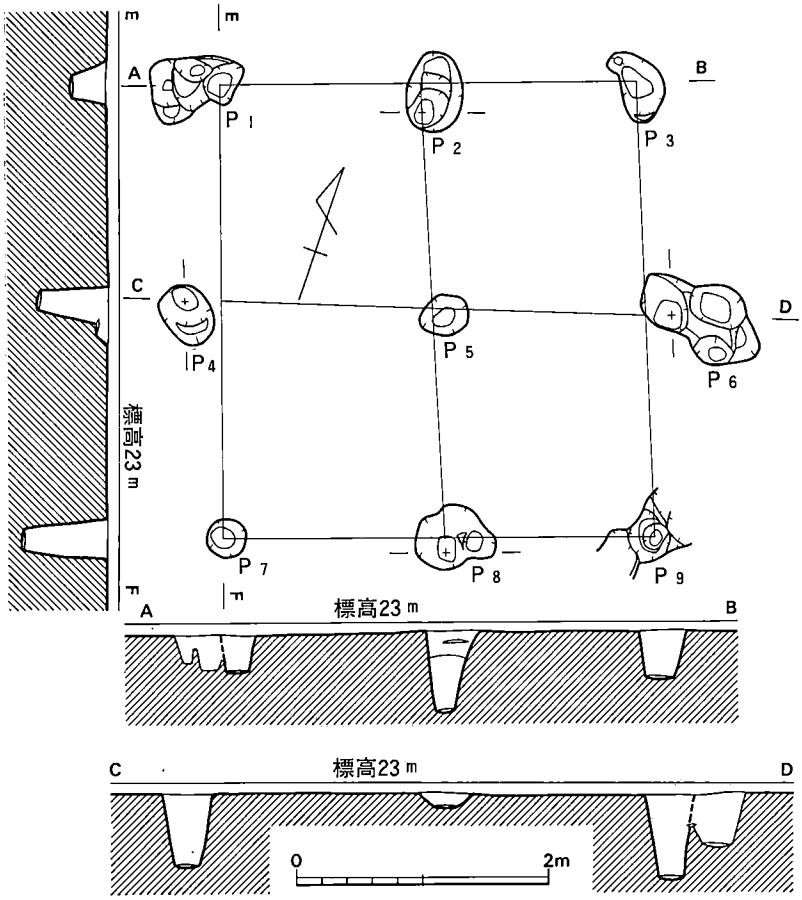
B区西側11号住居跡に隣接したところに位置し，10・11・12号建物と重複しているが掘方の切り合いはない。南側は道路のために未発掘で，広がりは分からない。P_1—P_7は柱列が整然と並び，∠$P_7P_1P_4$は直角をなす。P_2P_3はP_1—P_4線上から略北に15cm，略南に7cmずれる。P_1—P_4の方位はN54°W，P_1—P_7の方位はN36°Eである。

第20表 10号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法
P_1—P_2	162	—	P_1—P_4	175	—
P_2—P_3	172	330	P_4—P_7	190	357
P_4—P_5	210	—	P_2—P_5	160	—
P_5—P_6	180	388	P_5—P_8	185	347
P_7—P_8	177	—	P_3—P_6	185	—
P_8—P_9	165	343	P_6—P_9	175	360
平均	178	354	平均	178	355

P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
1	28	30×35	8	46	35×45
2	64	45×45	9	40	35×45
3	38	35×50			
4	58	40×50			
5	11	33×40			
6	69	35×45			
7	51	30×32			

（単位はcm）



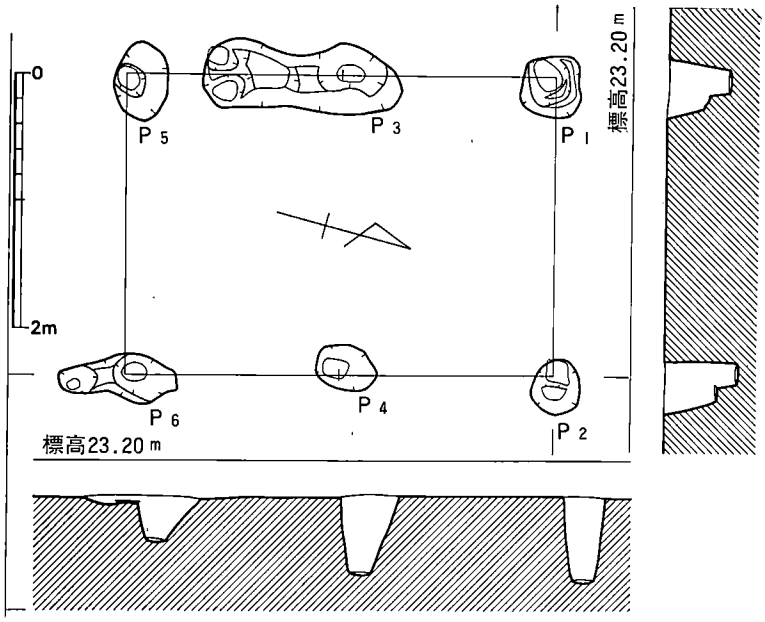
第99図 10号掘立柱建物実測図（1/60）

10号掘立柱建物（図版41，第99図）

2間×2間の総柱の建物である。四隅の内角はおよそ∠P₇P₁P₃が90°，∠P₁P₃P₉が92°，∠P₃P₉P₇が88°，∠P₉P₇P₁が90°でほぼ正方形である。P₂はP₁—P₃線上より略南に23cmずれ，P₈はP₇—P₉線上から略南に11cmずれる。P₄はP₁—P₇線上から略西に30cmずれ，P₆はP₃—P₉線上から略東に20cmずれる。P₅は他の柱穴よりも浅く，P₂—P₈・P₄—P₆線上にのる。規模は3.54m×3.55mで，主軸はN21°WあるいはN71°Eである。

11号掘立柱建物（図版41，第100図）

梁行1間×桁行2間の建物である。梁行柱列P₁—P₂・P₃—P₄・P₅—P₆は平行で梁行間が2.35m，桁行柱間が1.7mである。規模は梁間2.35m×桁行3.40mで，主軸はN15°Wである。



第100図 11号掘立柱建物実測図（1/60）

第21表 11号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P_1 P_2	—	235	P_1 P_3	170	—	1	51	46×48	6	73	38×50
P_3 P_4	—	235	P_3 P_5	170	340	2	55	40×45			
P_5 P_6	—	235	P_2 P_4	170	—	3	67	50×70			
平均	—	235	P_4 P_6	170	340	4	56	35×50			
			平均	170	340	5	65	42×58			

（単位は*cm*）

12号掘立柱建物（図版41，第101図）

南側が道路のために未発掘で詳細は分からないが、P_1—P_3が梁行と考えられ南に広がり2間×2間あるいは2間×3間の建物が推定出来る。P_3—P_5の方位はN13°Wを示す。

第22表 12号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P_1 P_2	155	—	P_1 P_4	180	—	1	19	32×33	4	14	30×30
P_2 P_3	155	310	P_3 P_5	210	—	2	60	25×30	5	31	30×30
平均	155	310	平均	195	—	3	50	30×45			

（単位は*cm*）

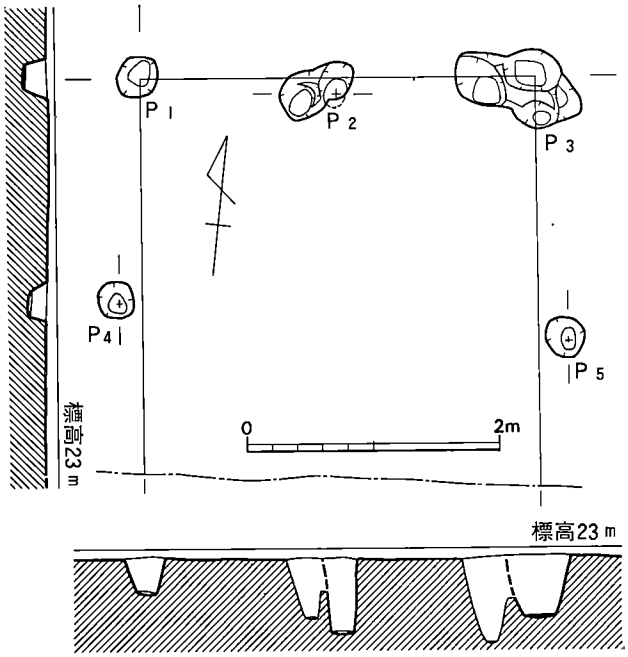
13号掘立柱建物（第102図）

B区西部の9～12号建物の東隣りに位置している。南側は道路のために未発掘で詳細は分か

らないが，12号建物と柱配列に共通性がみられ同規模の建物が推定出来る。P3—P5の方位はN26°Wを示す。

14号掘立柱建物（図版32・47，第103図）

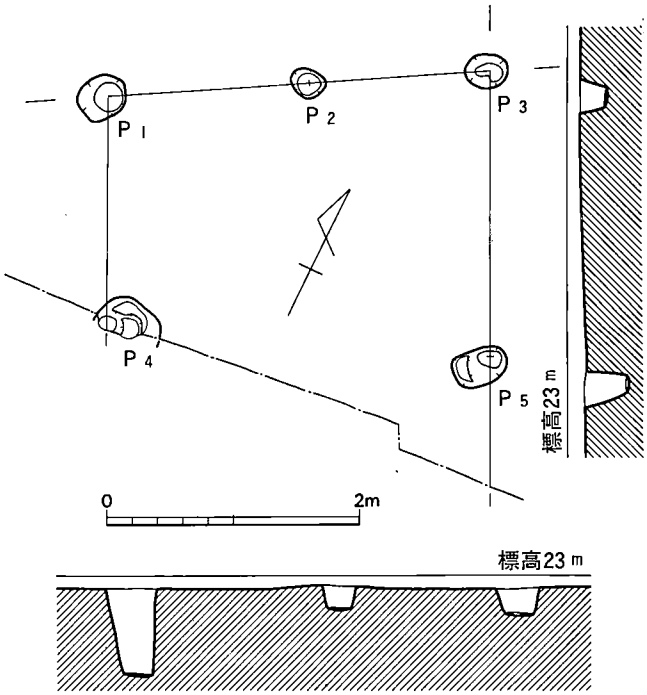
B区中央部南に位置する梁行1間×桁行2間の建物である。四隅の内角はおよそ，∠P4P1P3が87°，∠P1P3P6が90°，∠P3P6P4が91°30′，∠P6P4P1が91°30′である。P5はP4—P6線上より南に15cmずれるが，桁行柱列P1—P3・P4—P6はほぼ平行である。梁行方向P3—P6・P2—P5・P1—P4もほぼ平行である。直径70cm前後の円あるいは楕円形の掘方に直径25cm前後の柱痕と思われるものがあった。規模は梁行2.72m×桁行3.23mで，主軸はW2°Sである。



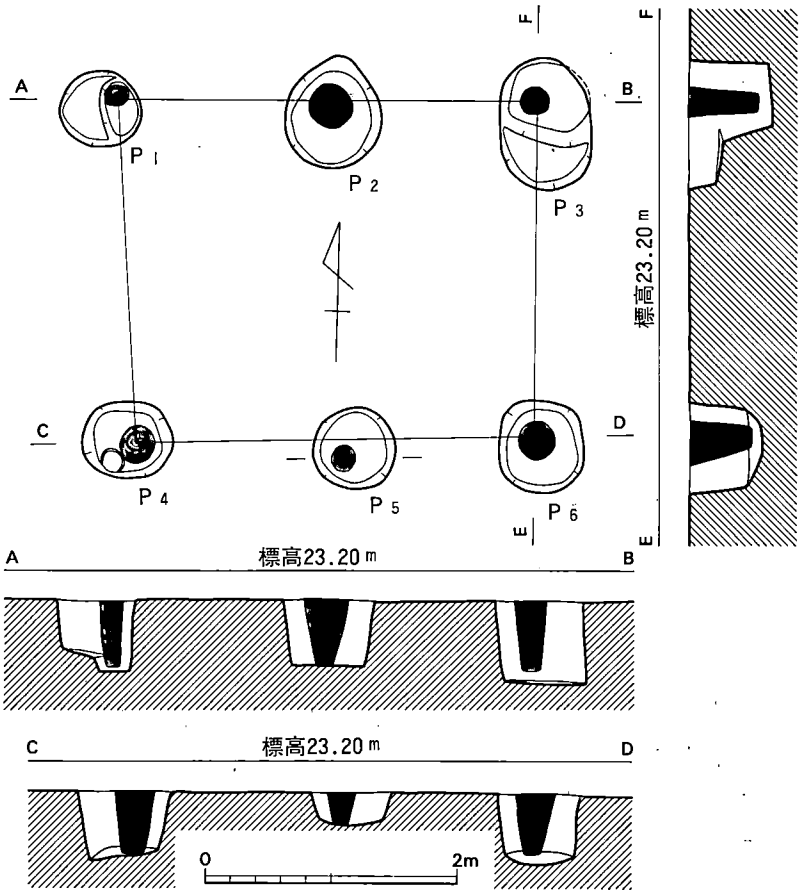
第101図　12号掘立柱建物実測図（1/60）

15号掘立柱建物（図版32・47，第104図）

14号建物の東隣りに位置し，梁行1間×桁行2間の建物である。この建物は表土を剝いだ状態で，直径60cm前後の楕円形あるいは隅丸方形のプランとその中に柱痕と思われる直径20cm前後の円形プランを検出した。この状態で柱痕の中心を設定しP1P3P4P5P7の関係をトランシットを使って観



第102図　13号掘立柱建物実測図（1/60）



第103図 14号掘立柱建物実測図（1/60，アミをかぶせた部分は柱痕を示す。）

第23表 13号掘立柱建物計測表

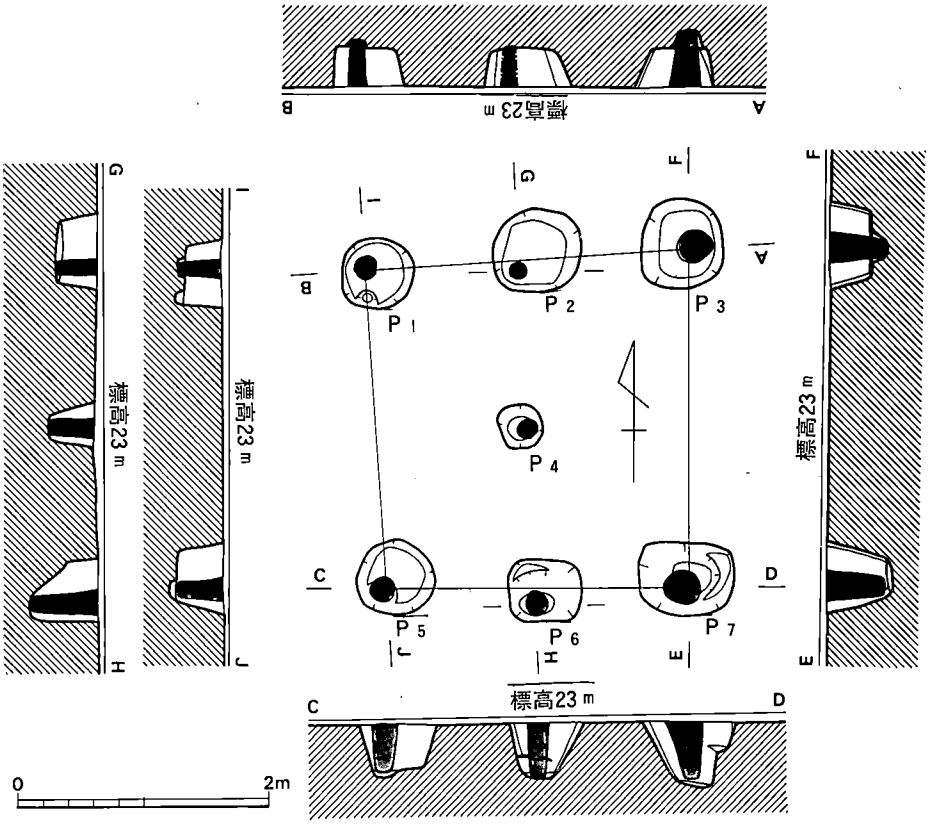
	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P1 P2	160	—	P1 P4	180	—	1	20	35×40	4	51	25×30?
P2 P3	143	303	P3 P5	225	—	2	18	23×28	5	34	30×45
P4 P5	—	305	平均	203	—	3	21	28×35			
平均	152	304									

（単位は*cm*）

第24表 14号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	柱痕径	掘方径
P1 P4	—	270	P1 P2	170	—	1	56	15×20	60×65
P2 P5	—	280	P2 P3	160	330	2	53	34×35	76×90
P3 P6	—	265	P4 P5	165	—	3	72	20×23	70×103
平均	—	272	P5 P6	150	315	4	50	27×30	60×74
			平均	161	323	5	26	17×20	64×65
						6	57	30×30	68×72

（単位は*cm*）



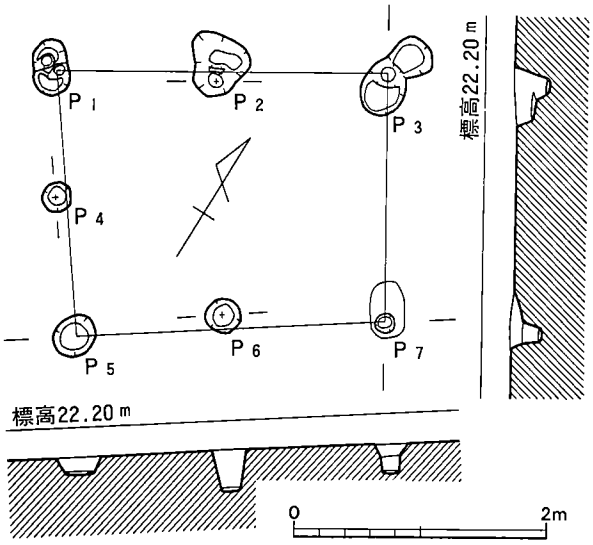
第104図 15号掘立柱建物実測図（1/60，アミをかぶせた部分は柱痕を示す。）

測した。その結果，四隅の内角は∠P₁P₅P₇が94°01′40″，∠P₅P₇P₃が90°17′40″，∠P₁P₃P₇が85°40′40″，∠P₃P₁P₅が90°であった。P₂はP₁—P₃から南に8cm，P₆はP₅—P₇から南に13cmずれる。P₁—P₃・P₅—P₇はほぼ平行を保ち，対応するP₁—P₅，P₂—P₆，P₃—P₇もほぼ平行する。P₄は正方形プランの中心にあり，他の柱穴より掘方径は小さいが深く掘られている。規模はおよそ梁行2.6m×桁行2.5mで，主軸はW2°Sである。計測表（第25表）では，トランシットで観測したものに（ ）をつけた。

第25表 15号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	柱痕径	掘方径
P₁ P₅	—	(249.6)	P₁ P₂	120	—	1	35	17×17	56×56
P₂ P₄	125	—	P₂ P₃	187	(259.3)	2	32	13×15	66×70
P₄ P₆	137	263	P₅ P₆	118	—	3	44	25×27	65×72
P₃ P₇	—	(266.8)	P₆ P₇	125	(239.5)	4	56	15×17	35×35
平均	132	259.8	平均	138	249.4	5	43	20×20	60×64
						6	54	20×20	48×60
						7	49	26×30	58×75

（単位はcm）



第105図　16号掘立柱建物実測図（1/60）

16号掘立柱建物（図版32・48，第105図）

B区東側中央部にある，梁行1間×桁行2間の建物である。四隅の内角はおよそ∠P₅P₁P₃が85°，∠P₁P₃P₇が90°，∠P₃P₇P₅が93°30′，∠P₇P₅P₁が91°30′である。P₂はP₁—P₃線上より略南に7cmずれ，P₆はP₅—P₇線上から略北に4cmずれるが，P₂—P₆はP₁—P₅・P₃—P₇に対してほぼ平行で同間隔を保っている。P₄はP₁—P₅のほぼ中央にあり，掘方の大きさ，深さも他の柱穴と変わらないので一応取り上げてみたが，この建物の一部としてよいのか否か分からない。規模は梁行1.97m×桁行2.52mで，主軸はN53°Eである。

第26表　16号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P1 P4	100	—	P1 P2	127	—	1	33	30×30?	6	32	30×30
P4 P5	110	210	P2 P3	135	260	2	33	35×35	7	24	27×45
P2 P6	—	185	P5 P6	115	—	3	25	36×45			
P3 P7	—	195	P6 P7	130	244	4	32	25×25			
平均	105	197	平均	127	252	5	28	30×35			

（単位はcm）

第27表　17号掘立柱建物計測表

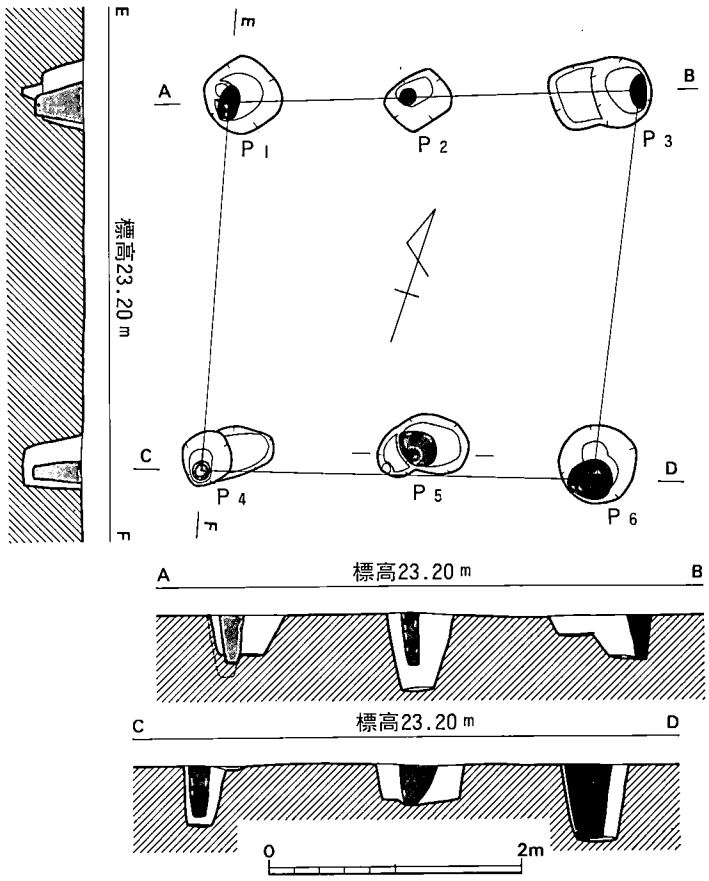
	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	柱痕径	掘方径
P1 P4	—	290	P1 P2	145	—	1	38	15×25	60×63
P2 P5	—	280	P2 P3	182	327	2	59	12×12	40×48
P3 P6	—	310	P4 P5	170	—	3	36	24×28	55×80
平均	—	293	P5 P6	143	310	4	47	14×15	45×70
			平均	160	319	5	31	26×28	60×60
						6	60	30×35	60×63

（単位はcm）

17号掘立柱建物

（図版32・48，第106図）

B区東側中央に位置する，梁行1間×桁行2間の建物である。四隅の内角はおよそ∠$P_4P_1P_3$が96°，∠$P_1P_3P_6$が81°30′，∠$P_3P_6P_4$が95°30′，∠$P_6P_4P_1$が87°であり，西側に歪んだ長方形を呈する。P_5はP_4—P_6線上より略北に16cmずれる。柱痕の残りがよく，全ての柱掘方にみられる。規模は梁行2.93m×桁行3.19mで，主軸はN71°Eである。

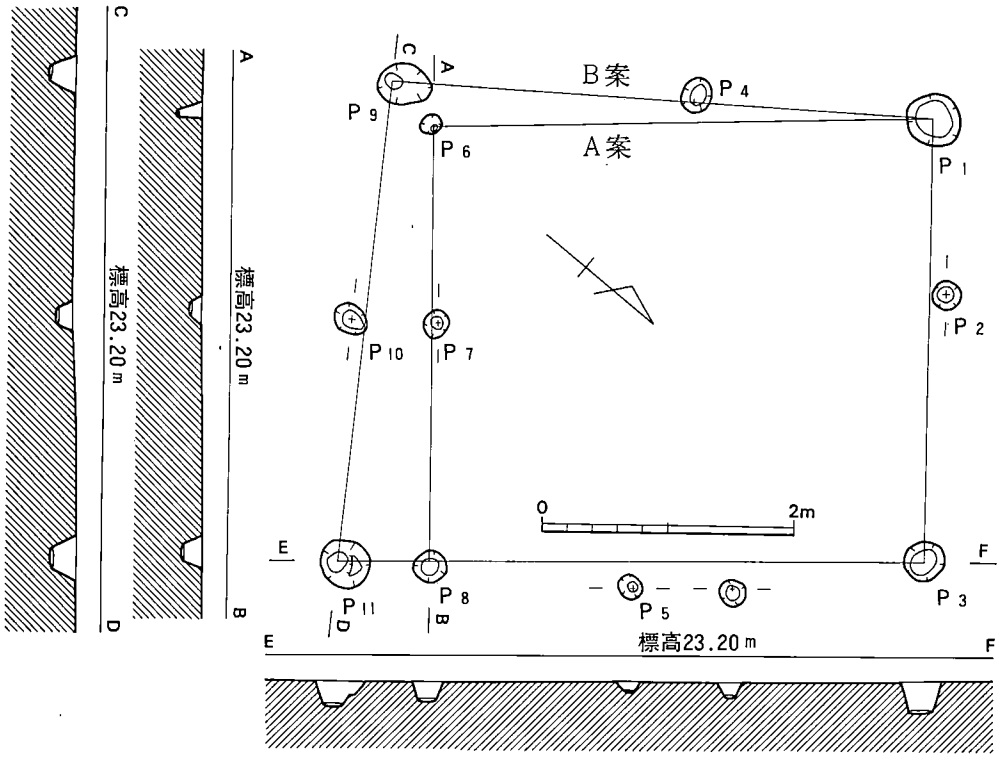


第106図 17号掘立柱建物実測図（1/60，アミをかぶせた部分は柱痕を示す。）

18号掘立柱建物（図版32・49，第107図）

B区東部中央に位置し，17号建物と隣接する2間×2間の建物である。南側梁行はP_6—P_8，P_9—P_{11}ともに考えられるので，ここでは仮に前者をA，後者をBとする。

Aの場合，四隅の内角はおよそ∠$P_6P_1P_3$が88°，∠$P_1P_3P_8$が91°，∠$P_3P_8P_6$が89°30′，∠$P_8P_6P_1$が91°30′である。P_2はP_1—P_3線上より略北に12cmずれ，P_7はP_6



第107図 18号掘立柱建物実測図（1/60）

—P_8線上から略北に5㎝ずれるが，桁行方向P_1—P_6・P_2—P_7・P_3—P_8はほぼ平行である。P_4はP_1—P_6線上から略西に20㎝ずれ，P_5はP_3—P_8線上より略東に20㎝ずれ，梁行方向P_4—P_5は斜行する。P_1—P_3・P_6—P_8はほぼ平行である。規模は梁行3.60m×桁行4.07mで，主軸はN40°Wである。

Bの場合は，四隅の内角はおよそ∠$P_9P_1P_3$が93°，∠$P_1P_3P_8$が91°，∠$P_3P_{11}P_9$が83°30′，∠$P_{11}P_9P_1$が92°30′である。P_{10}はP_9—P_{11}線上から略北に10㎝ずれるが，P_4はP_1—P_9線上にのる。柱穴間隔はP_4—P_9とF_5—P_{11}はほぼ同じになる。規模は梁行3.72m×桁行4.32mで，主軸はN35°Wである。

第28表 18号掘立柱建物（A案）計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P_1 P_2	140	—	P_1 P_4	190	—	1	26	40×45	7	8	20×25
P_2 P_3	210	350	P_4 P_6	240	430	2	12	22×22	8	15	25×25
P_4 P_5	—	385	P_2 P_7	—	400	3	26	30×32			
P_6 P_7	155	—	P_3 P_5	230	—	4	11	24×30			
P_7 P_8	190	345	P_5 P_8	163	390	5	28	20×20			
平均	174	360	平均	206	407	6	18	15×20			

（単位は㎝）

第29表　18号掘立柱建物（B案）計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法
P1 P2	140	—	P1 P4	190	—
P2 P3	210	350	P4 P9	240	430
P4 P5	—	385	P2 P7	—	400
P9 P10	193	—	P3 P5	230	—
P10 P11	190	380	P5 P11	235	465
平均	183	372	平均	224	432

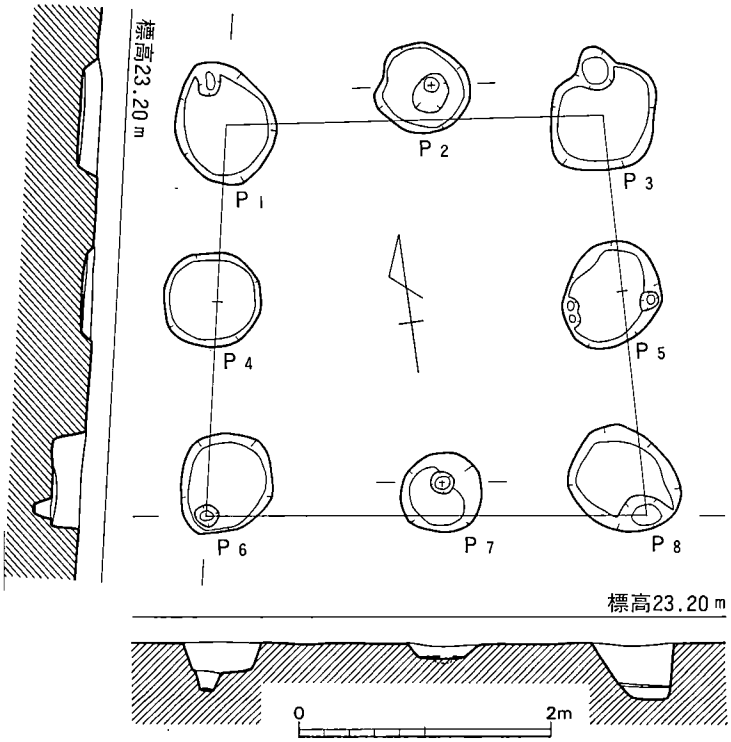
P	深さ	掘方径
9	22	33×45
10	14	22×30
11	20	40×40

（単位は*cm*）

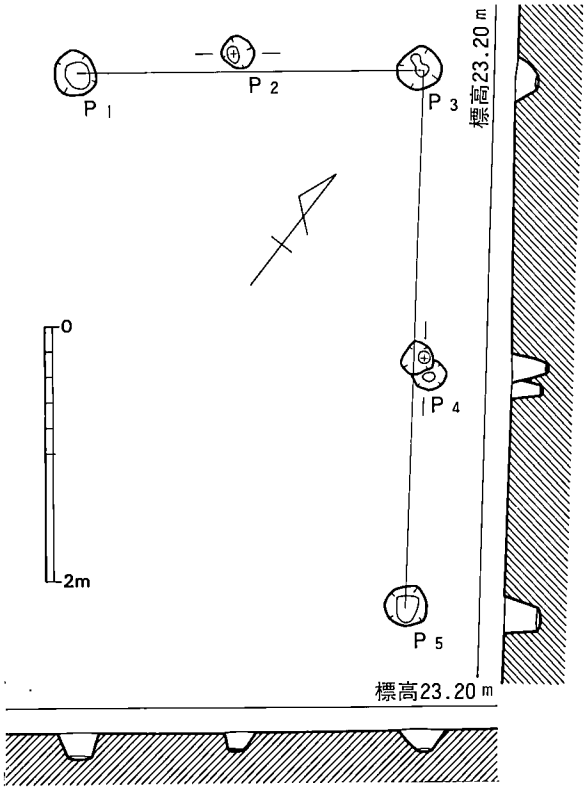
19号掘立柱建物

（図版32・49，第108図）

B区東端に位置する，2間×2間の建物である。四隅の内角はおよそ∠P6 P1 P3が94°30′，∠P1 P3 P8が94°30′，∠P3 P8 P6が84°，∠P8 P6 P1が87°で台形を呈する。P2はP1—P3線上から北に27*cm*ずれ，P7はP6—P8線上から北に25*cm*ずれるが，P1—P3・P6—P8はほぼ平行である。柱穴上面は削平されているが現状ではP7の直径65*cm*を除いて80*cm*前後と他の建物に比べて大きい。掘方内の埋土は14号・15号建物と共通するものがあった。規模は3.13*m*×3.25*m*で，P2—P7方向はN7°E・P4—P5方向はN83°Wである。



第108図　19号掘立柱建物実測図（1/60）



第109図　20号掘立柱建物実測図（1/60）

20号掘立柱建物（図版32,第109図）

B区東端の19号建物・18号住居跡に隣接してある。東側桁行柱列と南側梁行柱列は水田の畦の部分にあたり削平されて残っていないが，2間×2間の建物であろう。内角∠P₁P₃P₅は約88°，∠P₁P₃P₄は約90°であった。P₅はP₃—P₄線上より略西に20cmずれ，P₂はP₁—P₃線上より略北に15cmずれる。規模は梁行1.38m×桁行2.10m位に推定出来る。P₃—P₅方向はN36°Wである。（日高）

第30表　19号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P1 P4	140	—	P1 P2	165	—	1	17	80×85	7	16	65×65
P4 P6	170	310	P2 P3	140	300	2	35	70×70	8	36	80×93
P2 P7	—	315	P4 P5	—	323	3	16	80×85			
P3 P5	140	—	P6 P7	190	—	4	10	75×80			
P5 P8	178	315	P7 P8	165	350	5	16	80×85			
平均	157	313	平均	165	325	6	27	73×80			

（単位はcm）

第31表　20号掘立柱建物計測表

	梁行柱間寸法	梁行間寸法		桁行柱間寸法	桁行間寸法	P	深さ	掘方径	P	深さ	掘方径
P1 P2	125	—	P3 P4	225	—	1	19	34×35	4	30	25×25
P2 P3	150	275	P4 P5	195	420	2	15	25×26	5	27	30×32
平均	138	275	平均	210	420	3	16	34×37			

（単位はcm）

結　　語

1　竪穴住居跡について

立野・宮原遺跡における現時点の問題点と課題を記し，若干の考察を加えることで竪穴住居跡のまとめにしたい。

築造時における問題点　立野・宮原遺跡で竪穴住居跡の大部分が６Ｃより奈良時代に至る時期で，主柱穴は４本で構成し隅円方形を呈している。細部の形状及び形態の違いはあるものの概ね類似しており何らかの規格性を持つと考えられる。両遺跡において焼失家屋は一軒も存しないので上部構造は全く不明であり，今回の報告分が調査総数の極く一部であるため検討を重ね次回以後に持ち越したい。なお６号竪穴住居跡は模式図（第46図）の原型であり，32・33表に示した様にほぼ同じ数値を計測した。辺・主柱穴及びカマドなども中軸線で左右対称をなしている。

下部構造について　床面下層より検出した土壙と掘り込みに関する報告例はごく僅かで，千潟遺跡（註１）に土壙が検出されている。掘り込みは後で述べる周溝と壁の構造にも関連する遺構と考えられ，明瞭でない部分もあるが今回報告する20軒の大半以上は存在していた可能性がある。共通する事項は壁に沿って廻っていること，主柱穴間内には存在しないことである。性格については不明な点が多く残されており居住空間や壁の構造など複合させて考察しなければ理解出来ないかもしれない。湿気抜きの施設とも考えられるが断定するまでには至っていない。類例の増加することを待ちつつ埋土及び掘削状況の再検討をしなければならない。土壙に関して築造時の遺構かそれ以後（生活時の修復行為の所産か）の遺構かは不明である。理由は埋土状況が貼床の土層とほぼ同じで判別し難い場合が多かったことである。少なくとも４軒の住居跡に遺存しないことは，土壙が普遍性を持つ性格の遺構ではないのか，又は必要性に起因する遺構なのかが考えられる。両遺構が立野・宮原遺跡の特色であるのかそして６Ｃより奈良時代まで（現時点において）と限定されるのかを究明させねばならないし，この遺構が風土・地理及び地質に影響されているのかも考慮せねばならぬ問題点であろう。

床面上における問題点　床面上に遺存する遺構は主柱穴・カマド・周溝・落ち込み及び貼床である。主柱穴間を結んだ平面形は二つに大別出来る。

Ａ類（方形）…P_1～P_2≒P_3～P_4，P_1～P_3≒P_2～P_4…１，５，６，７号住居跡。

Ｂ類（台形）…一辺が広く他の三辺がほぼ等しい…２，４，10，15，16及び18号住居跡。

11・13号住居跡はＡ，Ｂ類に属さない特異な平面形を呈している。また床面積をグラフ化してみると５つのグループに分けられる。

Ⅰ類…床面積30㎡以上の大型住居…１号住居跡。

Ⅱ類…床面積20～30㎡のやや大型住居…11号住居跡（3，19号住居跡も属す？）。

Ⅲ類…床面積18～20㎡の少し大きめの住居…6，7号住居跡（10号住居跡も属す？）。

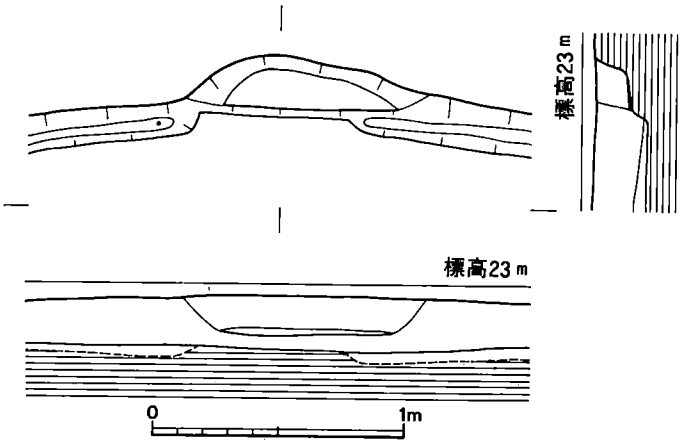
Ⅳ類…床面積16～18㎡の中型住居…2，4，13，15，16と18号住居跡。

Ⅴ類…床面積16㎡以下の住居…17号住居跡。

主柱穴の形態と規模及び32，33表に記載した種々の事項を考え合せてみると，6号住居跡と7号住居跡はほぼ同じタイプ（平面形態は少し違うけれども）と考えられる。2，4，15，16，18号住居跡は同一タイプである。まだ調査，整理中なので断定されないが立野・宮原遺跡の古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴住居跡は，主柱穴間を結んだ辺と壁がほぼ平行になる様に主柱穴の位置決定がなされている。現時点まで著しく差異を示す例は稀である。

カマドは突出型と粘土を積み上げる型の2種類がある。突出型は13，17号住居跡のみでC地区（現時点で2軒）でも数少ないが宮原遺跡では若干増加している。13号住居跡と17号住居跡の違いはほとんどなく，袖部が遺存しているのと袖部が存在しない(毀れたことも考えられる)ことだけである。突出部内壁には全く粘土を使用した痕跡がないのでこの構造は不明であり，類例も多く報告されているけれども構造を解明出来る例は報告されていない。なお両住居跡の地形は緩やかな傾斜面で削平を受けた可能性があることを付記しておく。後者は類例も多く，部分的に差異が認められてはいるが型式化するまでには至っていない。カマド内の支脚は立野・宮原遺跡において小型甕を使用している場合が多いし，座位している状態が多いことが特徴（註2）と言えるだろう。

周溝については道添遺跡(註3)の報告書内考察で詳しく記述されているので類例を述べたい。道添遺跡の杭とは若干形状を異にするが立野遺跡でも周溝内に杭状痕を検出した。この遺構と壁面で検出した杭状痕（16，17号住居跡）を考え合せると道添遺跡の「壁」に類似したものが想定される。「周溝は掘って造ったものではなく上からの重みで生じたものである」と記されているが，立野遺跡の場合は掘り込みと(現時点で)断定することは出来ないけれども何らかの関係があるのではないかと考えられる。



第110図　16号竪穴住居跡段状遺構実測図（1/30）

落ち込みと粘土だまりは上部構造が不明ではあるが入口の施設に関連する遺構と考えられる。落ち込みに関しては周溝との関連性が強く今後検討を重ねなけれ

ばならない。16号住居跡の階段状遺構（第110図）は入口と考えるには不合理な点（蹴上げが極端に低く，踏み面が狭い）がある。しかしカマド右袖，主柱穴P_2とP_4，階段状遺構北端が直線上に位置している。貼床は当遺跡では普遍的であり地形，地質に大きく作用された所産と言えるであろう。

主柱穴間内面積は床面積の19～30.3%しか占めておらず，この結果主柱穴外空間が生活時に大きな比重を持つと考えられる。前述した「壁」はある程度高いことが必要条件となるが，屋根の構造を解明していくことと同時進行する問題であろう。

上部構造について　焼失家屋を一軒も検出していないことも当遺跡の特徴の一つである。このことで上部構造の復原は平面図に頼らざるを得ないし，これも今後の課題としたい。

生活時における問題点　当遺跡のカマド築造に使用されている粘土のほとんどは地山（黄褐色粘質土）に類似しており，3号住居跡の様にスサを混ぜる場合もあるが堅固に造り上げているとは言えない。その結果6号住居跡などの如くカマド修復が何回かなされたと考えられるし，宮原遺跡では袖内に毀れた甕を補強材として用いた住居跡数棟を検出したことなどはより堅固なカマド築造法の変遷を物語っている。

廃棄時における問題点　どの様な状況で廃棄されるのかは分らないが，7号住居跡の主柱穴4本は抜き取られておりP_4に甕（毀れた状態で出土）が埋められていた。県内では類例は乏しいがC地区の掘立柱建物の柱穴内に弥生時代終末期頃の完形の甕が埋められていた。この甕は図面作成中盗難に遭い紛失したことは悔まれる。祭祀的な意味を持つと考えられ，類例として大分県に多くみられる。日当遺跡（註4）との比較では，時期は異なるけれども甕が埋められる柱位置は類似している。カマドは人為的に毀したものはなく，祭祀を行なったカマド跡も検出していない。

大雑把にまとめたため誤謬を記していると思われ，御教示賜れたら幸いです。

最後に九州大学工学部建築学教室助手の山本先生に何かと御教示を致き，ここに記し感謝の意を表します。

（武田）

2　掘立柱建物について

E・D地区　E区南側に2棟と中央部に4棟・D区中央部南に2棟を検出し，その内で6・8号建物を完掘することが出来た。遺構に伴った遺物の出土が無く，時期決定は出来なかった。E区中央部の4～6号建物は重複した配置であるが，掘方相互の切り合いはなく，分からなかった。しかし5・6号建物は掘方の規模や掘方内埋土も他の建物とは全く異っており，別の時期と思われる。住居跡を含めて同一主軸方向を示すものは，2・7号建物―2・4・6・7号住居跡，3・4号建物―1・3・5号住居跡，8号建物の3者に分類出来る。

B地区　西側に5棟と東側に7棟検出した。西側の一群内で完掘したのは10・11号の2棟で，残りの3棟は南側の道路・用水溝によって大半が未発掘である。この一群は5棟が掘方相互の切り合いがなく重複した配置にあり，出土遺物も伴っていないので新旧関係は分からなかった。東側の一群は20号建物を除いて完掘したが，掘方内の出土遺物はなく，時期・新旧関係を決定する資料はなかった。住居跡を含めて主軸方位から分類すると，11・17号建物—17号住居跡，10・13号建物—9・13号住居跡、9・16・18・20号建物—10・11号住居跡、12・14・15・19号建物—15・16・18号住居跡になる。

平面プランについて　平面プランを分類すると正方形と長方形に大別出来るが，長方形にも長辺と短辺の差が大小あるので、ここでは梁行寸法と桁寸法の比を出した。許容範囲を±0.1とすると，1：1・1：1.2・1：1.6前後に集中した。1：1の型—10・15・17・19号建物，1：1.2の型—3・8・14・16・18号建物，1：1.6の型—2・5・6・11・20号建物となる。

柱配置について　掘立柱建物の柱配置をみると住居跡の主柱穴配置と共通性をもつものがあった。列記すると

2号建物—16号住居跡　　3・11号建物—11号住居跡

10号建物—15号住居跡　　19号建物—1号住居跡

である。これらは柱間寸法が梁行・桁行ともにほぼ等しいものを取り上げた。つぎに掘立柱建物の柱間寸法をみると，1.25m・1.5m・1.65m・1.8m・1.9m・2.1m・2.4m前後が多く，特に1.65・1.8・1.9m前後に集中する傾向がみられた。住居跡は，大半が1.7〜2.0m前後に集まる。今回は狭い範囲での資料なので事実報告にとどめて，今後のC地区の調査資料を踏まえて検討したい。

（日高）

3　むすびにかえて

前述の2つの項で，竪穴住居跡と掘立柱建物についての問題点が指摘された。九州大学工学部建築学教室助手山本輝夫氏から発掘現場でのたび重なる熱心な指導助言を頂き，私どもは竪穴住居跡と掘立柱建物の柱間寸法の間に何らかの関係が存在するのではないか，という推測を抱き，調査と整理を進めている。そこには，竪穴住居を含めて建物にはある程度の規格性が存するのではないか，という，想像上の前提が働いている。よって，試行錯誤をくり返しながら、平面観察では確認の難しい柱痕を土層断面によって確認し，トランシットを使用して柱位置の相対的な関係を割り出す方法をとっている。柱が抜き取られたものも多く，現在は，資料の蓄積をはかっている。このような方法による竪穴住居跡と掘立柱建物の柱間寸法や柱配置における数値上の類似は前項でいくつか指摘されている。このことは，直ちに数値の類似する竪穴住居跡と掘立柱建物の同時併存を示すわけではないだろうが，比較的時期決定のしやすい竪穴住居跡を介して，掘立柱建物の時期推定をするひとつの試論的な方法と考えている。もっと

も，竪穴住居の主軸方向と掘立建物のそれとの関係や，掘立柱建物相互の配置や主軸方向の問題を軽視しているわけではないし，柱間寸法が土器型式の変化のような変遷をするとは考えてはいない。その限界性を十分に考慮して，集落構造を検討するひとつの方法と考えている。

さて，今回報告したB・D・E地区は立野遺跡の周縁部にあたり，遺構の密集するC地区（調査継続中，1985年報告予定）が，遺跡の中心に近い部分と推測される。それ故，B・D・E地区の資料だけでは立野遺跡の個別遺構の構造や性格、あるいは集落の具体的な問題を考えるには限界があり，前2項で呈示した問題点について論究できる状態ではない。よって，C地区の報告の折に立野遺跡の一定程度具体的な検討を行いたいと考えており，立野遺跡よりも大規模な集落跡と目される宮原遺跡（6世紀後半～8世紀代）の最終報告において，立野遺跡を含めて総括を行う予定である。

なお，今回報告しなかったD地区の埋葬遺構や土壙，A地区（調査継続中）の方形周溝墓を中心とする埋葬遺構は1984年に報告する予定である。（児玉）

註

1 福岡県教育委員会『干潟遺跡』Ⅰ 1977

2 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XⅣ— 1977
B区第18号は土製支脚で立野遺跡10号住居跡と類似している。B区第36号住居跡は小型甕を使用しており，B区第29，44号住居跡は高坏，B区第24号住居跡は石を使用しており，立野・宮原遺跡のように画一的ではない。

3 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XⅨ— 1977
道添遺跡における住居跡の周溝については土田充義氏と宮原種生氏の執筆による。「周溝は掘って…生じたものである」は発掘担当者の言葉である。

4 大分県教育委員会『日当遺跡』1982

第32表　竪穴住居跡一覧①

番号	規模	面積 (㎡)	主軸方位	周溝	落ち込み	カマド対面の粘土だまり	カマド 左袖の長さ×右袖の長さ	カマド 支脚の高さ	火床面 奥行×幅	火床面 平面形態	床面下層土壙 長軸×短軸	床面下層土壙 面積 (㎡)	床面下層土壙 平面形態	掘り込み
1	580×618	35.5	N17°W											
2	423×447	約16.5	N11°W	○	○									○
3				○			75×65	22	93×60	長方形？				
4	422×418	約15	N 8°W	○			×84	17			—	—	—	
5	×384		N17°W	○			69×79				—	—	—	
6	460×445	18.1	N23°W	○		○	68×93	16	71×(65×37)	台形？				○
7	475×465	17.9	W10°S	○			68×75	16？	73×47	楕円形	180×150	2.2	不整円形	○
8														
9			N22°W	○？										
10	444×478		N39°W	○		○	90×63	17.5	71×46	楕円形？	145×118	1.5	不整円形	
11	510×488	約22.3	N38°W	○？			71×63		71×57	楕円形？	163×147	2	不整円形	
12							71×78	16？	57×47	長方形				
13	413×448	16.1	N19°W		○				74×62	長方形	130×115	1.3	不整円形	○
14				○	○									
15	410×435	16.5	W7°S？								131×120	1.3	不整円形	
16	427×452	約16	W14°S	○							150×125	1.6	不整円形	
17			N 8°W								155×125	1.5	長楕円形	
18	389×422	15	N88°W	○		○			54×46	楕円形？	215×130	2.1	長楕円形	○
19				○			78×80							
20														

※模式図（第46図）で使用した用語で記載している。

（単位は㎝）

第33表 竪穴住居跡一覧表②

番号	主柱穴 Ⓐ P1～P2	Ⓑ P3～P4	Ⓒ P1～P3	Ⓓ P2～P4	Ⓒ+Ⓓ / Ⓐ+Ⓑ	Ⓔ主柱穴間内面積 (㎡)	Ⓔ/床面積 (%)	主柱穴から壁までの距離 a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	主柱穴間と辺長の比率 (%) Ⓐ/Ⓐ+(a2+c1)	Ⓑ/Ⓑ+(a1+c2)	Ⓒ/Ⓒ+(b1+d2)	Ⓓ/Ⓓ+(b2+d1)	主柱穴間内角 LP1	LP2	LP3	LP4	主柱穴間を結んだ平面形
1	3.36	3.29	3.13	3.19	0.95	10.8	30.3	1.17	1.41	1.30	1.32	1.40	1.46	1.34	1.21	54	55	55	55	90°	88°	91°	91°	方形
2	1.99	1.99	1.85	2.08	0.987	3.8	約23.4	1.01	1.09	1.23	0.98		0.82	1.02	0.78		52	48	51	89°	87°	93°	91°	台形
3	3.4							1.32		1.18	1.42	1.20												
4	1.52	1.49	1.51	1.76	1.086	2.5	約16.8	1.08	1.18		1.23	1.22	1.14	1.15	1.10	39	40		43	91°	87°	98°	84°	台形
5	1.62	1.70	1.60	1.54	0.946	2.6		1.07	1.04	1.17	1.26	0.87	0.96			46	46			91°	92°	87°	90	方形
6	2.07	2.05	1.89	1.87	0.919	3.9	21.5	1.13	1.13	1.38	1.29	1.00	1.09	1.22	1.26	49	48	42	43	92°	88°	91°	89°	方形
7	2.18	2.11	1.88	1.82	0.86	24.4	24.2	1.17	1.27	1.40	1.23	1.07	1.21	21.8	1.14	48	48	43	42	87°	91°	91°	91°	方形
8																								
9	2.75			2.49																	94°			
10	2.18	1.87	1.94	1.91	0.951	3.9		1.04	1.31	1.12	1.16	1.33	1.51	1.30	1.29	45	42	45	44	84°	88°	96°30′	91°30′	台形
11	2.01	1.84	2.54	2.23	1.239	4.6	約20.4	1.45	1.29	1.20	1.30	1.28	1.45	1.13	1.22	44	39	51	48	85°	90°	85°30′	99°30′	台形
12																								
13	1.97	1.95	1.83	1.70	0.901	3.5	21.6	1.31	1.11	0.96	1.06	1.08	1.09	1.21	1.11	47	45	47	43	88°	91°	89°30′	91°30′	台形
14																								
15	1.94	1.77	1.77	1.71	0.938	3.1	19.1	1.15	1.19	0.96	1.00	1.16	1.23	1.28	1.27	45	43	44	43	83°	91°	91°	95°	台形
16	1.72	2.00	1.81	1.79	0.968	3.3	約20.4	1.18	1.07	1.09	1.10	1.30	1.20	0.92	1.09	42	46	45	47	97°	90°30′	82°30′	90°	台形
17	1.26	1.16	1.10	1.11	0.913	1.4														81°	94°	91°30′	93°30′	台形
18	2.10	1.86	1.96	1.97	0.992	4	26.5	1.10	1.11	0.86	0.96	0.93	1.05	0.98	0.98	51	46	52	50	86°	90°	93°	91°	台形
19	2.92																							

(単位はm)

※模式図（第46図）で使用した用語で記載している。

第34表 掘立柱建物一覧表

建物番号	旧番号	規模	平均寸法 梁行柱間	梁行間	桁行柱間	桁行間	主軸	面積	桁行間/梁行間
1	—	?	335	?	211	?	N35°E (P2—P3)		
2	—	2間 ×3間?	175	358	181	?	N11°W		1.52?
3	—	2間?×2間	189	?	235	480	N72°E		1.27
4	—	3間?×4間?	200	?	183	713	N72°E (P4—P8)		
5	—	2間?×3間?	222	438	233	700	N74°E		1.60?
6	—	1間 ×2間	—	210	181	363	N72°E	7.6	1.73
7	—	3間 × ?	149	473	230	?	N80°E (P1—P4)		
8	—	1間 ×2間	—	230	150	300	N58°E	6.9	1.30
9	—	3間?×4間?	187	?	138	?	N54°W か N36°W		
10	—	2間 ×2間	178	354	178	355	N21°W か N71°E	12.8	1.00
11	—	1間 ×2間	—	235	170	340	N15°W	8.0	1.45
12	—	2間 ×2間?	155	310	195	?	N13°W (P3—P5)		1.26?
13	—	2間 ×2間?	152	304	203	?	N26°W (P3—P5)		
14	B4	1間 ×2間	—	272	161	323	W 2°S	8.9	1.19
15	B3	1間 ×2間	—	259.8	138	249.4	W 2°S	6.5	0.96
16	B6	1間 ×2間	—	197	127	252	N53°E	5.0	1.28
17	B1	1間 ×2間	—	293	160	319	N71°E	9.2	1.09
18 A B	B5	2間 ×2間	174 183	360 372	206 224	407 432	N40°W N35°W	14.5 17.3	1.13 1.16
19	B2	2間 ×2間	157	313	165	325	N83°W	10.1	1.04
20	—	2間 ×2間?	138	275	210	420	N36°W (P3—P5)		1.53

主軸で完掘していない場合は（ ）内の方向を示した。 （柱間寸法の単位は*cm*）
面積は全ての柱穴の中心を結んだ広さを表わした。（m^2）

Ⅳ　福岡県立野遺跡B・C地区発掘遺跡に見る正方形平面掘立柱建物の可能性とその機能

山本輝雄（九州大学工学部建築学教室助手）

はじめに

発掘調査で出現する建築址の中で，掘立柱建物と命名され報告される建物くらい，その実態はおろか，その定義とか範囲が不明確なものは無い。多くの報告は，掘立柱建物の定義については言及されておらず，掘立柱穴がほぼ方形に配置されることのみが掘立柱建物の成立条件だとしているらしい。

掘立柱穴のみから1つの建築を確信するのに，従来のような不十分な検討のみを続けていて，果して，納得が得られようか。

そこで，以下は，この反省の上に立って．当遺跡の掘立柱建物の一部に新しい解釈を試みたものである。

御批判あって、採らるべき所あるを望む。

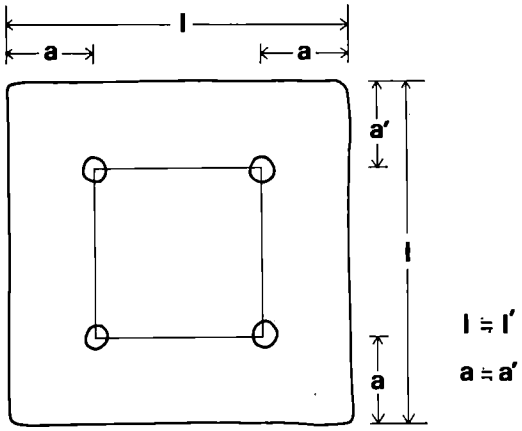
Ⅰ　正方形平面竪穴式家屋の構造

当地区の発掘建物址では，方形平面の竪穴式家屋が明瞭なものである。このうち，弥生時代後期の長方形平面のベット状遺構付き竪穴式家屋2棟を除いて，他は全て正方形平面の竪穴式家屋址である。ただし，ここで言う正方形とは幾何学的に正しく正方形と言えるものではなく，隣り合う辺はほぼ直交しており，各辺の長さはほぼ等しいと言うことである。

この正方形平面の竪穴式家屋の形式は一定しており，異なった形式はほとんど存在しなかったほどであり，家屋様式への厳しい規制が働いている。

類形化すると，第111図のようになる。

正方形平面の竪穴壁から一定の距離を内側へは入った位置に，4コの柱穴をもつ。故に，4コの柱穴を繋ぐ4辺形と竪穴壁で構成される外周りの4辺形とは，平行をなしている。このことは，竪穴規模の大小によって異なることはない。



第111図　正方形平面竪穴式家屋の類形

さらに，この竪穴の4辺形は，ほぼ正方

形をなすものが大半である。故に，大半の正方形平面竪穴式家屋址は，規模の大小によらず，正方形平面の竪穴壁と竪穴壁から少しは入った床面に正方形配置の４コの柱穴をもつ。

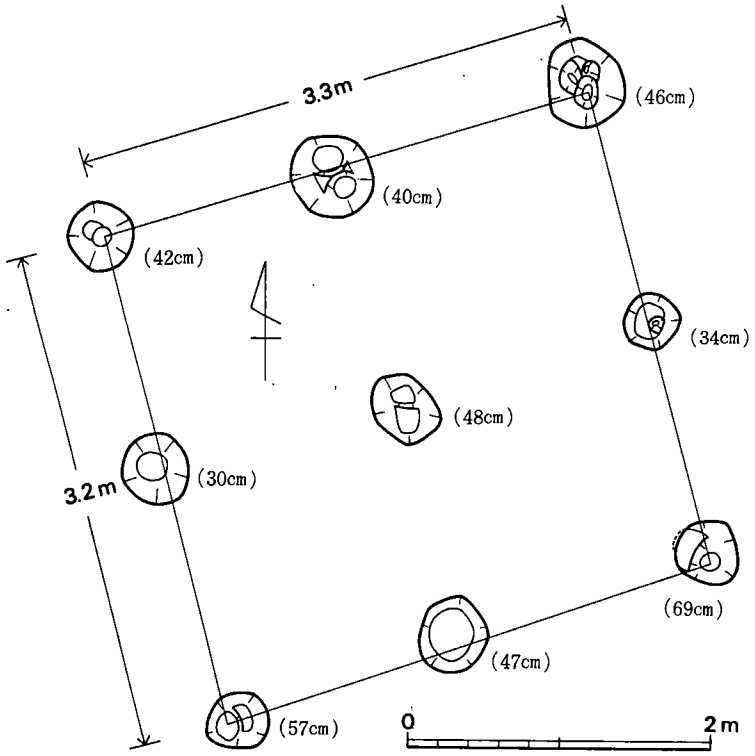
このことから，ある時代の竪穴式家屋という建築は，正方形配置を踏む４本の掘立柱によって，構造されていたことが明白となった。

Ⅱ　正方形配置の掘立柱群の存在

一方，目を転じて竪穴式家屋以外の遺跡について気を付けてみると，掘立柱群のうちには，他の掘立柱穴と比べて大きさが大きかったりまたはその一画のみ孤立したりして，方形配置をとる掘立柱群がある。

うち，特に当地区に目立つのは，ほぼ正方形に配置される掘立柱群である。それらを，掘立柱の数によって分類すると，９本柱（１ケ所），８本柱（１ケ所），７本柱（２ケ所），６本柱（２ケ所）の計６ケ所となる。

以上の明瞭な６ケ所を，以下，実例として掲げる。



第112図　C地区A号掘立柱建物実測図（1/50）

Ⅲ　実例

(1)　９本柱

（第112図）

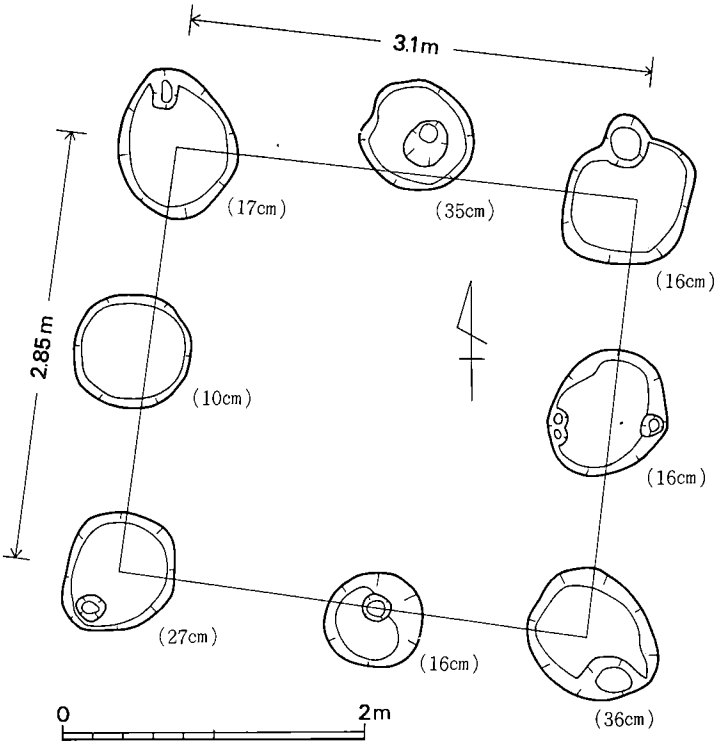
C地区西方にあり，周辺にこの９コの掘立柱穴以外には掘立柱穴が無いのですぐ分る。配置の方位は真北から西へ14度振れる。東西長約3.3*m*，南北長約3.2*m*。東西長，南北長の各辺のほぼ中央にも柱穴があり，中央の１コを含めて９コの柱穴とも，格子線上にきちっと配置されている。

図中の（　）内の*cm*単位の数値は，発掘面からの掘立柱穴の深さを示す。以下も同じ。

(2)　8本柱

(第113図)

B地区東北隅に位置し，柱穴が大きく，掘立柱穴群としては孤立するので，遺跡は明瞭。すぐ南側に同方位を示す正方形平面の竪穴式家屋址が存在。東西長約3.1m，南北長約2.85m。配置の方位は真北から東へ9度振れる。前者の9本柱と比べて，中央の1コの柱穴が存在しないが，各辺のほぼ中央にはきちんと大きな柱穴が存在する。



第113図　B地区19号掘立柱建物実測図（1/50）

(3)　7本柱(イ)（第114図）

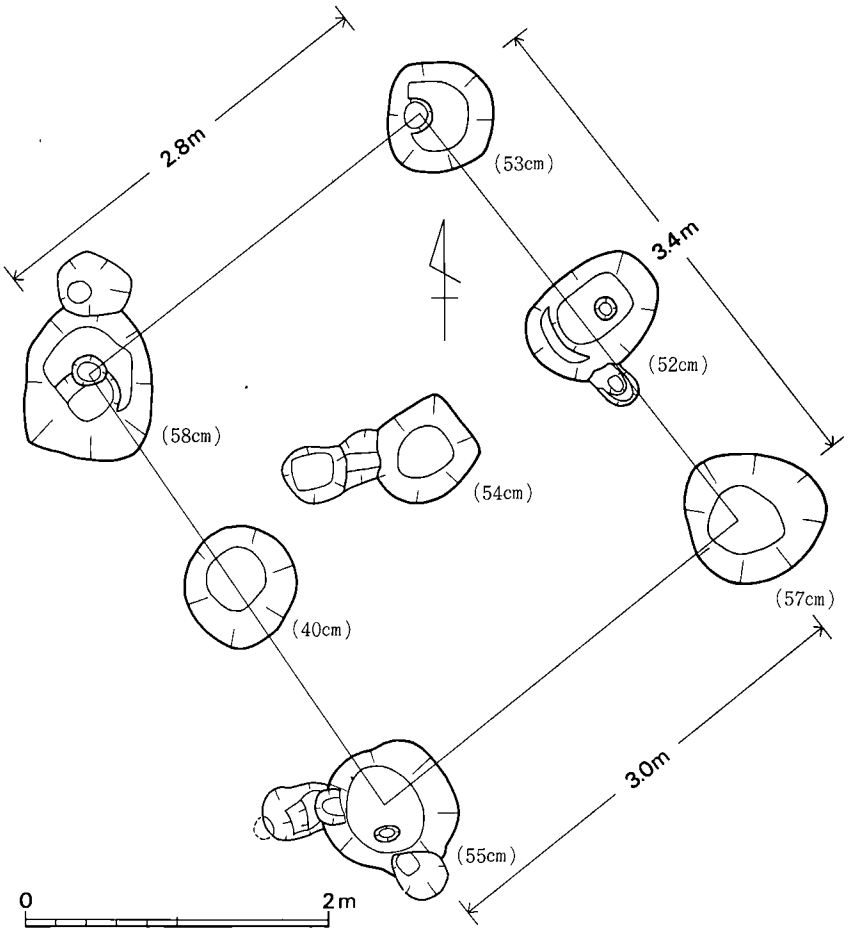
C地区東方寄りの，巨大な弥生時代後期の長方形平面のベット状遺構付き竪穴式家屋址のすぐ東側に位置し，その掘立柱群は周囲の小柱穴とは明白な大きさの違いでもって，正方形配置が分明となる。配置の方位は真北から西へ34度と大きく振れる。東西長約2.8～3.0m，南北長約3.4m。前者の8本柱と比べて，東西辺の中央に柱穴が無いかわりに，正方形配置の中央にも，他と同じ位の大きさの柱穴が存在する。

(4)　7本柱(ロ)（第115図）

B地区の東側寄りにあるが，このあたりには掘立柱穴が方形配置をとるものが多い。6コの各柱穴は大きいが，それらの配置が決める正方形は小さい。東西長約2.4～2.6m，南北長約2.4～2.7m。配置の方位はほぼ真南北に向いている。南北辺の中央に柱穴が無いかわりに，小さい柱穴ではあるが，中央に1コの掘立柱穴が存在する。

(5)　6本柱(イ)（第116図）

前者の北西方約10m離れて，存在する。配置の方位は真北から西へ13度振れる。東西長約



第114図　C地区5号掘立柱建物実測図（1/50）

3.1m，南北長約 3.0m。ほとんど正方形に近い配置をとる。東西辺の中央に柱穴が存在するが，南北長の中央には柱穴は無い。

(6)　6本柱(ロ)（第117図）

前者の南6mほど隔たっている。これは東西長が少し長いので，正方形配置のものに入れるかどうか，少し疑問が残る。配置の方位は真北から西へわずか4度位しか振れておらず，ほとんど真南北に向いている。東西長約 3.3m，南北長約 2.7m。長辺の中央に掘立柱穴は存在する。

(7)　まとめ

以上，9本柱（1ケ所），8本柱（1ケ所），7本柱（2ケ所），6本柱（2ケ所）の計6ケ所は，いずれもほぼ正方形の平面配置を示し，他の掘立柱群と明らかに区別できる。

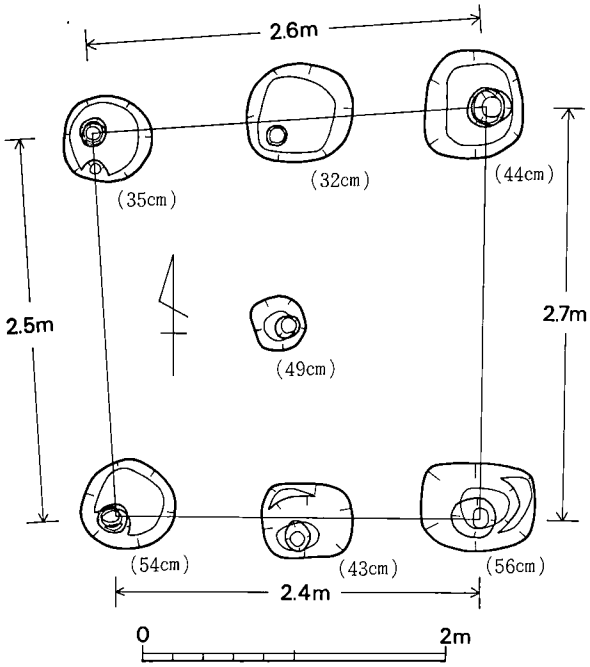
Ⅳ　正方形平面掘立柱建物の可能性

以上，実例をあげて，6ケ所の明白なる掘立柱群がすべて正方形の配置をとることを指摘した。

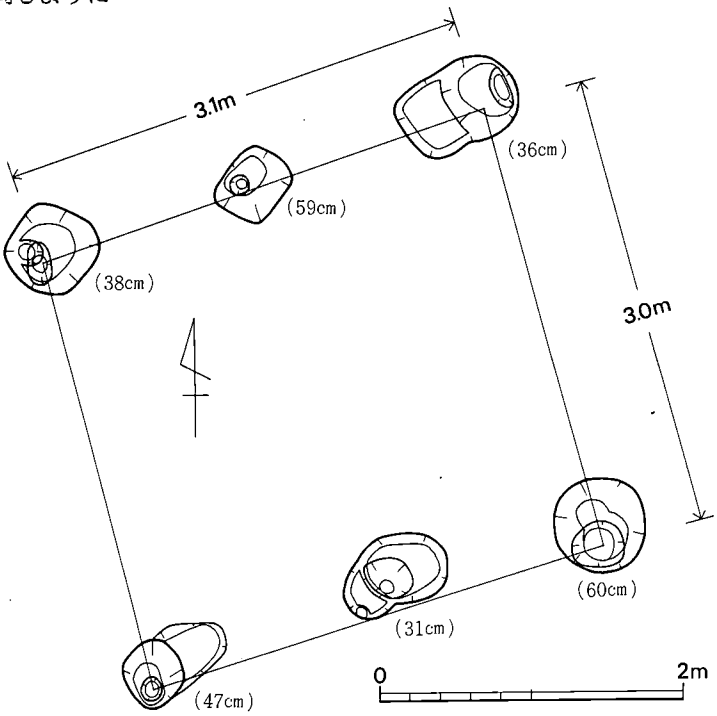
一方，明確な建築物としてかっては上屋構造のあった竪穴式家屋址として，当地区で採り上げた正方形平面竪穴式家屋の構造が正方形配置の4本柱であったことも，Ⅰ章で指摘できた。

竪穴式家屋を構造する4本柱が採用する正方形配置が，正しく掘立柱群にも見られると言うことは，その掘立柱群が竪穴式家屋と同じように建築址としての可能性があることを示している。

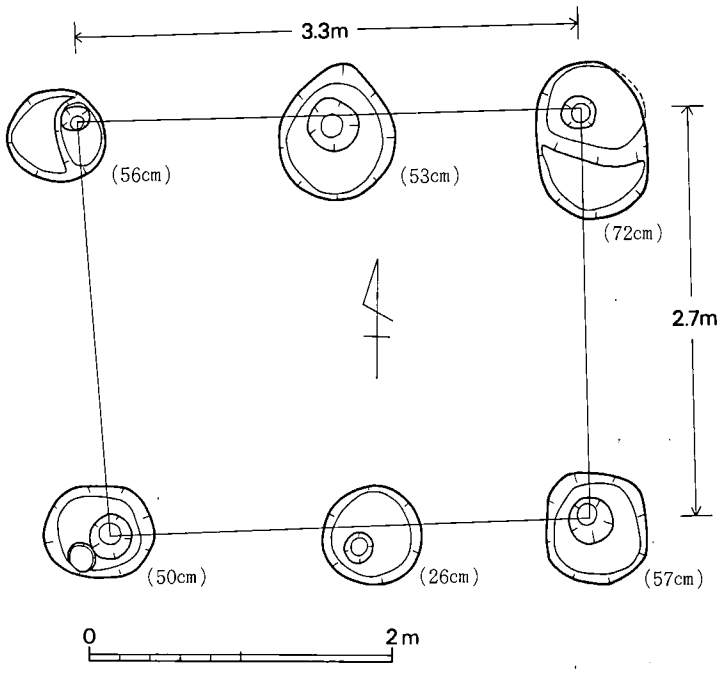
ここではじめて，この正方形配置の掘立柱群を正方形平面の掘立柱建物として扱うことができる。それのみならず，正方形平面竪穴式家屋とこの正方形平面掘立柱建物は，その柱配置計画における共通性から，同時期の建物であることも発言できる。



第115図　B地区15号掘立柱建物実測図（1/50）



第116図　B地区17号掘立柱建物実測図（1/50）



第117図　B地区14号掘立柱建物実測図（1/50）

V　その機能の想定

以上6棟の正方形平面掘立柱建物は規模が同じ程度のものだから，建物の機能は同じだろう。

6棟のうち，殊に9本柱と7本柱においては中央に柱が立っているが，一辺3 *m*程度の空間では室内中央に柱が立つとは考えにくいので，この中央の柱は床を支えるものだと思われ，これらの建物は床ある建物と想像される。

同時期の建物としての竪穴式家屋が住いとしての機能を引き受けるとすれば，一方この床ある一辺3 *m*規模の正方形平面の建物は貯蔵の機能を引き受ける倉と想定できよう。倉として，今日の遺例を見ると，特に一般庶民の建築としては，東南アジア諸国（日本の南西諸島等を含む）の米貯蔵のための床ある倉がある。[註(1)]

とくに，当地区の6棟の正方形平面掘立柱建物と同じ柱配置を示すものは，九州本土に連なる南西諸島に見られる高倉がある。即ち，9本柱，8本柱，7本柱，6本柱の高倉の実例が指摘できる。[註(2)] ただし，7本柱の実例は極めて少なく，管見には与論島の熊谷文秀氏宅高倉（図版64）にのみ実見できた。

しかし，日本の南西諸島にある高倉諸例にも，それらの建築形態には種々の変化があり，当遺跡で発掘され今回検討した正方形平面掘立柱建物が，どのような高倉の形態を採っていたかは，不明とするしかない。

以上の推論よりして，正方形平面竪穴式家屋の時期，即ち7C頃，一般庶民の所有する建築として，住いとしての4本柱の正方形平面竪穴式家屋と，米倉としての正方形平面の高倉があることが判明した。しかも，その高倉の柱配置計画にはすでに各種の変化が起きていた。

おわりに

正方形に配置される掘立柱群が竪穴式家屋を構造する4本柱の正方形配置と柱配置において共通点があることを指摘して，掘立柱建物として成立し得ることを提示した後，さらに進んで，その正方形平面の掘立柱建物が民俗（族）学的家屋調査例と類似していることから，米倉としての高倉であろうと推論した。

しかし，次のような点は今回解明できていない。

(1) 竪穴式家屋と比べて，正方形平面の掘立柱建物が数において圧倒的に少ない。

(2) 竪穴式家屋と比べて，正方形平面の掘立柱建物の方が方位に対する規制が緩い。

これ等建築上の問題に肉迫できないのは，発掘域が同時期の集落全体に及んでいないことに原因があろう。

（昭和57年6月16日稿了）

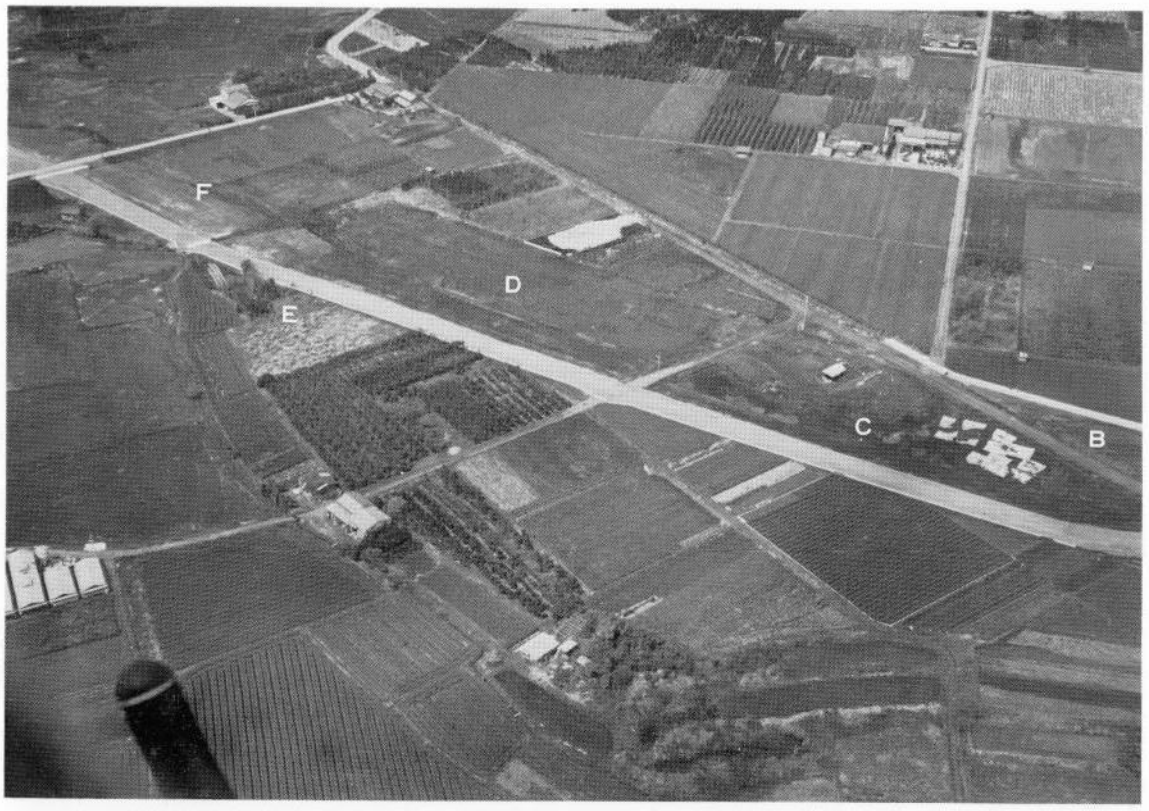
註

1 例えば，千々岩助太郎，『台湾高砂族の住家』昭和35年3月，丸善株式会社発行

2 野村孝文，『南西諸島の民家』，昭和51年4月 相模書房発行
巌谷不二雄，田辺泰，『琉球建築』，昭和12年10月，座右宝刊行会発行

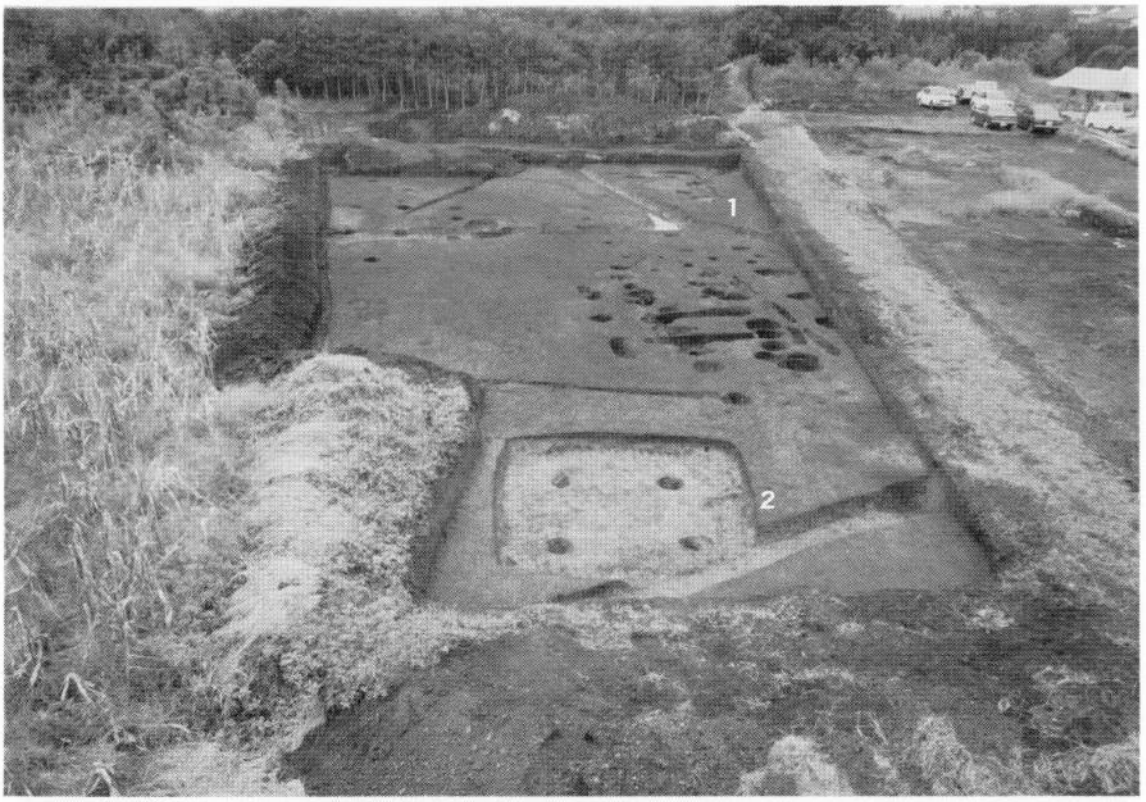
図　版

立野遺跡航空写真（1/7,000　アルファベットは地区名を示す）

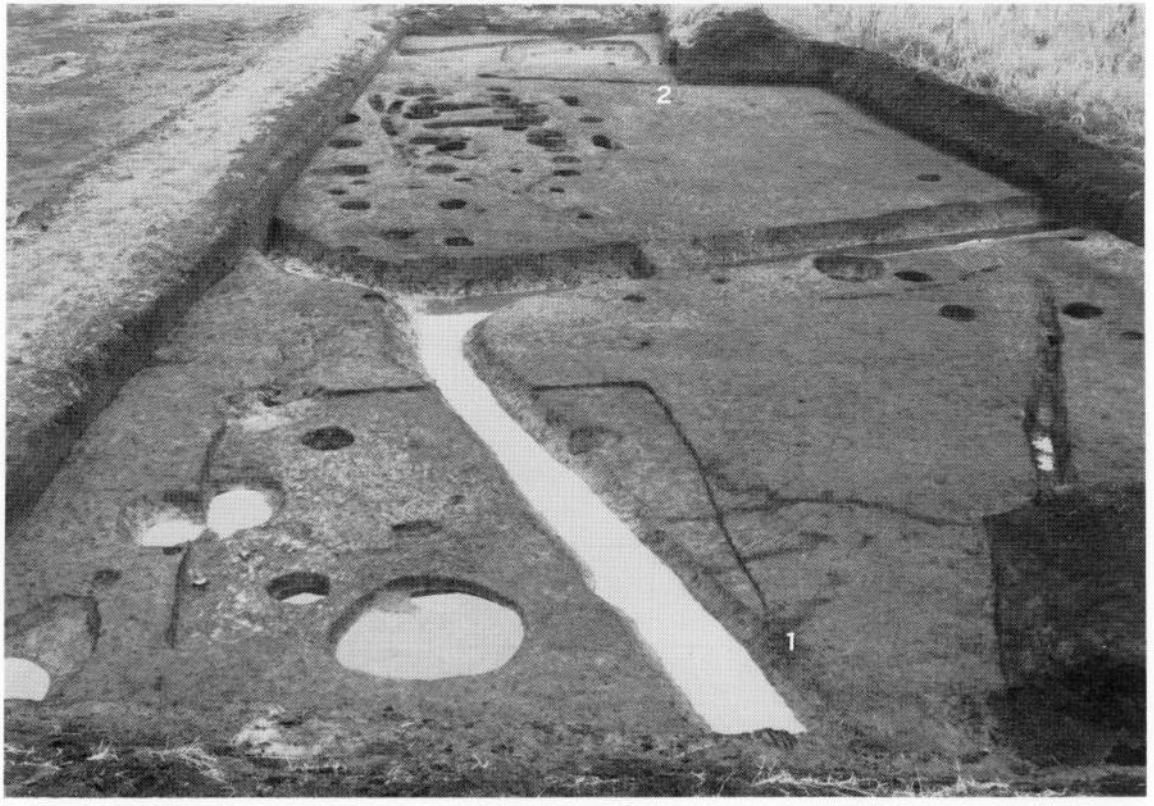


(1) 立野遺跡航空写真（南東上空から，アルファベットは地区名を示す）

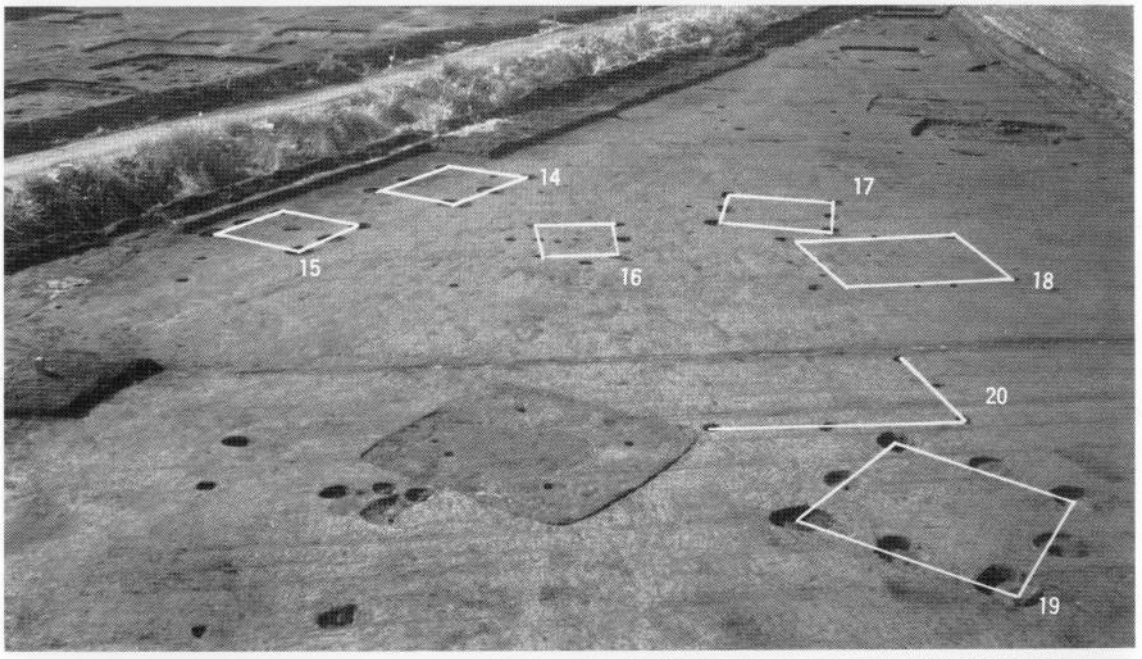
(2) 立野遺跡航空写真（西上空から）

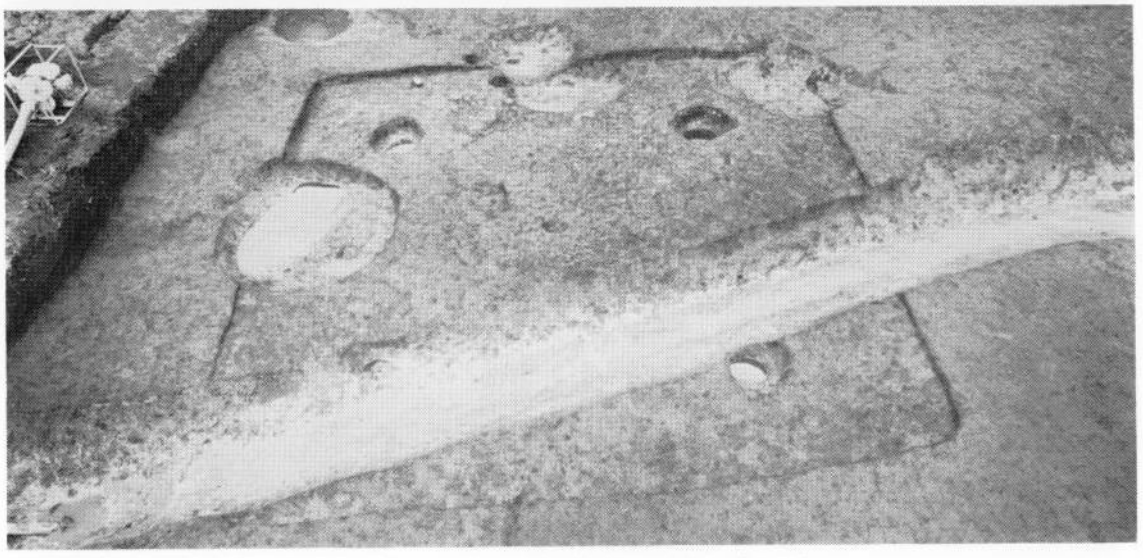


(1) 立野遺跡E区全景（東から，数字は住居跡の番号を示す）



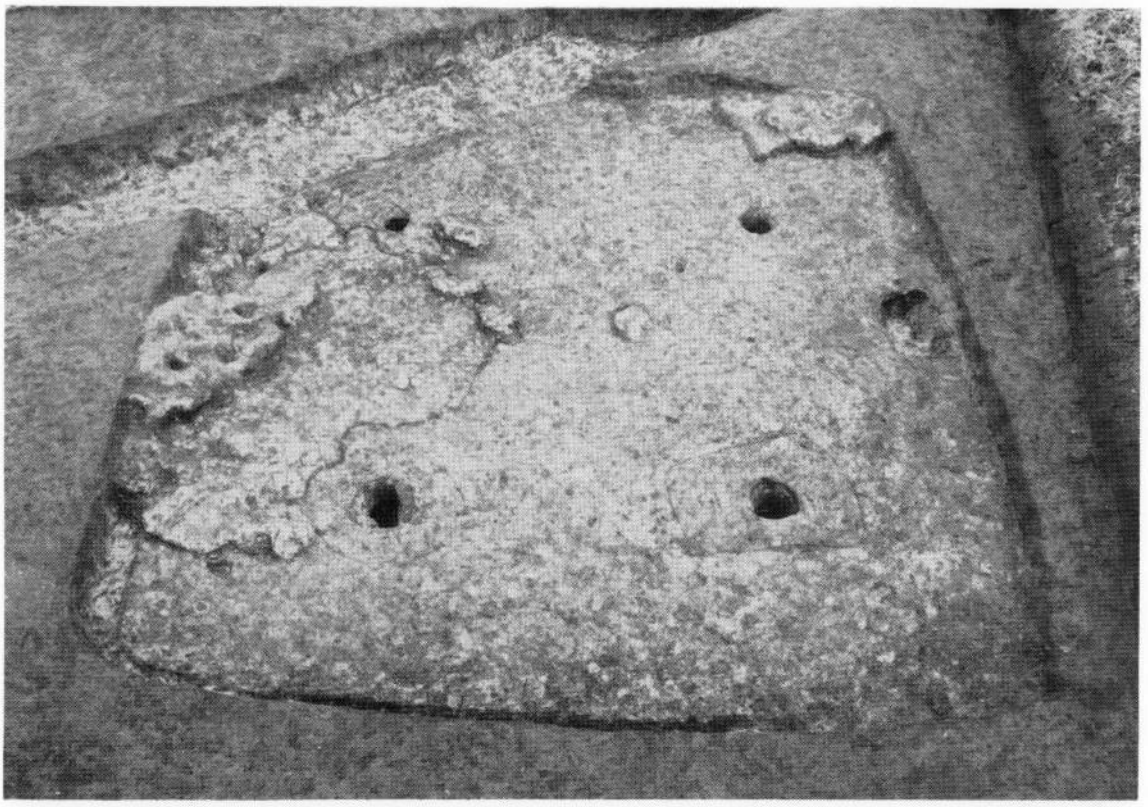
(2) 立野遺跡E区全景（西から）



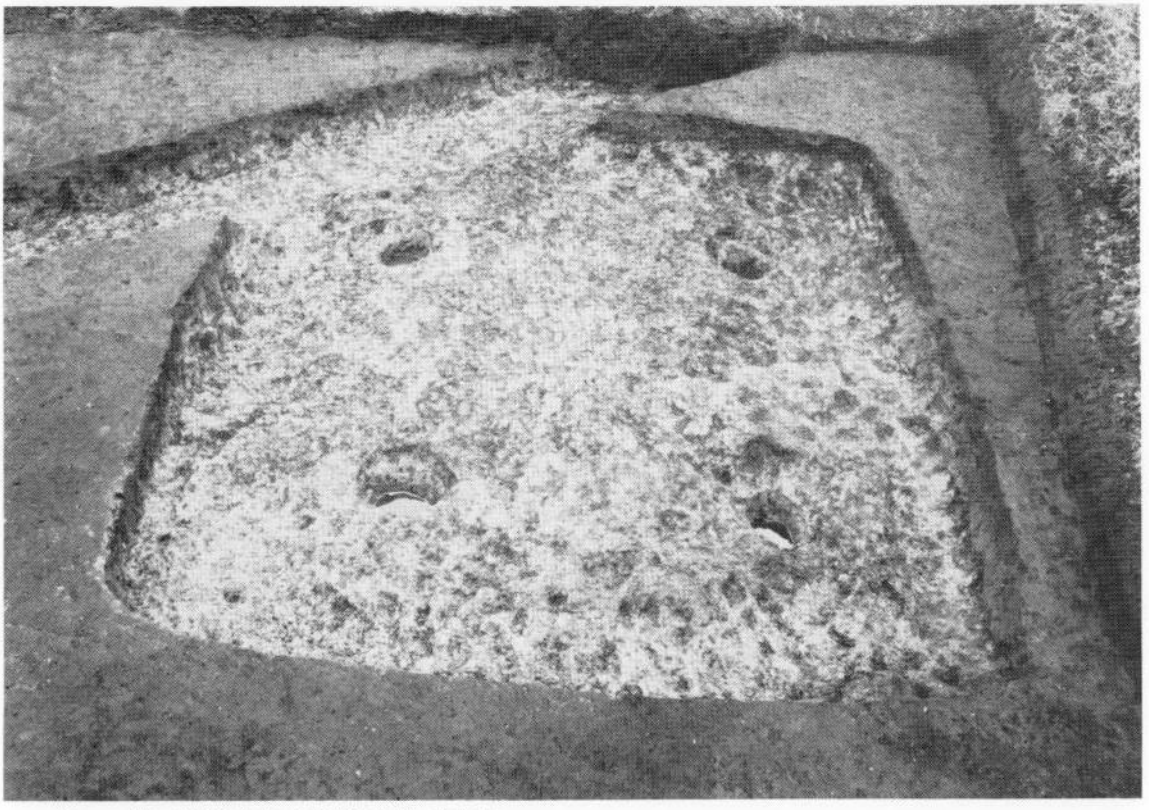


(1) 立野遺跡D区全景（西から）　(2) 立野遺跡B区全景（東から）

(3) 1号竪穴住居跡全景（E区，南から）



(1)　2号竪穴住居跡全景（E区，南から）



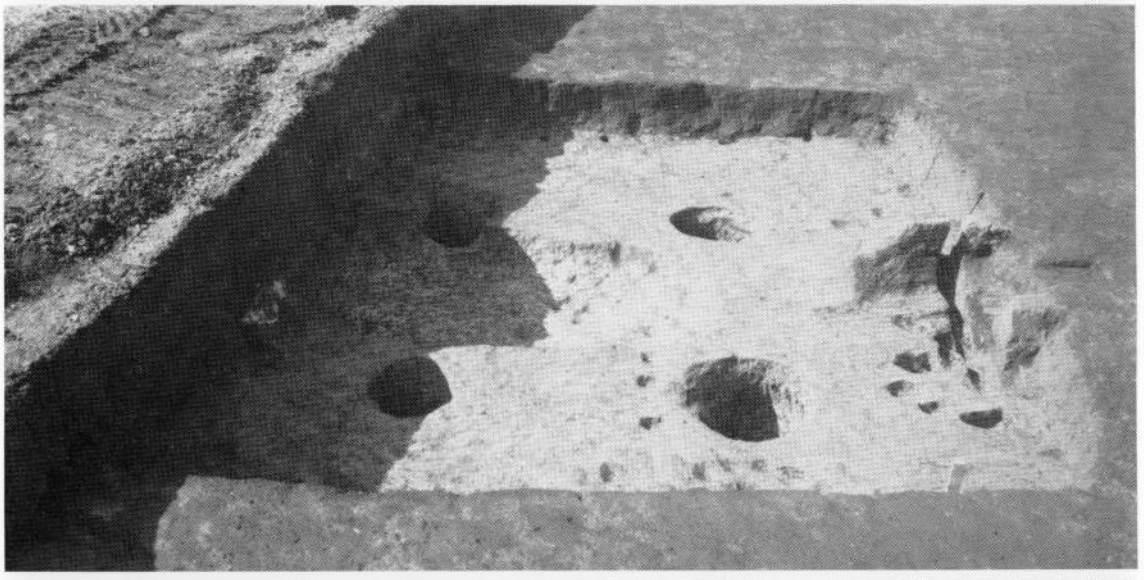
(2)　2号竪穴住居跡下層遺構全景（同上）

(1)　3号竪穴住居跡全景（D区，南から，上は4号竪穴住居跡）

(2)　3号竪穴住居跡カマドと支脚（同上）

(1)　4号竪穴住居跡全景（D区，南から）

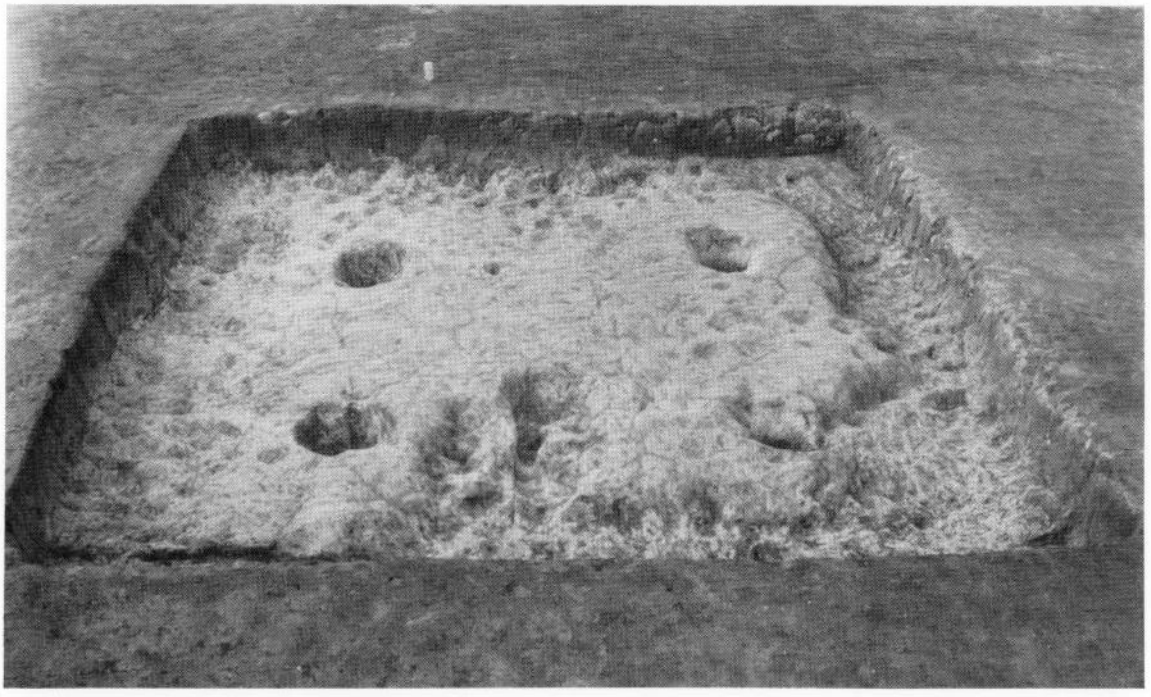
(2)　4号竪穴住居跡下層遺構全景（同上）



(1)　5号竪穴住居跡全景（D区，東から）　(2)　5号竪穴住居跡下層遺構全景（同右）

(3)　5号竪穴住居跡カマド（南から）

(1)　6号竪穴住居跡全景（D区，南から）

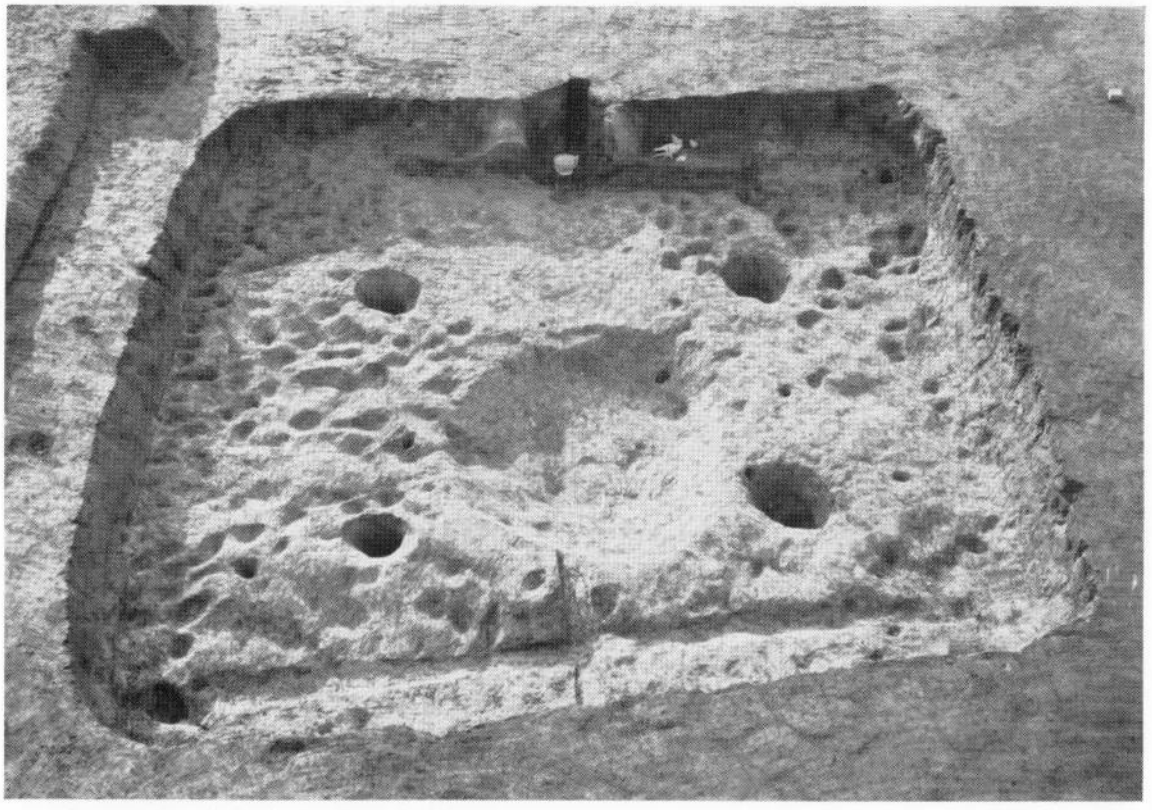


(2)　6号竪穴住居跡下層遺構全量（同上）

(1)　6号竪穴住居跡カマドと土器出土状態（南から）

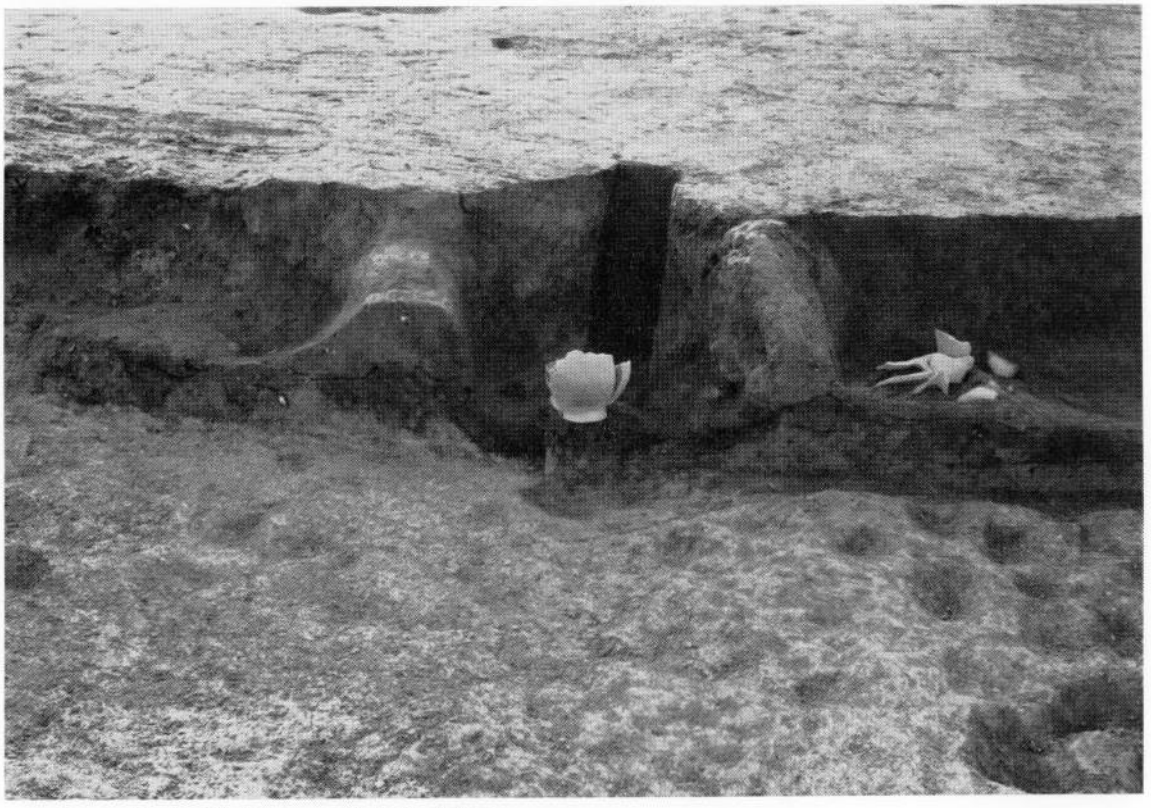
(2)　6号竪穴住居跡カマドと支脚（同上）

(1)　7号竪穴住居跡全景（D区，東から）

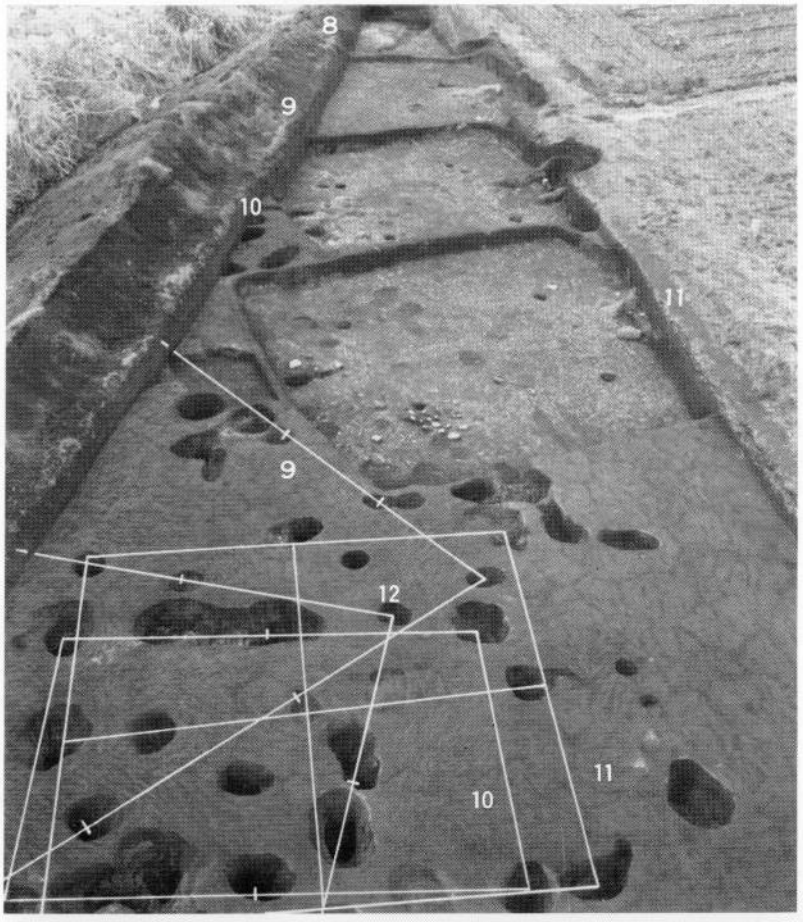


(2)　7号竪穴住居跡下層遺構全景（同上）

(1)　7号竪穴住居跡カマドと土器出土状態（東から）



(2)　7号竪穴住居跡カマドと支脚（同上）。



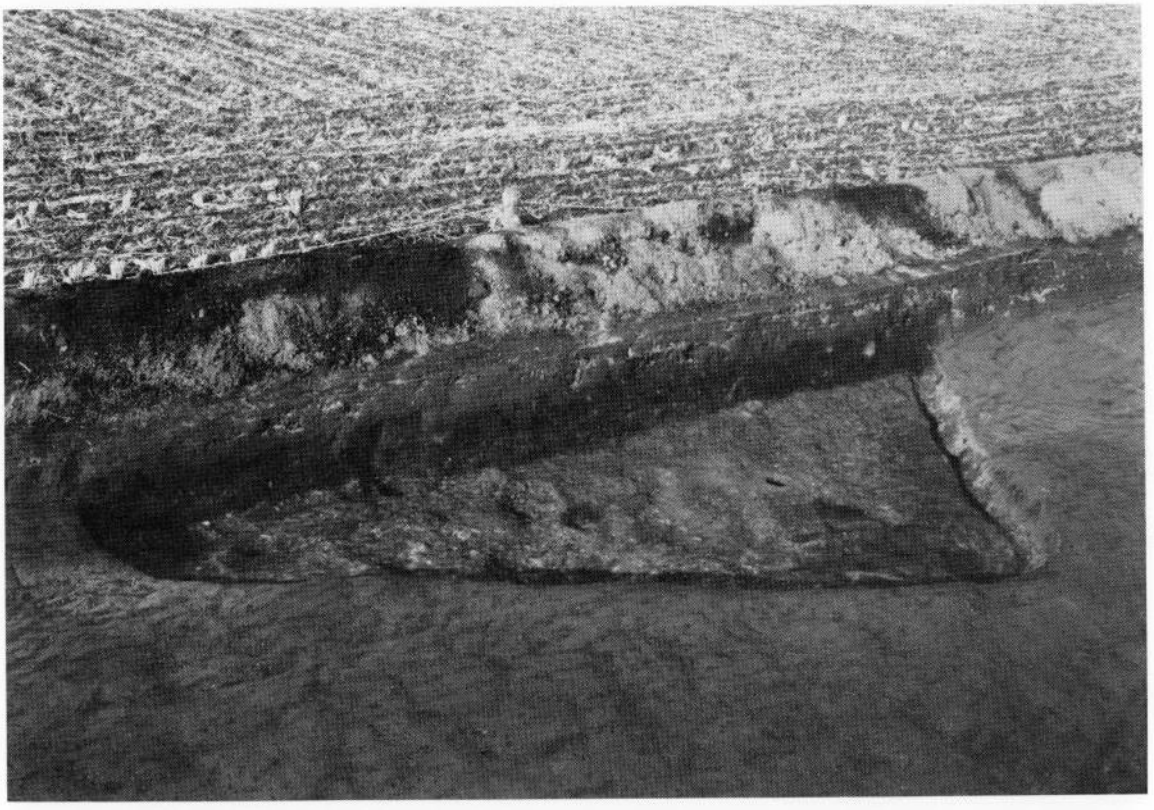
(1)

(2)

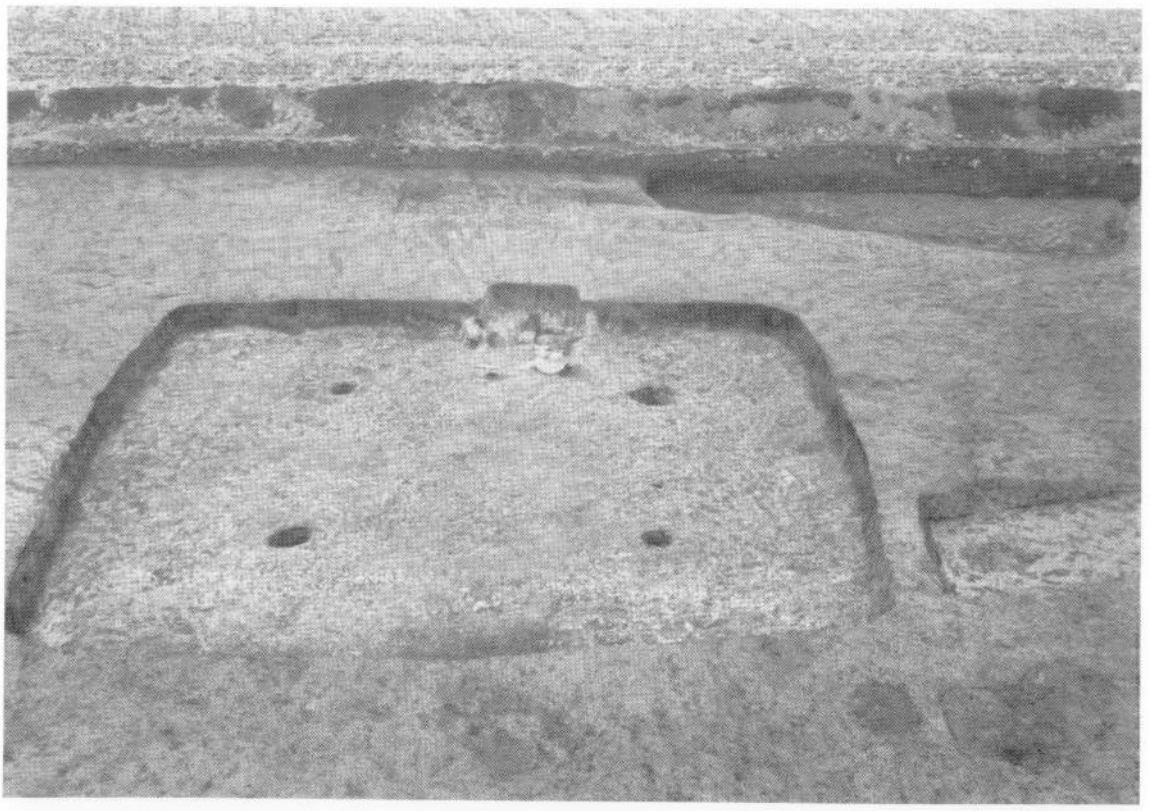
(1)　8～11号竪穴住居跡と9～12号掘立柱建物（B区，東から）

(2)　10号竪穴住居跡カマドと支脚（南から）

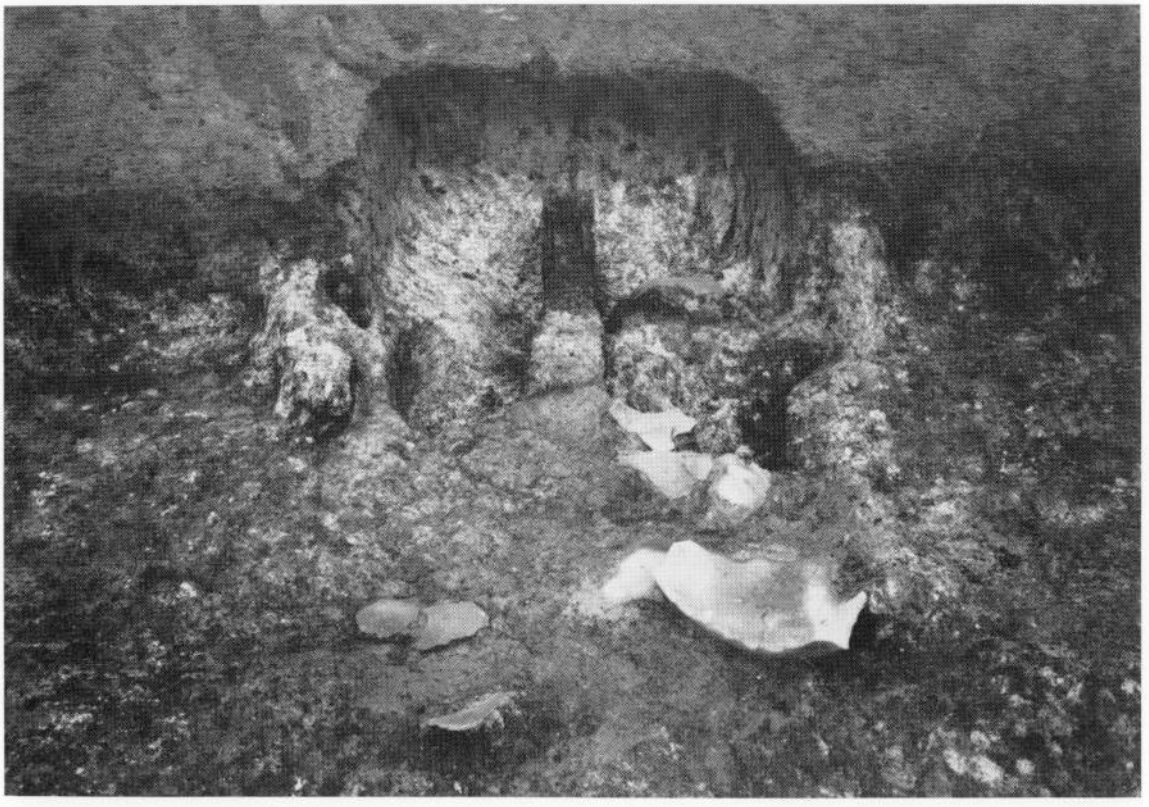
(1)　12号竪穴住居跡全景（B区，北から）



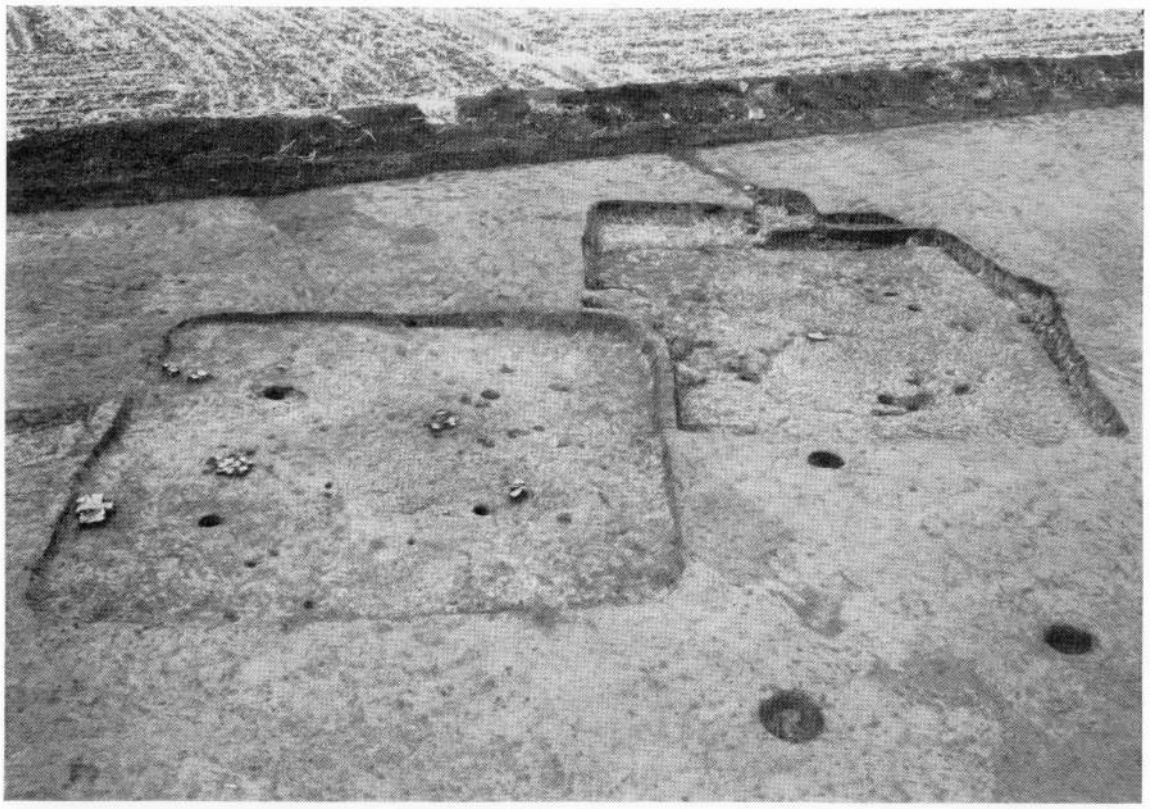
(2)　14号竪穴住居跡全景（B区，南から）



(1) 13号竪穴住居跡全景（B区，南から）

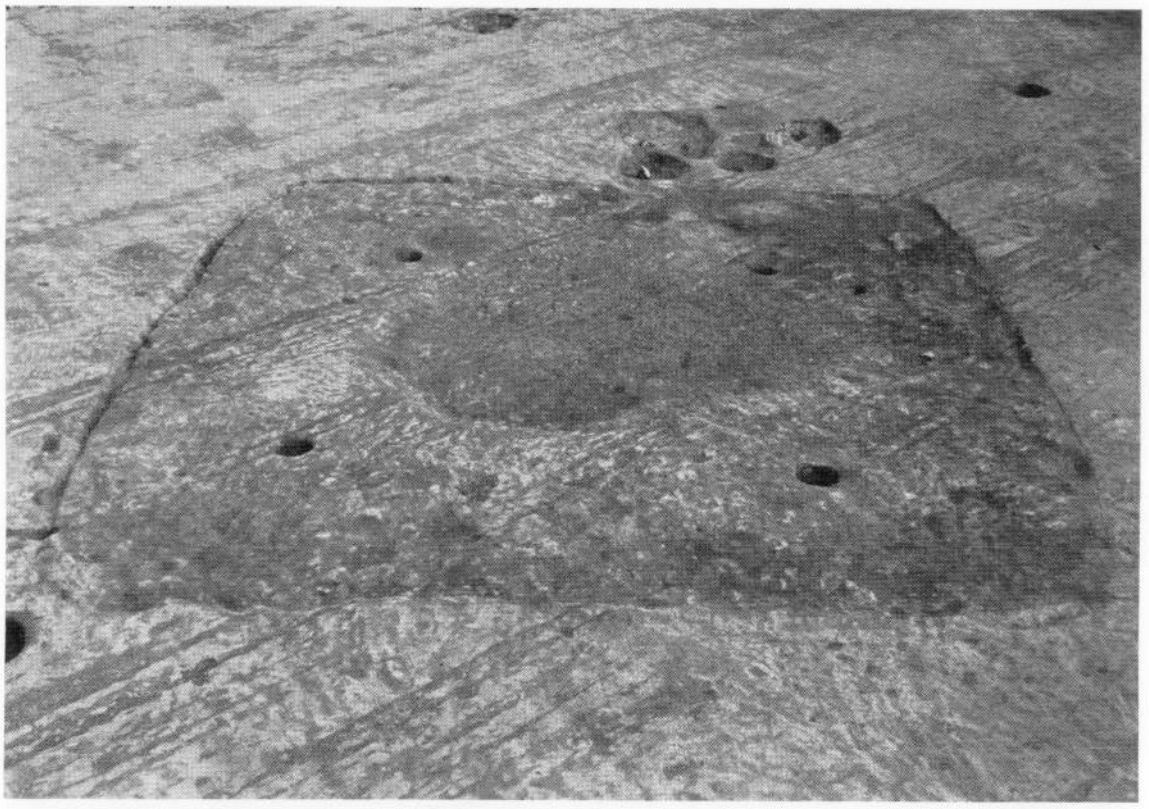


(2) 13号竪穴住居跡カマド（同上）



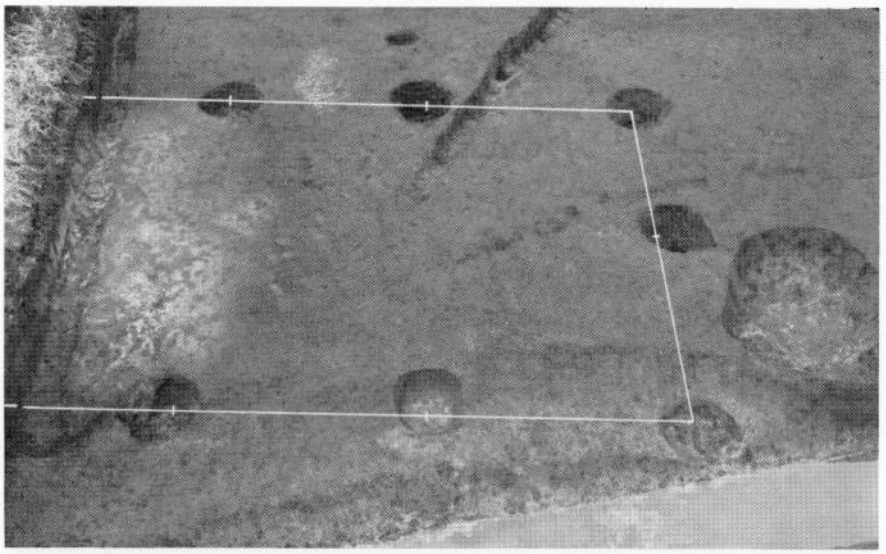
(1) 15〜17号竪穴住居跡全景（B区，南から）

(2) 17号竪穴住居跡カマド（同上）

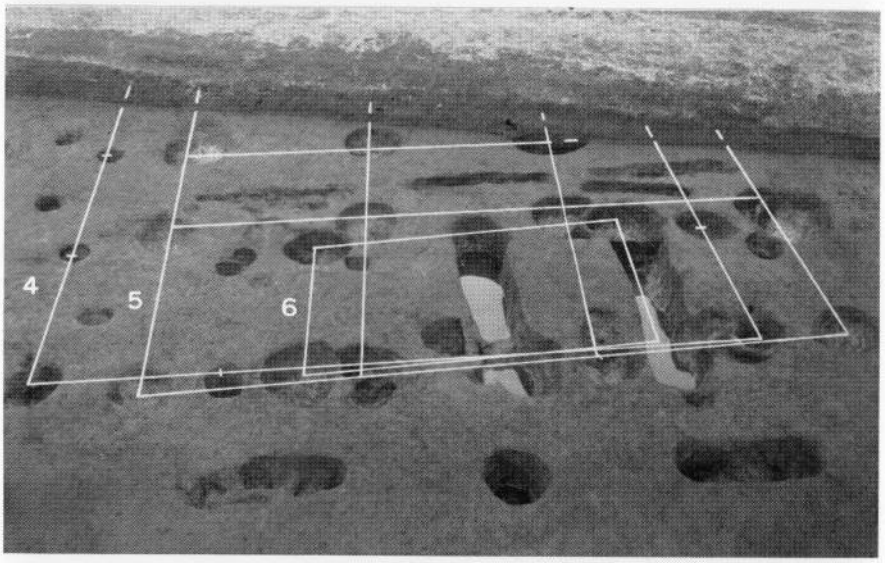


(1) 18号竪穴住居跡全景（B区，西から）

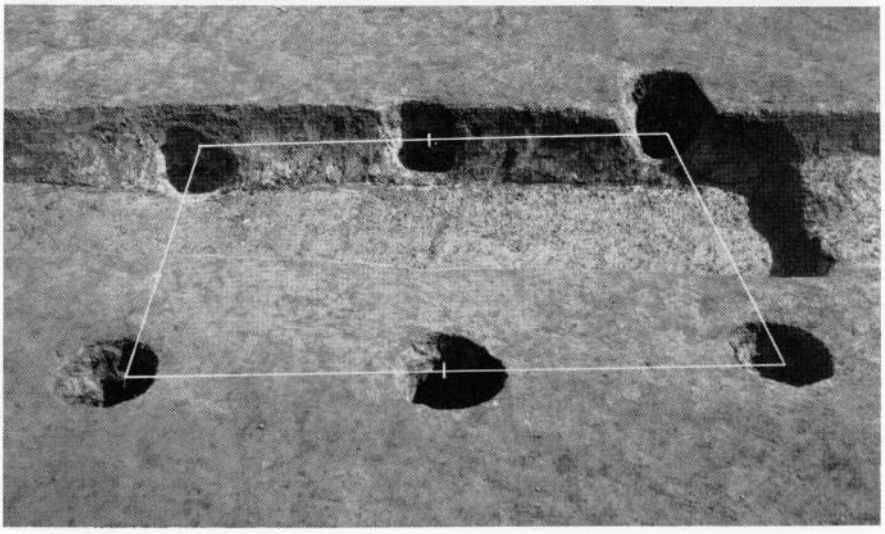
(2) 19号竪穴住居跡全景（B区，北から）



(1)

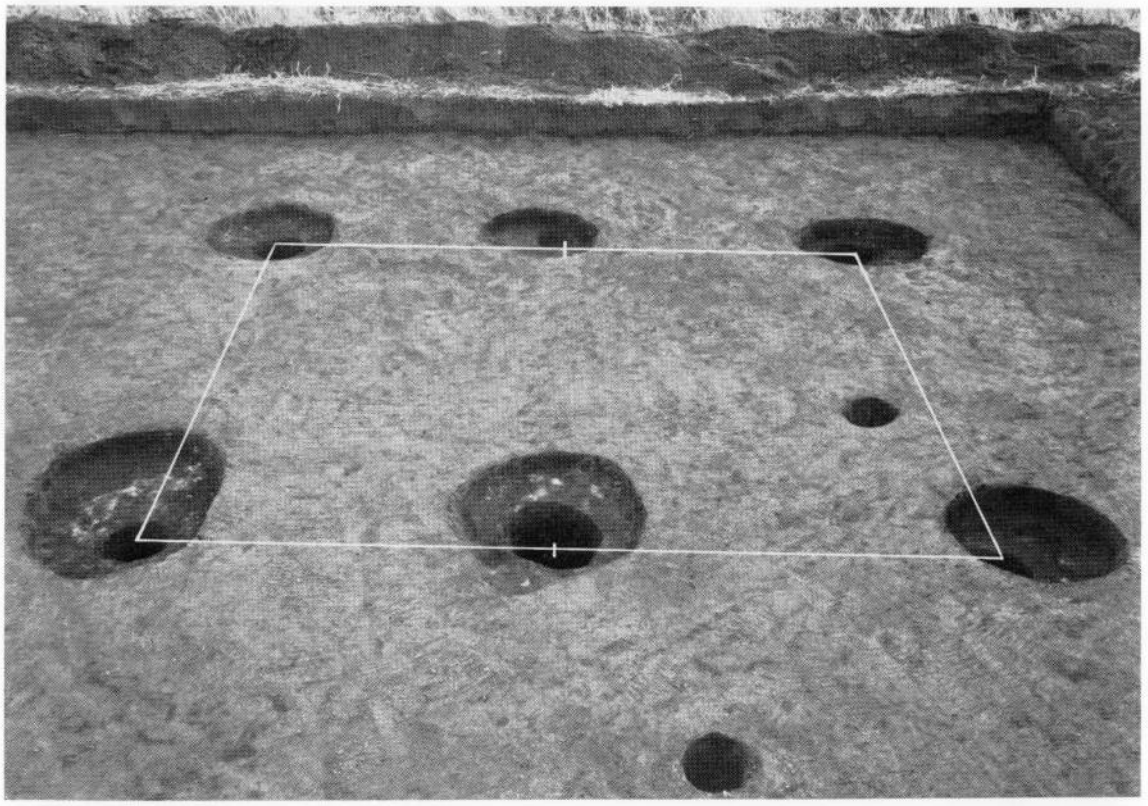


(2)

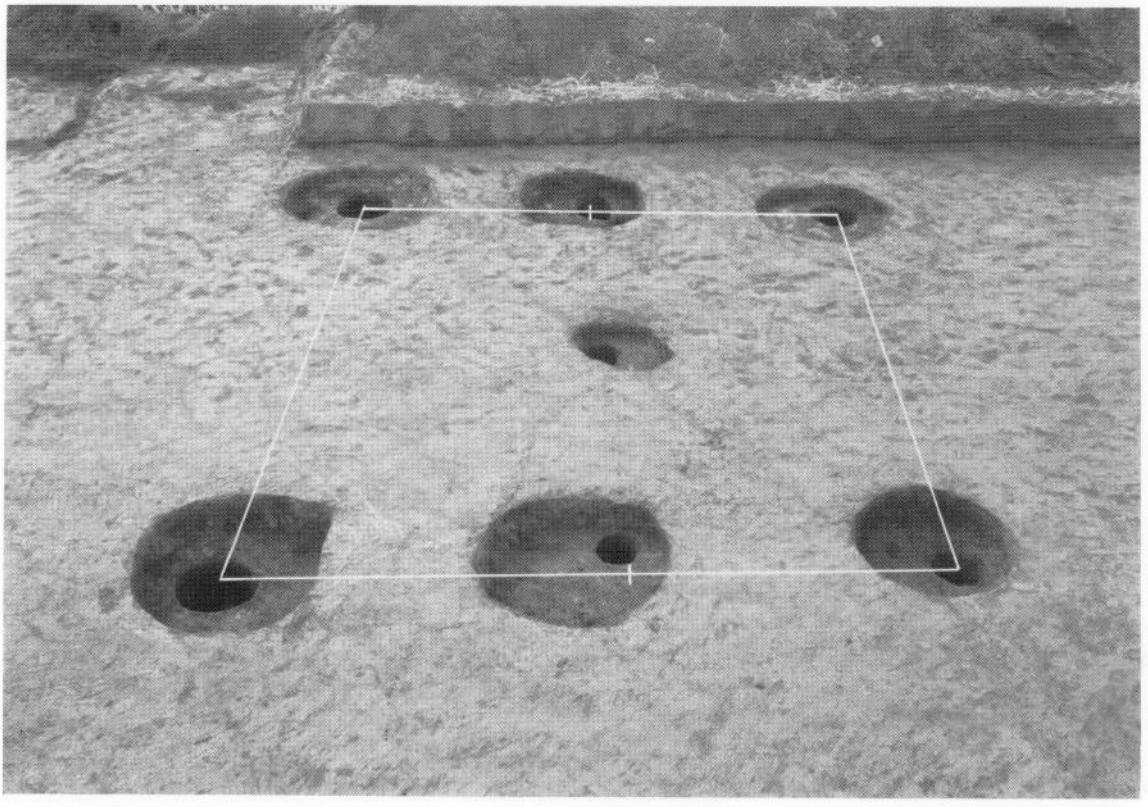


(3)

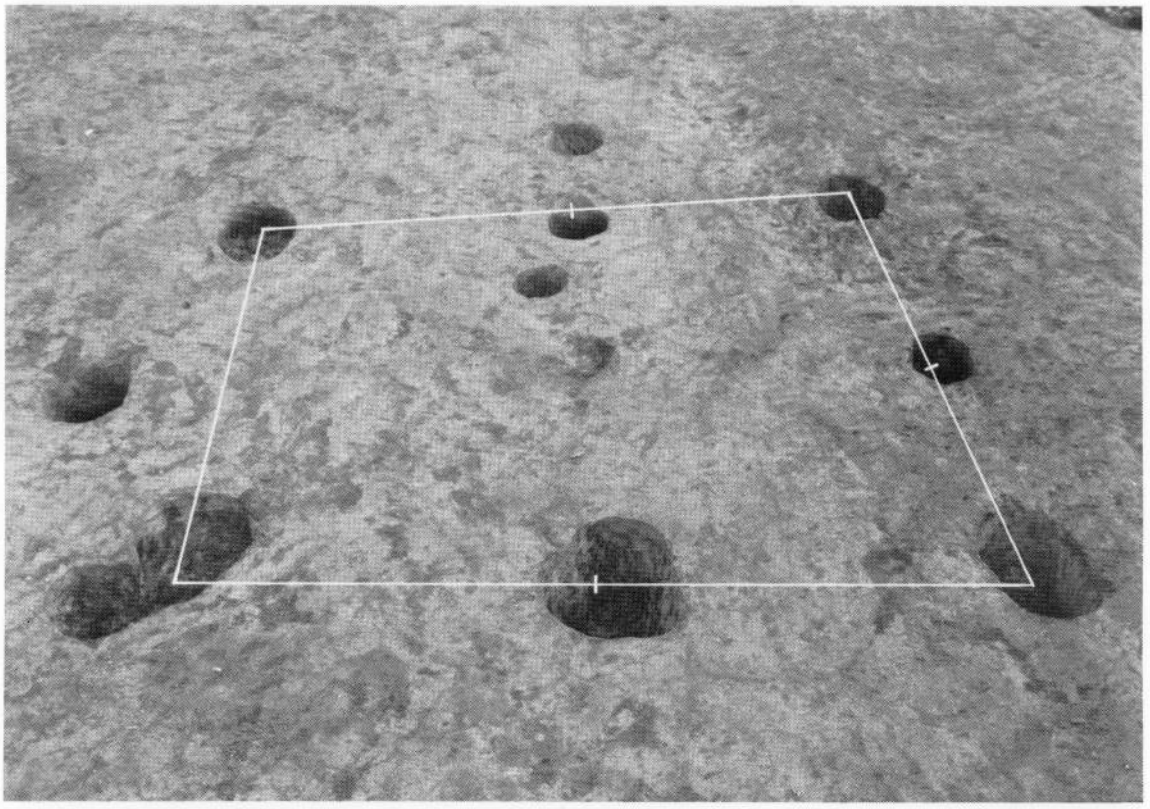
(1) 2号掘立柱建物（E区、東から）
(2) 4～6号掘立柱建物（E区　南から）
(3) 8号掘立柱建物（D区　北から）



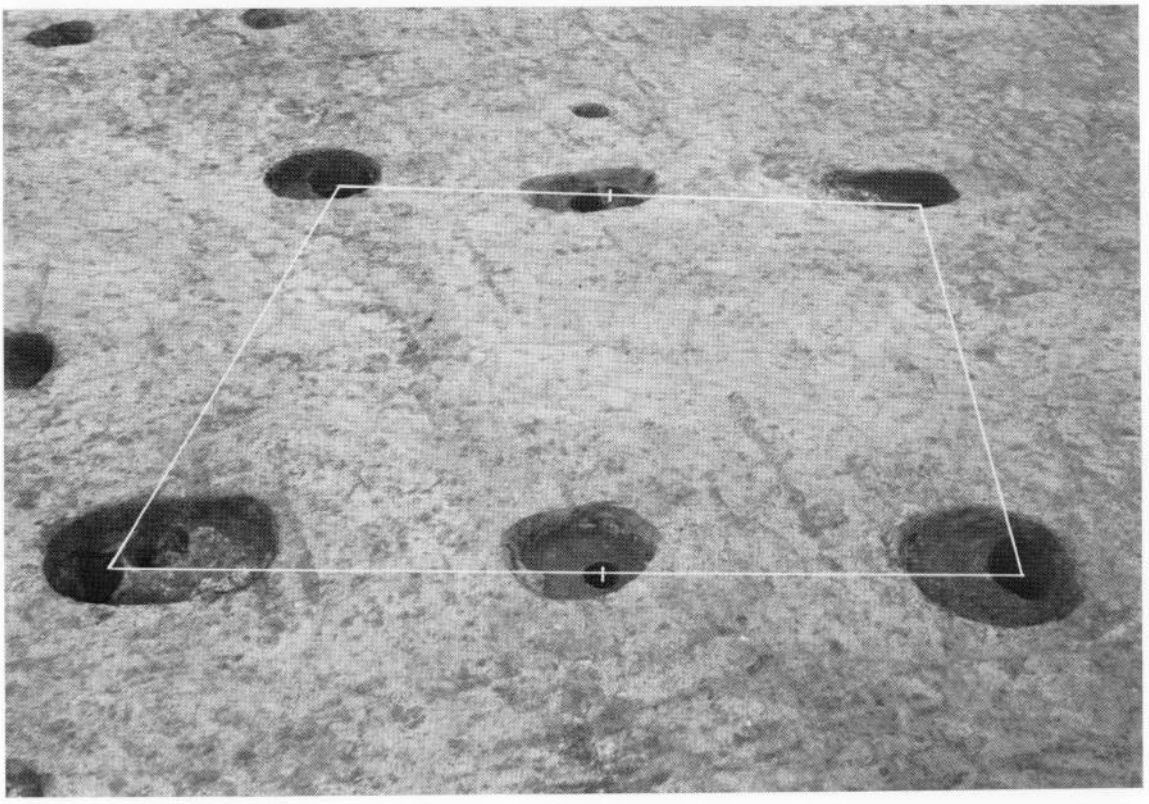
(1) 14号掘立柱建物（B区，北から）



(2) 15号掘立柱建物（同上）

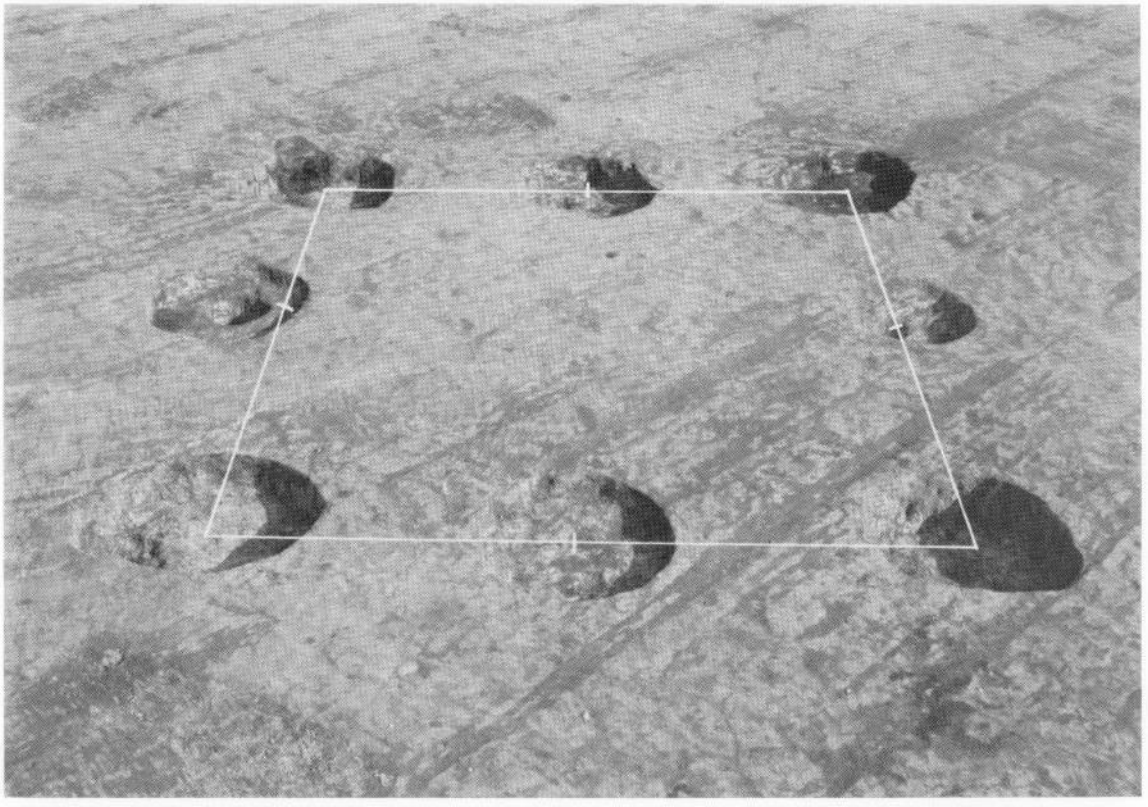


(1) 16号掘立柱建物（B区，北から）

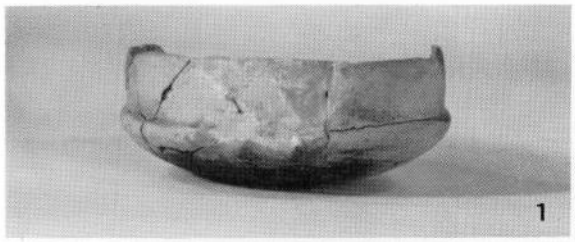


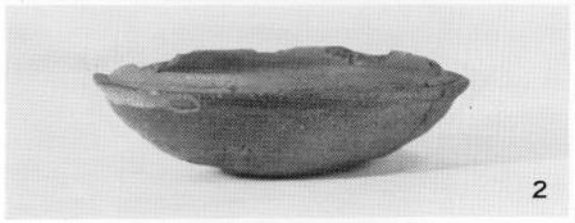
(2) 17号掘立柱建物（B区，北から）

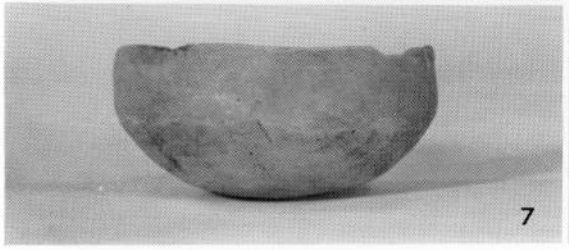
(1) 18号掘立柱建物（B区，北から）

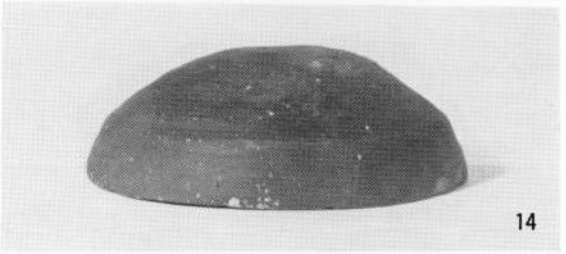


(2) 19号掘立柱建物（B区，西から）

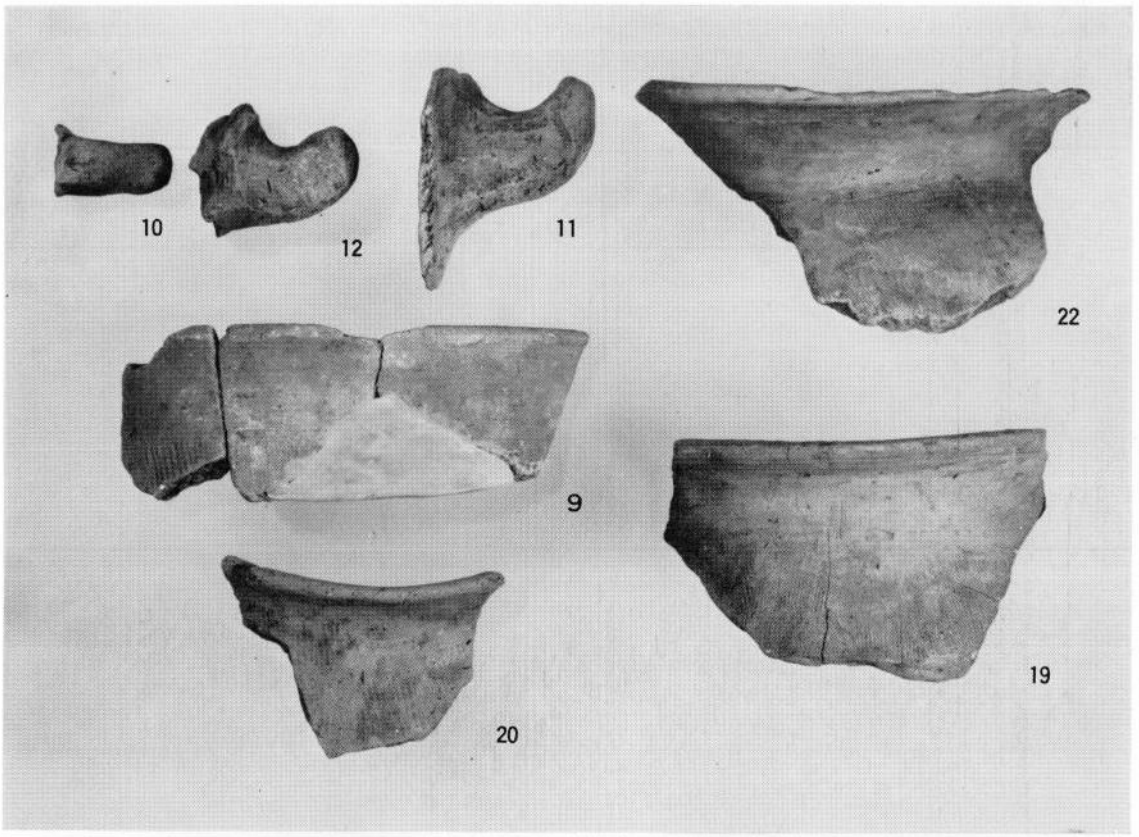


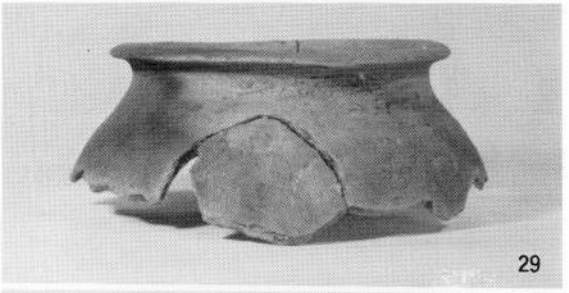


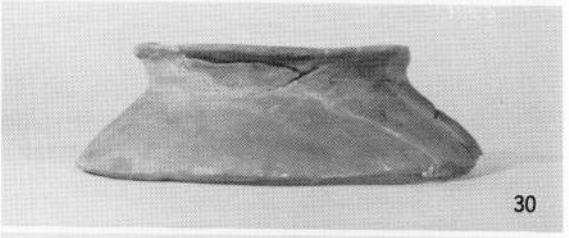


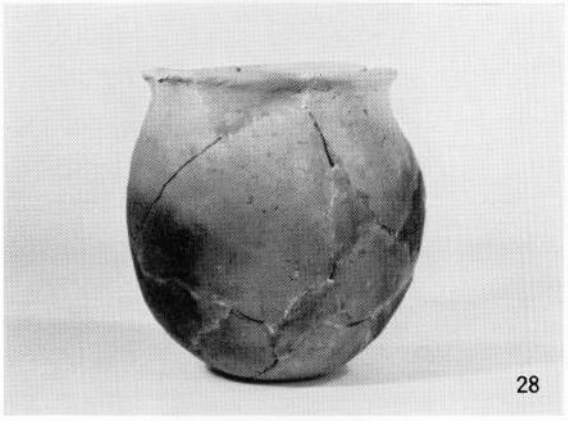


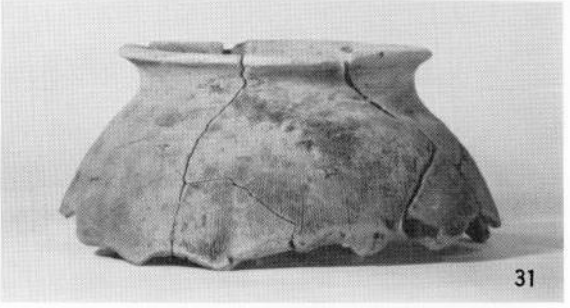
1・3号竪穴住居跡出土土器



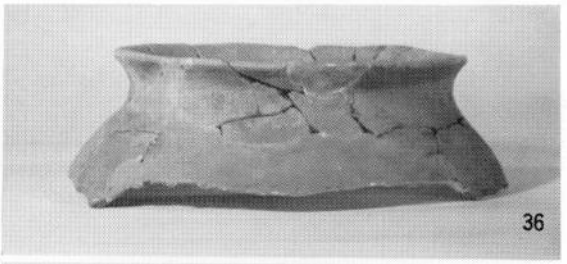


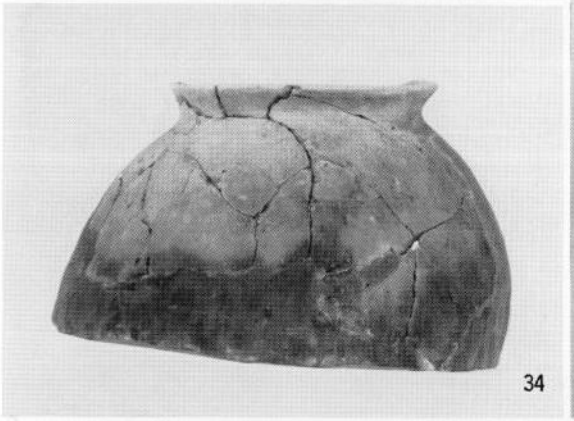


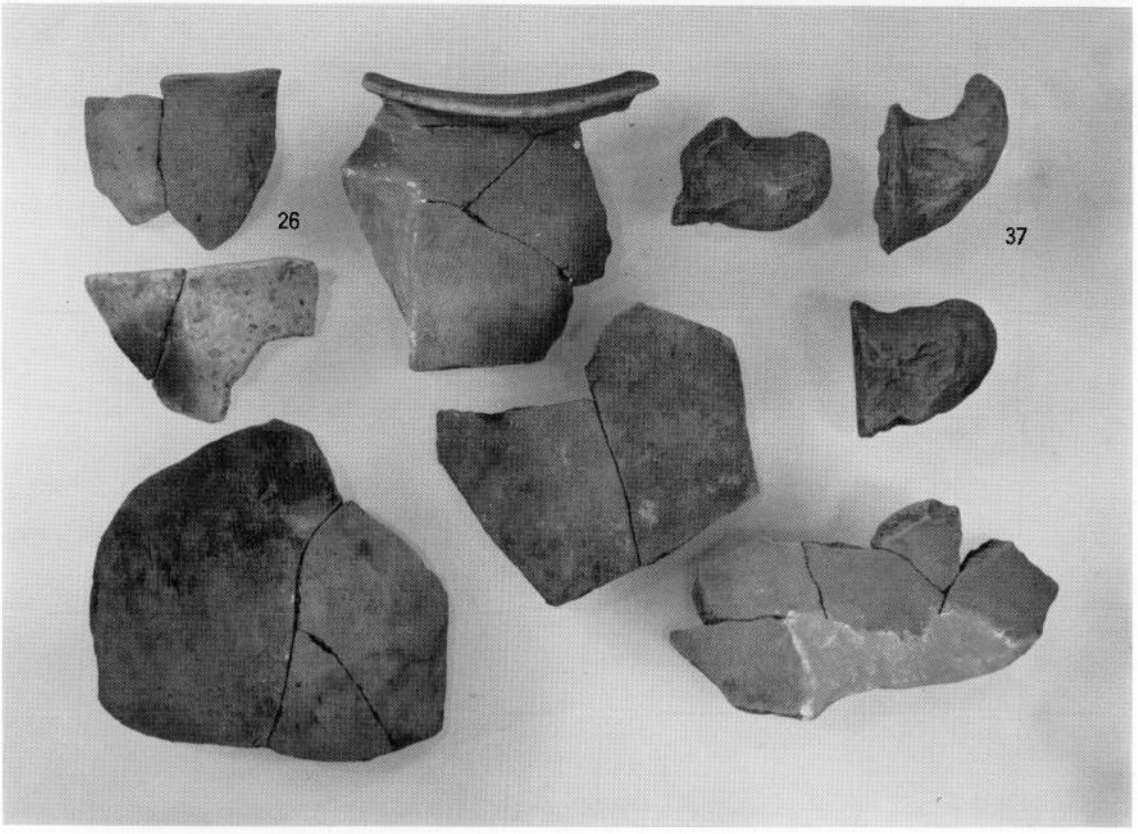




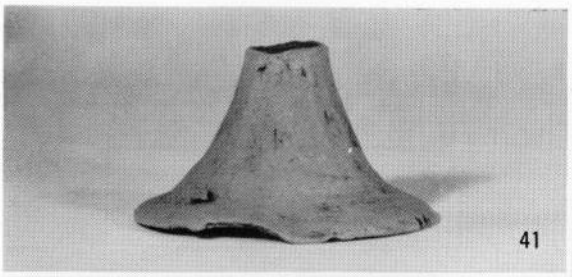
3・4号竪穴住居跡出土土器

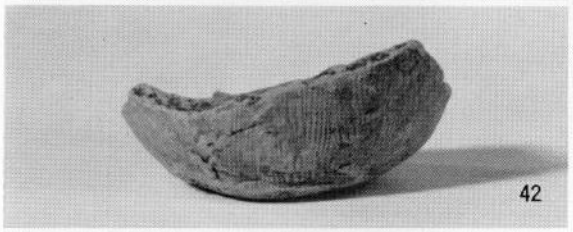


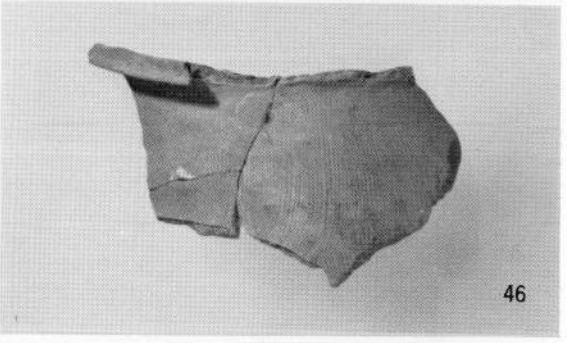


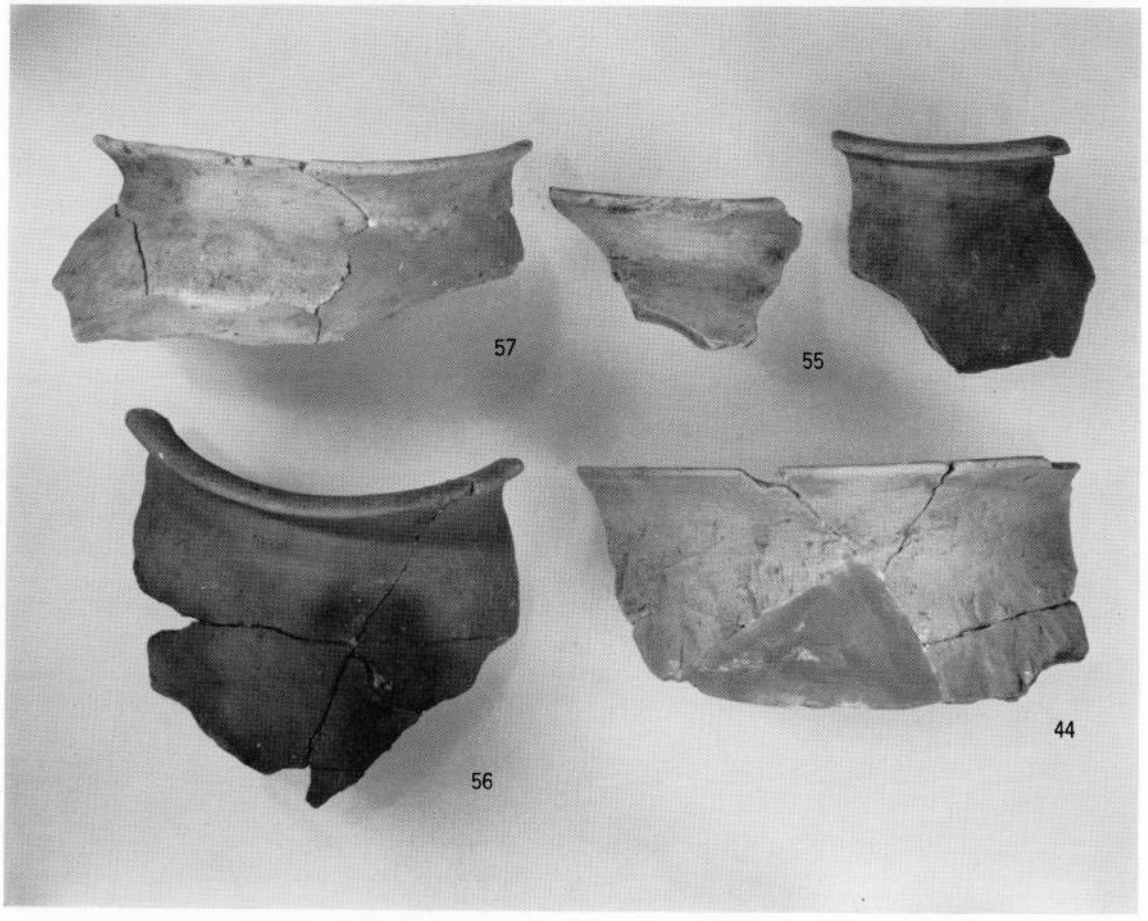


4号竪穴住居跡出土土器

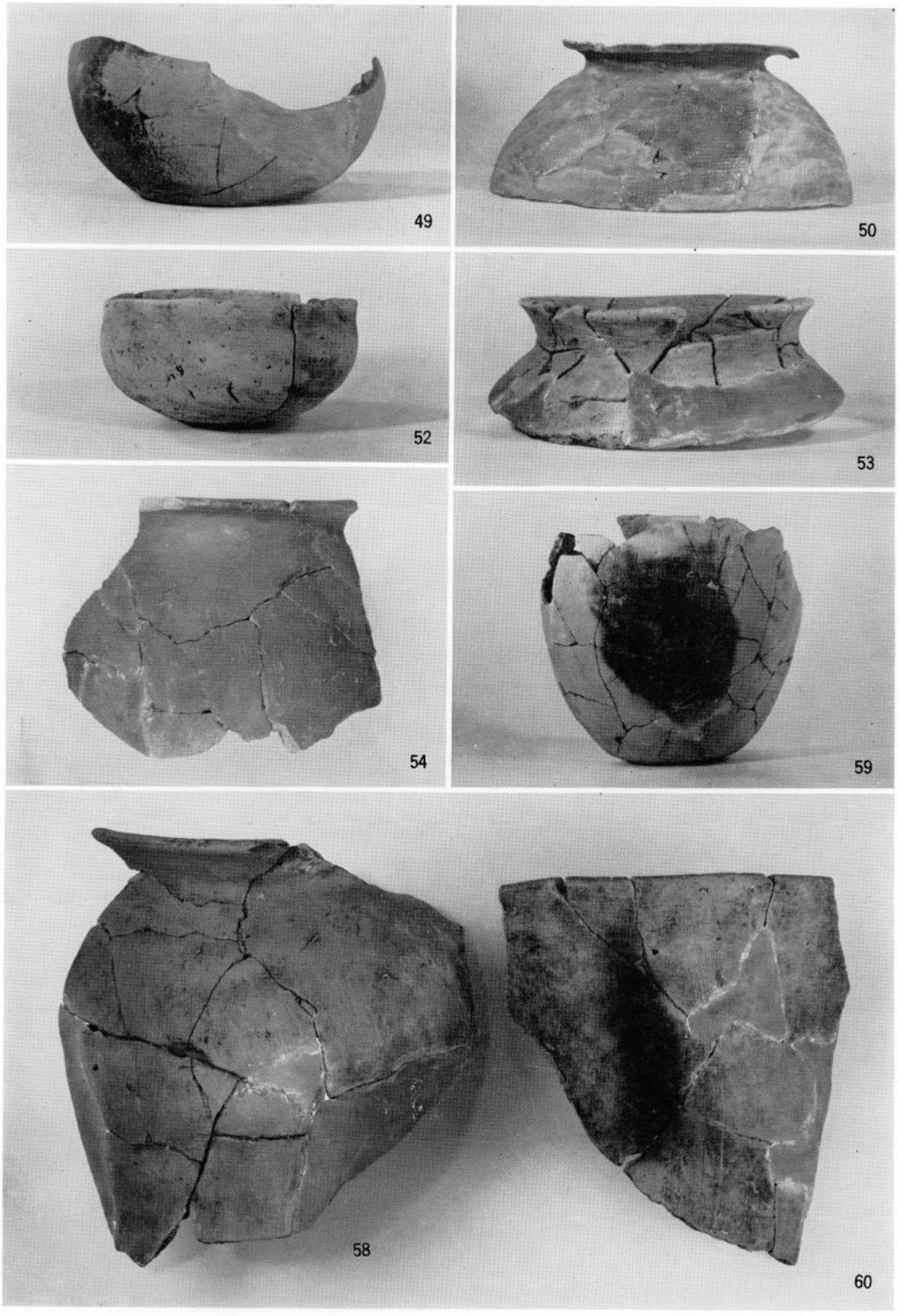




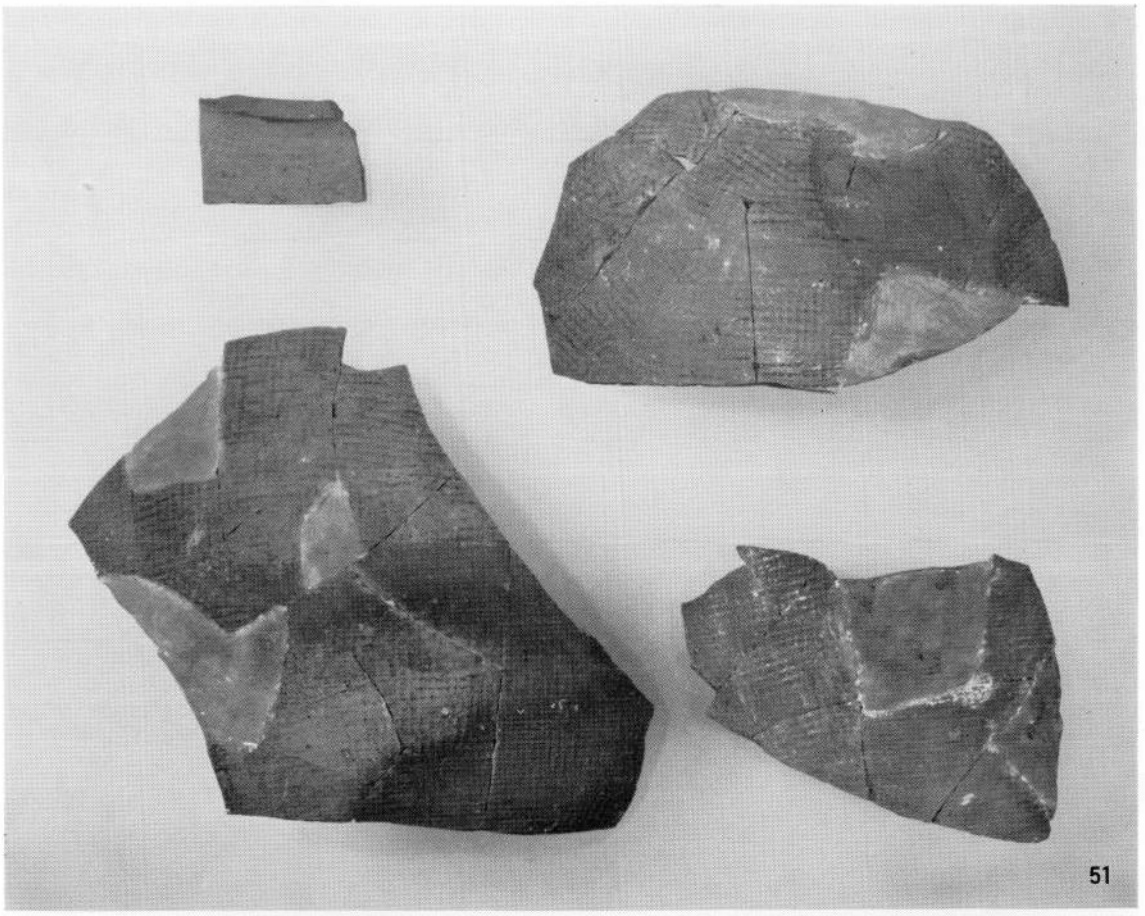


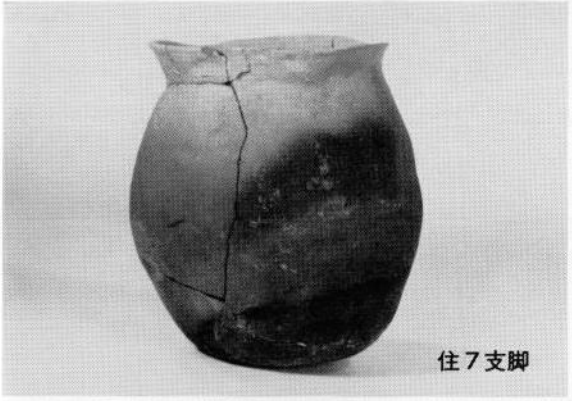


5・6号竪穴住居跡出土土器

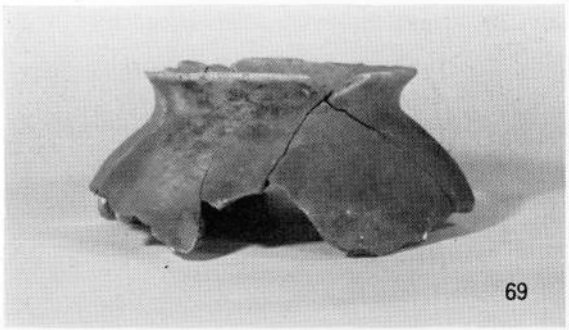


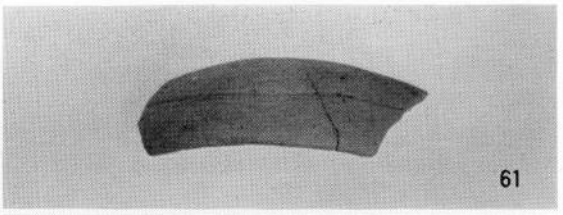
6号竪穴住居跡出土土器

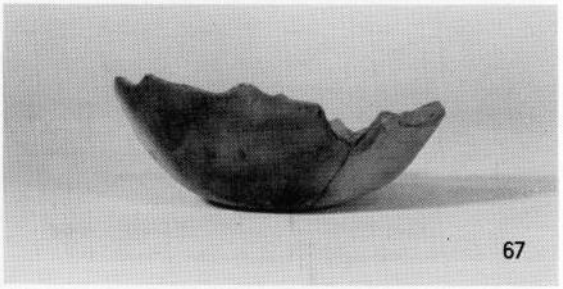


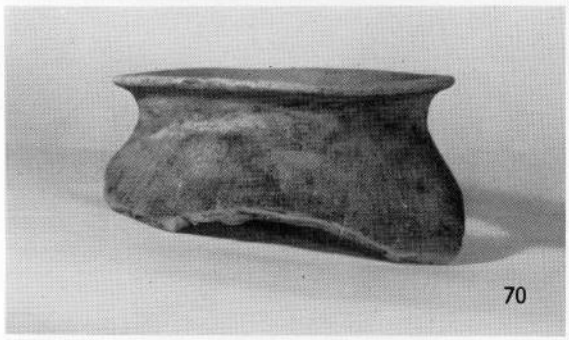


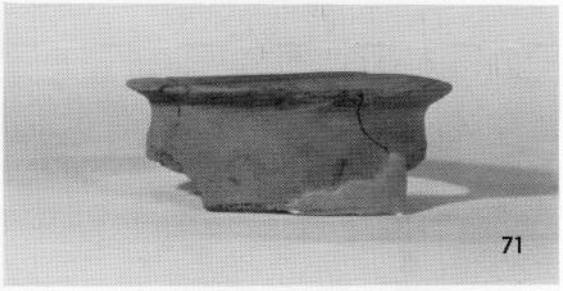
6・7号竪穴住居跡出土土器

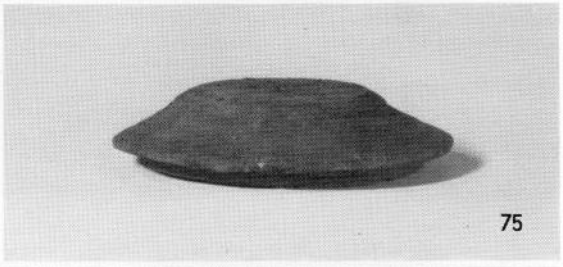


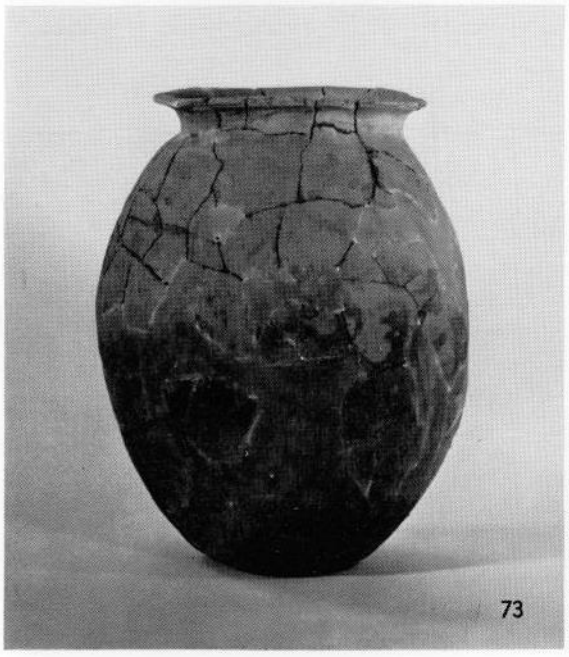


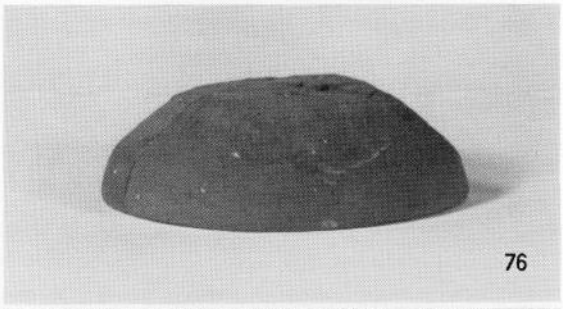




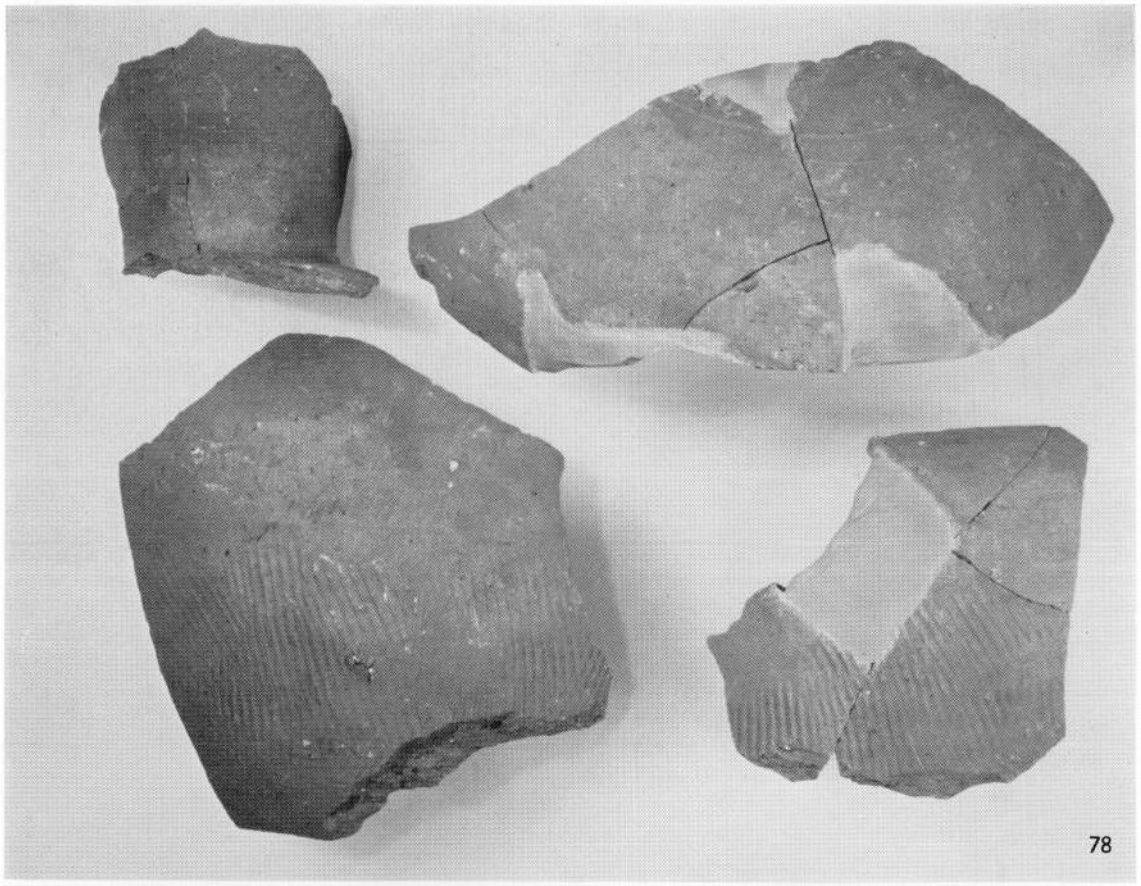


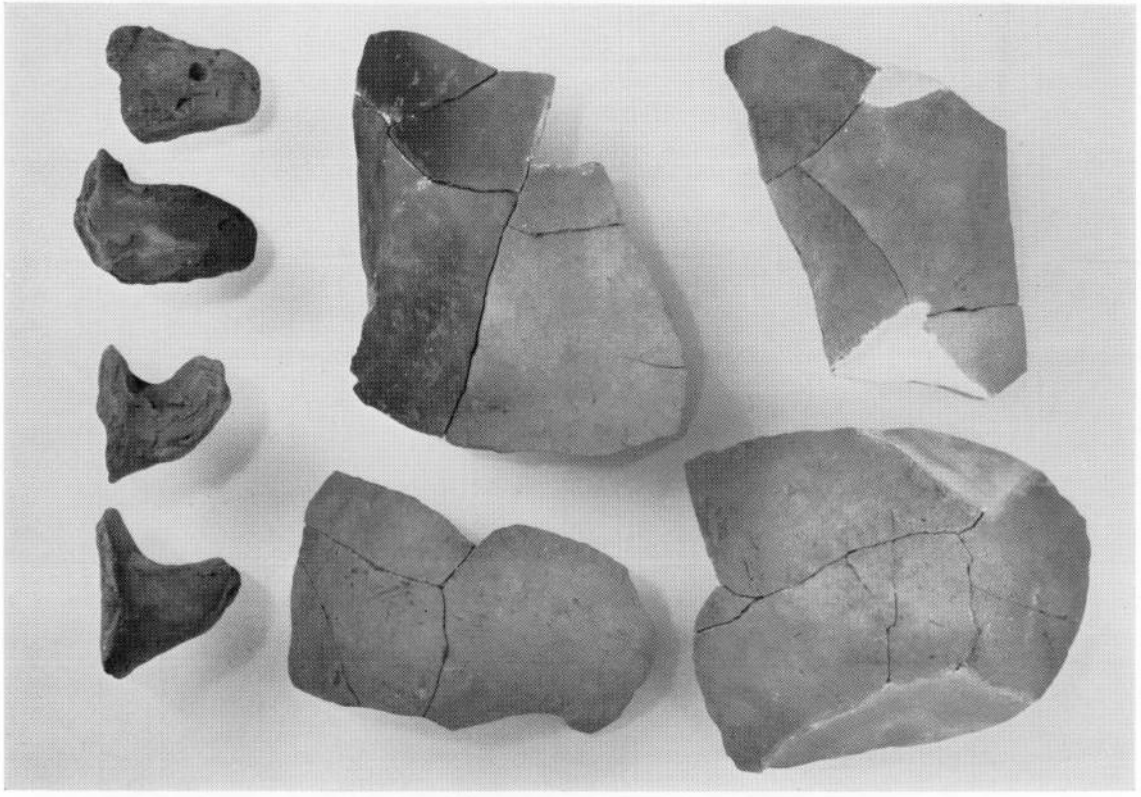




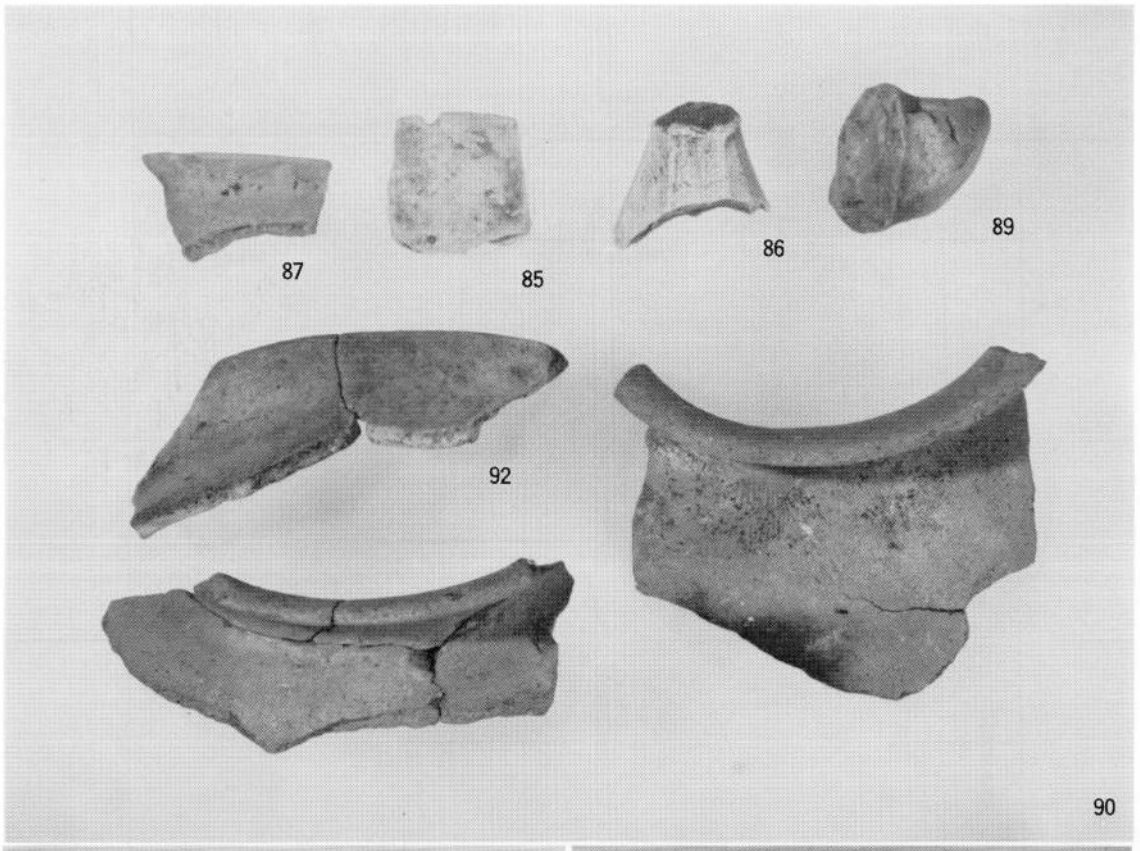


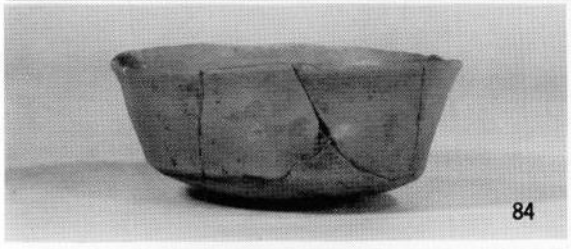
7号竪穴住居跡出土土器

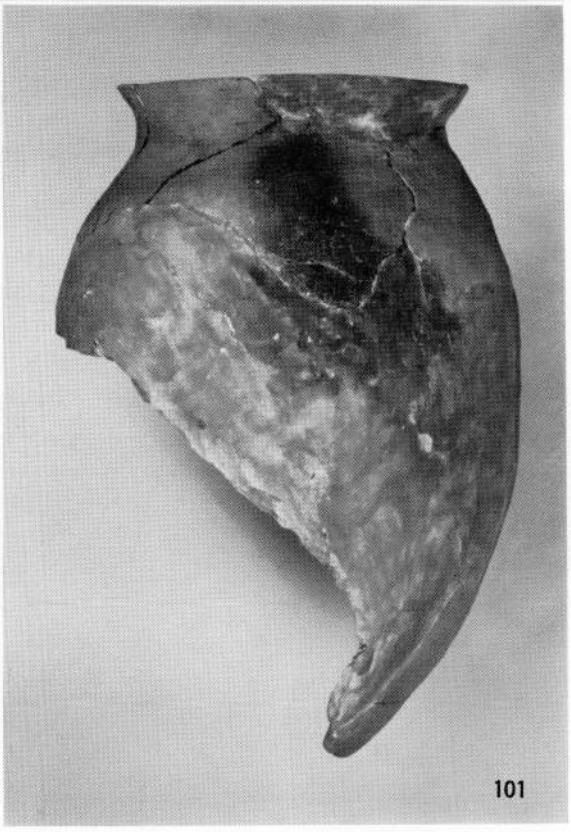




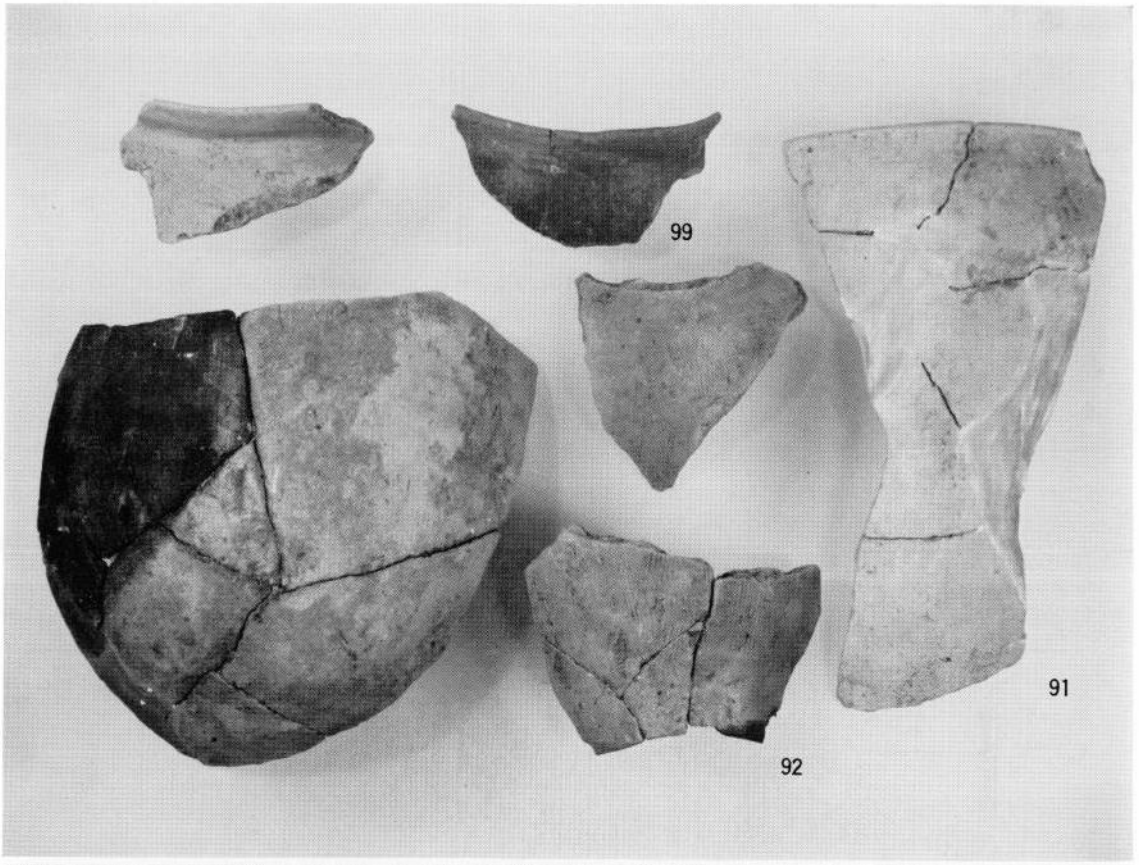
7号竪穴住居跡出土土器（下段写真の把手以外はカマド周辺床面出土）

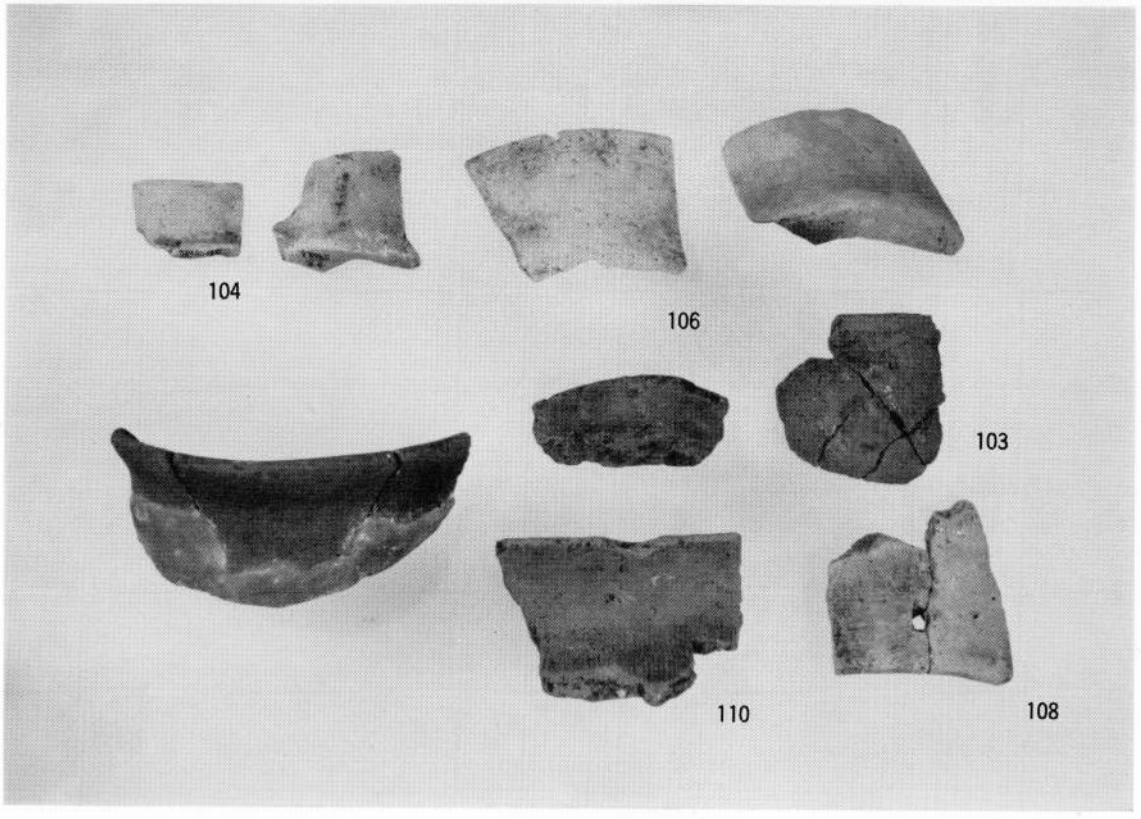




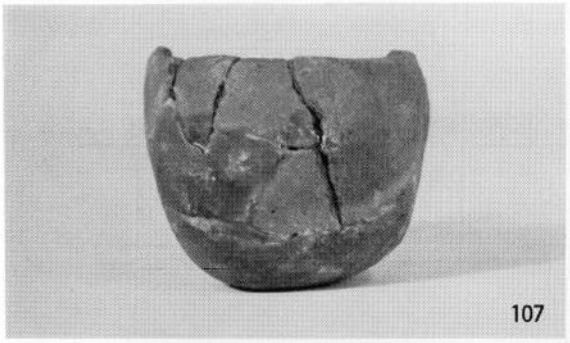


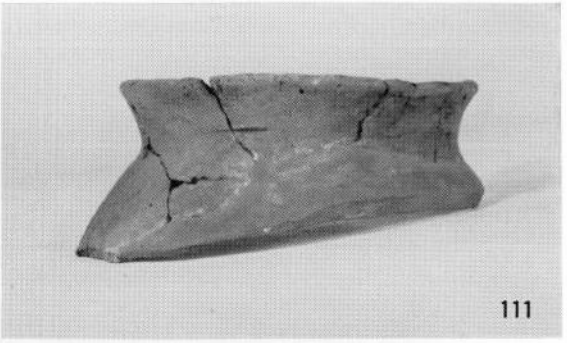
8・10号竪穴住居跡出土土器

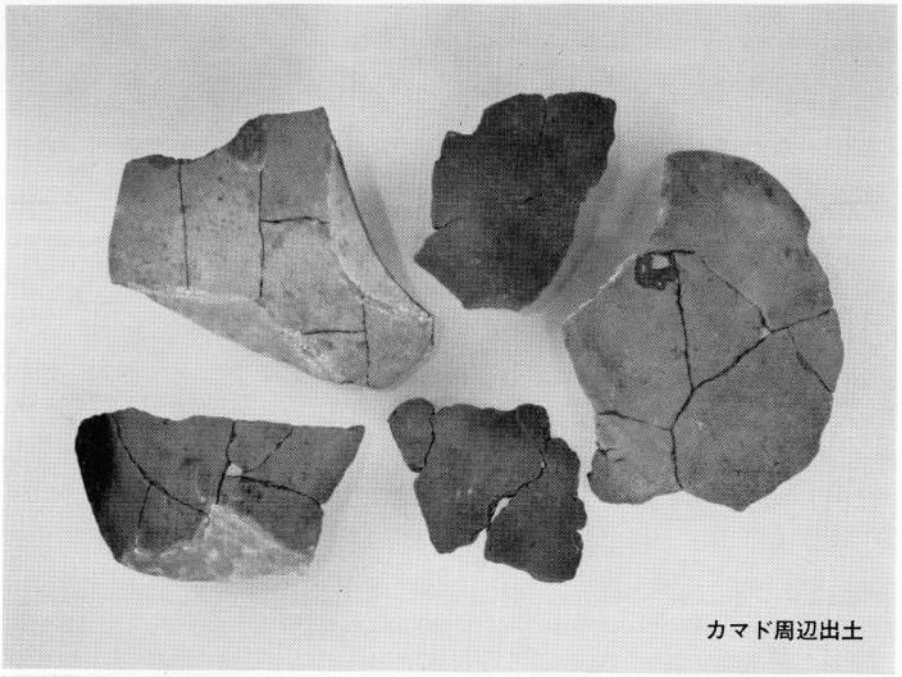


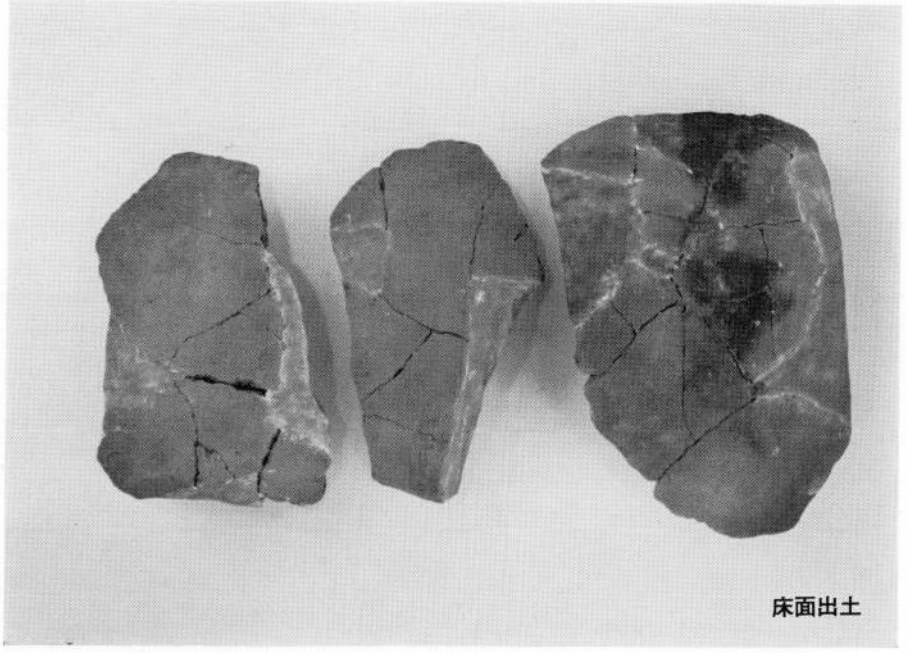


10・12号竪穴住居跡出土土器

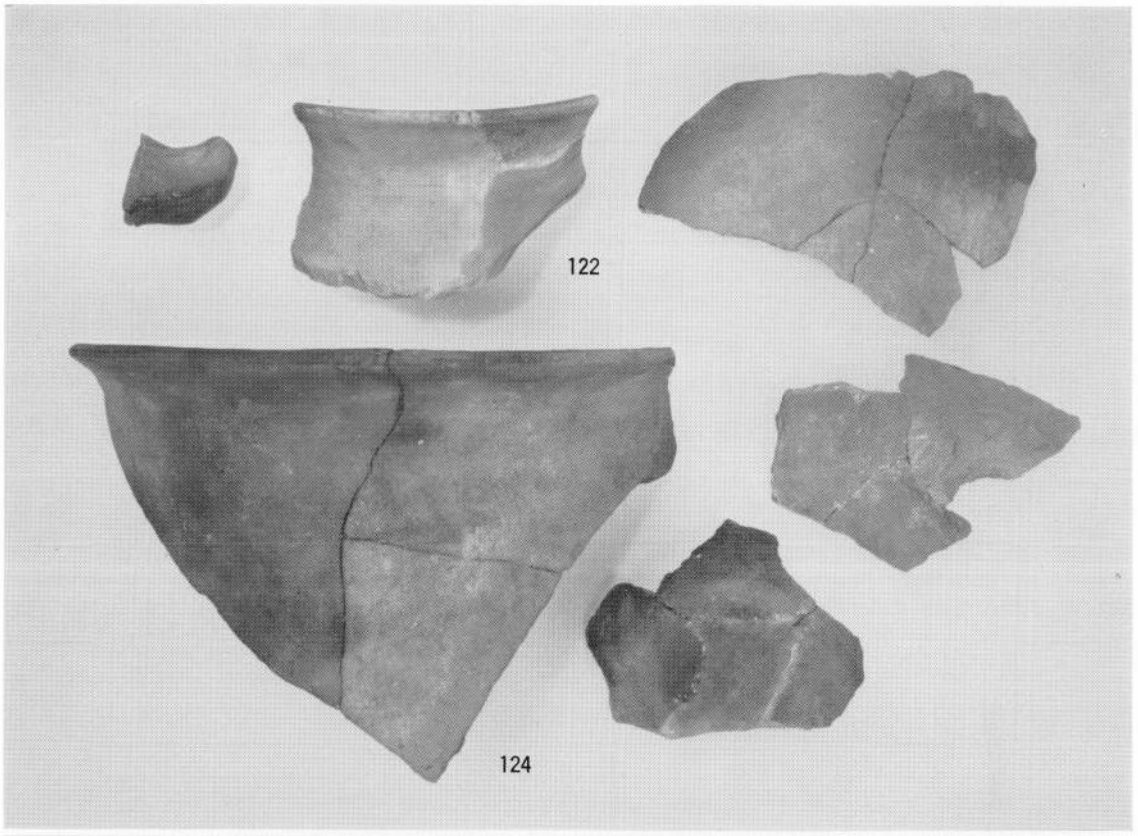


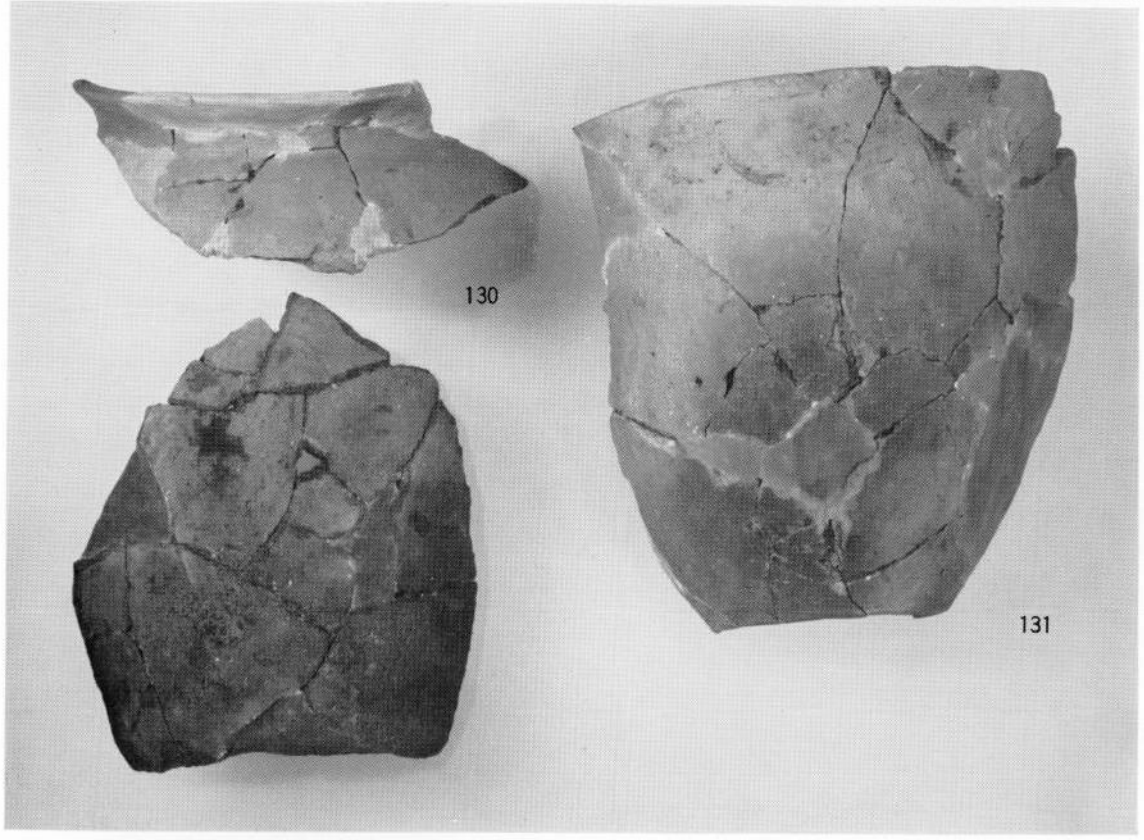




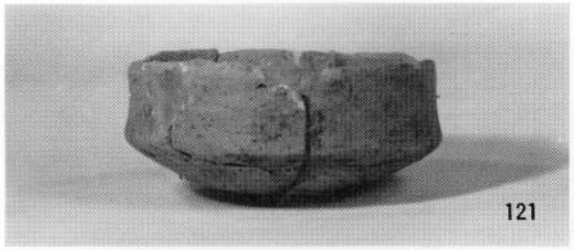


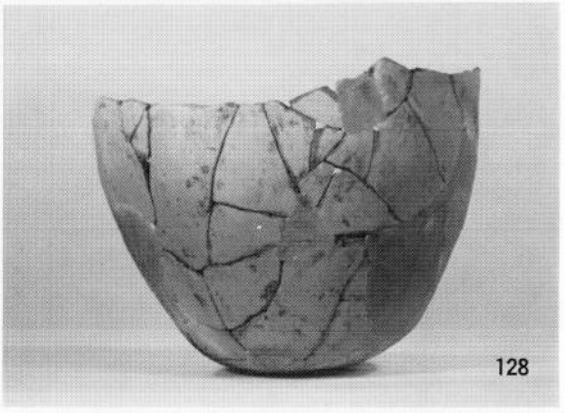
11号竪穴住居跡出土土器

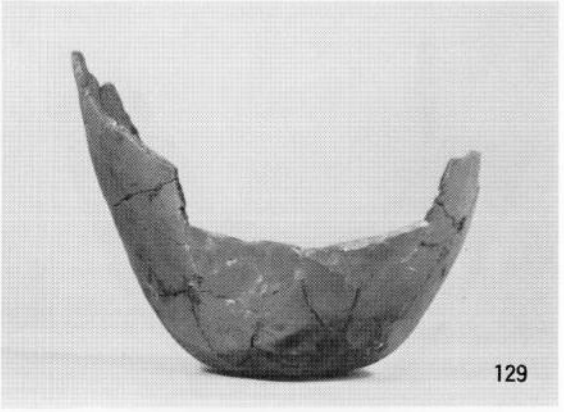


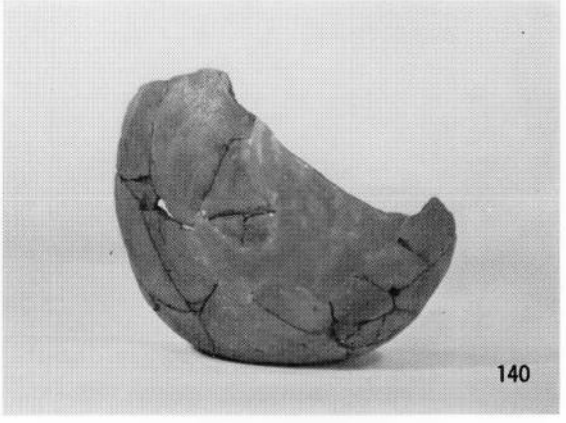


14・15号竪穴住居跡出土土器

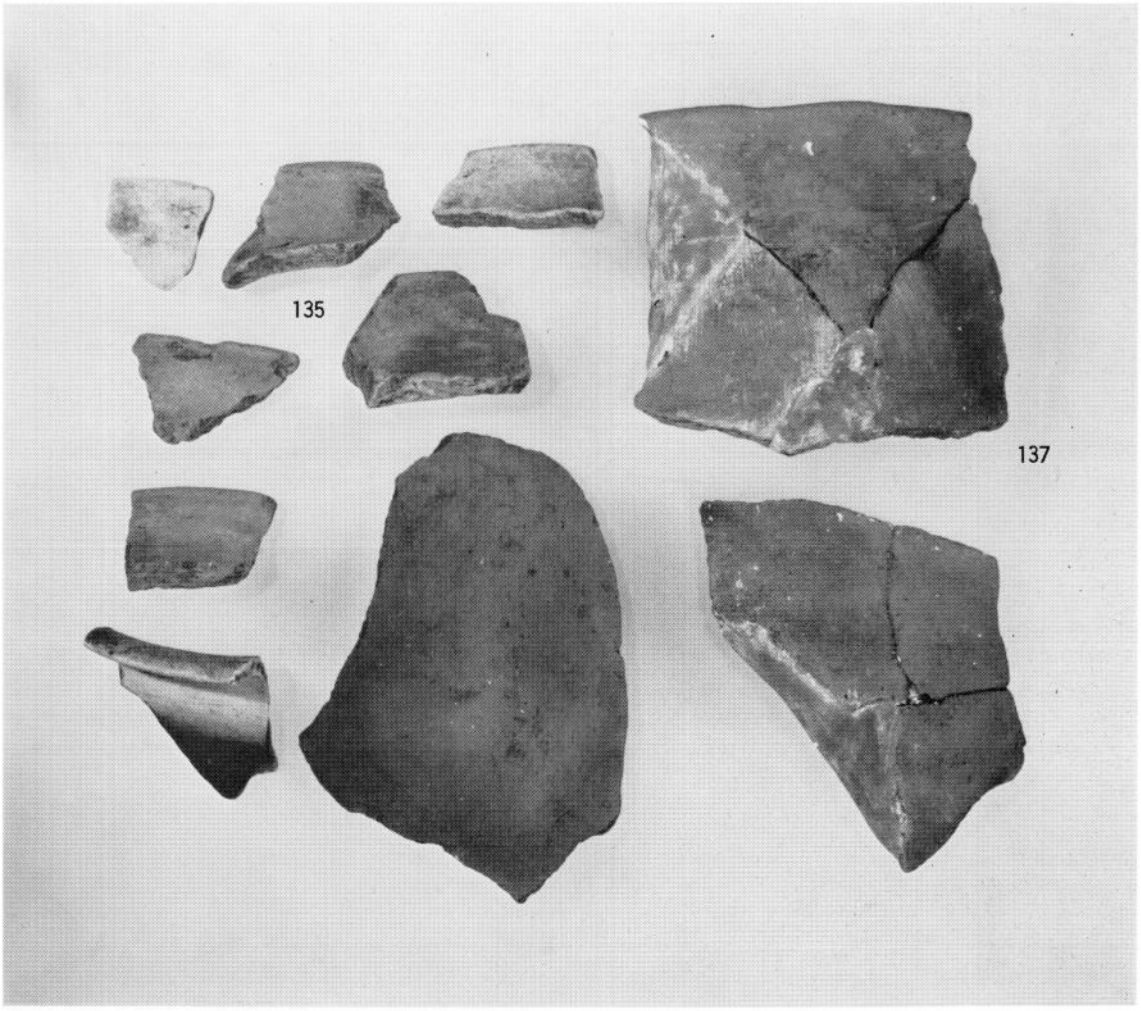


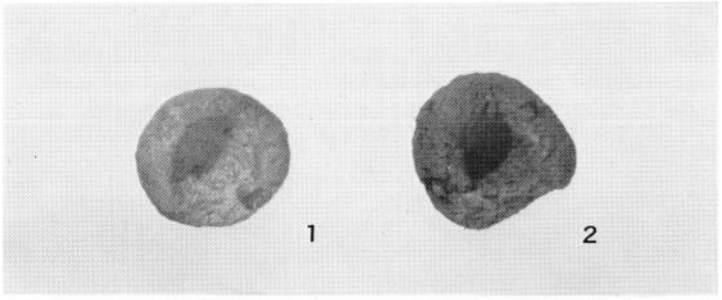


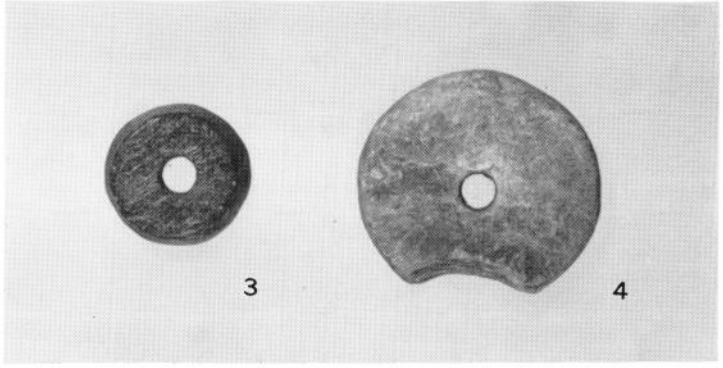




15・19号竪穴住居跡出土土器（140は19号出土）



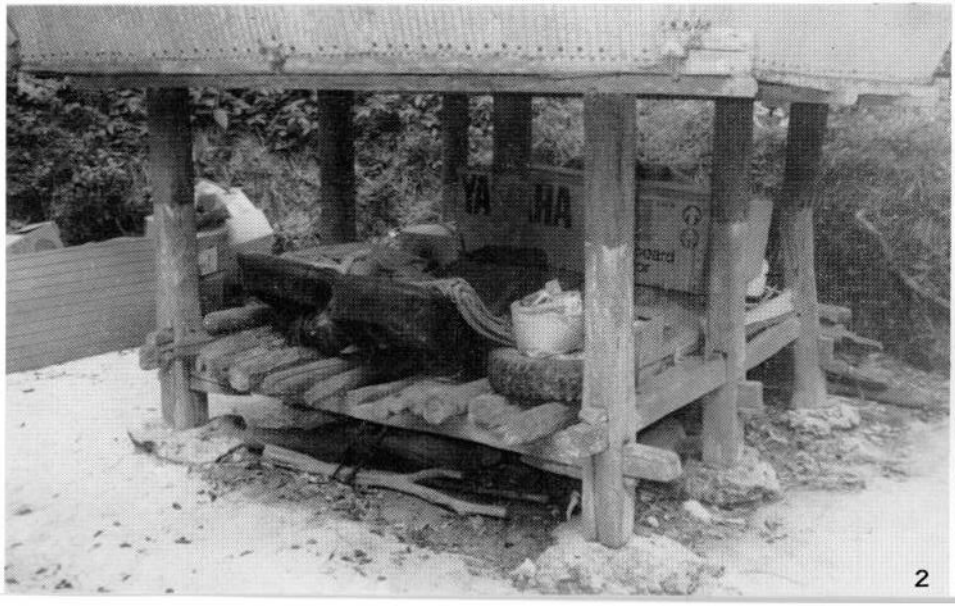


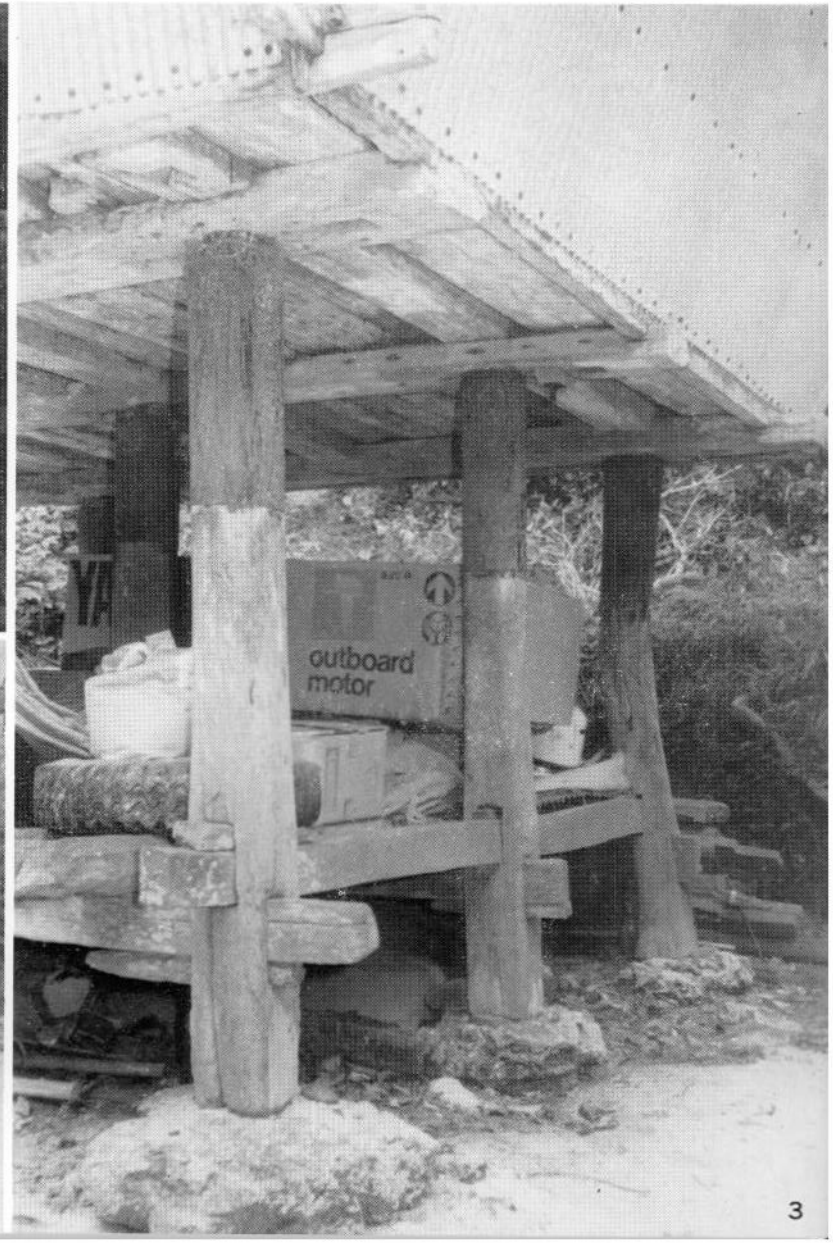


16号竪穴住居跡出土土器と手捏土器・紡錘車（1－3号住，2－5号住，3－18号住，4－7号住）

図版64

鹿児島県与論島能谷文秀氏宅高床　1全景　2・3同細部写真





九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —2—

昭和58年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　株式会社 川島弘文社

福岡市東区箱崎埠頭6丁目4番4号